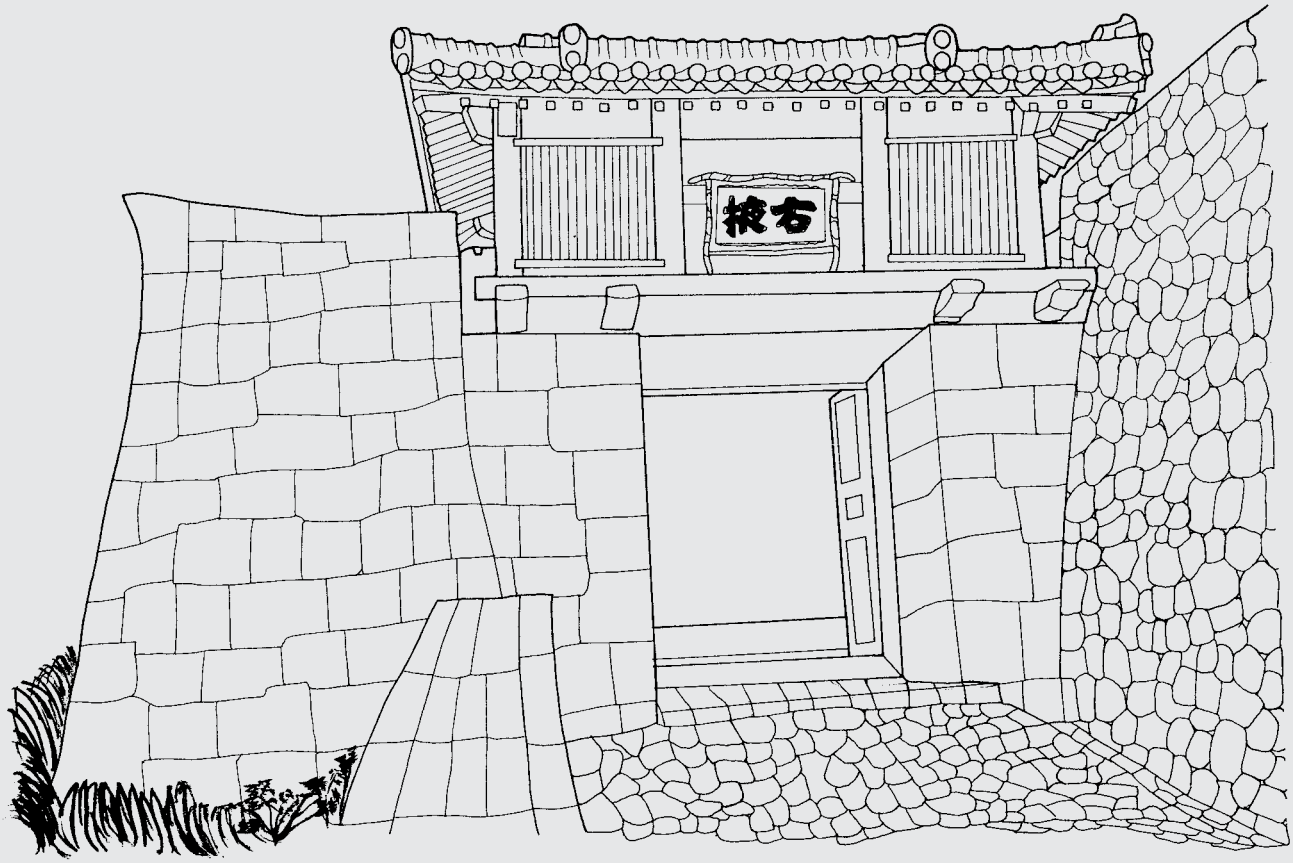
沖縄県立埋蔵文化センター調査報告書　第14集

首　里　城　跡

－右掖門及び周辺地区発掘調査報告書－



2003年（平成15）3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

首里城跡　右掖門及び周辺地区発掘調査報告書　二〇〇三年（平成十五）三月　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化センター調査報告書　第14集

首　里　城　跡

－右掖門及び周辺地区発掘調査報告書－

2003年（平成15年）3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本書『首里城跡―右掖門及び周辺地区発掘調査報告書―』は、建設省の都市公園整備事業（所管：同省国営沖縄記念公園首里城地区）にともない、同省からの委託を受けて県教育委員会（所管：教育庁文化課）が平成２年度に実施した、首里城跡右掖門及び周辺地区発掘調査の成果を記録したものです。

首里城跡は城郭内部を国（国土交通省）が、周辺地域を県（土木建築部）が所管して公園整備事業として復元整備を推進しておりますが、いずれの場合も事業地にかかる遺構調査については、県教育委員会が国からの委託あるいは県土木建築部からの分任を受けて、この数十年間発掘を実施してきました。

平成元年から平成２年にかけて実施した発掘調査の成果は、平成13年度に刊行した下之御庭・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木洩門跡に加え、今回の右掖門及び周辺地区の報告で完了します。これらの遺構は首里城城郭復元整備事業の一環としてすでに復元されており、正殿や城郭等とあわせて王国時代の首里城の景観を取り戻しつつあります。

さて、右掖門は首里城の内郭に位置する城門の一つで、歓会門から石垣沿いの長い石畳道を登りつめた所に建っており、淑順門へと通じていました。「よそへちの御門」とも称され、かつては後宮である御内原（ううちばる）への通用門として使用されました。

首里城跡は先の大戦で廃墟と化し、琉球大学の建設に伴って著しい破壊を受けたにもかかわらず、右掖門周辺は遺構の保存状態が良好で、右掖門の蹴離しを始め石畳道や内郭及び側溝等が確認されました。この調査中に北殿の基壇の一部も確認されました。さらに、同時進行で実施していた城郭の復元整備中に、内郭の石積内からグスク土器と人骨が確認されるなど、特異な発見例もありました。

首里城は、独自の歴史と文化を形成した王国時代の中核であり、当時の都城の様相を伝える遺構や遺物が発掘調査によって豊富に得られています。そのひとつが先に国の重要文化財に指定された「京の内出土の貿易陶磁器」であり、琉球が周辺地域と活発に親交を結び、交易を展開していたことを示しています。

本報告書が、王国時代の政治と文化の中心であった首里城のようすを知る資料として、さらに琉球・沖縄の歴史と文化の諸相と歩みを調べるための資料として、広く県民をはじめ内外の人々に有効に活用されることを期待します。さらに本書を通して、文化財の保護と活用についても関心を深めていただければ幸いです。

末尾になりましたが、発掘調査から資料整理を経て報告書の刊行に至る間、専門的事項についてご指導・ご助言を賜りました諸先生方、ならびに事業の実施にあたりご協力を賜りました関係各位に深く感謝申し上げます。

２００３（平成15）年３月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　　安里　嗣淳

巻首図版１　首里城跡（航空写真）

巻首図版２　上：復元された右掖門遠景　下：復元された右掖門近景

巻首図版３　上：首里城右掖門（古写真）　下：首里城右掖門に通じる道（古写真、昭和10年頃）

巻首図版４　上：調査区全景（北から）　下：右掖門の跡（東から）

巻首図版５　上：塼集中（北から）　下：右掖門へ通じる石畳道側壁の暗渠（北から）

巻首図版６　上：人骨検出状況（西から）　下：人骨共伴出土の土器

陶磁器

沖縄産無釉陶器

骨製品・玉

巻首図版７　出土遺物

例　言

1　本報告書は、国の都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区）に伴い平成２年度に実施した首里城跡－右掖門及び周辺地区－の埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。

2　発掘調査は沖縄総合事務局より依頼を受け沖縄県教育庁文化課が実施した。資料整理は沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。

3　出土遺物の同定及び資料整理にあたってのご指導は下記の諸先生方によるものであります。記して深謝いたします。

陶磁器・・・・・・・・・・・・手塚　直樹（青山学院大学）
〃　・・・・・・・・・・・・大橋　康二（佐賀県立九州陶磁文化館）
〃　・・・・・・・・・・・・向井　　亙（金沢大学大学院）
脊椎動物遺体・・・・・・金子　浩昌（東京国立博物館）
自然遺物・・・・・・・・・・名和　　純（潟の生態史研究会）
石　質・・・・・・・・・・・・神谷　厚昭（沖縄県立真和志高等学校教諭）
人　骨・・・・・・・・・・・・土肥　直美（琉球大学）
〃　・・・・・・・・・・・・譜久嶺忠彦（琉球大学）

4　本書に掲載した地図は、国土地理院の１／25,000地形図を使用した。

5　巻首図版に掲載した右掖門の古写真は多和田真重発行の『写真集　沖縄』1984年より転載させていただいた。

6　本報告書の編集は又吉純子の協力を得て片桐千亜紀が行った。各節の執筆は以下のとおりである。

片桐千亜紀・・・・・・・・第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章第２・６～11・25・37・38節
西銘　　章・・・・・・・・第Ⅳ章第13～24・26・33～36節。
中山　　晋・・・・・・・・第Ⅳ章第１・12・28～32節
知念　隆博・・・・・・・・第Ⅳ章第３～５・27節
金子　昌浩・・・・・・・・第Ⅳ章第40節
土肥　直美・・・・・・・・第Ⅴ章
譜久嶺忠彦・・・・・・・・　〃
盛本　　勲・・・・・・・・第Ⅵ章

7　本書に掲載された出土遺物の写真撮影は宮崎典子・光嶋香が行った。

8　発掘調査で得られた出土品、図面・写真等の記録は、全て沖縄県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	しゅりじょうあと
書　　名	首　里　城　跡
副　　書　　名	－右掖門及び周辺地区発掘調査報告書－
巻　　次	沖縄県立埋蔵文化財調査報告書第14集
シ　リ　ー　ズ　名	－
編　著　者　名	盛本勲、片桐千亜紀、西銘章、中山晋、知念隆博、土肥直美、 譜久嶺忠彦、金子昌浩
発　行　機　関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所　　在　　地	〒903－0125 沖縄県西原町字上原193番地の７
発　行　年　月　日	2003年３月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ　ー　ド 市　町　村	 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積	調査原因
しゅりじょうあと 首 里 城 跡	おきなわけん　なはし 沖縄県 那覇市 しゅりとうのくらちょう 首 里 当 蔵 町	47201 那覇市		26° 12′ 46″	127° 43′ 14″	平成２年度	850㎡	国営記念公園 （首里城地区） 整備

所収遺跡名	種　類	主な時代	主 な 遺 構	主　な　遺　物	特 記 事 項
首里城跡	城　館	中　世 近　世 近　代	右掖門礎石 城壁内郭 Ｌ字状石積み遺構 石積遺構 磚敷遺構 石畳遺構 側溝遺構 暗渠	青磁、白磁、染付、青磁染付、褐釉染付、瑠璃釉、紅釉、色絵、釉裏紅、彩釉陶、黒釉陶器、無釉陶器、褐釉磁器、中国産鉄絵、褐釉陶器、ベトナム産染付、タイ産鉄絵、タイ産半練、高麗青磁、本土産青磁、本土産白磁、本土産染付、本土産色絵、本土産陶器、本土産印判手、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、類須恵器、土器、陶質土器、瓦質土器、瓦、円盤状製品、銭貨、坩堝、玉、煙管、簪、金属製品、硯、石製品、石器、その他の製品、骨製品、貝製品、貝類、脊椎動物遺体、人骨	本書掲載の紅釉水注は重要文化財京之内及び下之御庭他の紅釉水注と接合する可能性がある

目　　次

序
巻首図版
例　　言
報告書抄録

第Ⅰ章　調査に至る経緯……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査体制……1
　第３節　調査経過……2

第Ⅱ章　位置と環境……3
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……3

第Ⅲ章　層序と遺構……9
　第１節　層序……9
　第２節　遺構……9

第Ⅳ章　出土遺物……10
　第１節　青磁……10
　第２節　白磁……29
　第３節　染付……32
　第４節　青磁染付……36
　第５節　褐釉染付……36
　第６節　その他の中国産陶磁器……42
　第７節　中国産鉄絵……46
　第８節　褐釉陶器……46
　第９節　ベトナム産染付……53
　第10節　タイ産鉄絵……53
　第11節　タイ産半練……53
　第12節　高麗青磁……54
　第13節　本土産青磁……54
　第14節　本土産白磁……54
　第15節　本土産染付……54
　第16節　本土産色絵……54
　第17節　本土産陶器……54
　第18節　本土産印判手……58
　第19節　沖縄産施釉陶器……59
　第20節　沖縄産無釉陶器……62
　第21節　類須恵器……65
　第22節　土器……65
　第23節　陶質土器……66
　第24節　瓦質土器……68
　第25節　瓦……68
　第26節　円盤状製品……70
　第27節　銭貨……73
　第28節　坩堝……75
　第29節　玉……75
　第30節　煙管……76
　第31節　簪……76
　第32節　金属製品……76
　第33節　硯……77
　第34節　石製品……79
　第35節　石器……79
　第36節　その他の製品……79
　第37節　骨製品……81
　第38節　貝製品……81
　第39節　貝類……83
　第40節　脊椎動物遺体……85

第Ⅴ章　人骨……151

第Ⅵ章　結語……158

附篇　下之御庭ほか出土の遺物……160

図　目　次

第１図　沖縄本島の位置 …… 4
第２図　首里城跡の位置及び周辺の遺跡 …… 5
第３図　首里城平面図 …… 6
第４図　遺構検出状況 …… 7
第５図　青磁１ ……19
第６図　青磁２ ……20
第７図　青磁３ ……21
第８図　青磁４ ……22
第９図　青磁５ ……23
第10図　青磁６ ……24
第11図　青磁７ ……25
第12図　青磁８ ……26
第13図　青磁９ ……27
第14図　青磁10……28
第15図　青磁11……29
第16図　白磁 ……31
第17図　染付１ ……37
第18図　染付２ ……38
第19図　染付３ ……39
第20図　染付４ ……40
第21図　染付５・青磁染付・褐釉染付 ……41
第22図　その他の中国産陶磁器１ …… 45
第23図　その他の中国産陶磁器２ ……46
第24図　褐釉陶器１ ……51
第25図　褐釉陶器２ ……52
第26図　ベトナム産染付 ……53
第27図　タイ産半練 ……53
第28図　高麗青磁……54
第29図　本土産青磁・本土産白磁・本土産染付 ……56
第30図　本土産色絵・本土産陶器・本土産白磁 ……57
第31図　沖縄産施釉陶器１ ……60
第32図　沖縄産施釉陶器２ ……61
第33図　沖縄産無釉陶器１ ……63
第34図　沖縄産無釉陶器２ ……64
第35図　沖縄産無釉陶器３ ……65
第36図　土器……65
第37図　陶質土器……67
第38図　瓦質土器……68
第39図　円盤状製品……72
第40図　銭貨……74
第41図　坩堝……75
第42図　玉……75
第43図　煙管・簪・金属製品……77
第44図　硯……78
第45図　石製品１ ……79
第46図　石製品２・石器・その他の製品……80
第47図　骨製品・貝製品……82
第48図　切痕をもつ骨……92
第49図　人骨の出土部位 ……151
第50図　頭蓋計測値の比較（西南日本現代人基準） ……153
第51図　四肢骨主要示数の比較……154

図　版　目　次

巻首図版１　首里城跡（航空写真）
巻首図版２　上：現代の右掖門遠景　下：現代の右掖門近景
巻首図版３　上：首里城右掖門（古写真）　下：首里城右掖門へ通じる道（古写真、昭和10年頃）
巻首図版４　上：調査区全景（北から）　下：右掖門（東から）
巻首図版５　上：塼集中（北から）　下：右掖門へ通じる石畳道側壁の暗渠（北から）
巻首図版６　上：人骨検出状況（西から）　下：人骨共伴出土の土器
巻首図版７　出土遺物

図版 1　遺構１……101
図版 2　遺構２……102
図版 3　上：青磁１　下：青磁２……103
図版 4　上：青磁３　下：青磁４……104
図版 5　上：青磁５　下：青磁６……105
図版 6　上：青磁７　下：青磁８……106
図版 7　上：青磁９　下：青磁10……107
図版 8　上：青磁11　下右：白磁
　下左：中国産鉄絵……108
図版 9　染付１……109
図版10　染付２……110
図版11　染付３……111
図版12　上：染付４　下：染付５・青磁染付・
　褐釉染付……112
図版13　上：その他の中国産陶磁器１
　下：その他の中国産陶磁器２……113
図版14　褐釉陶器１……114
図版15　褐釉陶器２……115
図版16　ベトナム産染付……53
図版17　タイ産鉄絵……53
図版18　タイ産半練……53
図版19　高麗青磁……54
図版20　上：本土産青磁・本土産白磁・本土産
　染付　下：本土産色絵・本土産陶器・
　本土産白磁……116
図版21　本土産印判手……117
図版22　上：沖縄産施釉陶器１
　下：沖縄産施釉陶器２……118
図版23　沖縄産無釉陶器１……119
図版24　上：沖縄産無釉陶器２
　下：沖縄産無釉陶器３……120
図版25　土器……65
図版26　陶質土器……121
図版27　瓦質土器……68
図版28　瓦１……122
図版29　瓦２……123
図版30　円盤状製品……124
図版31　銭貨……125
図版32　坩堝……75
図版33　玉……75
図版34　上：煙管・簪・金属製品　下：硯……126
図版35　上：石製品１
　下：石製品２・石器・その他の製品　127
図版36　骨製品・貝製品……128
図版37　貝１……129
図版38　貝２……130
図版39　貝３……131
図版40　魚類１……133
図版41　魚類２……135
図版42　ニワトリ……137
図版43　ウミガメ・イヌ・ネコ……139
図版44　上：ジュゴン　下：ウマ……141
図版45　ブタ１……143
図版46　ブタ２……145
図版47　ウシ……147
図版48　上：ヤギ・シカ……149
　下：切痕をもつ骨
図版49　右掖門西方岩陰下出土人骨……156
図版50　右掖門西方岩陰下出土人骨にみられた
　刀創……157
図版51　下之御庭ほか出土の遺物……160

表　目　次

第１表　青磁出土状況……12
第２表　青磁観察一覧……12
第３表　白磁出土状況……30
第４表　白磁法量一覧……30
第５表　染付出土状況……33
第６表　染付観察一覧……33
第７表　その他の中国産陶磁器法量一覧……44
第８表　褐釉陶器出土状況……48
第９表　褐釉陶器観察一覧……48
第10表　本土産陶磁器観察一覧……55
第11表　本土産印判手観察一覧……58
第12表　沖縄産施釉陶器観察一覧……59
第13表　沖縄産無釉陶器観察一覧……62
第14表　陶質土器観察一覧……66
第15表　円盤状製品計測一覧……70
第16表　長径・重さ・厚さの散布図……71
第17表　長径のヒストグラム……71
第18表　銭貨観察一覧……73
第19表　煙管法量一覧……76
第20表　硯観察一覧……77
第21表　骨製品法量一覧……81
第22表　貝類出土状況（巻貝）……83
第23表　貝類出土状況（二枚貝）……84
第24表　魚類出土一覧……93
第25表　ウミガメ出土一覧……94
第26表　ニワトリ出土一覧……94
第27表　ネズミ出土一覧……94
第28表　イヌ出土一覧……94
第29表　ネコ出土一覧……94
第30表　ジュゴン出土一覧……94
第31表　ウマ出土一覧……94
第32表　ブタ出土一覧……95
第33表　シカ出土一覧……96
第34表　ウシ出土一覧……96
第35表　ウシ・ウマ出土一覧……96
第36表　ヤギ出土一覧……96
第37表　種不明出土一覧……96
第38表　サカナ計測一覧……97
第39表　ウマ計測一覧……97
第40表　頭蓋主要計測値……152
第41表　頭蓋非計測的形質の観察……152
第42表　上肢骨主要計測値……153
第43表　下肢骨計測値……153

第Ⅰ章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

首里城及び周辺文化財の復元整備は、1955（昭和30）年に開始された園比屋武御嶽石門の修復を嚆矢とする。その後も守礼門・弁財天堂・円覚寺総門など、かつての大戦で灰燼に帰した旧国宝指定の建造物を中心に、往事の歴史的景観の回復を目的とした修復・復元が進められてきた。首里城も1972（昭和47）年の沖縄県の本土復帰を機に、戦災文化財復元整備事業として歓会門及び久慶門とその周辺地域の整備が実施されたが、跡地に立てられた旧琉球大学の移転作業の進捗に伴い、その跡地利用法として首里城一帯の公園化が有力になったことから、1982（昭和57）年の第二次沖縄振興開発計画に「首里城一帯の歴史的風土を生かしつつ、公園としてふさわしい地域についてその整備を検討する。との提言が盛り込まれ、1984（昭和59）年には沖縄県により「首里城公園基本計画」が策定された。そして1987（昭和62）年には公園計画区域の城郭内側約４haを国営公園として、また国営公園範囲を除く約14haを県営公園として、それぞれ復元整備を実施することが決定された。これにより本格的な復元整備が始動し、現在までに国営公園区域では正殿・北殿・南殿・二階殿・奉神門、県営公園区域では龍潭及びハンタン山地区・上之毛地区・首里杜館地区・南側管理用道路地区・守礼門周辺地区・継世門周辺地区の整備が完了している。

今回の発掘調査は国営公園整備事業に伴うもので、調査区である「右掖門地区」の整備を実施する上で事前の発掘調査が必要であるとの判断から、沖縄開発庁総合事務局からの委託を受けた沖縄県教育委員会が主体となり、1990（平成２）年より発掘調査を開始することとなった。

第２節　調査体制

発掘調査は平成２年度に沖縄県教育委員会文化課が実施し、平成14年度に沖縄県立埋蔵文化財センターが本格的な資料整理と報告書の作成を行った。その体制は以下の通りである（職名等は当時）。

平成２年度（発掘調査）

事業主体者	沖縄県教育委員会	教　育　長	高良　盛敏	
事業所管	沖縄県教育庁文化課	課　　長	宜保榮治郎	
事業総括	同　上	課長補佐	上江洲　均	
	同　上	課長補佐	平田　與進	
	同　上	主幹兼係長	安里　嗣淳	
事業事務	同　上	文化振興係長	仲里　哲雄	
		同　主事	波平　　淳	
事業実施	同　上	埋蔵文化財係	主任専門員	大城　　慧
	同　上	同　上	専門員	長嶺　　均
	同　上	同　上	嘱託職員	矢沢　秀雄
	同　上	同　上	同　上	島袋　　洋
	同　上	同　上	同　上	城間千栄子
	同　上	同　上	同　上	上地千賀子
	同　上	同　上	同　上	照屋　　孝
	同　上	同　上	同　上	比嘉　優子

発掘調査作業員

島尻三郎、新里浩一、上原美枝、金城春江、兼城光子、諸見里豊子、呉屋正一、呉屋光子、古波津芳子、古波津夏子、玉城富子、幸地ヨシ子、城間ハル子、小橋川幸子、呉屋救、山畑キミ、新垣シゲ子、知花まさ子、屋比久孟松、屋比久春、儀間トヨ、比屋根トミ、仲村ツル、比嘉キク、津波古よし子、平良ツル、島袋文子、上原美枝子、与那原寛喜、諸見里幸子

平成14年度（資料整理）

事業主体者	沖縄県教育委員会	教　育　長	津嘉山朝祥
事 業 所 管	沖縄県立埋蔵文化財センター	所　　長	安里　嗣淳
事 業 総 括	同　上	副所長兼庶務課長	安冨祖英紀
事 業 事 務	同　上	副所長兼庶務課長	安冨祖英紀
	同　上	庶務課主事	城間　千賀
	同　上	庶務課主任	西江　幸枝
事 業 実 施	同　上	調 査 課 長	盛本　　勲
	同　上	指 導 主 事	西銘　　章
	同　上	専　門　員	片桐千亜紀
	同　上	同　上	中山　　晋
	同　上	同　上	知念　隆博

資料整理作業員

平良貴子、友利映子、新城ゆかり、玉寄智恵子、池原直美、外間瞳、照屋利子、吉川由紀、国場のりえ、金城恵子、久保田有美、青山奈緒、喜多亮輔、宮城奈緒

資料整理協力者

新垣利津代、上原美穂子、大村由美子、我那覇悠子、金城敬子、崎原美智子、比嘉登美子、比嘉孝子、又吉純子

第３節　調査経過

右掖門及び周辺地区（第３図）の調査は平成元年から実施している下之御庭跡、用物座跡、瑞泉門跡、漏刻門跡、廣福門跡、木洩門跡地区の調査と一部並行しつつ、平成２年度に実施した。総面積約850㎡である。調査区一帯は戦後には琉球大学が建設されており、主に盛土造成が行われていた。そのため、調査はまず、バックホウにより造成土を除去することから開始した。ある程度の造成土を除去した後、人力による掘り下げを行い、遺構を検出した。右掖門西側地区から作業を開始し、右掖門を通過し東側の広場、北殿へ至る緩斜面地へと進めていった。

調査区の設定は、首里城正殿の調査以来踏襲されているグリット配置に準じた。グリットは１辺が４ｍの正方形で、南から北へアルファベット、東から西へ算用数字を割り当てた。

遺構は右掖門西側では戦争と琉球大学の建設により壊滅的な破壊を受けていたが、右掖門の蹴離しは保存状態が良く、また右掖門東側の広場や、北殿へ至る緩斜面地でも保存状態良好な遺構が検出された。

調査は右掖門西側の城壁整備もほぼ同時進行で実施し、右掖門東側の遺構検出中には石積等の復元が徐々になされていった。

資料は報告書作成年度まで糸満市の兼城資料室に保管し、平成12年度沖縄県立埋蔵文化財センターの完成とともに埋蔵文化財センター収蔵庫に移動した。平成14年度、本格的な資料整理を実施した。調査で得られた遺物は遺物収納コンテナに換算して460箱に及ぶ膨大な量であった。

資料整理は調査から12年を経ていることもあり、出土グリットの認識や遺物の再整理に奮闘した。これらの確認後、実測、トレース、図版作成及び原稿執筆を行い、報告書刊行となった。

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　地理的環境

首里城は那覇市首里当蔵町３丁目１番地に所在し、琉球王国の王城となったグスクである。東西410m、南北273m、面積46,167㎡と県下最大の規模を誇る。首里城の立地する首里台地は那覇市の東方に広がる琉球石灰岩の丘陵地で、丘陵東側の特に高い場所（標高100～130m）に築かれている。広く沖縄本島中南部一帯及び水上交通の出入り口でもあった西海岸と、さらにその沖に点在する慶良間諸島が遠望できる。また丘陵東側は安里川の浸食により比較的急な斜面が形成され、地形を利用した掘り込み式の古墓が点在している。

首里城周辺の地質は、上層に更新世の琉球石灰岩が広がり、その下は新第三期鮮新世の砂岩・泥岩からなり、島尻群層が基盤層となっている。上層の琉球石灰岩の特質として、スポンジ状の構造で高い透水性を有する点が挙げられるが、これと不透水層である島尻群層が組み合わされることから、首里地区では湧水が各所で確認されている。

首里城は「国都の高所に発祖し、最も好」くと『球陽』にうたわれるように、周辺は東に弁ヶ嶽、北に末吉一帯の丘陵、さらに水の豊富さから各河川の源流が集中する。このように起伏に富んだ様々な地形に恵まれた首里城は王都として最適な場所に占地しているといえよう。

今回の調査区である「右掖門地区」は前述した首里台地の北側緩斜面地に位置する。調査区に湧水などは確認されないが、門の西側には龍樋が良質な水を湛え、また北西方面には円覚寺放生池・円鑑池・龍潭など、随所に土質の特性を利用した貯水池がみられる。このように、水源が容易に確保できたことが、首里が発展する大きな要因になったと考えられる。

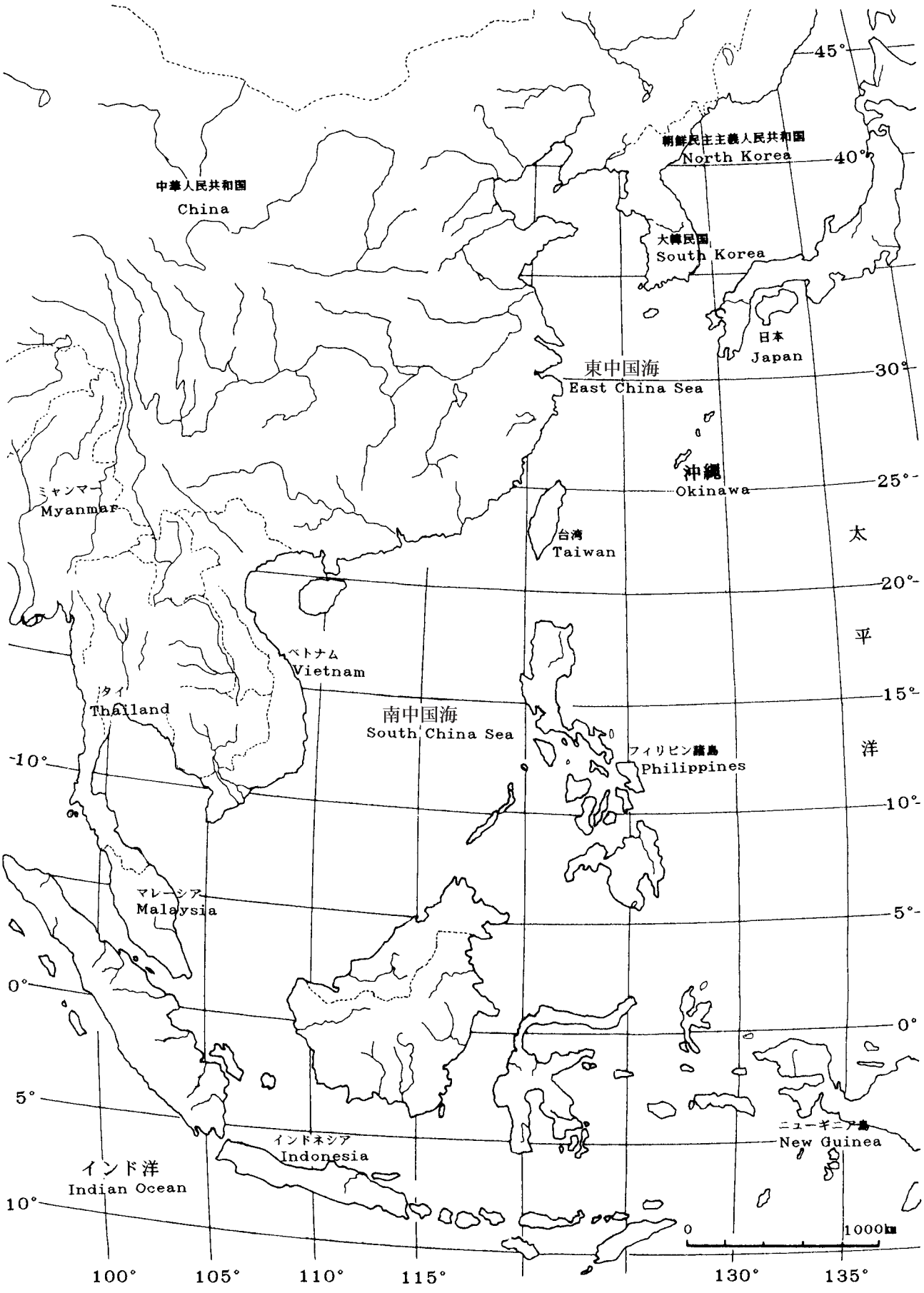
第２節　歴史的環境

首里城は琉球王国の居城であるとともに、政治・文化の中心地でもあった王都首里の象徴である。構築年代については不明な点が多いが、現在までの発掘調査の成果から14世紀中頃までさかのぼると考えられる。その他にも1392年に察度が建造した高楼が首里城にあたるとの説もあるが、確実な例としては琉球最古の碑文である「安国山樹華木之記碑」があり、この内容から15世紀前半頃には王城として基本的な構造が確立していたと考えられる。

構造は「内郭」と「外郭」に大きく２つに分けられ、内郭は創建当初の部分とされ、城内の主要施設が集中する。外郭は第二尚氏の尚真王以降に拡張されたもので、防備の強化を目的としたものとされる。右掖門は内郭に位置する城門の一つで、歓会門から淑順門に通じる道に設けられている。「よそへちの御門」とも称され、かつては御内原への通用門として使用された。構造は石造単拱門（アーチ門）ではなく、城壁に渡した桁の上に直接木造入母屋造の櫓を乗せており、門前から西側方面には緩やかな勾配の石畳道が伸びている。創建年代は不明だが、内郭と連続する城門は懐機によって整備されたと伝えられるため、第一尚氏代（1406年～1469年）に収まるものと思われる。ちなみに昭和初期に撮影された古写真から、明治期には櫓が消失していたとことが確認される。

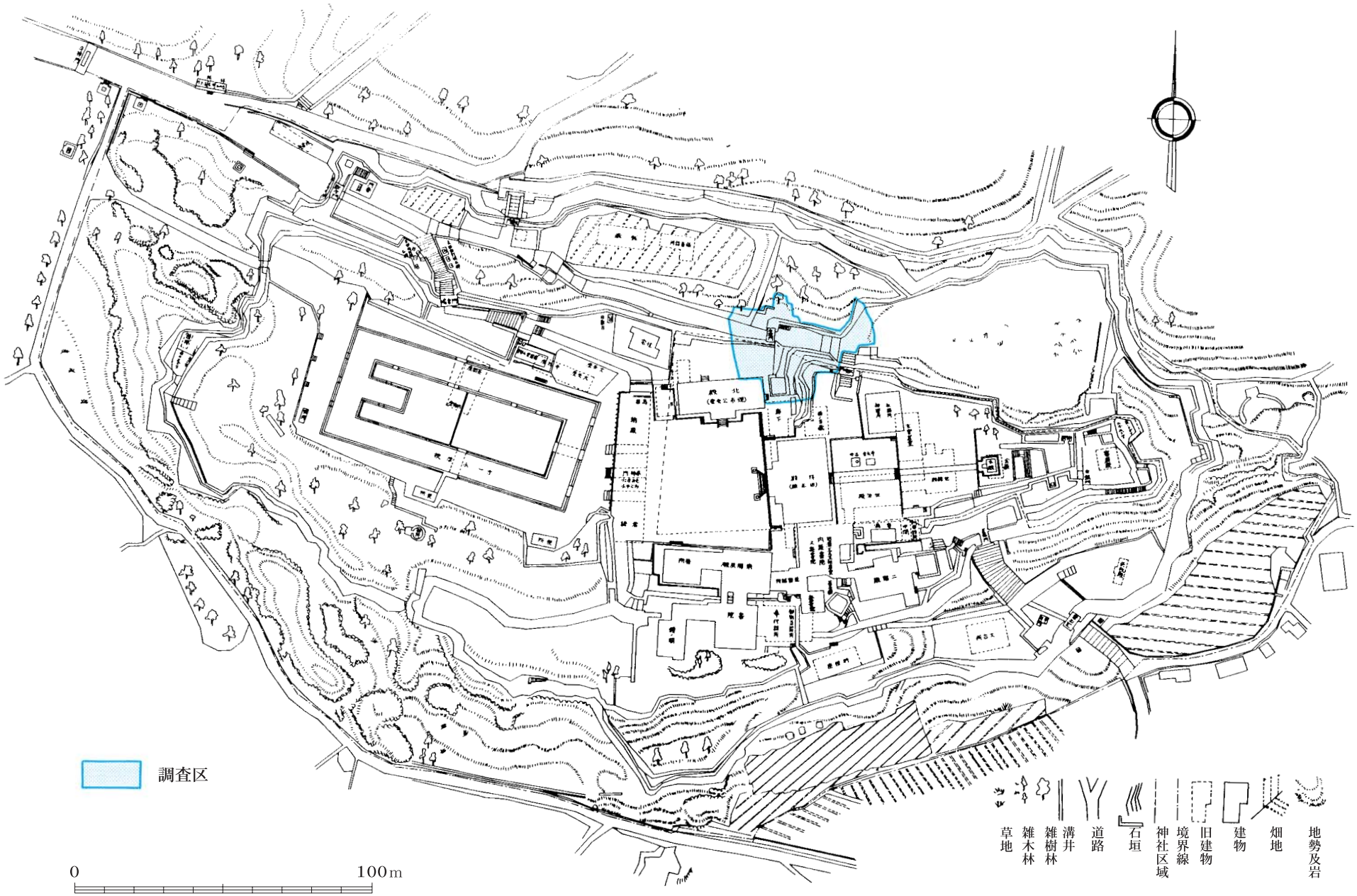
1950（昭和25）年、戦争で廃墟と化した首里城の跡地には琉球大学が設置され、一帯は旧状が僅かに偲ばれる状態にまで変貌を遂げた。右掖門及びその周辺も著しく地形が改変され、旧琉球大学の理学部第一ビルの工事に伴い大規模な造成が施された。しかし、1982（昭和57）年に琉球大学の移転が完了したことにより、「首里城公園基本公園」や「国営沖縄記念公園首里城地区基本計画」などが策定され、これを基本方針とした首里城周辺の本格的な復元整備が始動することとなった。そして1986（昭和61）年には、右掖門地区を含む城郭内側地域４haが国営公園として整備されることが決定され、また公園整備に伴う発掘調査も着手され始めた。

現在、右掖門地区は正殿から久慶門へと抜ける園路として活用されている。周辺地区も同じく復元整備が進められており、一帯は往時の歴史的景観を取り戻しつつある。


中華人民共和国
China
朝鮮民主主義人民共和国
North Korea
大韓民国
South Korea
日本
Japan
東中国海
East China Sea
沖縄
Okinawa
台湾
Taiwan
ミャンマー
Myanmar
ベトナム
Vietnam
タイ
Thailand
南中国海
South China Sea
フィリピン諸島
Philippines
マレーシア
Malaysia
インドネシア
Indonesia
ニューギニア島
New Guinea
インド洋
Indian Ocean
太
平
洋
45°
40°
30°
25°
20°
15°
10°
5°
0°
100°
105°
110°
115°
130°
135°
0
1000km

第１図　沖縄本島の位置

第２図　首里城跡の位置及び周辺の遺跡



第３図　首里城平面図(昭和６年頃)

N
右掖門
人骨検出位置
L字状石積み
塼集中部
北殿跡
①
EL=124.000m
②
EL=124.000m
③
EL=124.000m
④
EL=124.000m
凡例
石積み
0
10m

第４図　遺構検出状況

第Ⅲ章　層序と遺構

第１節　層序

首里城跡は、戦前の第一小学校建設やそれに続く大戦、戦後の琉球大学建設により建物・石積みの撤去等大規模な攪乱を受けており、良好な包含層は確認できなかった。一部を除き琉球大学建設に伴う造成土層であったため、旧地形に大きな影響はなかった。調査は復元を目的とした遺構検出が主であるため、首里城築城以前の状態は確認していない。したがって、今回の調査は多くの層が造成土または攪乱層であったため、層序の詳細については割愛する。また、遺物に関しても層序による検出は実施しておらず、右掖門及び周辺地区一括遺物として検出した。

第２節　遺構（第４図）

右掖門及び周辺地区の発掘調査は、右掖門を中心として西側約10m、東側約25m、北側約10m、南側約25mに至る範囲を行った。その結果、保存状態の良好な右掖門の蹴離しが検出され、周辺の状況は以下のようであった。

Ａ　右掖門西側

右掖門西側約５ｍまで幅約3.5m程の石畳道が検出されたが、その先は沖縄戦や琉球大学建設に伴う造成で破壊されていた。石畳道は側溝が設けられており、破壊は著しいが内郭石積も検出された。後述するがこの調査のとき、内郭石積みの中から人骨が一体検出された。

Ｂ　右掖門東側

右掖門東側は保存状態が良好で、右掖門から淑順門へ至る道の約15m程まで石畳道が検出された。この石畳道は幅が約６ｍ弱あり、西側で検出されたもの（約3.5m）より広く作られている。淑順門は確認できなかったが、すぐ手前まで検出したと考えられる。石畳道の両脇は石積みが作られている。

Ｃ　右掖門南側

右掖門南側では北殿の一部・正殿の手前まで調査を行い、緩斜面を呈した石畳道が検出された、道幅は西側とほぼ一緒である。この石畳道の東側では道に沿った形で３列程に並べられた磚集中遺構が検出された、舗道の役割であろうか。石畳道の西側ではＬ字状を呈する石積み以降が検出されたが、用途は不明である。尚、この調査の時に15世紀頃の北殿基壇に相当すると考えられる遺構が検出された。

Ｄ　右掖門北側

右掖門北側では内郭石積を検出したが、破壊が著しかった。さらに、検出した内郭石積に沿って調査を行い、石畳道を検出した。

Ｅ　埋葬人骨

右掖門西側地区の調査で内郭石積内の琉球石灰岩岩陰より、一体の人骨が検出された。西側地区では先述したように、石畳道と側溝・内郭石積が検出されたが、石畳道と側溝は約５ｍから先は破壊を受けていた。内郭は破壊が著しかったが残存しており、人骨は右掖門から約７ｍ程離れた内郭石積内より検出された。城壁の復元整備事業に伴い内郭石積みの摘出を行っていたところ、内郭石積内から琉球石灰岩が確認された。岩陰直下を掘り下げたところ頭骨が確認され、さらに検出を進めるとグスク土器が確認され、それに伴って一体の人骨が検出された。

人骨の詳細については第Ⅴ章で後述するが、頭骨には切り傷があり完治した痕跡が認められるという。

第Ⅳ章　出土遺物

首里城跡、右掖門及び周辺地区の発掘調査では、青磁・白磁・染付・青磁染付・褐釉染付・瑠璃釉・紅釉・色絵・釉裏紅・彩釉陶・黒釉陶器・無釉陶器・褐釉磁器・中国産鉄絵・褐釉陶器・ベトナム産染付・タイ産鉄絵・タイ産半練・高麗青磁・本土産青磁・本土産白磁・本土産染付・本土産色絵・本土産陶器・本土産印判手・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・類須恵器・土器・陶質土器・瓦質土器・瓦・円盤状製品・銭貨・坩堝・玉・煙管・簪・金属製品・硯・石製品・石器・その他の製品・骨製品・貝製品・貝類・脊椎動物遺体・人骨等が出土した。

遺物はすべて沖縄戦による攪乱や琉球大学建設に伴う造成土からの出土であり、明確な層序から出土した遺物はほとんどない。また、広大な面積の調査にもかかわらず遺物の出土地区や位置が判然としない。唯一、一体の人骨は内郭石積内からの出土であり、グスク土器を伴うことからその出自がハッキリしている。以下に報告する。

第１節　青磁（第５～15図）

器種としては、碗・皿・盤・鉢・擂鉢・蓋・壺・瓶・香炉・蓋置・水注・馬上杯・駒等がある。しかし、そのほとんどは小破片のため全形をうかがえるものに乏しく、碗・皿・盤以外の遺物に関しては集計しなかった（第１表　青磁出土状況）。以下にその概要を述べ、詳細は観察表にまとめる。

碗　基本的に無文、有文で大別した。無文は口縁部形態からⅠ～Ⅳ類に、有文は文様の種類からⅤ～Ⅷ類に分類し、必要に応じて細分した。また、底部資料で特徴的なものを底部Ⅰ～底部Ⅴに分類した。

Ⅰ類　口縁部を肥厚させ、玉縁状に仕上げるもの（1）。

1以外のものは肥厚が微弱であった。

Ⅱ類　口縁部周辺から開きながら立ち上がるもの（2～6）。

Ⅲ類　胴部から口縁部まで直線的に立ち上がるもの（7・8）。

Ⅳ類　口縁部が内湾するもの（9～11）。

Ⅴ類　外面に蓮弁文の施されるもの（12～28）。

蓮弁の種類によってa～cの3種に細分した。

ａ　鎬蓮弁文

しっかりとした蓮弁が施され、弁部中央に鎬のあるもの。すべて細片資料であるため今回は集計だけに留めた。

ｂ　蓮弁文（12～17）

鎬は確認できないが、蓮弁を1枚ずつ施すもの。17は便宜上ここに含めた。

ｃ　細蓮弁文（18～28）

線描きにより蓮弁の境目と弁先を別個に施すもの。蓮弁の単位が意識されているもの（18・19）、単位の意識が弱くなるもの（20～22）、単位を失ったもの（23～26）のほか、27のような蓮弁もあった。28は口縁部がないが、おそらく22と同様の蓮弁が施されると思われる。また、図示していないもので6本の単位の櫛状工具により蓮弁が施されるものもあった。

Ⅵ類　単位を失った細蓮弁文の上に濤頭文が施されるもの（29～31）。

口縁部形態はすべて内湾である。

Ⅶ類　口縁部周辺に雷文の施されるもの（32～34）。

32は片切彫りにより雷文が施されるが、33・34はスタンプにより雷文が施される。

Ⅷ類　有文のうちⅤ類～Ⅶ類以外のもの（35～41）。

図示はしていないが、見込みに双魚文の一部（尾）と思われるものが確認できた資料もあった。

底部Ⅰ類　見込みに文様が施されるもの（42～49）。

文様のほとんどはスタンプにより施される。

底部Ⅱ類　見込みの釉を蛇ノ目状に掻き取るもの（50）。

図化したのは1点だけだが、この資料に関しては胴部にスタンプの施される青磁染付になる可能性もある。

底部Ⅲ類　見込みの釉を掻き取り、露胎させるもの（51、52）。
底部Ⅳ類　高台先端で陵が入り細くなるもの（53、54）。
　見込みに文様が施される点では底部Ⅰ類と共通するが、底部形態に特徴があったため分類を別に設けた。
底部Ⅴ類　底部Ⅰ類～底部Ⅳ類以外のもの。（55～58）。

皿　口縁部形態により、Ⅰ～Ⅶ類に分類した。
Ⅰ類　口縁部が外反するもの（59～61）。
　　59は泉州窯のものと思われる。
Ⅱ類　口縁部が内湾するもの（62、63）。
Ⅲ類　口縁部が外側に折れるもの（64～68）。
Ⅳ類　口縁部が玉縁状を呈するもの（69）。
　図化したのは１点のみだが、残りの3点も無文であった。肥厚と言っても微弱なもので、全体的な器形はⅠ類の範疇である。
Ⅴ類　稜花皿（70～71）。
　断面形態はⅠ類のなかの腰折（61参照）の範疇であるが別に分類した。
Ⅵ類　菊花皿（72～78）。
　断面形態はⅡ類、Ⅲ類のものが大部分を占める。
Ⅶ類　八角皿（79、80）。
　断面形態はⅠ類のなかの腰折（61参照）の範疇であるが別に分類した。
底部資料　（81）
分類はしなかったが1点図示した。

盤　基本的に口縁部形態によりⅠ類～Ⅲ類に分類し、必要に応じて細分した。底部資料については高台の形態により底部Ⅰ類、底部Ⅱ類に分類した。
Ⅰ類　口縁部を外側に折り、さらに先端を鍔縁状に仕上げるもの（82～89）。
　口縁部の形態によりさらにa～cに細分した。
　a　口縁部先端の鍔縁がしっかりしているもの（82～87）。内体部に唐草文を施すのもあった。
　b　口縁部先端の断面形態が三角形を呈するもの（88）。文様が確認できたもの5点はすべて内体部に蓮弁を施す。
　c　口縁部先端の断面形態が、次に述べるⅡ類の上に小さな突起をつけた状態のもの（89）。文様は確認できない。
Ⅱ類　口縁部を外側に折り、そのまま仕上げるもの（90～97）。
　稜花もしくは輪花になるものは24点確認された。
Ⅲ類　外側に折れることなく直口口縁になるもの（98）。
底部Ⅰ類　底部が臥足になるもの（99～103）。
底部Ⅱ類　高台を作るもの（104～118）。

鉢（119）
鉢と判断できるもの4点のうち1点を図示した。

擂鉢（120）
　擂鉢と判断できるもの3点のうち1点を図示した。

蓋（121、122）
　蓋と判断できるもの12点のうち2点を図示した。

壺（123～126）

壺と断定できるもののみ図示した。すべて酒会壺である。

その他（127～136）

その他の器種としては、瓶（127、～130)、香炉（131～133)、蓋置（134)、水注（135、136)、馬上杯（137)、中国将棋の駒（138）が検出されたが、そのなかでも中国将棋の駒は他の遺跡での出土例が少ない。

＜参考文献＞

沖縄県立埋蔵文化財センター　2001　『首里城跡―下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書―』

上原靜　1989　「円盤状製品その後の資料」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第13号

第１表　青磁出土状況

碗																皿								盤								合計
Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ			Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	底					不明	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	不明	口					底		不明	
				a	b	c				Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ										Ⅰ			Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ		
																								a	b	c						
13	147	34	47	5	53	169	16	42	71	43	4	9	7	70	745	67	13	60	5	28	7	11	82	38	15	2	38	1	19	32	95	1988

第２表a　青磁観察一覧

単位：cm

図番号		器種	分類	口径 器高 底径	文様・成形等の特徴	素地	釉色・施釉状況等	年代	窯
第5図・図版3	1	碗	Ⅰ	－ － －	口縁部は肥厚し、玉縁状を呈する。外面は約1㎝幅の轆轤目が残る。	灰白色の細粒子で、部分的に橙色を呈する。	明緑灰色の釉を両面に施す。	16c?	－
	2		Ⅱ	－ － －	直口気味に立ち上がり、口縁端部は外反する。外面は約1㎝幅の轆轤目が残る。	赤褐色の細粒子。	明緑灰色の釉を両面に施す。	15c前～中	－
	3			16.4 － －	口縁部は外反。その直下に削りを入れ、一見沈線に見える。	灰白色の微粒子。	明緑灰色の釉を両面に施す。	15c前～中	龍泉窯（？）
	4			16.0 － －	口縁部は外反。その直下に削りを入れ、幅広の凹線状に見える。	灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	15c前～中	龍泉窯（？）
	5			14.6 6.5 5.4	口縁部は外反。胴部屈曲部には指圧痕(？)が右あがりの斜位に連続して入る。高台は粗く削る。見込み中央には牡丹(？)の印花文が施される。	灰色の細粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施すが、高台脇から畳付までの施釉は徹底しておらず、高台内面は露胎。	15c前～中	－
	6			14.4 － －	口縁部を外反させる。	灰白色の細粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施すが、発色は悪く、くすむ。	14c後～15c前	－
	7		Ⅲ	13.9 － －	口縁部は直口。	灰白色の細粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施すが、発色は悪く、くすむ。	16c中～後	－
	8			13.0 － －	胴部からやや開き気味に立ち上がる。	淡灰色の細粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施すが、灰がかぶり白化する。	16c中～後	－

第２表b　青磁観察一覧

単位：cm

図番号		器種	分類	口径 器高 底径	文様・成形等の特徴	素地	釉色・施釉状況等	年代	窯
第5図・図版3	9	碗	Ⅳ	－ － －	胴部からやや開き気味に立ち上がり、口縁部は緩やかに内湾する。	灰白色の細粒子。	やや黄味がかった緑色の釉を両面に施す。	16c中～後	－
	10			12.8 － －	胴部からやや開き気味に立ち上がり、口縁部は内湾する。	灰白色の細粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施すが、灰がかぶり白化する。	16c中～後	－
	11			－ － －	口縁部周辺で微弱に内湾する。外面には約0.5cm幅の轆轤目が明瞭に残る。	灰白色の細粒子。	暗緑色の釉を両面に施す。	16c中～後	－
	12		Ⅴ－ｂ	17.4 － －	外面にはしっかりとした蓮弁が施され、弁部中央は盛り上がるが鎬はない。内面には唐草文が線彫りされる。	白色の微粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。	15c前～中	龍泉窯
	13			－ － 8.2	外面にはしっかりとした蓮弁が施され、弁部中央は盛り上がるが鎬はない。内面には唐草文が線彫りされる。	灰白色の微粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施し、高台内面まで達する。畳付は部分的に釉が剥げ、露胎している箇所は橙色を呈する。	15c前～中	龍泉窯
第6図・図版3	14	碗	Ⅴ－ｂ	－ － －	外面にはしっかりとした蓮弁が施され、弁部中央に8本単位の櫛状工具で文様が施される。内面には唐草文が線彫りされる。	灰白色の微粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。	15c前～中	龍泉窯
	15			11.2 － －	外面には蓮弁が施され、弁部中央の盛り上がりは微弱である。内面にはかなり細い線彫りが見られる。	白色の微粒子。	緑灰色の釉両面に施す。	15c前～中	龍泉窯
	16			－ － －	外面には2条の圏線の下に蓮弁を施す。弁部中央には縦位に線彫りが施される。内面も線彫りが施されるが不明瞭である。	灰白色の細粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。	15c前～中	－
	17			－ － －	外面には丸刀状の工具によって蓮弁が施され、さらに弁先に添う形で曲線が施される。内面には深い切りこみ状の線が入る。	淡灰色の細粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施すが、焼成が悪いためか、白濁する。	16c前～中	－
	18		Ⅴ－ｃ	－ － －	作りは薄手である。蓮弁は簡略化される。	灰色の細粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。	16c前～中	－
	19			12.4 － －	口縁部周辺に1条の圏線を施し、その下に蓮弁を線彫りする。弁先はまだ意識されている。	淡灰色の細粒子。	明緑灰色の釉を両面に施すが、やや白濁する。	16c前～中	－
	20			13.4 － －	外面には細蓮弁が施される。弁先はかなり簡略化される。成形も雑で、胴部から高台に至る屈曲部は回転篦削りの跡が明瞭に残る。	灰色の細粒子。	やや黄味がかった緑色の釉を両面に施す。	16c前～中	－
	21			13.4 － －	外面には細蓮弁が施される。弁先はかなり簡略化される。成形も雑である。	灰色の細粒子。	緑灰色の釉を両面に施すが、やや白濁する。	16c中～後	－
	22			13.4 － －	外面には狭い間隔で細蓮弁が施される。弁先はかなり簡略化される。内面には線彫りが施される。	灰白色の微粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。	16c中～後	－
	23			9.4 － －	外面には細蓮弁が施されるが、弁先が簡略化され、蓮弁も等間隔ではない。縦位の線は3本単位の工具で施される。	灰白色の微粒子。	緑がかった灰白色の釉を両面に施す。	16c中～17c前(?)	－
	24			－ － －	外面に片切彫りの蓮弁が施されるが、簡略化される。	灰白色の微粒子。	緑がかった灰白色の釉を両面に施す。	16c中～17c前	－
	25			12.6 － －	外面に蓮弁が施されるが、簡略化され、弁先の単位が無くなり一直線になる。	灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	16c中～17c前	－
	26			14.2 － －	口縁部周辺に1条の圏線を施し、その下に蓮弁を線彫りする。	白色の細粒子。	明緑灰色の釉を両面に施す。	16c中～17c前	－
	27			－ － －	外面には細蓮弁状に線彫りが施される。胴部から高台に至る屈曲部は回転篦削りの跡が明瞭に残る。	白色の細粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。	16c中～17c前	－
	28			－ － 5.3	外面には細蓮弁が施され、見込み中央には牡丹（?）の印花文が施される。	灰白色の細粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。高台の釉は高台内まで達し、蛇ノ目に剥ぎ取られる。	16c前～中	－
第7図	29	碗	Ⅵ	－ － －	外面は口縁周辺に濤頭文を廻らし、その下には蓮弁が施される。	白色の細粒子。	緑がかった灰白色の釉を両面に施す。	16c中～17c前	－
	30			－ － －	外面は口縁周辺に濤頭文を廻らし、その下には蓮弁が施される。	灰白色の細粒子。	明緑灰色で透明度の高い釉を両面に施す。	16c中～17c前	－

第２表c　青磁観察一覧

単位：cm

図番号		器種	分類	口径 器高 底径	文様・成形等の特徴	素地	釉色・施釉状況等	年代	窯
第7図・図版4	31	碗	Ⅵ	－ － －	外面は口縁部周辺に濤頭文を廻らす。	灰白色の細粒子。	灰白色の釉を両面に施すが、口唇部の釉は薄くなり、外面は明黄褐色を呈する。	16c中～17c前	－
	32		Ⅶ	－ － －	両面の口縁部周辺に片切彫りによる雷文帯が廻らされ、その下には牡丹とその葉が描かれる。	灰白色の細粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。	15c前～中	龍泉窯
	33			16.6 － －	外面は口縁部周辺の雷文及びその下の弁先はスタンプで施され、縦位の線彫りとあわせて蓮弁を表す。内面にも口縁部周辺にスタンプによる雷文が、その下に唐草文（？）が施されるが、不明瞭である。	灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	15c中～後	－
	34			－ － －	外面の口縁部周辺はスタンプによる雷文が施され、胴部にはラマ式蓮弁が見られる。内面の口縁部周辺にもスタンプによる雷文が施されるがかなり不明瞭である。内面胴部には唐草(？)が施される。	灰白色の細粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	15c前～中	－
	35		Ⅷ	17.6 － －	内面にのみ、片切彫りにより花弁文(？)が施される。	灰白色の細粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。	15c前～中	－
	36			－ － －	内面にのみ、唐草文(？)が施される。	灰白色の細粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	15c中～後	－
	37			－ － －	外面にラマ式蓮弁が施される。	灰白色の微粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。	15c前～中	－
	38			14.8 － －	両面に片切彫りによる唐草文(？)が施される。	灰白色の細粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。	15c前～中	－
	39			－ － －	外面に片切彫りの龍が施され、内面には花弁(？)が施される。	淡灰色の微粒子。	明緑灰色の釉を両面に施す。	15c前～中	龍泉窯
	40			18.4 － －	外面口縁部周辺に２条の圏線を廻らす。口縁部は大きく開き、器高の低い器形になると思われる。	灰白色の細粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。	15c中～後	－
	41			13.0 － －	口縁部外面に１条の圏線を廻らす。	灰白色の細粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。	16c前～中	－
第8図・図版4	42	碗	底－Ⅰ	－ － 4.6	見込み中央にスタンプによる菊花が施される。	灰色の細粒子	緑がかった灰白色の釉を両面に施すが、高台内には達していない。	16c前～中	－
	43			－ － 6.2	見込み中央にスタンプによる花弁(？)が施される。	淡灰色の微粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。一部畳付から高台内まで達するが意図的なものではなく、大部分が畳付までは達していない。	15c前～中	－
	44			－ － －	見込み中央にスタンプによる花弁(？)が施される。	灰白色の細粒子。底部が厚いためか、半分から下は橙色を帯びる。	緑灰色の釉を両面に施すが、高台内は蛇ノ目に剥がれる。	15c前～中	－
	45			－ － 5.2	見込み中央にスタンプによる唐草文(？)が施される。	灰色の細粒子。	緑がかった灰白色の釉を両面に施すが、高台内には達していない。	15c前～中	－
	46			－ － 4.2	見込み中央にスタンプによる菊花が施される。	白色の細粒子。	淡緑灰色の釉を両面に施す。	16c中～17c前	－
	47			－ － 4.0	見込み中央にスタンプによる菊花が施される。高台外面には１条の圏線を廻らす。	灰白色の細粒子。	明緑灰色の釉を両面に施す。やや白味がかる。	16c中～17c前	－
	48			－ － 5.0	見込み中央にスタンプが押される。	灰白色の細粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	16c中～17c前	－
	49			－ － 4.4	見込み中央にスタンプによる菊花が施されるが、不明瞭である。	灰白色の細粒子。	明緑灰色の釉を両面に施す。やや白味がかる。	16c中～17c前	－

第２表d　青磁観察一覧

単位：cm

図番号		器種	分類	口径 器高 底径	文様・成形等の特徴	素地	釉色・施釉状況等	年代	窯
第8図・図版4	50	碗	底－Ⅱ	－ － 7.8	高台部分はかなりしっかり作られ、畳付は幅広である。	灰白色の細粒子。	明緑灰色の釉を両面に施す。見込みは蛇ノ目釉剥ぎが施される。	18c前～中	－
	51		底－Ⅲ	－ － 4.8	見込みは露胎し、その中に竹(？)が彫られる。	淡灰色の細粒子。	淡緑灰色の釉を両面に施す。	16c中～後	－
	52			－ － 6.4	見込みは露胎し、回転へら削りの跡が明瞭に残る。	黄橙色の細粒子。	両面に釉を施すが、焼成不良のため気泡も多く、白化する。	16c前～中(？)	－
	53		底－Ⅳ	－ － 5.4	高台外面の下半分を削って段を作る。内面には花弁(？)が施されるが不明瞭である。	淡灰色の細粒子。	緑がかった灰白色の釉を両面に施すが、高台内には達していない。	15c前～中	－
	54			－ － 5.1	高台外面の下半分を削って段を作る。内面には何らかの文様が施されるが不明瞭である。	淡灰色の細粒子だが、高台周辺は赤褐色を呈する。	緑がかった灰白色の釉を両面に施すが、高台内には達していない。	15c前～中	－
	55		底－Ⅴ	－ － 6.7	高台脇に３条の圏線を廻らす。	やや橙色を帯びた灰白色の細粒子。	淡緑灰色の釉を両面に施す。	16c中～後	－
第9図・図版5	56	碗	底－Ⅴ	－ － 4.8	全体的に作りが粗い。	浅黄橙色の細粒子。	鈍い緑褐色の釉を施すが、素地が透けているため、外見は黄褐色を呈する。	16c中～後	－
	57			－ － 4.1	見込みには成形痕が明瞭に残る。	灰色の細粒子。	淡緑灰色の釉を両面に施す。部分的に畳付を超えて高台内まで達する。	16c中～17c前	－
	58			－ － 4.7	高台脇には回転篦削りの跡が残る。薄手で丁寧なつくりである事から皿の可能性もある。	白色の微粒子。	明緑灰色の釉を両面に施すが、高台には達しない。	15c	－
	59	皿	Ⅰ	－ － －	胴部からゆっくりと立ち上がり、口縁部付近で急に外反する。外面には調整痕が明瞭に残る。	灰白色の微粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施すが、断面で確認できないほどに薄い。	15c(?)	泉州窯
	60			12.4 － －	内外面に片切彫りによる唐草文(？)が施される。	灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	14c後～15c前	龍泉窯
	61			11.6 3.1 5.4	高台脇から緩やかに外反する。見込みにはスタンプにより「福」の字が施される。	灰色の細粒子。	緑灰色の釉を両面に施し、畳付まで達する。また、高台内中央は雑に施される。	15c前～中	－
	62		Ⅱ	10.8 － －	口縁部は緩やかに内湾する。外面には片切彫りによる蓮弁が施される。	灰白色の微粒子。	明緑灰色の釉を両面に施す。	14c後～15c前	龍泉窯
	63			10.6 2.7 5.4	口縁部は緩やかに内湾する。見込みは平らに削り取られている。	灰白色の微粒子。	明緑灰色の釉を両面に施す。	15c前～中	龍泉窯
	64		Ⅲ	13.0 － －	外面に蓮弁が施され、弁部中央は僅かに盛り上がる。内面には唐草文(？)が施され、口縁部上面には雷文が施される。	灰白色の微粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。	14c後～15c前	龍泉窯
	65			11.4 － －	外面に蓮弁が施され、弁部は僅かに盛り上がる。	灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	14c後～15c前	龍泉窯
	66			13.6 － －	外面には深い片切彫りにより蓮弁が施される。弁部左は意図的かは不明だが、段差が確認できる。	灰白色の微粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。	14c後～15c前	龍泉窯
	67			12.1 － －	外面には弁先のとがった蓮弁が施され、弁部中央は盛り上がる。見込みには双魚文が施されると思われる。	灰白色の微粒子。	淡緑灰色の釉を両面に施す。	14c後～15c前	龍泉窯
	68			15.0 4.8 5.4	外面には二股の工具により蓮弁が線彫りされる。見込み中央部にはスタンプによる双魚文が施される。	灰白色の細粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施すが、畳付までは達しない。	14c後～15c前	－
	69		Ⅳ	12.6 － －	外面口縁部下を削る事によって、口縁部を若干肥厚させる。	灰色の細粒子。	淡緑灰色の釉を両面に施す。	15c前～中	－
	70		Ⅴ	11.4 3.3 4.2	高台脇から屈曲し、緩やかに外反する。	浅黄橙色の細粒子。	鈍い緑褐色の釉を施すが、素地が透けているため、外見は黄褐色を呈する。	15c前～中	－

第２表e　青磁観察一覧

単位：cm

図番号		器種	分類	口径 器高 底径	文様・成形等の特徴	素地	釉色・施釉状況等	年代	窯
第9図・図版5	71	Ⅲ	Ⅴ	13.0 3.5 5.2	見込み中央に花弁(？)が施されるが明瞭ではない。内面には唐草文(？)が施される。	黄味がかった灰白色の細粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施し、高台内は蛇ノ目状に施釉される。	15c前～中	－
	72		Ⅵ	13.0 － －	外面には線彫りによる蓮弁が施され、内面は丸彫りにより菊花を表す。	灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	15c中～後	龍泉窯
	73			－ － －	外面には線彫りによる蓮弁が施され、内面は丸彫りにより菊花を表す。	灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	15c中～後	龍泉窯
	74			13.8 3.3 6.6	見込みにはスタンプによる格子文(？)が施される。	黄味がかった灰白色の細粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	15c中～後	－
	75			13.6 2.4 6.4	見込みには74と同様に、スタンプによる格子文(？)が施されるが不明瞭である。	灰白色の細粒子。	青緑灰色の釉を両面に施す。	15c中～後	－
第10図・図版5	76	Ⅲ	Ⅵ	13.6 － －	口唇部の刻み目と、内面の丸彫りで菊花を表す。	灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	15c中～後	－
	77			12.5 － －	口唇部の刻み目と、内面の丸彫りで菊花を表す。	灰白色の細粒子。	緑灰色の釉を両面に施すが、発色が悪くやや白濁する。	15c中～後	－
	78			－ － 5.4	高台は丁寧に作られる。内面の丸彫りは菊花になると思われる。	灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	15c中～後	龍泉窯（？）
	79		Ⅶ	12.4 － －	内面を８つに区画し、その中に雲文を施す。外面にも線彫りによる雲文(？)が施される。	灰白色の細粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。	14c後～15c前	龍泉窯
	80			－ － －	内面を８つに区画し、さらに上下に区画する。その上部には雷文、下部には雲文を施す。	灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	14c後～15c前	龍泉窯
	81		－	－ － 6.4	見込みにはスタンプにより何らかの文様が施される。おそらく腰折れの外反器形になると思われる。	灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施し、高台内は蛇ノ目釉剥ぎが施される。	14c後～15c前	龍泉窯
	82	盤	Ⅰ－a	23.6 － －	全体的な作りは丁寧であり、口縁部を鍔縁状に仕上げる。	灰白色の微粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。	14c後～15c前	龍泉窯
	83			－ － －	全体的な作りは丁寧であり、口縁部を鍔縁状に仕上げる。内面には幅1.5cmの蓮弁が施される。	灰白色の細粒子。	淡緑灰色の釉を両面に施す。	14c後～15c前	龍泉窯
	84			－ － －	全体的な作りは丁寧であり、口縁部を鍔縁状に仕上げる。内面には浅い蓮弁が施される。	灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	14c後～15c前	龍泉窯
	85			－ － －	全体的な作りは丁寧であり、口縁部を鍔縁状に仕上げる。 内面には0.5cm 幅で弁先が直線の蓮弁が施される。	淡灰色の微粒子。	オリーブ褐色の釉を両面に施す。	15c前～中	龍泉窯
	86			－ － －	全体的な作りは丁寧であり、口縁部を鍔縁状に仕上げる。内面には５本単位の細かい櫛状工具により沈線が施される。	灰白色の細粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	15c中～後	－
	87			－ － －	全体的な作りは丁寧であり、口縁部を鍔縁状に仕上げる。口縁上部には雷文、胴部内面には濤文が施される。	灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	14c後～15c前	龍泉窯
	88		Ⅰ－b	－ － －	口縁部を鍔縁状に仕上げるが、断面形態は三角形状を呈する。胴部内面には幅広の蓮弁が施される。	灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	14c後～15c前	龍泉窯（？）
	89		Ⅰ－c	－ － －	口縁部を鍔縁状に仕上げるが、口唇部が微弱である。	灰白色の細粒子。	淡緑灰色の釉を両面に施す。	14c後～15c前	－
	90		Ⅱ	24.6 － －	全体的に丁寧な作りである。口縁部周辺で外側に屈曲し、直線的に伸びる。	淡灰色の細粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	15c前～中	龍泉窯
第11図・図版6	91	盤	Ⅱ	31.0 － －	全体的に丁寧な作りである。口縁部周辺で外側に屈曲し、直線的に伸びる。両面に片切彫りによる唐草文(？)が施される。	淡灰色の細粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。	14c後～15c前	龍泉窯
	92			29.4 － －	全体的に丁寧な作りである。口縁部周辺で外側に屈曲し、直線的に伸びる。両面に片切彫りによる唐草文が施される。	灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	14c後～15c前	龍泉窯
	93			28.0 － －	全体的に丁寧な作りである。やや内湾気味に立ち上がり口が折れる。口縁部上面には濤頭文(？)が施され、外面には２状の圏線が廻らされる。	灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	14c後～15c前	龍泉窯

第２表f　青磁観察一覧

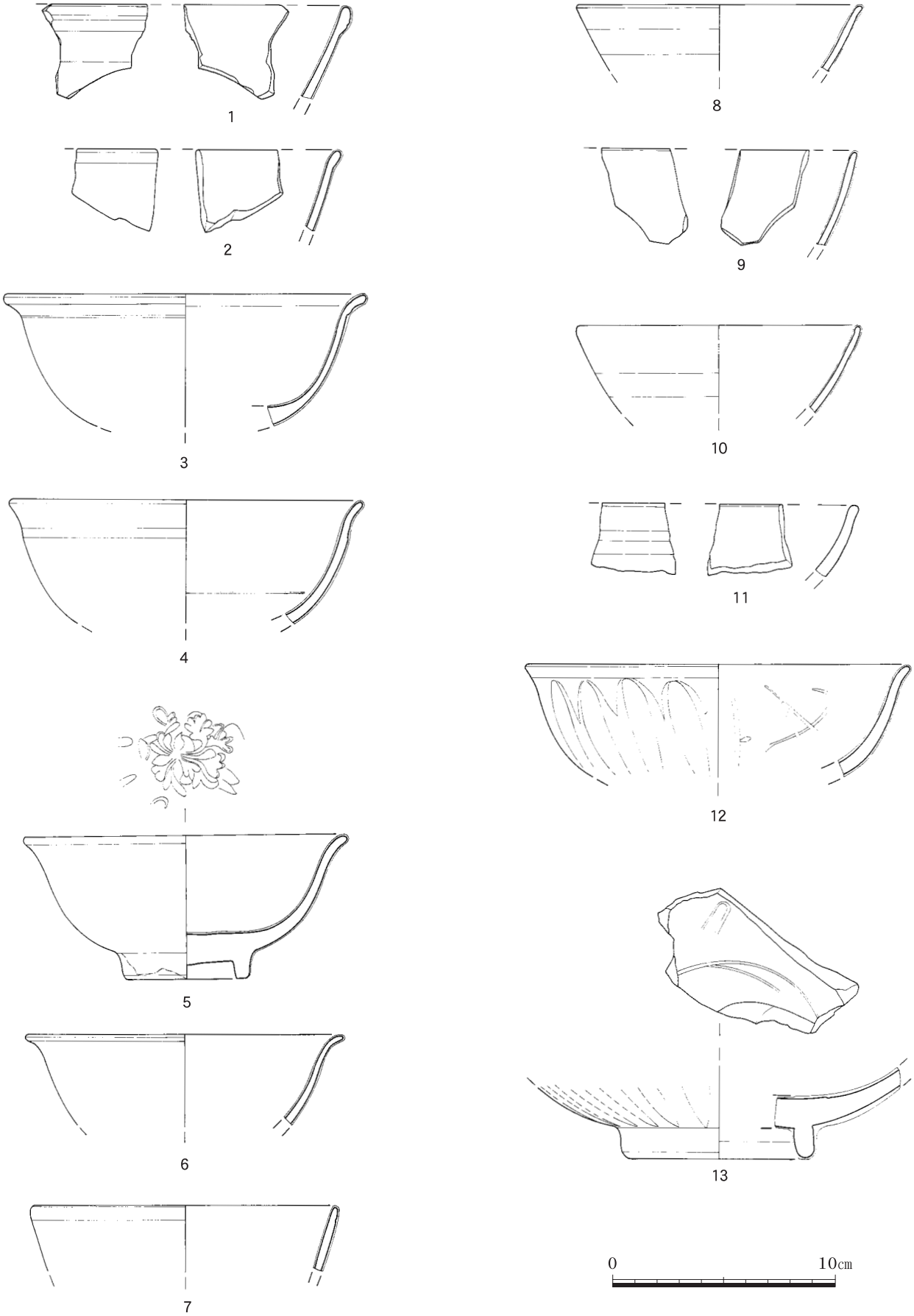
単位：cm

図番号		器種	分類	口径 器高 底径	文様・成形等の特徴	素地	釉色・施釉状況等	年代	窯
第11図・図版6	94	盤	Ⅱ	23.0 － －	全体的に丁寧な作りである。口唇部に刻みを施し、稜花にする。内面には片切彫りによる草花文が、外面には丸彫りによる蓮弁が施される。	灰白色の微粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。	15c前～中	－
	95			－ － －	口唇部に刻みを施し、稜花もしくは輪花にする。内面には片切彫りによる草花文が施される。	灰白色の細粒子。	暗緑灰色の釉が施される。	15c前～中	－
	96			30.0 － －	口唇部に刻みを施し、稜花にする。両面に丸彫りにより蓮弁が施される。	やや黄味がかった灰白色の細粒子。	オリーブ褐色の釉を両面に施す。	14c後～15c前	龍泉窯
	97			－ － －	全体的に丁寧な作りで、口唇部に刻みを入れて稜花もしくは輪花にする。両面には丸彫りにより浅い蓮弁が施されるが、不明瞭である。	灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	14c後～15c前	龍泉窯
	98		Ⅲ	－ － －	割と小振りであり、さらになる可能性も高い。口縁部は直口であり、内面には１条の圏線と蓮弁が施される。	灰白色の細粒子。	青緑灰色の釉を両面に施す。	15c中～後	－
第12図・図版6	99	盤	底Ⅰ	－ － 8.6	見込みに印花文、内面には櫛書きによる蓮弁文が施される。	淡灰色の細粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。高台内は露胎する。	15c中～後	－
	100			－ － 8.2	見込みに八宝文(？)が描かれる。	淡灰色の細粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。高台内は露胎する。	15c中～後	－
	101			－ － 8.0	見込みに印花文を施す。	淡灰色の細粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。高台内は露胎する。	15c中～後	－
	102			－ － 10.6	全体的に雑な作りである。	淡灰色の細粒子。	やや白味がかった緑灰色の釉を両面に施す。高台内は蛇ノ目状に掻き取る。	15c中～後	－
	103			－ － 8.8	全体的に雑な作りである。	にぶい黄橙色の細粒子。	オリーブ黄色の釉を両面に施す。	15c中～後	－
	104			－ － 10.0	内面に櫛書きによる蓮弁文を施すが不明瞭である。見込みには印花文が施される。	淡灰色の細粒子。	浅黄色の釉を両面に施す。	15c中～後	－
	105			－ － 9.8	臥足ではあるが、胴部へ移行する部分で削りが入る。内面には八宝文(？)が施される。	浅黄橙色の細粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。高台内は蛇ノ目状に掻き取る。	15c中～後	－
	106			－ － 8.0	臥足ではあるが、胴部へ移行する部分で削りが入る。見込みには蓮花(？)が、その周囲には蓮弁が施される。	灰黄色の細粒子。	緑がかった灰白色の釉を両面に施す。	15c中～後	－
	107		底Ⅱ	－ － 10.6	高台が低く、一見臥足にも見える。見込みに印花文、その周囲に蓮弁が施されるが、不明瞭である。	淡灰色の細粒子。	緑がかった灰白色の釉を両面に施す。	15c中～後	－
第13図・図版7	108	盤	底Ⅱ	－ － －	高台が低く、一見臥足にも見える。文様は観察できない。	やや茶色がかった灰白色の細粒子。	淡緑灰色の釉を両面に施す。	15c中～後	－
	109			－ － 7.4	見込みに印花文(？)が施される。	淡灰色の細粒子。	淡緑灰色の釉を両面に施す。	15c中～後	－
	110			－ － 10.0	見込みに印花文(？)が施され、その周囲には唐草文が描かれる。全体的に丁寧な作りである。	灰白色の微粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施し、高台内は蛇ノ目に掻き取る。	14c後～15c前	龍泉窯
	111			－ － －	両面に幅の広い蓮弁が施される。高台の作りも丁寧である。	灰白色の微粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施し、高台内は蛇ノ目に掻き取る。	14c後～15c前	龍泉窯
	112			－ － －	見込みにスタンプによる格子文(？)が施される。作りも丁寧である。	白色の微粒子。	明緑灰色の釉を両面に施す。	15c前～中	龍泉窯
	113			－ － 10.2	見込みにスタンプによる菊花文(？)が施される。	灰白色の細粒子。	暗緑色の釉を両面に施す。	15c前～中	－
	114			－ － 10.2	見込みに印花文(？)が施される。	にぶい黄橙色の細粒子。	オリーブ黄色の釉を両面に施す。	14c後～15c前	－
	115			－ － －	内面に幅の広い蓮弁が施される。高台は大きく、しっかりとしている。	にぶい黄橙色の細粒子。	オリーブ黄色の釉を両面に施す。	14c後～15c前	－

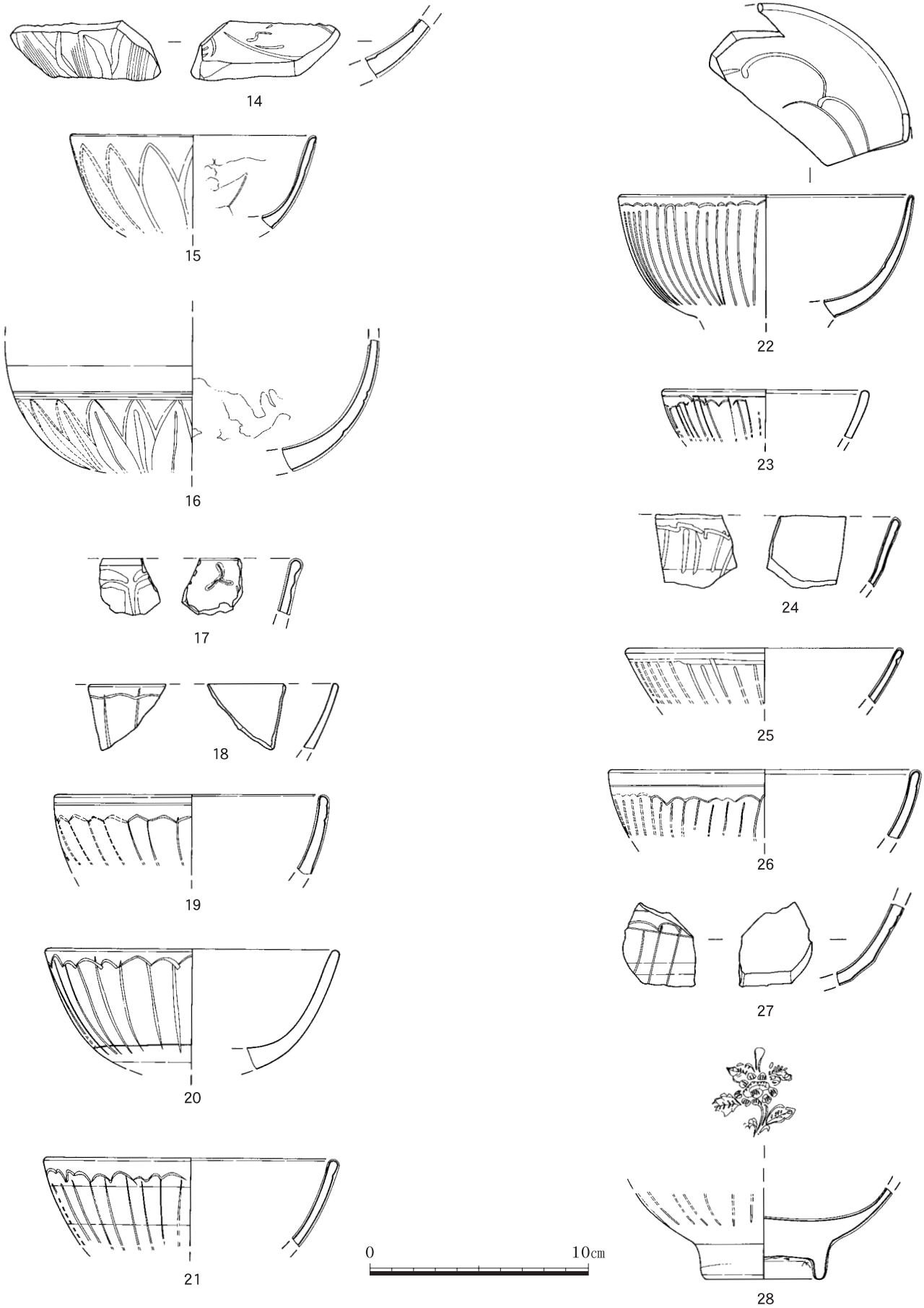
第２表g　青磁観察一覧

単位：cm

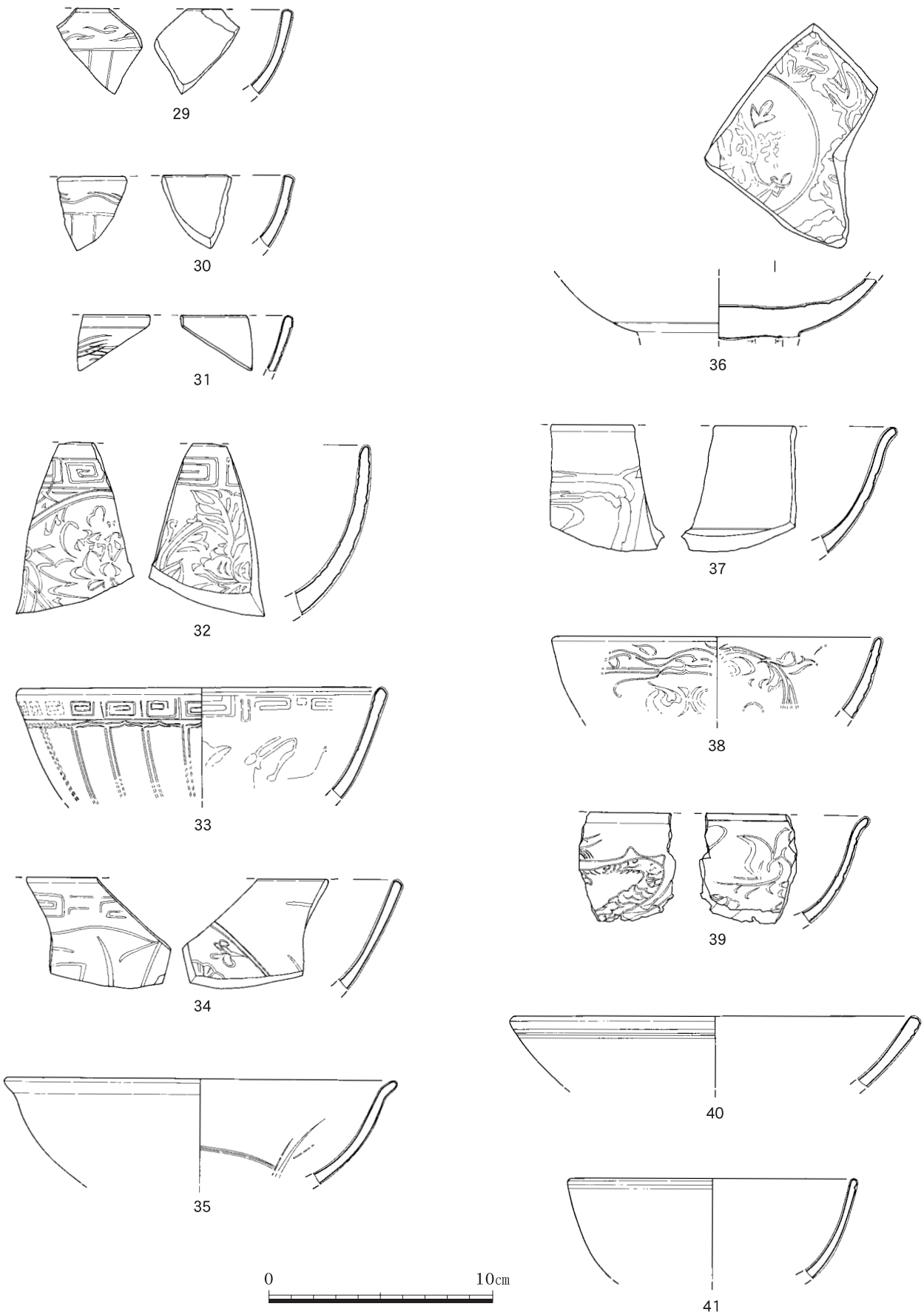
図番号		器種	分類	口径 器高 底径	文様・成形等の特徴	素地	釉色・施釉状況等	年代	窯
第13図・図版7	116	盤	底Ⅱ	－ － 9.0	見込みに印花文が施される。その周囲に圏線を一条廻らす。高台は低く、畳付は幅広である。	灰色の細粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。	15c前～中	－
	117			－ － 10.0	全体的に丁寧な作りで、高台は薄い。見込みには片切彫りにより葉(？)が施される。	灰白色の細粒子。	明緑灰色の釉を両面に施し、高台内は蛇ノ目状に掻き取る。	14c後～15c前	龍泉窯
	118			－ － 14.2	全体的に丁寧な作りで、高台はかなり薄めである。内面には丸彫りによる蓮弁文が施される。	灰白色の細粒子。	緑灰色の釉を両面に施し、高台内は蛇ノ目状に掻き取る。	15c前～中	龍泉窯(？)
第14図・図版7	119	鉢	－	27.6 － －	口縁部外面に雷文を線彫りし、その下にはラマ式蓮弁(？)が施される。内面には唐草文(？)が施される。	灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	15c前～中	龍泉窯
	120	擂鉢	－	13.8 － －	内面には６本単位の櫛状工具により、割りと雑に擂り目を作る。外面には片切彫りにより蓮弁を施す。	灰白色の細粒子。	暗オリーブ色の釉を両面に施す。	15c前～中	－
	121	蓋	－	内経 18.6	酒会壺の蓋と思われる。作りは丁寧であり、蓋甲部には線刻花文が施される。	灰白色の微粒子。	暗緑灰色の釉を外面にのみ施し、見受け部分は露胎させる。	15c前～中	龍泉窯
	122			－ － －	酒会壺の蓋の鍔部分と思われる。作りは丁寧である。	灰白色の微粒子。	暗緑灰色の釉を外面にのみ施し、見受け部分は露胎させる。	14c後～15c前	龍泉窯
	123	壺	－	－ － －	酒会壺の口縁部と思われる。全体的に丁寧な作りである。	灰白色の細粒子。	明緑灰色の釉を両面に施し、口唇部は露胎させる。	14c後～15c前	龍泉窯
	124			－ － －	酒会壺か。外面には蓮弁と葉がレリーフ状に施される。	灰白色の細粒子。	淡緑灰色の釉を両面に施す。内面はかなり薄い。	15c前～中	－
	125			－ － 18.8	酒会壺の底部。内面には轆轤目が明瞭に残る。落とし底は薄手でかなり垂れ下がる。	灰白色の細粒子。	淡緑灰色の釉を両面に施す。内面はかなり薄い。	15c前～中	－
	126			－ － 12.2	壺の底部か。厚手の作りだが底径は小さい。作りは丁寧である。外面には片切彫りにより蓮弁が施される。	灰白色の細粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。畳付周辺は露胎させる。	14c後～15c前	龍泉窯
	127	瓶	－	－ － －	口縁部は上面観が八角形を呈する。丁寧な作りで、頚部に縦位に細かい線刻を入れる。	灰白色の微粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。	15c前～中	龍泉窯
	128			－ － 7.0	小振りの瓶で、底部からすっと立ち上がる。内面には轆轤目が明瞭に残る。	灰白色の微粒子。	暗緑灰色の釉を両面に施す。内面は薄い。	14c後～15c前	龍泉窯
	129			－ － 6.3	底部は高台が無く、平底である。内面は調整痕が明瞭に残る。	淡灰色の細粒子。	暗緑灰色の釉を外面にのみ施す。見込み部分に若干釉が付着する。	15c前～中	－
第15図・図版8	130	瓶	－	－ － 11.4	しっかりとした高台を持つ。畳付は幅広である。	灰白色の細粒子。	暗緑灰色の釉を外面にのみ施す。	15c前～中	－
	131	香炉	－	32.8 － －	大振りの香炉で、頚部には線刻が、その下には花のリレーフを施す。	灰白色の細粒子。	青緑灰色で透明度の高い釉を両面に施す。	15c	－
	132			－ － －	大振りの香炉で無文。	淡灰色の細粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	15c前～中	－
	133			－ － －	大振りの香炉で口縁部は内側に折れる。外面には算木文がレリーフ状に施される。	淡灰色の細粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	15c前～中	－
	134	蓋置	－	5.4 － －	作りが丁寧であり、口縁部直下に孔が穿たれる。	灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	14c後～15c前	龍泉窯
	135	水注	－	－ － －	作りは雑である。	灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	15c	－
	136			－ － －	水柱の注ぎ口。	灰白色の微粒子。135と酷似する。	緑灰色の釉を施す。釉調は135と酷似する。	15c～16c	－
	137	馬上杯	－	－ － 4.6	高台は竹を模したのかのような圏線が廻らされる。	灰白色の微粒子。	淡緑灰色の釉を両面に施す。畳付は掻き取る。	15c	－
	138	駒	－	－ － －	中国将棋の駒。「包」もしくは「炮」の駒だと思われる。	灰白色の細粒子。	暗緑灰色の釉を側面にのみ施す。	15c(?)	－



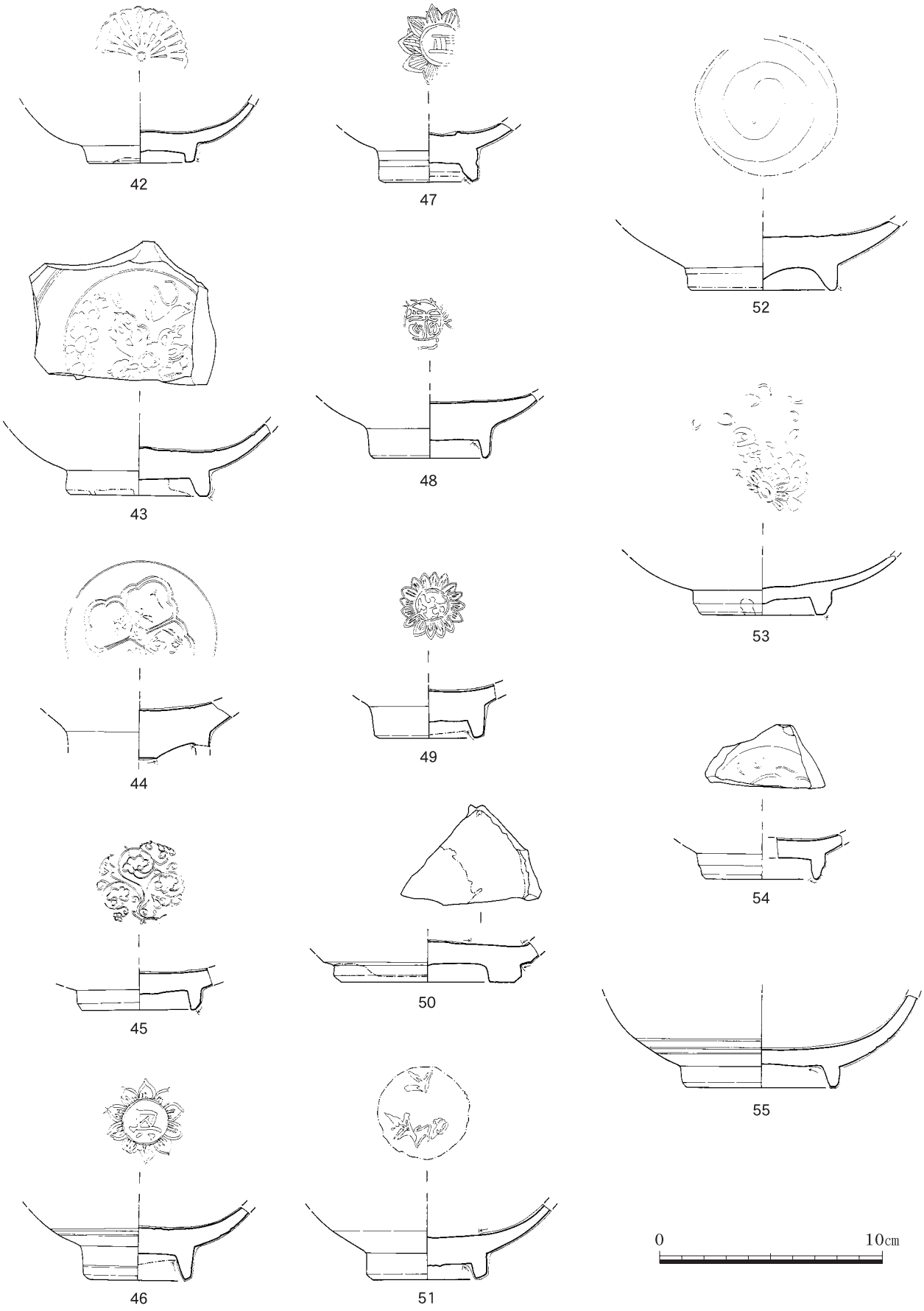
第５図　青磁１　碗



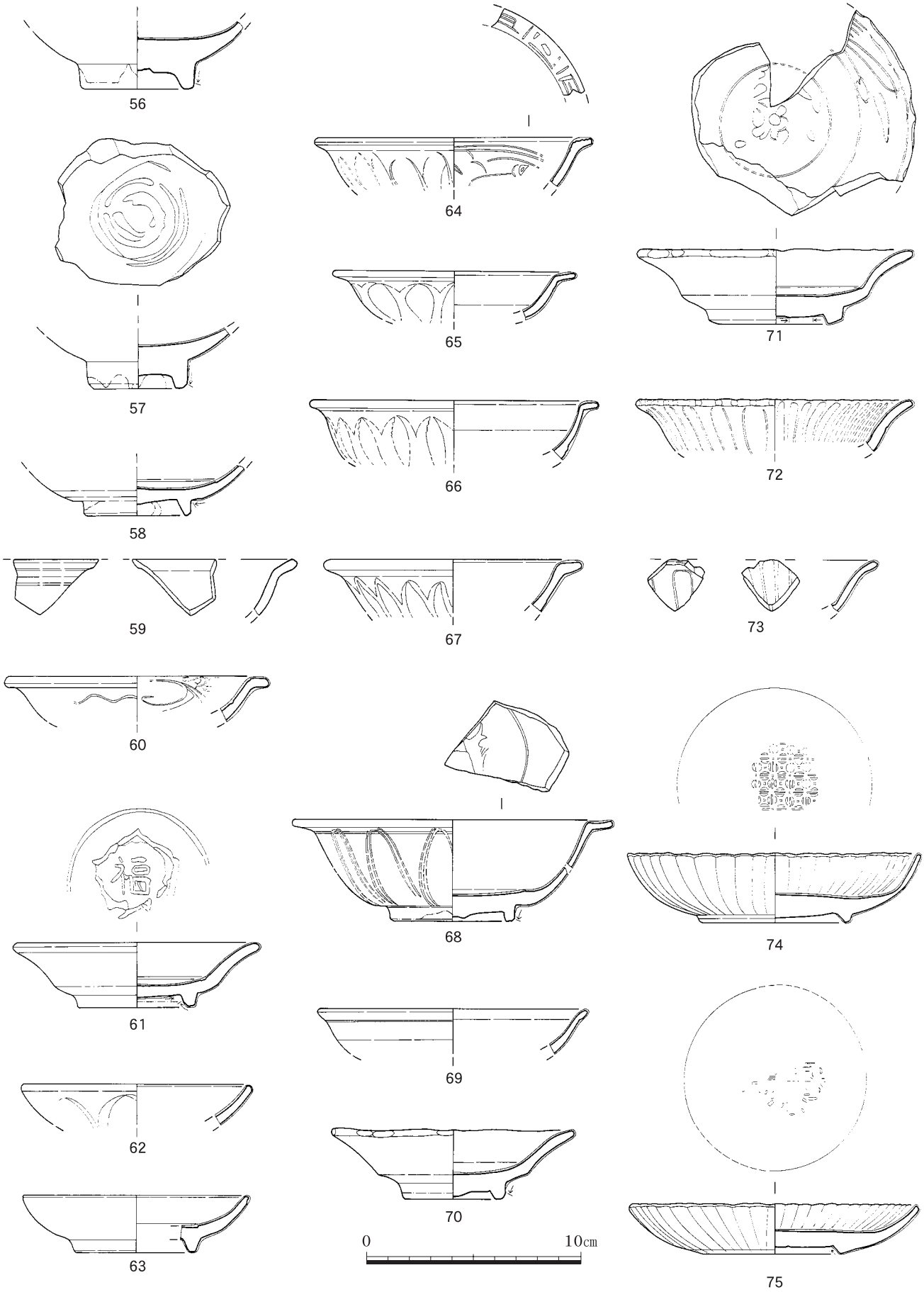
第６図　青磁２　碗



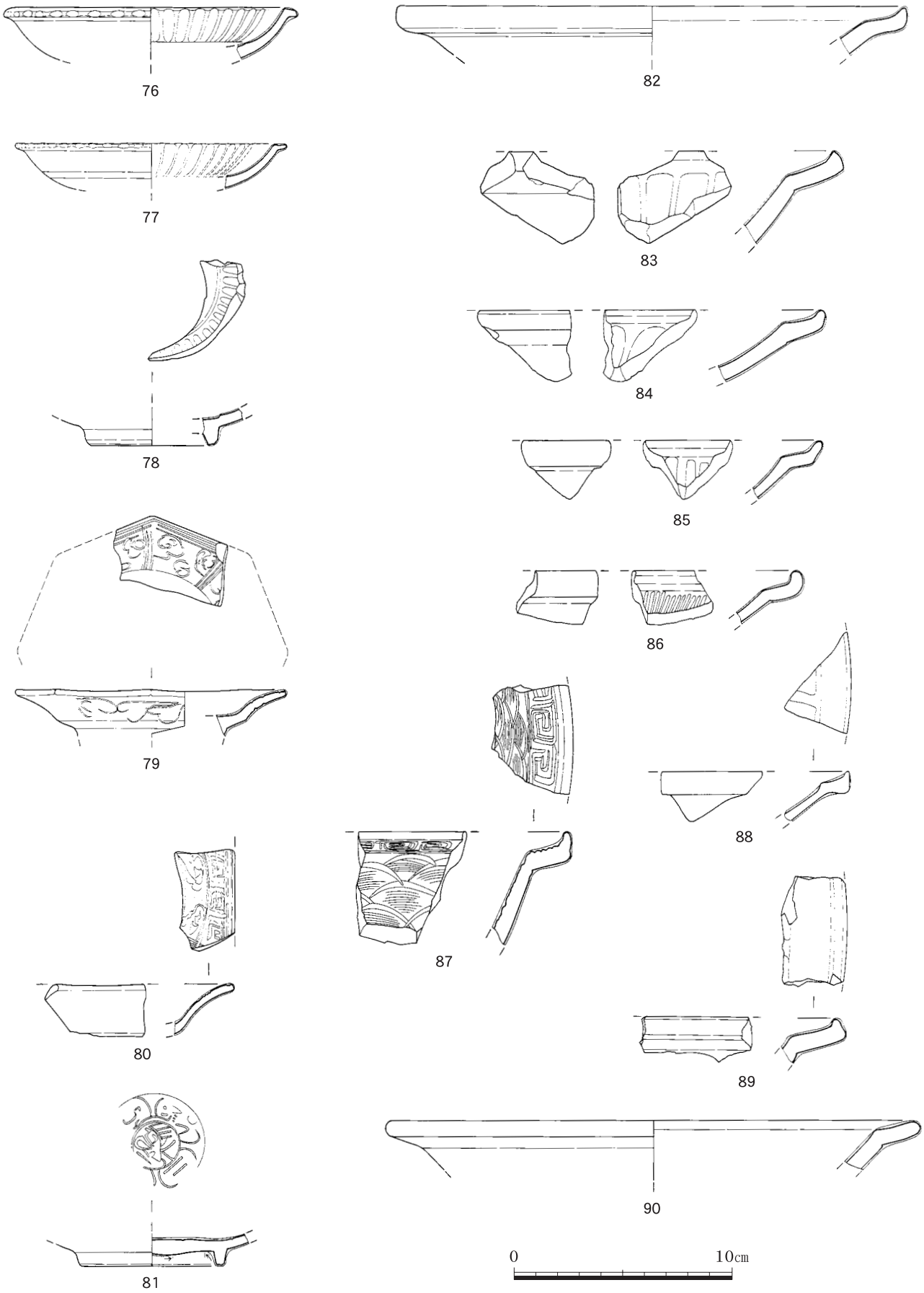
第７図　青磁３　碗



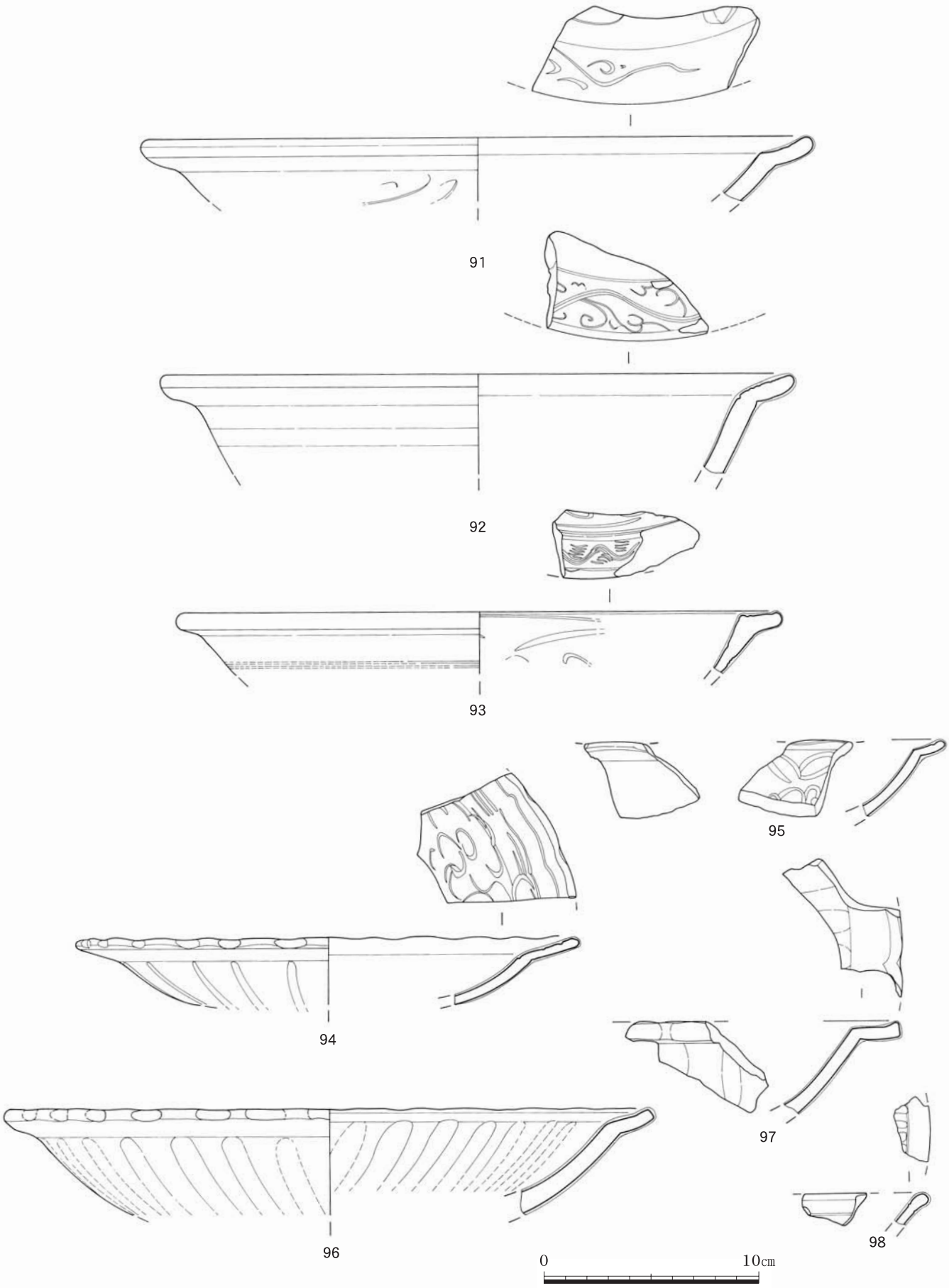
第８図　青磁４　碗



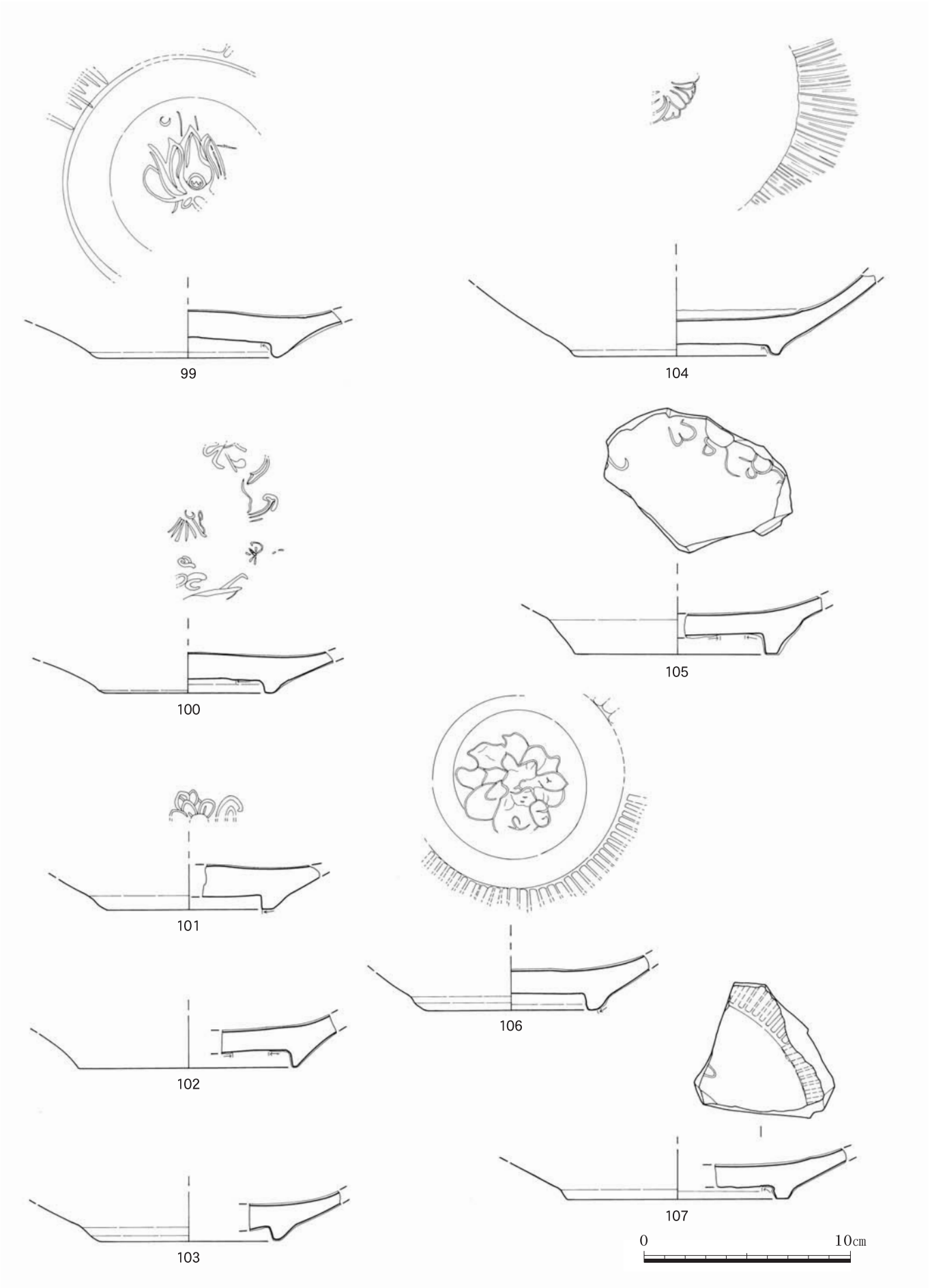
第９図　青磁５　碗(56～58)、皿(59～75)



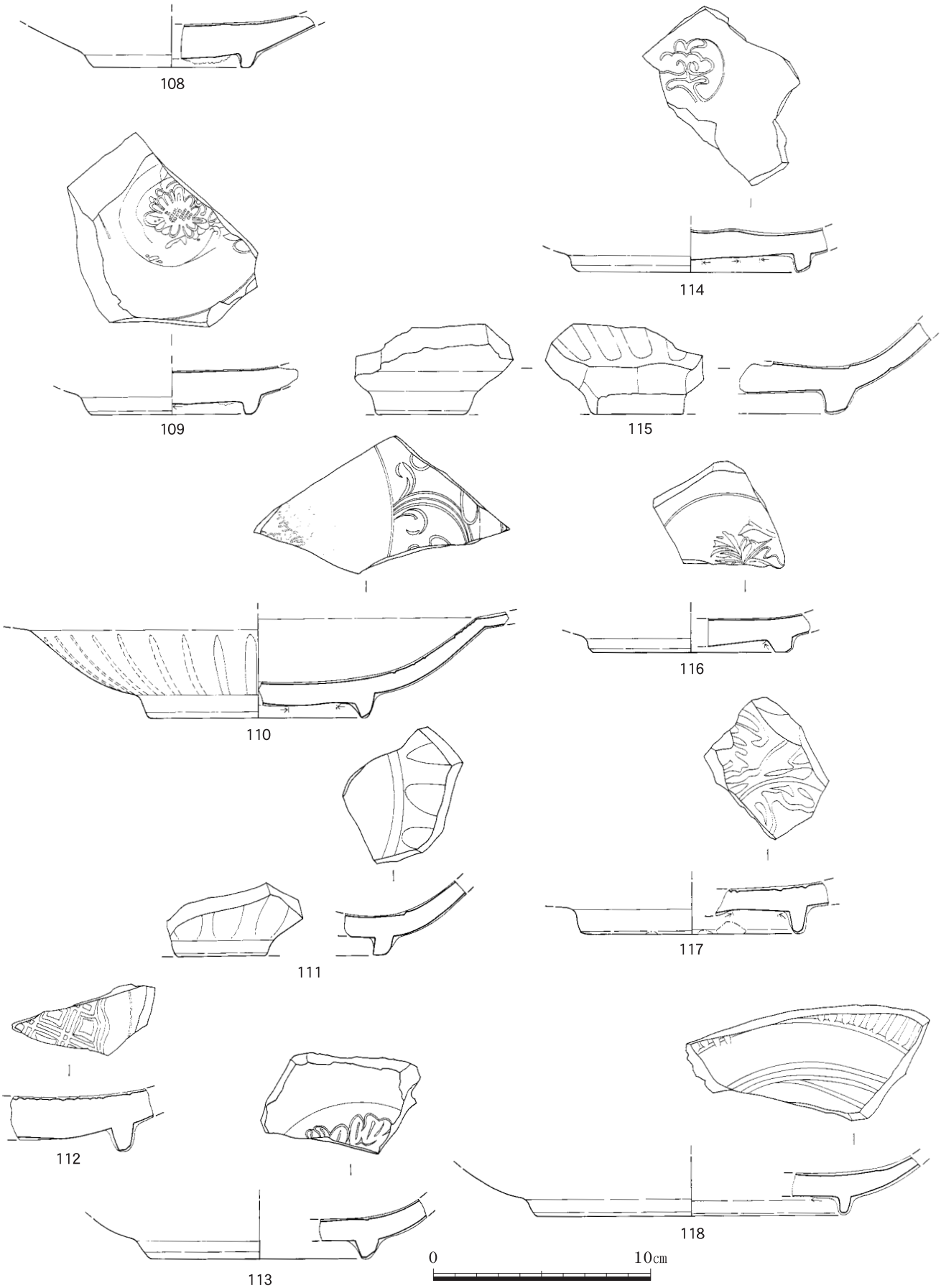
第10図　青磁６　皿(76～81)、盤(82～90)



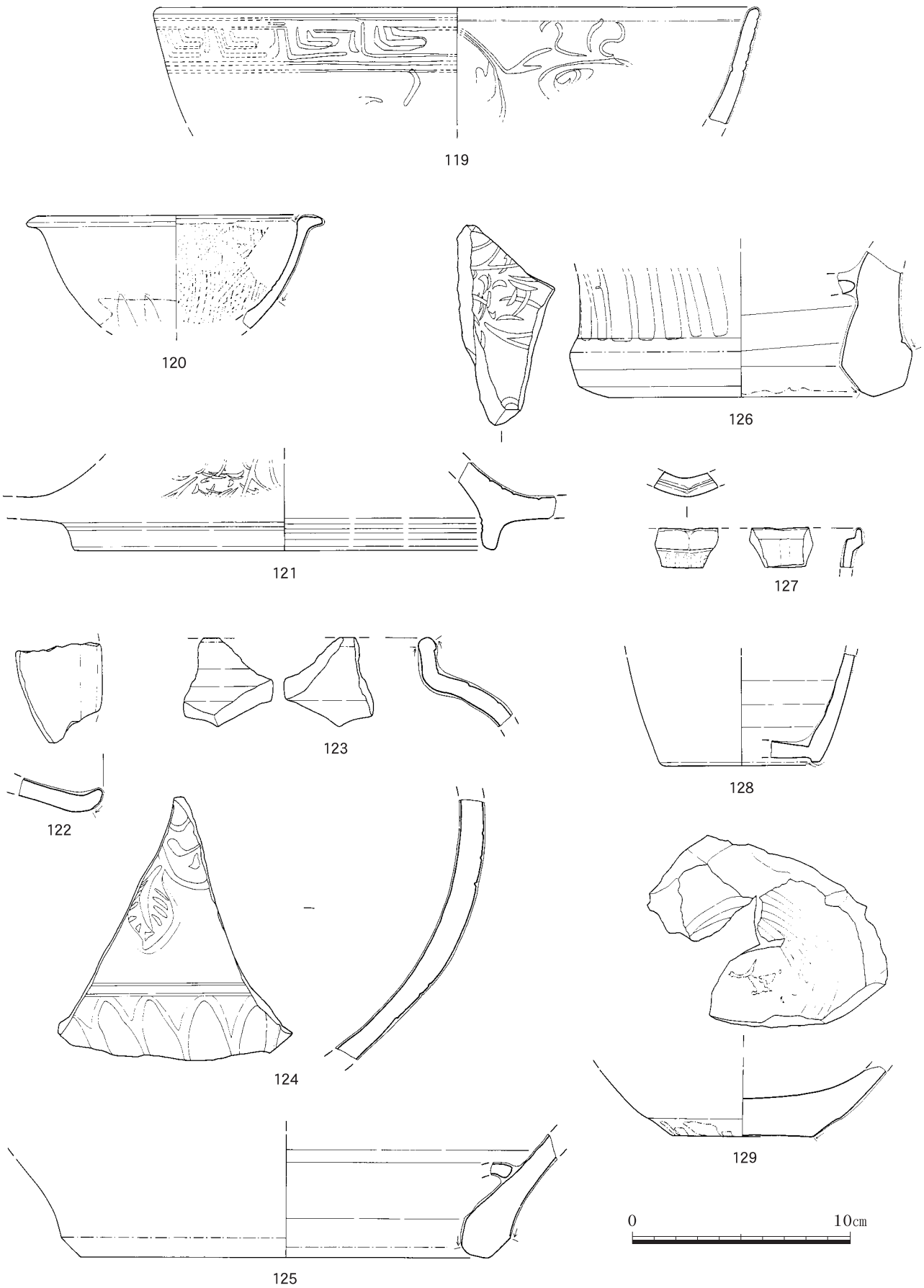
第11図　青磁７　盤



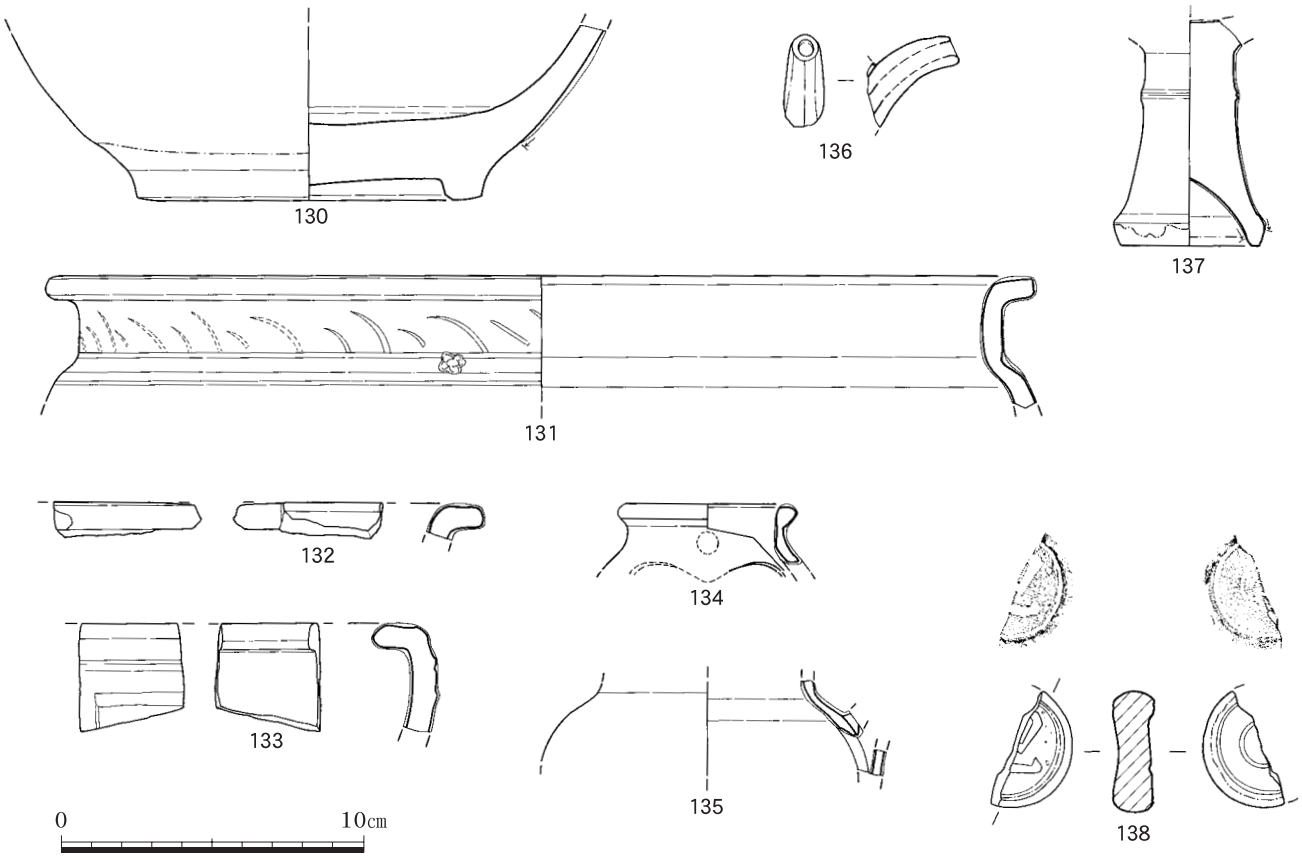
第12図　青磁８　盤



第13図　青磁９　盤



第14図　青磁10　鉢(119)、擂鉢(120)、蓋(121・122)、壺(123～126)、瓶(127～129)



第15図　青磁11　瓶(130)、香炉(131～133)、蓋置(134)、水注(135･136)、馬上杯(137)、駒(138)

第２節　白磁（第16図）

白磁は碗、皿、坏、瓶、器台の４器種得られ、最も多く出土したのは碗であり、次いで皿、坏とつづく。器台の口縁資料が１点出土した。生産年代は15～16世紀を中心に13世紀から近世のものまで出土しており、広い年代幅をもつ。

碗（１～６）

１はいわゆるビーロスクタイプと呼ばれる白磁碗の口縁で内彎する。口縁外面に稜をもち収縮するのが特徴である。釉薬は灰白色で観察できる範囲では内外面に施釉する。素地は気泡が目立ち、白灰色である。14世紀後半に位置づけられる。

２は外反器形を呈する碗である。内彎する胴部から稜をつくり口縁にかけて器壁を薄くさせることで外面は屈曲する外反状を呈する。釉は内外面に厚く施釉され、明オリーブ白色である。素地は灰色で微少な黒色粒子を含む。14世紀後半～15世紀中頃に位置づけられる。

３は口縁部を若干肥厚させるシャープな器形を呈する。成形方法は２と酷似しており、シャープな胴部から微弱な稜をつくり、器壁を薄くさせることで外面は微弱に屈曲する外反状を呈する。釉薬は観察できる範囲で内外面に施釉し、釉色は灰色である。素地は暗灰色で微弱な黒色粒子を含む。福建・広東。16世紀後半～17世紀前半に位置づけられる。

４は内傾碗で口縁直下の外面に明瞭なロクロ痕が残る。釉色は透明。素地は黄白色で粒子が細かい。15世紀に位置づけられる可能性がある。

５は碗の底部である。高台脇に段をもち成形は粗い。見込みは焼成後鋭い工具で文様を描いている。畳付から外底面を除き観察できる範囲で全面施釉する。釉色は透明。素地は黄白色で、粗い気泡が目立つ。15世紀に位置づけられる可能性がある。

６は碗の底部である。高台外面の単脚に比して畳付から外底面は長脚である。見込及び畳付から外底面を除き施釉されるが、所々剥げている。見込に文字が彫られている。釉色は暗オリーブ白色である。素地は黄白色で粒子は細かい。15世紀に位置づけられる可能性がある。

皿（７～10）

７は碗の底部と考えられるが、皿との判別が難しい。高台から胴部下方で強い稜をもち屈曲させ外反する。見込文様が描かれ、その後施釉している。畳付から外底面を除き観察できる範囲で全面施釉される。焼成時に付着したのか黒色粒子が多量にみられる。釉色は透明。素地は白灰色で微少な褐色粒子をまばらに含む。13世紀中～14世紀前半に位置づけられ、出土白磁の中では古いタイプである。

８は口縁が外反し、体部から底部にかけて丸みをもたせて内彎する。釉色は灰白色で全面施釉されるが、畳付は掻き取られ、砂目が付着する。素地は灰白色で微少な黒色粒子を含む。高台は外底面が焼成により形崩れを起こしている。景徳鎮。16世紀中～17世紀前半に位置づけられる。

９は口縁が内彎し、スマートに高台に至る器形を呈する。成形が粗く高台脇に稜をもつ。方形を呈する高台の畳付は間隔を置いて削られる。体部下方から外底面いたるまで施釉されないが、内面は全面施釉される。釉色は透明。素地は白色で粒子が細かい。15世紀中～後半に位置付けられる。

10は底部で比較的大型の資料である。釉薬は畳付から外底面を除き観察できる範囲で全面施釉される。畳付の釉薬は掻き取られた跡が残る。釉色は淡オリーブ白色である。素地は白灰色で粗い黒色粒子を含み、釉薬が付いた器面でも観察できる。16世紀中～17世紀前半に位置づけられる可能性がある。

坏（11）

11は八角坏の底部資料である。円形の高台から、腰部に稜をつくり八角に仕上げている。見込には目跡が残る。畳付は間隔をおいて規則的に削られている。高台と外面を除き全面施釉される。釉色は淡黄白色で貫入が目立つ。素地は白色で微粒子。15世紀中～後半に位置づけられる。

瓶（12）

12は底部資料で厚みがあり上底状である。外面は高台状を呈し微弱に屈曲し胴部に至る。底部外面下方に強い稜をもたせる。底面の素地は焼成による変色作用を受け、茶褐色を呈する。釉薬は内面と高台状の底部直前まで施釉されるが、一部畳付直前までたれている。釉色は淡青白色である。素地は灰色で黒色粒子を含み、気泡が目立つ。福建・広東。16世紀中～17世紀前半に位置づけられる。

器台（13）

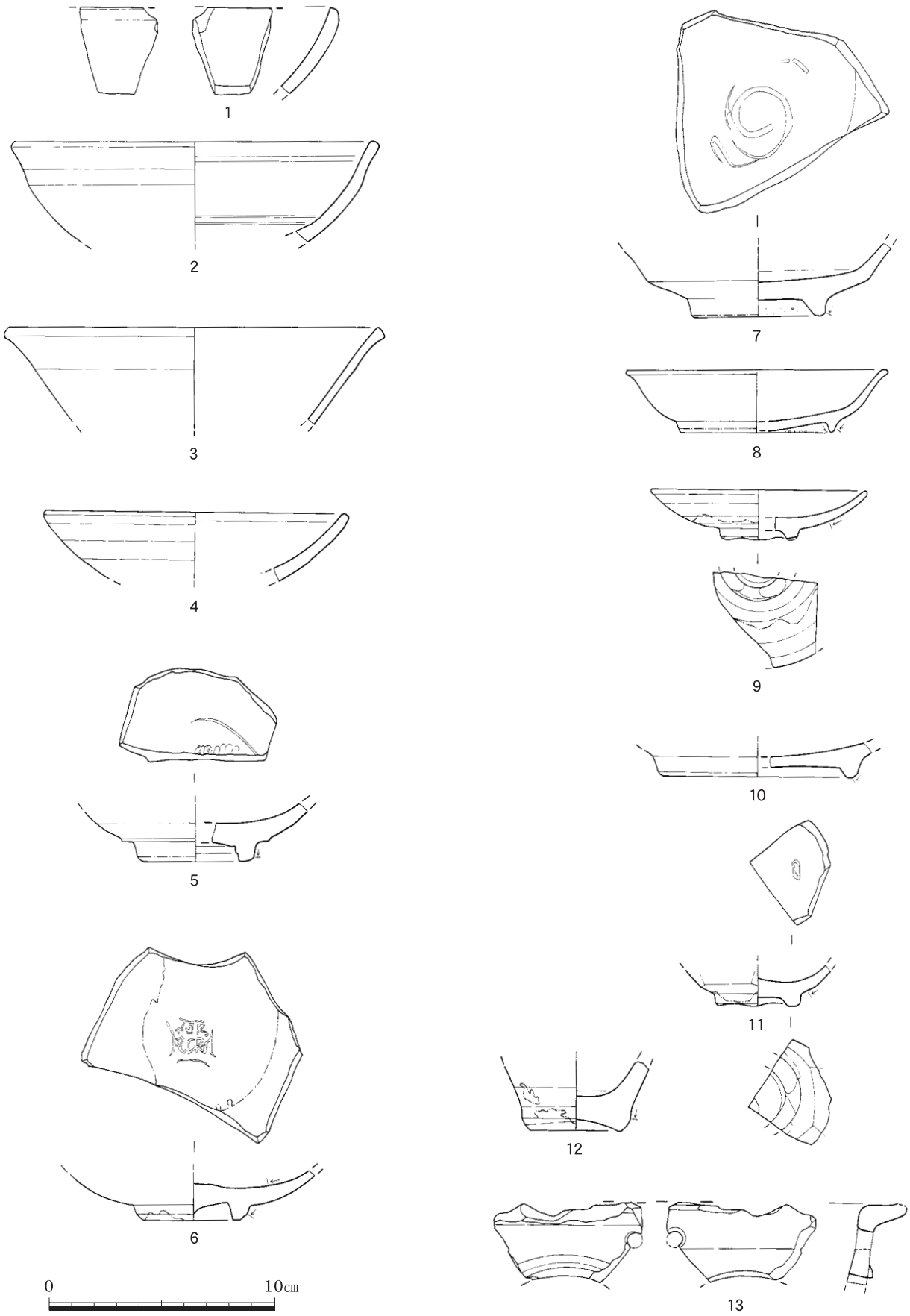
13の１点のみ出土した。口縁がＬ字状に折れ、頸部がシャープである。釉薬は乳白色を呈し、観察できる範囲で全面施釉されている。素地は白色で微粒子。16世紀～17世紀に位置づけられる可能性がある。

第３表　白磁出土状況

碗	小碗	皿	杯	瓶	壺	酒会壺	水注	器台	器種不明	合計
127	15	45	10	9	1	1	1	1	119	329

第４表　白磁法量一覧　単位：cm

番号	器種	部位	口径	器高	底径
1	碗	口	－	－	－
2		口	16.4	－	－
3		口	17.0	－	－
4		口	13.6	－	－
5		底	－	－	4.6
6		底	－	－	4.3
7	皿	底	－	－	5.6
8		口～底	11.7	2.8	6.8
9		口～底	9.6	2.2	3.5
10		底	－	－	3.4
11	杯	底	－	－	8.4
12	瓶	底	－	－	4.0
13	器台	口	26.0	－	－



第16図　白磁　碗(1～6)、皿(7～10)、杯(11)、瓶(12)、器台(13)

第３節　染付（第17～21図）

染付は総数3,414点出土し、器種は碗、皿、鉢、盤、杯、瓶、壺などがある。量的には碗が最も多く、皿が続く。時期的には15世紀代よりも、17世紀～18世紀相当のものが多い。産地は景徳鎮を始めとして、福建・広東系、徳化窯系、漳州窯系があり、比較的徳化窯系が多くみられる。また、特徴的な資料として口縁部を輪花形に成形し、芙蓉手文様を施す碗がある。以下に各器種の分類について略述し、観察表に文様などの説明を記述する。

１　碗

碗は口縁部形態を主として器形や文様によりⅠ～Ⅲ類に分類し、さらに分類可能なものは細分類を行った。

Ⅰ類：口縁部が外反するもの。

　ａ－口縁部端を外反させるもの（１～８）。

　ｂ－緩やかに外反するもの（９～11）。

Ⅱ類：口縁部が直口するもので、胴部が直線的なものと内湾するものがある（12～22）。

Ⅲ類：口縁部が輪花形をするもので、外反させた口縁部端を僅かにつまみあげる。芙蓉手文様を施文する（23）。

底部：器形や文様に特徴があるものを図化した（24～28）。

２　小碗

小碗は4点図化した。口縁部は外反し、文様は唐草文、寿字文などである（29～33）。

３　皿

皿は口縁部形態を主として器形や文様によりⅠ～Ⅴ類に分類し、さらに分類可能なものは細分類をした。

Ⅰ類：口縁部が外反するもの。

　ａ－緩やかに外反するもの（34・39）。

　ｂ－口縁部端を外反させるもの（35～37）。

　ｃ－腰折皿（38）。

Ⅱ類：口縁部が直口するもの（40～42）。

Ⅲ類：口縁部が輪花形をするもので、外反する口縁部の端を摘み上げるもの（43）。

Ⅳ類：口縁部が輪花形で直口口縁のもの（44）。

Ⅴ類：ひねり変形皿。口縁部は輪花形と思われる（45）。

胴部：陰刻による蓮弁文を胴部に施すなど特徴的な資料を１点図化した（46）。

底部：蓮子形、饅頭心形などの器形に特徴があるものや文様に特徴のあるものを図化した（47～51）。

４　小皿（52～53）

小皿は２点図化した。２点とも口唇部は無釉となっている。

５　鉢（54～57）

鉢は口縁部資料は無く、胴部、底部のみであった。特徴的な資料としては、漳州窯系がある（56）。

６　壺（58・59）

壺は２点図化した。58は短い頸部をもち、口唇部に鉄釉を施すものである。

７　盤（60）

口縁部で外側に折れる。被熱跡が認められ、付着物もある。

８　瓶（61～64）

瓶は蓋、頸部、胴部、獅子面が検出されている。

9　杯（65）

杯の胴部を図化した。文様は折枝梅文を胴部に描いている。

10　高足杯（66）

高足杯の胴部から底部にかけての資料である。

11　小杯（68・69）

小杯は全体が窺穴うことができるものと文様に特徴があるものを図化した。69は外底に「成化年製」銘がある資料である。

12　袋物（67）

袋物は１点図示した。角をもつ底部片であり、畳付は無釉である。

第５表　染付出土状況

碗				小碗				皿				小皿		鉢		壺		盤		
口～底	口	胴	底	口～底	口	胴	底	口～底	口	胴	底	口～底	口	胴	底	口	胴	口	胴	底
13	860	957	540	4	138	44	39	15	257	153	248	1	1	11	9	1	11	3	4	12

瓶				杯		高足杯	小杯				袋物	レンゲ	器種不明	合計
口	頸	胴	不明	胴	底	胴	口～底	口	胴	底	底			
2	1	18	2	1	1	1	3	39	10	11	1	2	1	3414

第６表a　染付観察一覧

単位：cm

図番号		器種分類	部位	口径 器高 底径	成形・文様等の特徴	素地	釉色・施釉状況・貫入等
第17図・図版9	1	碗Ⅰ－a	口	12.8 － －	外面に口縁部に圏線、胴部に渦文及び圏線、内面に圏線。	灰白色	灰白色釉を施釉、内外面ともに粗い貫入が入る
	2		口	14.8 － －	外面口縁部に圏線、胴部に馬士、内面口縁部に圏線。	灰白色で緻密	若干灰白色を帯びる釉、貫入は入らない
	3		口	14.6 － －	外面口縁部に圏線、胴部に龍文及び雲文。内面口縁部及び見込際に圏線。	白色	白色釉、粗い貫入が入る
	4		口～底	15.2 6.7 7.4	外面口縁部及び高台に圏線、胴部に草花文及び蓮弁文。内面に圏線。	白色で緻密	白色釉、貫入は入らない
	5		口～底	12.2 5.5 5.4	外面口縁部及び高台に圏線、胴部は区画し梅花散し文及び寿字文を配する。その下には略された蓮弁文。内面には圏線。	灰白色で緻密	青味を帯びる釉、貫入は入らない
	6		口～底	14.0 6.7 6.8	外面口縁部及び高台に圏線、胴部に連続した寿字文及び略された蓮弁文。内面に圏線。	灰白色で緻密	青味を帯びる釉、貫入は入らない
	7		口～底	15.4 7.2 8.0	外面口縁部及び高台に圏線、胴部に波中龍文及？びれ蓮弁文。内面に圏線。	白色で緻密	白色釉、貫入は入らない
	8		口	15.4 － －	外面口縁部に圏線、胴部に梅散し文及び？波中龍文。内面口縁部に圏線。	白色で緻密	白色釉、貫入は入らない
	9	碗Ⅰ－b	口	11.7 － －	外面口縁部に圏線、胴部に豹皮状の文様、内面口縁部に圏線。	淡灰白色	灰白色釉、貫入は入らない
	10		口～底	12.6 5.6 7.1	外面胴部に雲文？、内面に圏線。	灰白色で緻密	青味を帯びる透明釉、貫入は入らない

第６表b　染付観察一覧

単位：cm

図番号		器種分類	部位	口径 器高 底径	成形・文様等の特徴	素地	釉色・施釉状況・貫入等
第17図・図版9	11	碗 Ⅰ－b	口	15.0 － －	外面胴部に雲状の文様、内面胴部下位に陰刻線。	乳白色	生成色釉で呉須の発色は悪く、黒味がかる。細かい貫入が入る
	12	碗 Ⅱ	口	12.8 － －	外面口縁部に圏線、胴部に松及び花喰鹿文、内面口縁部に圏線。	白色	白色釉、貫入は入らない
	13		口	－ － －	外面口縁部に圏線、胴部に三葉を並べたような文様、口唇部内面に呉須を配する。	白色	僅かに青味を帯びる釉、呉須の発色は弱い、貫入は入らない
	14		口	14.0 － －	外面口縁部に圏線、胴部に草花文及び寿字文。内面口縁部に圏線。	淡灰白色	非常に薄い灰白色釉、貫入は入らない
	15		口	11.9 － －	外面に圏線、梵字？	白色で緻密	透明釉、貫入は入らない
第18図・図版10	16	碗 Ⅱ	口～底	13.0 5.7 5.9	外面口縁部及び高台に圏線、胴部に梵字及び蓮弁文、内面に圏線。	乳白色で緻密	白色釉、貫入は入らない
	17		口	13.0 － －	外面口縁部に圏線、胴部に丸文及び草文？。内面口縁部及び胴部に圏線。	白色で緻密	淡青灰白色釉、貫入は入らない
	18		口	15.1 － －	外面胴部に印花文、内面口縁部に圏線。	灰白色	灰白色釉、貫入は入らない
	19		口	14.8 － －	外面口縁部に波濤文？、胴部に圏線。内面に圏線。	灰白色で黒色粒子を含む	透明釉で呉須の発色は悪く、黒味がかる。貫入は入らない
	20		口～底	12.0 － －	外面口縁部に圏線、胴部に火焔文及び海波文。内面口縁部及び見込際に圏線。	淡灰白色で緻密	白色釉、貫入は入らない
	21		口	15.2 － －	外面に圏線、雲文及び牡丹文？、内面口縁部に圏線。	白色で緻密	白色釉、貫入は入らない
	22		口～底	15.6 6.65 5.8	外面口縁部、高台際及び外底に圏線、胴部に龍文。内面口縁部及び見込に圏線。	白色で緻密	透明釉、貫入は入らない
	23	碗 Ⅲ	口～底	12.0 6.8 4.6	型により口縁部を輪花形に成形する。芙蓉手文様を描く。外面は六つに区画され、その内に桃文？、竹文、花鳥文を描く。内面は見込に花鳥文を描き、胴部は瓔珞文により六つに区画し、桃文？、草文を描く。	白色	白色釉、貫入は入らない
	24	碗	底	－ － 4.5	蓮子碗。外面胴部にアラベスク文、内面見込に法螺貝文。	灰白色で焼成は悪い	灰白色釉、底部のは粗く施釉。呉須の発色は弱い
	25		底	－ － 3.9	外面胴部に芭蕉文及び陰刻草花文、高台に圏線。内面見込みに捻花文。	白色で緻密	白色釉、貫入は入らない
	26		底	－ － 6.65	高台際及び高台外面に圏線。見込に仙人及び池。	白色	白色釉、粗い貫入が入る
	27		底	－ － 5.5	外面胴部にアラベスク文？、内面見込に十字花文。	灰白色	濁灰白色釉、貫入は入らない
	28		胴	－ － －	外面胴部に草花によるアラベスク文、外底に圏線及び字款。見込に圏線及び宝文。	白色で緻密	白色釉、貫入は入らない
第19図・図版11	29	小碗	口～底	－ － 3.2	外面胴部に牡丹唐草文及び圏線、外底に丸文。	白色で緻密	濁白色釉、貫入は入らない
	30		底	－ － 3.8	外面高台に圏線、胴部に唐草文、外底に字款。見込に「寿」字文。	淡灰白色で緻密	薄青白色釉、貫入は入らない
	31		口～底	10.0 4.9 4.4	外面口縁部及び高台に圏線、胴部に梵字文を施すが、描き失敗の縦線あり。外底に銘。内面口縁部及び見込際に圏線、見込に梵字文。	白色	白色釉、貫入は入らない

第６表c　染付観察一覧

単位：cm

図番号		器種分類	部位	口径 器高 底径	成形・文様等の特徴	素地	釉色・施釉状況・貫入等
第19図・図版11	32	小碗	口～底	9.8 4.7 4.0	外面口縁部、高台及び外底に圏線、胴部に菊唐草文。内面に圏線。	白色で緻密	白色釉、貫入は入らない
	33		口～底	11.1 4.5 4.9	外面口縁部及び高台に圏線、胴部に唐草文。内面口縁部及び見込に圏線。	白色で緻密	白色釉、貫入は入らない
	34	皿 Ⅰ－a	口	12.1 － －	外面口縁部に圏線、胴部に宝相華唐草文。内面口縁部及び胴部に圏線。	淡灰白色	青灰白色釉、呉須は黒味を帯びる。貫入は入らない
	35	皿 Ⅰ－b	口～底	15.4 3.2 7.9	外面口縁部及び高台際に圏線、胴部に魚文若しくは龍文？。内面口縁部及び見込に圏線、胴部及び見込に草花文。	淡灰白色で緻密	灰白色釉、貫入は入らない
	36		底	14.5 3.35 7.5	外面口縁部及び高台際に圏線、胴部に宝文？、見込に圏線。内面口縁部及び胴部に圏線、胴部及び見込に梅散し文。	灰白色で緻密	白色釉、貫入は入らない
	37		口～底	15.2 3.05 8.0	外面口縁部及び高台際に圏線、胴部に文様。内面口縁部及び胴部に圏線、見込に「志在書中」の一部。	灰白色で緻密	灰白色釉、貫入は入らない
	38	皿 Ⅰ－c	口～底	11.6 2.65 7.9	腰折皿。外底に銘の一部。内面口縁部及び見込周辺に圏線、見込に菊草花文。	白色で緻密	白色釉、貫入は入らない
	39	皿 Ⅰ－a	口～底	12.0 2.2 6.0	外面胴部に草文、内面口縁部は圏帯、見込は塗りつぶしされている。	白色で緻密	白色釉、貫入は入らない
	40	皿 Ⅱ	口	11.4 － －	外面口縁部に圏線。内面口縁部に四方襷文。	灰白色	白色釉、貫入は入らない
	41		口	9.5 － －	外面口縁部に略された波濤文、胴部に芭蕉文。内面口縁部及び胴部に圏線。	白色	白色釉、貫入は入らない
	42		口	16.0 － －	内面口縁部に圏線、胴部に梵字文。	白色で緻密	白色釉、貫入は入らない
	43	皿 Ⅲ	口	14.1 － －	芙蓉手の皿。口縁部は外反し、輪花形の端を立たす。外面胴部を区画し、内に宝文。内面胴部を区画し、内に宝文、区画の間を唐花？で繋ぐ。	白色で緻密	白色釉、貫入は入らない
第20図・図版12	44	皿 Ⅳ	口	－ － －	輪花皿。外面に渦巻帯文、内面に四方襷文？。	淡灰白色	青灰白色釉、貫入は入らない
	45	皿 Ⅴ	口	－ － －	ひねり変形皿。内外面ともラマ式蓮弁文。	白色	白色釉、貫入は入らない
	46	皿	胴	－ － －	外面胴部に渦巻帯文及び陰刻蓮弁文。内面胴部に四方襷文？及び陰刻蓮弁文。	白色	青灰白色釉、貫入は入らない
	47		底	－ － 6.9	外面胴部に宝相華唐草文、高台に圏線。内面は玉取獅子文及び圏線。	白色	灰白色釉、呉須は黒味を帯びる。貫入は入らない
	48		底	－ － 8.8	外面高台際に圏線、見込に「宝利」銘。内面胴部に梅散し文、見込に圏線及び梅散し文。	灰白色で緻密	白色釉、貫入は入らない
	49		底	－ － 8.5	外面高台際及び外底に圏線。見込に雲文？及び魚文？	灰白色で緻密	白色釉、貫入は入らない
	50		底	－ － 3.6	碁笥底皿。外面胴部に芭蕉文。見込に芭蕉文に鳥文、圏線。	灰白色	青灰白色釉、貫入は入らない
	51		底	－ － 5.4	底部は饅頭心型。見込に龍文。高台に細砂が付着している。	淡灰白色	白色釉、貫入は入らない。高台周辺の釉の接着は弱い
	52	小皿	口～底	9.7 2.15 6.6	内面胴部に圏線、見込に字款。	白色で緻密	白色釉、貫入は入らな

第６表d　染付観察一覧

単位：cm

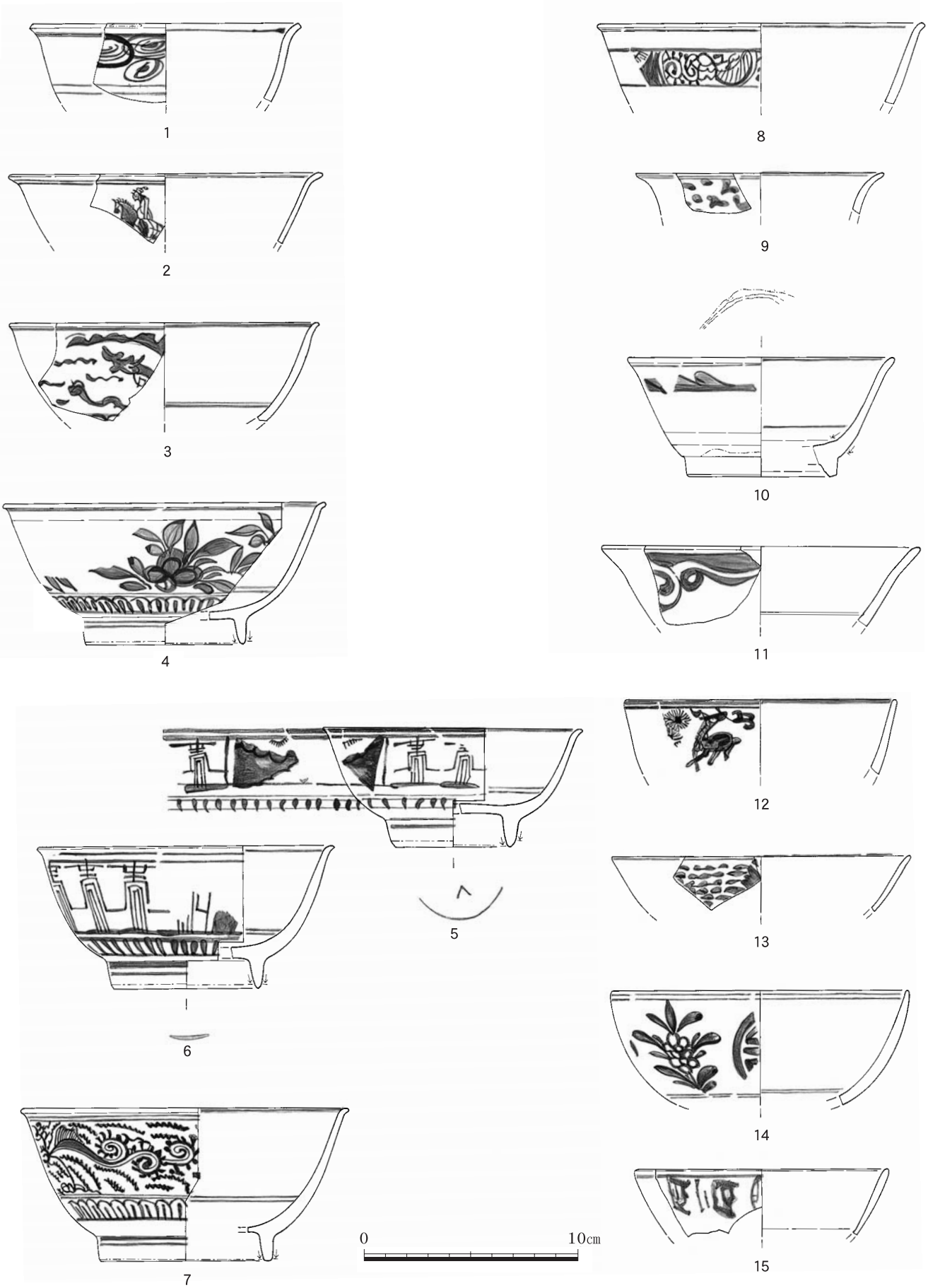
図番号		器種分類	部位	口径 器高 底径	成形・文様等の特徴	素地	釉色・施釉状況・貫入等
第20図・図版12	53	小皿	口	9.0 － －	内外面ともに仙芝祝寿文。	灰白色で緻密	口剥げで白色釉、貫入は入らない
	54	鉢	胴	－ － －	外面に寿字文。	灰白色で黒色粒子を含む	白色釉、貫入は入らない
	55		底	－ － 13.0	外面胴部に文様があるが不明。内面見込に圏線。高台に籾殻？が付着。	灰白色	雑に白色釉を施釉。見込は蛇の目釉剥ぎ。呉須の発色は悪い
第21図・図版12	56	鉢	底	－ － 11.6	高台に籾殻が付着。被熱跡あり。	白色で緻密	淡灰白色釉、貫入は入らない
	57		底	－ － 7.0	見込に鷺文及び草文。外面の釉に砂及び土が付着。漳州窯系。	乳白色	灰白色釉、内外面に細かい貫入が入る
	58	壺	胴	－ － －	外面胴部に龍文。被熱跡あり。	灰白色	白色釉
	59		口	5.0 － －	外面胴部に芭蕉文及び斜線による文様。口唇部は鉄釉を施す。	白色で緻密	白色釉、貫入は入らない
	60	盤	口	－ － －	外面胴部に圏線。内面鍔に唐草文、胴部に圏線。被熱跡あり。内外面に金属が付着。	灰白色	青灰白色
	61	瓶	－	－ － －	外面に圏線及び芭蕉文。	白色で緻密	白色釉、貫入は入らない
	62		頸	－ － －	外面に芭蕉文、雷文帯。	白色	淡灰白色釉、細かい貫入が入る
	63		胴	－ － －	外面に仙人？及び風景が描かれている。	白色で緻密	白色釉、貫入は入らない
	64		－	－ － －	獅子面の左側。	灰白色	白色釉、粗い貫入が入る
	65	杯	胴	－ － －	外面胴部に梅文及び圏線、内面胴部に圏線。被熱跡あり。	白色	白色釉、貫入は入らない
	66	高足杯	胴	－ － －	外面胴部に圏線。内面胴部に圏線。見込に梵字文？。	灰白色で緻密	淡青白色、貫入は入らない
	67	袋物	底	－ － －	外面に唐草文？	灰白色	淡青白色釉、貫入は入らない。底部は無釉
	68	小杯	口～底	4.75 2.75 2.15	畳付を厚く造り、内側へ若干斜めにしている。外面胴部に梵字文。内面胴部に圏線。	白色で緻密	白色釉、貫入は入らない
	69		底	－ － 2.2	外面胴部に獣面？及び龍文？、高台際に蓮弁文。外底に「成化年製」	白色で緻密	白色釉、貫入は入らない

第４節　青磁染付（第21図）

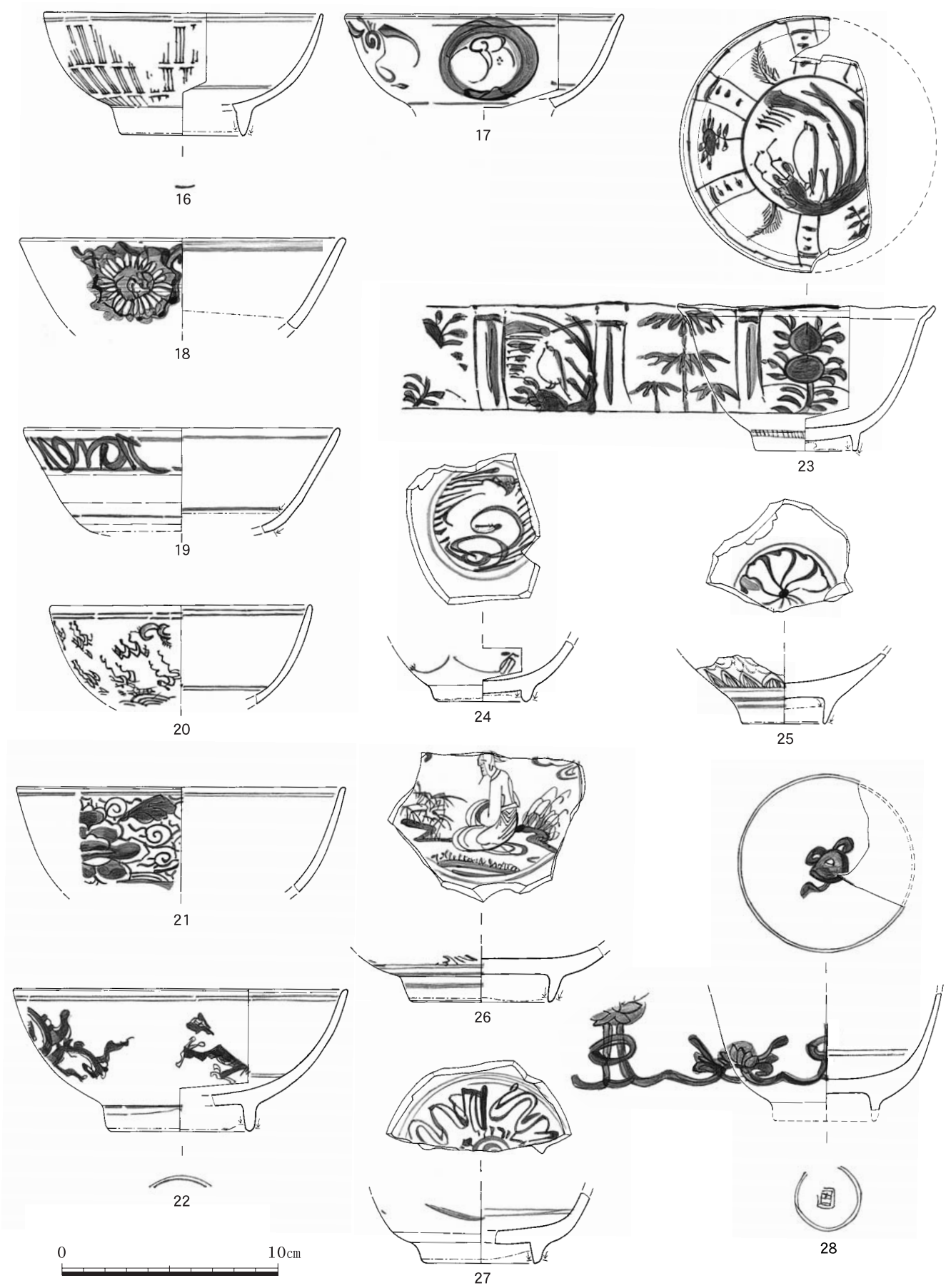
青磁染付は小碗が出土している。70は口縁部～胴部片であり、内面に八卦文及び圏線を施文する。外面に明緑灰色釉、内面に透明釉を施釉する。口径9.0cm。71は底部片であり、内面に太極図、外底に変形字を施文する。底径4.25cm。

第５節　褐釉染付（第21図）

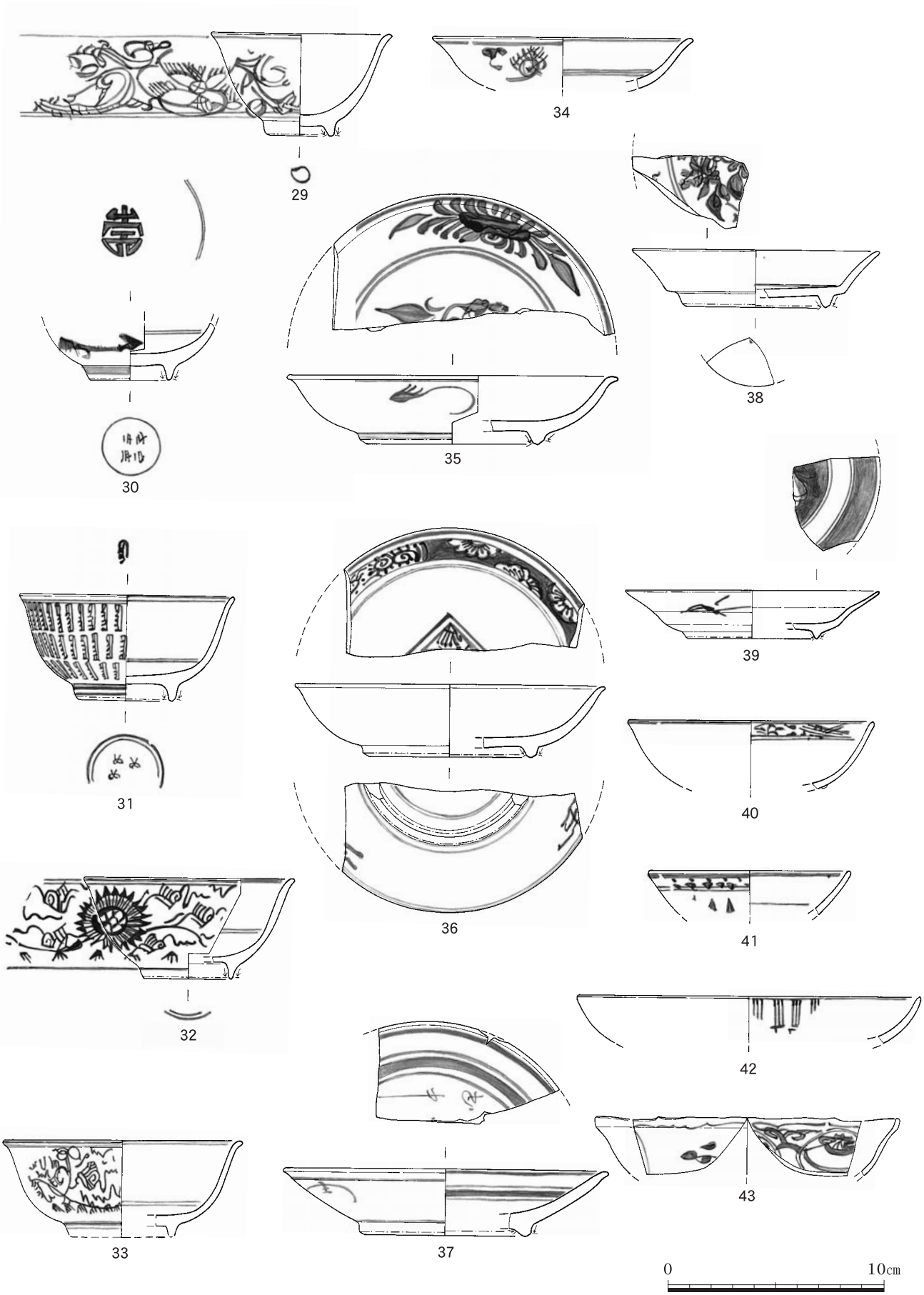
褐釉染付は小碗の口縁部片が出土している。72は内面口縁部に２本の圏線が施文される。口唇部には鉄釉は施されていない。胎土は白色で、外面に鉄釉、内面に透明釉を施す。口径7.4cm。



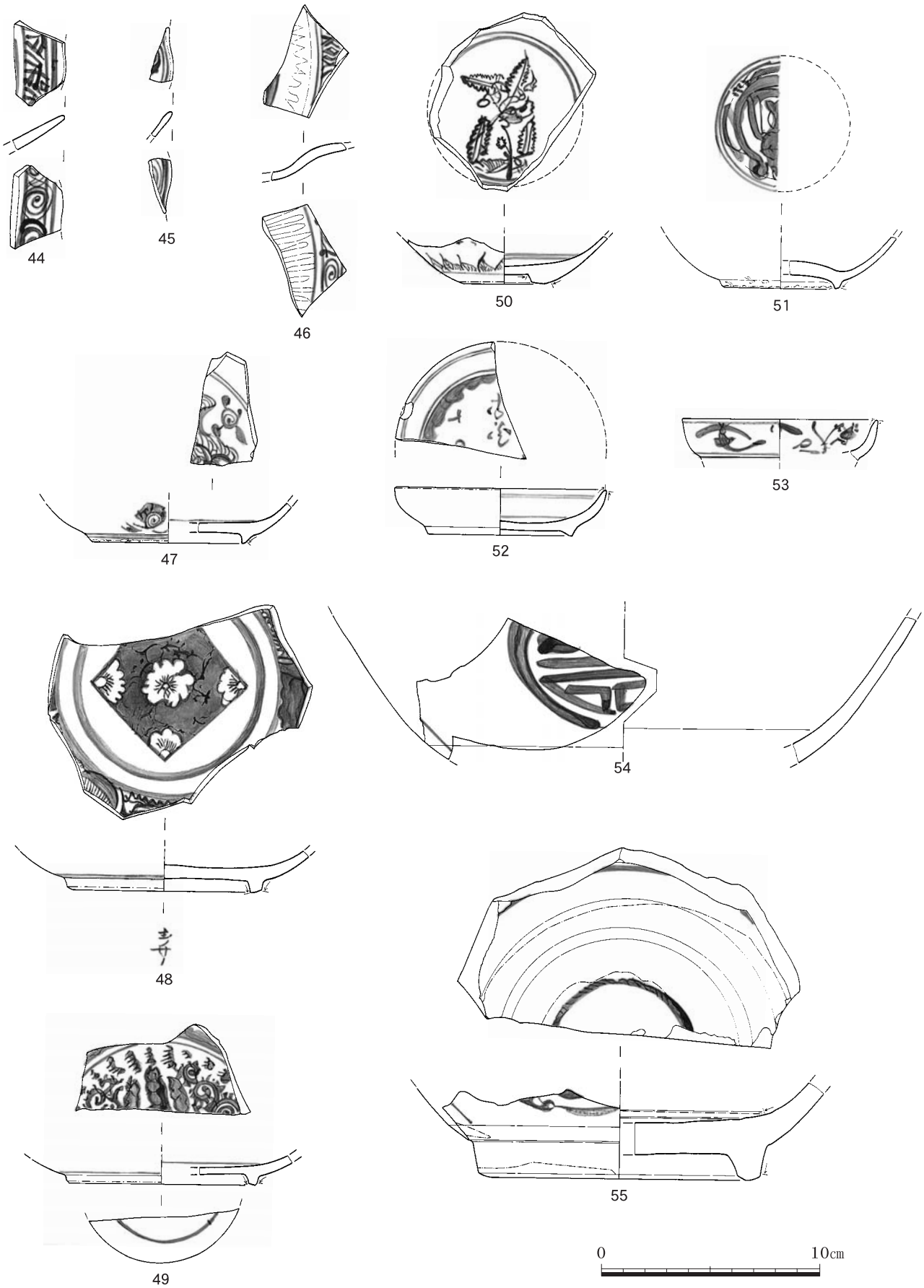
第17図　染付１　碗



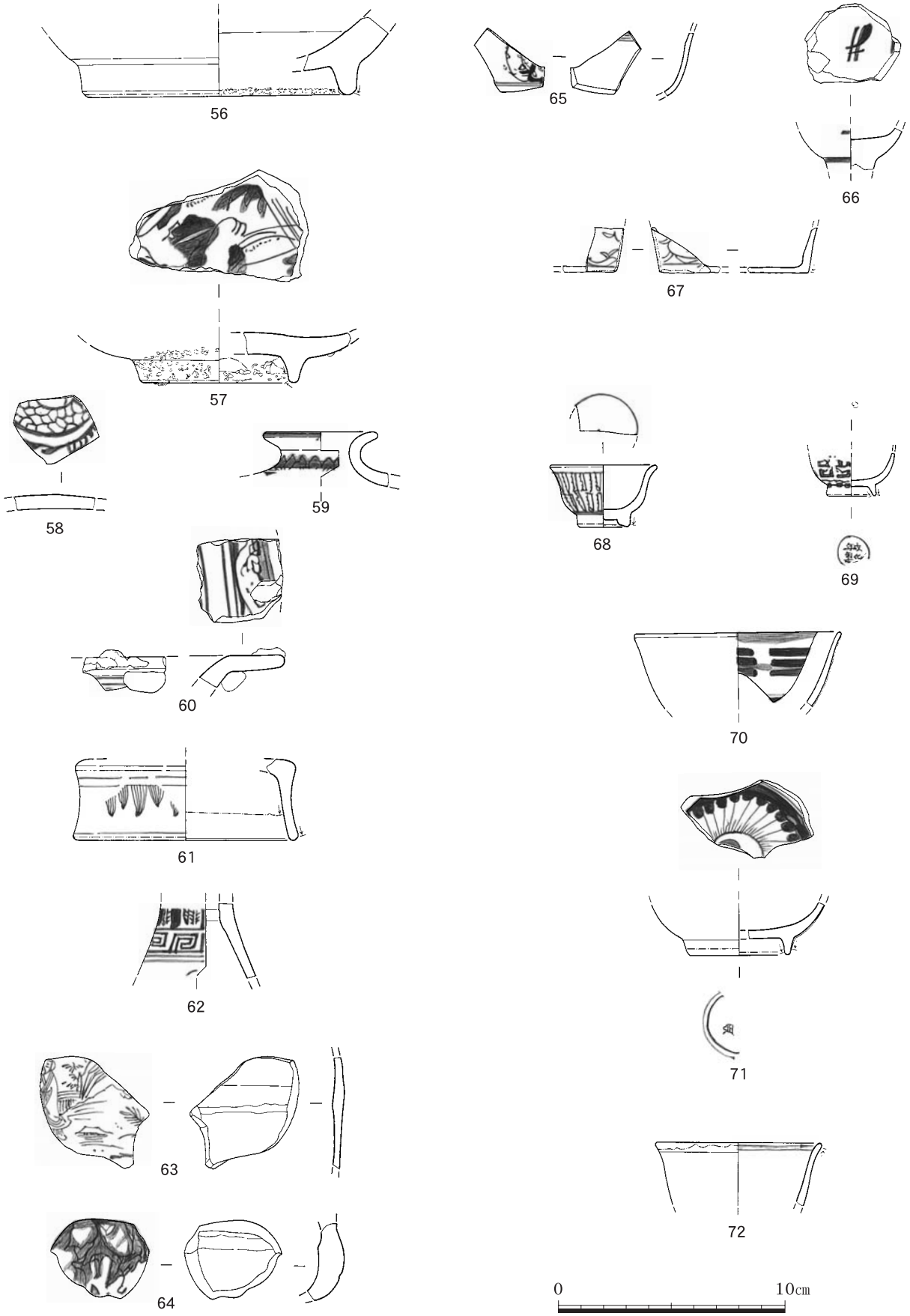
第18図　染付２　碗



第19図　染付３　小碗(29～33)、皿(34～43)



第20図　染付４　皿(44～51)、小皿(52・53)、鉢(54～56)



第21図　染付５　鉢(57)、壺(58・59)、盤(60)、瓶(61～64)、杯(65)、高足杯(66)、袋物(67)
小杯(68・69)　**青磁染付**　小碗(70・71)　**褐釉染付**　小碗(72)

第６節　その他の中国産陶磁器（第22・23図）

瑠璃釉、紅釉、色絵、釉裏紅、翡翠釉、三彩、法華、銅緑釉、黒釉陶器、無釉陶器、褐釉磁器をその他の中国産陶磁器としてまとめた。特徴的なものを以下にまとめた。

Ａ　瑠璃釉（第22図１～４）

今回の調査で出土した瑠璃釉の器種は碗・小坏・酒会壺の蓋の３器種であった。以下特徴的な資料を図下し、個々の特徴等について記述する。

１は碗の高台であるが、小破片のため詳細は不明。高台の内外端部に削りを入れる。外面に紺藍色釉を比較的厚く施釉している。高台底面及び内面に白釉を施釉している。素地は灰白色で気泡が目立つ。景徳鎮。16世紀後半～17世紀中頃に位置づけられる。

２・３は碗である。保存状態が良好で図上復元が可能であった。３は口縁部を若干外反させるが、４はまっすぐ立ち上げる。３・４とも口唇部はシャープに成形される。コバルト色釉を外面のみ施釉し、内面は露胎。素地は灰白色で微粒子。徳化窯。16世紀後半～17世紀中頃と考えられる。

４は小坏で図上復元が可能であった。底部から口縁にかけて微弱に内彎しまっすぐ立ち上げる。口唇部はシャープに成形される。紺藍色の釉薬を外面のみ施釉し、内面は露胎する。素地は白灰色で微粒子。徳化窯。16世紀後半～17世紀中頃と考えられる。

Ｂ　紅　釉（第22図５）

今回の調査でも紅釉水注の口縁破片資料が得られた。首里城跡京の内、下之御庭他の調査で出土した紅釉水注と接合する可能性がある。口縁部の断面形が盤口状となるものである。外面に赤茶色釉を施釉する。口縁端部から内面にかけて白釉を施釉する。２次的な被熱を受けている。素地は灰白色の微粒子である。15世紀前半～中頃と考えられる。景徳鎮窯。

Ｃ　色　絵（第22図６～10）

今回の調査で出土した色絵の器種は皿と腕の２器種であった。特徴的な遺物を図下し、以下にその特徴等を記述する。

６は皿の口縁部である。口縁部が強く外反し口唇部は丸みを帯びる。内外面に灰白濁色の釉薬を施釉する。外反する口縁部の直下に内外面とも２条の赤褐色の圏線が巡る。内外面底部付近にも１条の赤褐色の圏線が見られる。外面の上部の圏線と下部の圏線の間には宝相華唐草文を描くが簡略化される。唐草文は赤褐色で縁を描いたのち、暗緑色釉で間を埋める。宝相華は赤褐色の花びらである。素地は灰白色で微粒子。景徳鎮。15世紀に位置づけられる。今帰仁城跡の志慶真門郭出土資料に類例がある。

７は碗である。口縁部が微弱に外反する。青灰白色の釉薬を内外面に施釉する。外面口縁部直下及び底部付近に２条の圏線を巡らす。その中を赤褐色と暗緑色の２色で絵付けする。赤褐色で丸に「寿」と花文。周囲を暗緑色で充填する。素地は灰白色で微粒子。福建。18世紀と考えられる。

８は腕である。高台を欠損する。口縁部が微弱に外反する。内外面に青灰白色の釉薬を施釉する。外面に赤褐色で口縁部直下及び底部に１条の圏線を、その中に簡略化されたコウモリと丸に、金彩で簡略化された「寿」を描く。素地は灰白色で微粒子。福建。18世紀頃に位置づけられる。

９は碗の蓋である。撮みの見込には銘がある。外面に明黄色で文様を描くが判然としない。内外面に灰白色の釉薬を施釉する。素地は灰白色で微粒子。

10は碗である。口縁部は微弱に外反し、口唇部はシャープである。内外面に青灰白色の釉薬を施釉する。外面に赤褐色で文様を描くが判然としない。高台は削りを入れる。素地は灰白色で微粒子。

Ｄ　釉裏紅（第22図11～14）

今回の調査で出土した釉裏紅は盤のみである。特徴的な遺物を図下し、以下にその特徴等を記述する。

11・12は胴タイプの盤である。口縁部を屈曲して外反させ、さらに端部をつまみ上げる。内外面に灰白色の釉薬を厚く施釉するが、貫入が目立つ。内面には呉須により文様を描く。構成は外反屈曲させた内面に２条の圏線が巡り、その中を雲文と斜線を描く。胴部内面に文様を描くが判然としない。２次被熱を受けてい

る。素地は灰色で微粒子。気泡が目立つ。璋州窯。16世紀後半～17世紀中頃に位置づけられる。
13は口縁部を外反屈曲させる盤である。内外面に灰白色の釉薬を厚く施釉する。内面に呉須で文様を描くが判然としない。素地は灰白色で微粒子。璋州窯。16世紀後半～17世紀中頃に位置づけられる。
14は盤の底部である。内外面に灰白色の釉薬を厚く施釉する。内面に３条の圏線と花文を描くが２次被熱を受けており構成は判然としない。畳付に粗い砂が付着する。素地は灰色で微粒子。気泡が目立つ。璋州窯。16世紀後半～17世紀中頃に位置づけられる。

Ｅ　彩釉陶（第22図15・16　第23図17～19）
中国南部地域で生産された翡翠釉・法花・三彩・銅緑釉を彩釉陶とした。以下に個々の遺物の特徴等について記述する。

翡翠釉（15）
15は翡翠釉陶器の皿である。薄手で口縁部が外反する。高台を除き内外面に青色釉を施釉するが、剥落している部分がある。胴部下端と高台の間に削りを入れる。素地は白色で微粒子。16世紀後半～17世紀中頃に位置づけられる。

三彩（16・17）
16は鶴形水注の口縁部である。口唇部を平坦に仕上げる。外面口縁直下に褐色釉で連弁文、黄釉で波状文を施し、その直下に僅かに緑釉が見受けられる。口唇部と内面は緑釉を施釉する。素地は橙色で微粒子、白色鉱物を微少に含む。15世紀頃に位置づけられる。
17は琴高仙人形もしくは魚形の尾鰭。鰭は黄釉、鱗は緑釉で施釉する。素地は橙色で微粒子、黒色微粒子を僅かに含む。16世紀頃に位置づけられる。

法花（18）
18は壺の口縁部である。口唇部を丸く整える。外面は文様を浮き上がらせるため、葉の輪郭等を張付によって強調している。葉は水色釉、周囲を藍色釉で施釉する。内面は緑釉を施釉する。剥落が著しい。15世紀頃に位置づけられる。

銅緑釉（19）
19は酒会壺の蓋と考えられる。甲頂部は蓋をつかむ突起がない。身受けの突起が張り付けられており、垂直に成形されている。蓋甲部全体には形押しと考えられる鎬文が施されており、内面は形押しの影響で跡が残る。外面には銅緑釉が施釉されている。内面は露胎。素地は淡橙色で微粒子。17世紀頃と考えられる。

Ｆ　黒釉陶器（第23図20～22）
今回出土した黒釉陶器はすべて碗で、黒釉天目茶碗と呼ばれるものである。特徴的な遺物の特徴等を以下に記述する。
20は碗口縁部から胴部、底部欠損。底部から口縁部に向かって逆ハの字形に開き、口縁部で逆くの字形に屈曲する精密な成形である。内外面に黒色と茶色の釉薬を施釉するが、外面は胴部下方までである。素地は淡橙色で気泡が目立つ。15世紀頃に位置づけられる。
21は底部資料である。胴部下端を鋭く削って成形している。畳付外面を斜位に削り、内定面は軽い上底状を呈する。見込に厚く黒釉が施釉されている。素地は灰色で微少な黒色鉱物を若干含む。15世紀に位置づけられる。
22も高台資料である。胴部下端を鋭く削って成形している。畳付外面を斜位に削るところは23と同様であるが、内底面はより深く削っている。外面にロクロ成形痕が良く残る。見込に厚く黒釉が施釉されている。素地は灰色で微少な黒色鉱物を若干含む。15世紀に位置づけられる。

Ｇ　無釉陶器（第23図23～28）

今回出土した無釉陶器の器種は急須・坏がある。すべて茶器として生産されたものと考えられる。江蘇省宜興窯産である。いずれも精製された泥質で、明褐色を呈するものと、黒褐色を呈するものがある。

23（註１）は急須の把手である。丸形の成形。色調は黒褐色を呈する。24（註２）は急須の蓋と考えられ、鍔部が尖る。撮み部下端は段をつけている。撮み部頂部から内面にかけて穴をあけている。色調は明褐色を呈する。25（註３）は急須の口縁部である。内彎する胴部から口縁部を若干撮みあげて、口唇部を平坦に成形する。色調は明褐色を呈する。26（註４）は急須の底部である。底面は若干上底状を呈しており、ロクロ成形痕が残る。比較的小型である。色調は黒褐色を呈する。27（註５）は極めてまれな資料であり、器種は不明である。把手部分は、丸形でなく方形の成形をしている。23と比して大型の器形である。色調は黒褐色を呈する。28は坏である。図上復元が可能であった。大きく開く器形で口縁部は強く外反する。小型のため高台成形が緻密で、ロクロ成形痕が良く残る。色調は明褐色を呈する。

（註１）～（註５）については大橋康二先生のご教授により国産の可能性があることがわかった。

Ｈ　褐釉磁器（第23図29～31）

29は小碗である。腰部が丸く内彎し口縁部まで真っ直ぐに立ち上げる。口縁内面は口唇部に向かって収縮する。高台は型打成形である。外面は外底面を除き畳付までしっかりと褐釉を、内面には透明釉を施釉する。褐釉の色調は暗茶色で、後述する景徳鎮（30・31）の褐釉より暗い色調を呈する。素地は白色で微粒子。徳化窯。18世紀頃に位置づけられる。

30は器種不明の底部資料である。畳付の釉薬は掻き取る。外底面にロクロ成形痕が明瞭に残る。内面及び外底面に透明釉、外面に褐釉を施釉する。褐釉は茶色で、29より明るい色調呈する。素地は白色で微粒子。景徳鎮。16世紀末～17世紀前半に位置づけられる。

31は蓋である。受ける器の器種は不明。外面に褐釉を施釉するが、内面は露胎。褐釉の色調は30酷似する。素地は白色で微粒子。景徳鎮？

＜参考文献＞

沖縄県立埋蔵文化財センター　『首里城跡　－下之御庭・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木洩門跡発掘調査報告書－』　2001年

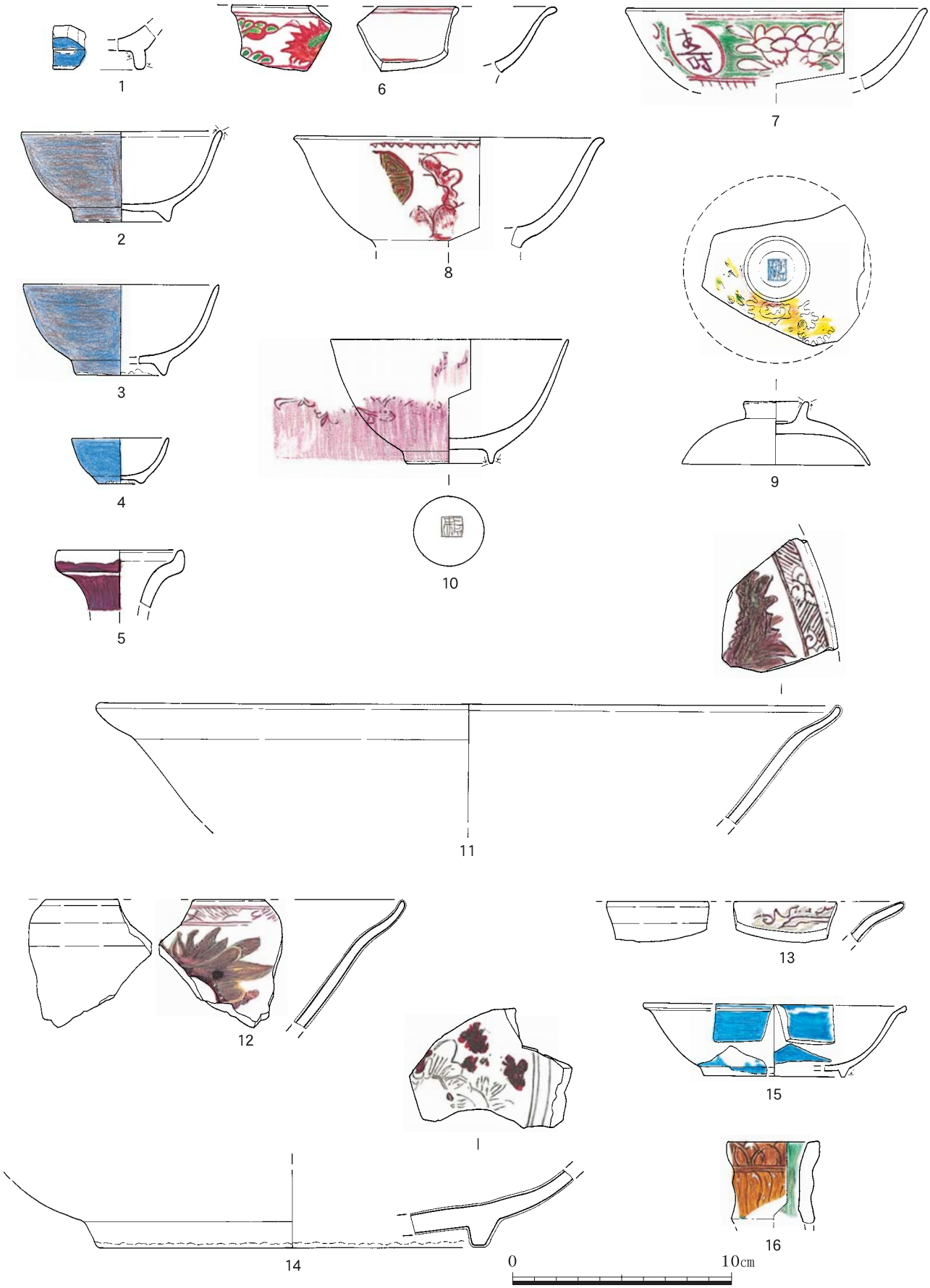
沖縄県教育委員会　『首里城跡　－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』　1998年

今帰仁村教育委員会　『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』　1983年

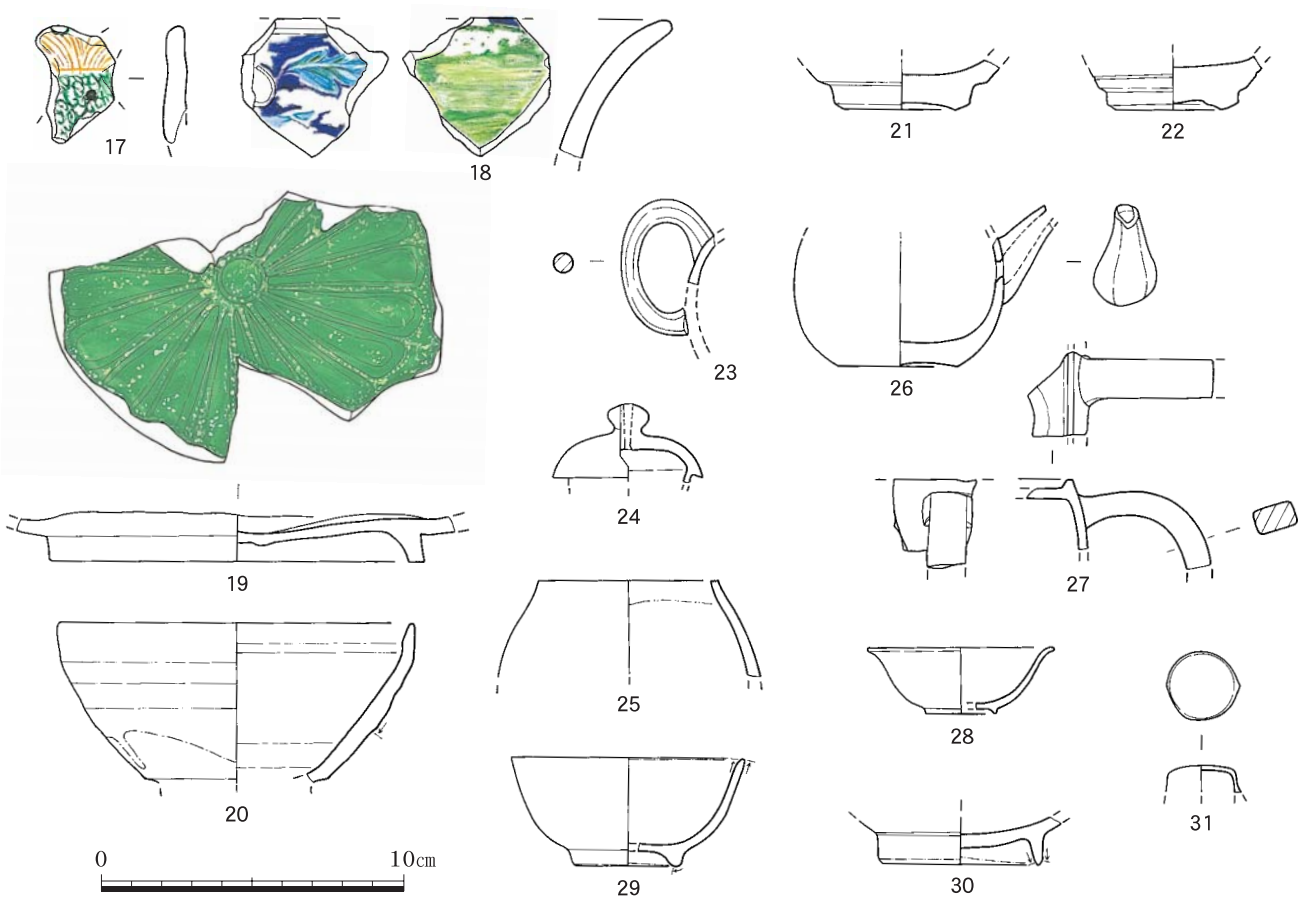
第７表　その他の中国産陶磁器法量一覧

単位：cm

番号	種類	部位	口径	器高	底径
1	瑠璃釉	底	－	－	－
2		口～底	9.2	4.2	4.4
3		口～底	9.0	4.2	4.0
4		口～底	4.5	2.1	2.0
5	紅釉	口	6.0	－	－
6	色絵	口	－	－	－
7		口	13.8	－	－
8		口	14.2	－	－
9		蓋	3.0	2.9	8.6
10		口～底	10.9	5.7	3.9
11	釉裏紅	口	34.2	－	－
12		口	－	－	－
13		口	－	－	－
14		底	－	－	17.6
15	彩釉陶	口～底	12.0	3.3	6.4
16		口	4.3	－	－
17		尾鰭	－	－	－
18		口	－	－	－
19		蓋	－	－	12.4
20	黒釉陶器	口	11.9	－	－
21	黒釉陶器	底	－	－	3.6
22		底	－	－	3.5
23	無釉陶器	把手	－	－	－
24		蓋	5.0	－	－
25		口	6.0	－	－
26		底	－	－	4.0
27		把手	－	－	－
28		口～底	6.2	2.2	2.4
29	褐釉磁器	口～底	7.8	3.6	3.6
30		底	－	－	5.2
31		蓋	－	－	－



第22図　その他の中国産陶磁器 1　瑠璃釉（1～4）、紅釉（5）、色絵（6～10）、釉裏紅（11～14）
彩釉陶（15・16）



第23図　その他の中国産陶磁器２　彩釉陶（17～19）、黒釉陶器（20～22）、無釉陶器（23～28）
褐釉磁器（29～31）

第７節　中国産鉄絵（図版８　１～５）

中国産鉄絵で確認された器種はすべて酒会壺と考えられる。すべて磁州窯系に属すると考えられる。

１は両面に白化粧を施したあと、内面は鉄釉を、外面は鉄釉による文様を描くが胴部片のため構成は判然としない。釉色は内面茶褐色で、外面灰白色を呈する。内面はロクロ調整痕が明瞭に残る。素地は灰黄色を呈し不純物はあまり見受けられない。２は両面に白化粧を施したあと、内面は鉄釉を、外面は鉄釉による文様を描くが、胴部片のため構成は判然としない。釉色は内面茶褐色で、外面赤灰色を呈する。素地は灰黄色を呈し不純物はあまり見受けられない。内面にロクロ調整痕が残る。３は内外面に白化粧を施した後、外面は鉄釉による文様を描くが、胴部片のため構成は判然としない。鉄絵が落ちており、発色がわずかに見受けられる程度である。釉色は内外面ともに赤灰色である。以上の３点は磁州窯系で13世紀頃に位置づけられる。

４・５は内面に鉄釉、外面に白化粧を施した後鉄釉による文様を描いている。４は渦巻状の文様を施し、５は判然としない。釉色は内面が暗褐色を呈し、外面が灰白色を呈する。鉄絵は１～３より色調が明瞭で茶褐色を呈する。素地は粗粒子で灰黄褐色を呈し、黒・白・赤褐色の鉱物を多量に含む。同一個体である可能性が高い。磁州窯系の可能性が高い。15世紀頃。

第８節　褐釉陶器（第24・25図）

Ａ　中国産褐釉陶器（第24・25図19～25）

今回確認できた器種は従来の首里城跡で報告されているとおり壺が主体となっており、僅かに鉢、すり鉢、水注、袋物がみられる。壺と鉢は口縁態等の特徴によって数種類に分類される。その他の器種は個体数が少ないため、分類は省略する。

壺

１～15である。以下に分類できる。

Ⅰ類：　口縁断面が方形状を呈し、口唇部は平らなもの（１）と明確な稜を作って隆起させるもの（２・３）がある。頸部は１条から２条の稜をもつ。今回の調査では全形を伺える資料は得られてないが、肩が強く張り底部に向かって大きく収縮するタイプの壺と考えられる。胴部から底部にかけてロクロ成形痕が良く残り、底面は上底状を呈する（４・５）。

Ⅱ類：　口縁断面が三角形状を呈するもの。薄手の成形で肩が張る器形（６・７・10）と比較的ナデ肩の器形（８・９）がある。６・７は同一個体と思われる。

Ⅲ類：　口縁を微弱に肥厚させており、器壁はⅡ類に比して厚い。頸部は外反させず、シャープに立ち上げる（11・12）。

Ⅳ類：　無頸壺である。口縁断面が三角形状を呈し稜をもつもの（14）と微弱に外反させるもの（15）がある。前者は肩が張り、後者はナデ肩である。

不明：　胴体資料のみであり詳細は不明であるが、このように器壁に渦状の成形痕が強く残る資料はヤッチのガマで確認されている（13）。

鉢

16～18、19～21である。以下に分類される。

Ⅰ類：　口縁部が内側に屈曲し肥厚するもの。口唇部を尖らせる（16・17）。

Ⅱ類：　口縁部が外側に屈曲しL字状を呈するもの。Ⅰ類より深めの器形を呈すると考えられる（19～21）。

その他：すり鉢の底部である（18）。

水注

１点のみ得られた。口縁から頸部にかけての資料で、火熱を受けている。口縁部を外反させ、直下は鋭い削りを入れる（22）。

袋物

底部資料で器種は袋物と思われる。24の底面は高台状を呈している。25は硬質で内定面にロクロ痕が良く残る。

その他

胴部資料で小破片のため器形は伺えないが釉薬を塗り焼成した後、釉薬を削り取って文様を施している（23）。

Ｂ　タイ産褐釉陶器（第25図26～38）

器種は全て壺型である。口縁形態と頸部の形態から分類した。

Ⅰ類：　口縁断面が丸みを帯び、頸部が緩く外反する。口縁部が折れるように外反するもの（26・29）と口縁上端が玉縁状を呈するもの（27・28）がある。

Ⅱ類：　頸部が強く外反し、ラッパ状の形態をもつ。口唇部を強調し突帯状を呈するもの（30・31）と丸みを帯びさせるもの（32～34）がある。

その他：　35は頸部から肩部にかけての資料で、頸部と肩部の境目に突帯をもち、肩部に横耳をつける。36～38は底部資料で中国産と比してどっしりしており、底面は直線的である。

Ｃ　ミャンマー産褐釉陶器（図版15）

胴部資料が２点出土した。２点とも別個体である。

39は横位に１条の突帯が巡っている。釉薬は外面のみ厚く施釉する。釉色は黒色を呈する。素地は赤灰色で茶褐色鉱物を多量に含む。内器面は粗い成形痕が残る。このてのミャンマー産褐釉陶器は首里城跡下之御庭他でも出土しており、横位の突帯から口縁部に向かって縦位の突帯が施される。

40は葉のような文様を浮彫りさせている。葉の中央と両脇に２条づつ指突連点文を施す。葉の向きは縦位

と思われる。釉薬は外面のみ厚く施釉する。釉色は黒茶褐色で貫入が目立つ。素地は灰色で１と同様の茶褐色鉱物を多量に含む。１とことなり内器面の成形は丁寧である。

＜参考文献＞
沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡　－下之御庭・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木洩門跡発掘調査報書－』

第８表　褐釉陶器出土状況

中国産																				タイ産					ミャンマー産	合　計
壺										鉢				水注			袋物	器種不明	壺				器種不明	器種不明	
Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ	その他			Ⅰ	Ⅱ	その他							Ⅰ	Ⅱ	その他				
口	底	口	底	口	底	口	口	胴	底	口	口	口	底	口	注口	胴	底	胴	口	口	胴	底	胴	胴	
132	90	17	5	13	8	2	10	1	1	2	4	1	1	1	1	1	2	8ｺﾝﾃﾅ(M)	61	24	1	42	4ｺﾝﾃﾅ(M)	2	422＋12コンテナ（M）

第９表a　褐釉陶器観察一覧

単位：cm

図番号		産地	器種	分類	部位	口径 器高 底径	文様・成形等の特徴	素地	釉色・施釉状況等
第24図・図版14	1	中国産	壺	Ⅰ類	口	22.1 － －	口縁断面が方形状で口唇部が平ら。頸部に３状の稜。	赤褐色。黒色粒子を含む。	内外面に施釉。暗オリーブ褐色。
	2				口	20.0 － －	口縁断面が方形状で口唇部が尖る。 口唇部の平らな部分に太い沈線。頸部に１状の稜。	赤灰色。白色鉱物を含む。	内外面に施釉。暗オリーブ褐色。
	3				口	17.3 － －	口縁断面が方形状で口唇部が尖る。 頸部外面は稜をもち、強く屈曲する。 口縁内面に太い沈線。	暗赤灰色。大粒の白色鉱物を含む。	内外面に施釉。黒褐色、暗オリーブ褐色。
	4				底	－ － 15.2	底部は上底状。外底面に砂目が残る。 内外面にロクロ痕が明瞭に残る。	黒灰色。大粒の白色鉱物を含む。	内外面に施釉。暗赤褐色。
	5				底	－ － 13.6	底部は上底状。底部から胴部にかけて大きく広がる。外底面に砂目が残る。 内外面にロクロ痕が明瞭に残る。	暗灰色。微粒子で大粒の白色鉱物を含む。	内外面に施釉。オリーブ色。
	6			Ⅱ類	口	12.8 － －	口縁断面が三角形状。縦耳がつく。 成形が良く、器壁は薄い。	暗灰色で大粒の白色鉱物を含む。	外面は施釉で、内面は口縁部に若干施釉されるのみ。 灰白色。
	7				底	－ － 15.4	上底状で内面にはロクロ痕が明瞭に残る。器壁が薄い。	明褐色で大粒の白色鉱物を含み、器面に露胎する。	外面は胴部下方まで施釉で、内面は施釉せず。灰白色。
	8				口	11.9 － －	口縁断面が三角形状。肩部から口縁部にかけての頸部はシャープに立ち上がる。内面に細かいロクロ痕を残す。	暗赤灰色。大粒の黒色鉱物を僅かに含む。気泡が目立つ。	外面は全面施釉で内面は頸部まで施釉。黒色。
	9				口	11.4 － －	口縁断面が三角形状。頸部が短く無頸に近い。成形が丁寧で器壁が薄い。外器面に敲目が残る。	黄橙色で微粒子。赤褐色鉱物を微少に含む。	釉薬がほとんど剥げ、口唇部に僅かに残る。赤褐色。
	10				口	12.6 － －	口縁断面が三角形状。丁寧に成形され器壁が薄い。肩部に微弱な突帯状の凸をもつ。	黄橙色で微粒子。赤褐色鉱物を微少に含む。	内外面に施釉。淡オリーブ白色。
	11			Ⅲ類	口	－ － －	口縁部が微弱に肥厚。頸部は直線的である。内外面にナデの跡が残る。 頸部末端に２条の沈線が巡る。	明橙褐色で、大粒の白色・黒色鉱物を多量に含む。気泡が目立つ。	内外面に施釉。灰赤色。

第９表b　褐釉陶器観察一覧

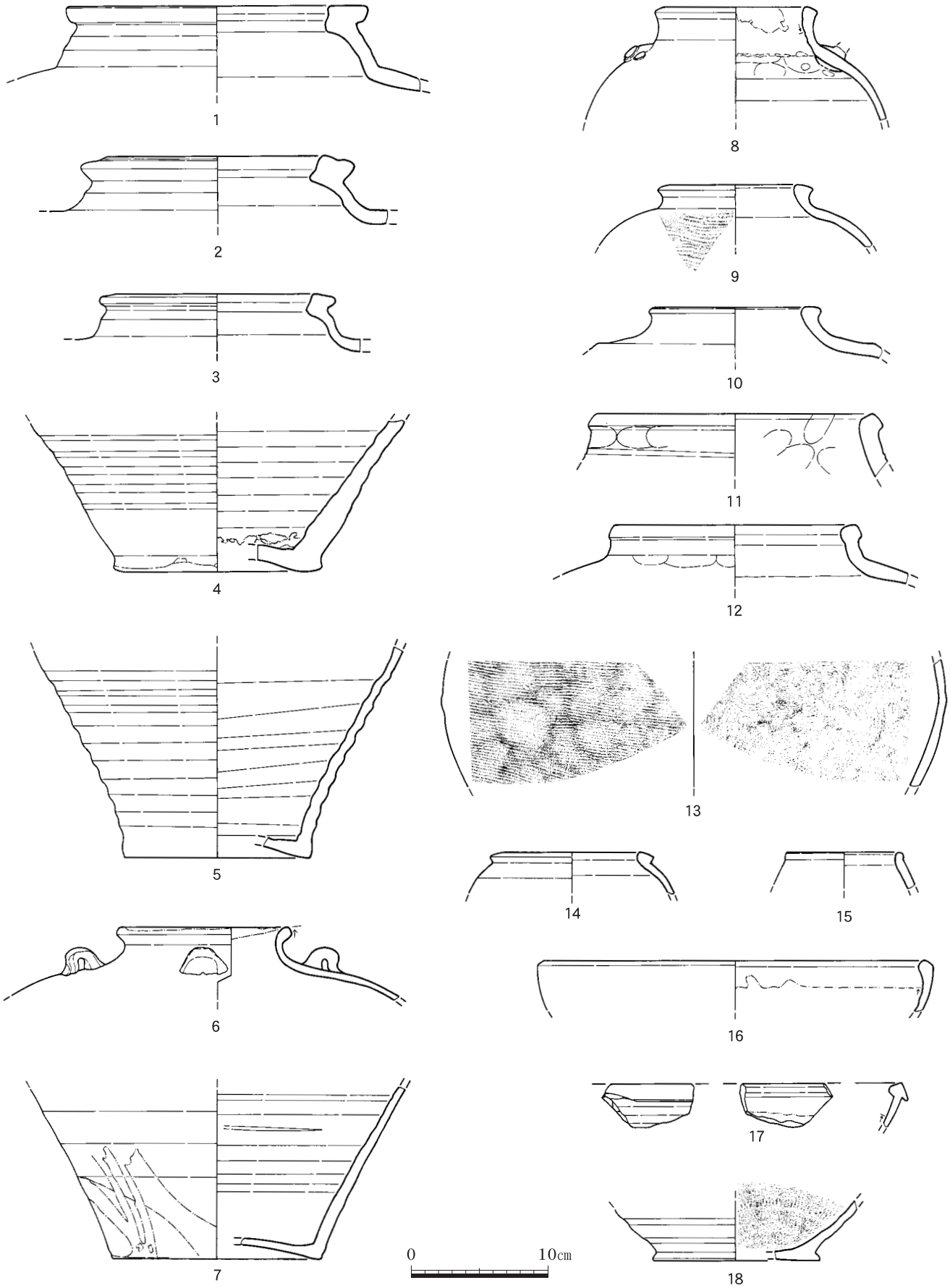
単位：cm

図番号		産地	器種	分類	部位	口径 器高 底径	文様・成形等の特徴	素地	釉色・施釉状況等
第24図・図版14	12	中国産	壺	Ⅲ類	口	18.5 － －	口縁部が微弱に肥厚。頸部は直線的である。外器面頸部直下にナデの跡が残る。口縁内面に稜をもつ。	灰赤色で、大粒の白色鉱物が目立つ。器面に鉱物が露胎する。	内外面に施釉するが、外器面と内器面で発色が異なる。外器面はオリーブ黒色。内器面は黄色。
	13			その他	胴	－ － －	外器面はナデの跡、櫛状工具で横位に成形し、内器面は渦状を呈する。成形良好で器壁は薄い。	白灰色で微粒子。微少な黒色鉱物を若干含む。	内外面に施釉するが、外器面と内器面で発色が異なる。外器面はオリーブ黄色。内器面は薄黄色。
	14			Ⅳ類	口	12.0 － －	無頸壺。口縁部を強く折り曲げて肥厚させる。卵形。	灰色で大小様々な白色鉱物を含む。	内外面に施釉。黒褐色。
	15				口	8.7 － －	無頸壺。内彎する胴部から若干屈曲させまっすぐ立ち上げる。	明赤褐色で白色鉱物を若干含む。	内外面に施釉。暗赤灰色。
	16		鉢	Ⅰ類	口	29.0 － －	口縁内面が若干肥厚する、内彎器形。口唇部が尖る。成形良好で丁寧に仕上げられている。	灰色で白色鉱物を若干含む。	内外面に施釉。青灰色。
	17				口	－ － －	外面口縁部直下に傘状に折り曲げ、内面も屈曲させ肥厚する。成形が細かく、丁寧に仕上げられている。	赤灰色で微粒子。硬質である。	外面および内面の途中から施釉。赤茶褐色。
	18			その他	底	－ － 12.0	すり鉢である。底面からいったんくびれて胴部に至る。外面は粗いロクロ成形痕が残る。底面に砂目跡。	白灰色で微粒子。大粒の白色鉱物を若干含む。	内外面に施釉するが、外器面と内器面では発色が異なる。外器面はにぶい橙色。内器面は灰色。
第25図・図版15	19	中国産	鉢	Ⅱ類	口	17.0 － －	口縁部をＬ字状に外反させる。口縁部直下に鋭い削りを入れて成形する。	明橙色で微粒子。赤褐色と白色の鉱物を若干含む。	外面および内面の一部施釉。オリーブ灰色。
	20				口	17.5 － －	口縁部をＬ字状に外反させる。口縁部直下に鋭い削りを入れて成形する。	明橙色。赤褐色と白色の鉱物を含む。	釉薬がほとんど剥げ、内外面に僅かに残る。
	21				口	15.2 － －	口縁部をＬ字状に外反させる。口縁部直下に鋭い削りを入れて成形する。	青灰色。大粒の白色鉱物を含む。	口唇部を除き内外面に施釉。外面はオリーブ色。内面は明茶褐色。
	22		水注	－	口	10.0 － －	口縁部を外反させる。口縁部直下に強い削りを入れる。	赤灰色で微粒子。白色鉱物を含む。	外面及び内面の頸部まで施釉。オリーブ系の発色であるが、２次被熱しており、詳細は不明。器面がアバタ状。
	23		不明	－	胴	－ － －	形態等不明。外面に施釉し焼成した後、釉薬を削り取って文様を描いている。	白黄色で微粒子。文様部の素地は赤茶褐色。	内外面に施釉するが、外器面と内器面では発色が異なる。外器面はオリーブ黄色。内器面は茶褐色。
	24		袋物	－	底	－ － 9.3	高台状の底部を呈する。丁寧に成形され、内器面はロクロ成形痕が明瞭に残る。	白色で微粒子。	内面及び畳付部に施釉。光沢のある茶褐色。
	25				底	－ － 6.2	小型で器壁が薄い。丁寧に成形され、内底面に明瞭なロクロ痕が残る。	灰白色で微粒子。不純物はみられない。	外面のみ施釉。オリーブ白色。
	26	タイ産	壺	Ⅰ類	口	20.9 － －	口縁部が丸みをもって肥厚し折れ曲がるように外反する。頸部の最小径が上端にくる。頸部下端に１条の突帯。	赤灰色で微粒子。赤褐色鉱物を微少に含む。	外面は頸部から、内面は口唇部から頸部上端まで。オリーブ灰色とオリーブ黒色。
	27				口	19.2 － －	口縁部上端が玉縁状をなし、外反する。頸部の最小径が中央部にくる。	白灰色で微粒子。赤褐色鉱物を微少に含む。	外面は頸部以下。内面は口縁部上端のみ施釉。暗オリーブ色。
	28				口	18.2 － －	口縁部上端が玉縁状をなし、外反する。頸部の最小径が上端にくる。	赤灰色で微粒子。赤褐色鉱物を微少に含む。	外面は折れ曲がった口縁部下端と頸部の途中から、内面は頸部下端に施釉。オリーブ黒色と黄褐色。

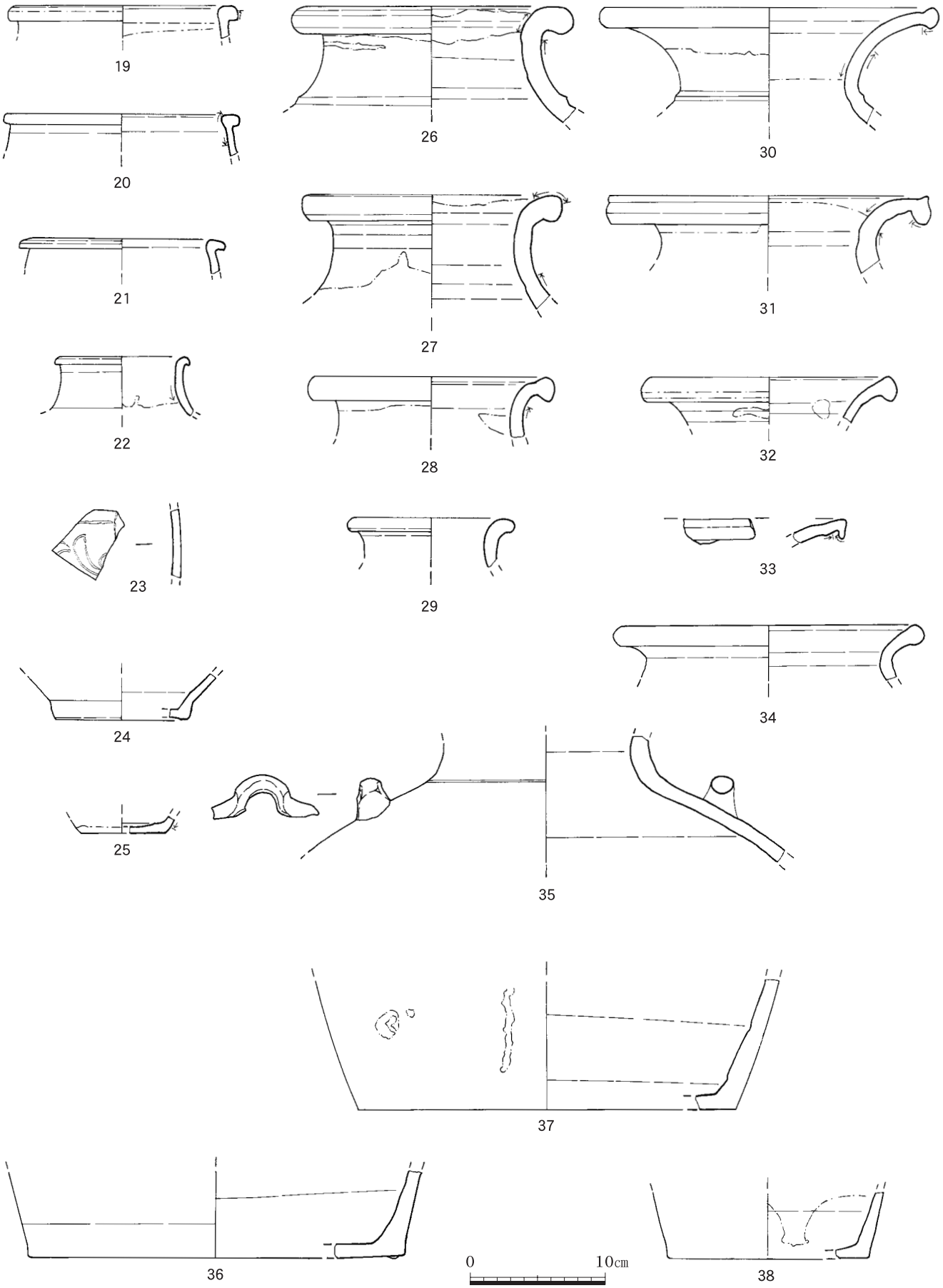
第９表c　褐釉陶器観察一覧

単位：cm

図番号		産地	器種	分類	部位	口径 器高 底径	文様・成形等の特徴	素地	釉色・施釉状況等
第25図・図版15	29	タイ産	壺	Ⅰ類	口	12.3 － －	口縁部が外反し、下端に削りを入れて強調する。	灰赤色で微粒子。微少な白黄色鉱物を僅かに含む。	外面に施釉されるが、ほとんど剥げ落ちている。黄褐色。
	30			Ⅱ類	口	25.0 － －	頸部が大きく外反しラッパ状を呈する。口縁部上端を尖らせる。頸部直下に１条の突帯が巡る。	赤灰色で微粒子。赤褐色鉱物を微少に含む。	外面は頸部中位以下を全体に、以上をまばらに、内面は口縁から頸部までを施釉。暗オリーブ色とオリーブ黒色。
	31				口	24.0 － －	口縁部は下方に折り曲げ、上端は突帯状のものが巡る。ラッパ状を呈する。	赤灰色～青灰色で微粒子。赤褐色鉱物が目立つ。	外面は頸部中位以下、内面は突帯から頸部中位まで施釉するが、ほとんど剥げ落ちている。黄褐色。
	32				口	19.0 － －	口縁部を下端に折り曲げ、上端を尖らせる。ラッパ状を呈する。外面にロクロ痕が明瞭に残る。	暗青灰色で微粒子。微少な白色鉱物を若干含む。	外面は口唇部と頸部に僅か、内面は口縁部上端から頸部上端まで施釉するが、剥げ落ちており、詳細は不明。
	33				口	－ － －	ラッパ状に外反した頸部から口縁部を下方にＬ字状に折り曲げる。頸部外面上端に突帯様のものが巡る。	暗青灰色で微粒子。微少な白色鉱物を含む。	外面はまばらに、内面は口縁部上端から頸部全体に施釉。オリーブ黒色。
	34				口	23.0 － －	口縁部が内外面均等に丸みをもって肥厚する。頸部は強く外反する。	暗青灰色で黒色鉱物を含む。	２次被熱しているため、釉色は不明。内外面全体的に施釉。
	35			その他	胴	－ － －	頸部直下に突帯を巡らす。横耳がつく。頸部の最小径が中位にくるタイプと考えられる。	赤灰色で微粒子。	外面のみ施釉。頸部はオリーブ灰色で突帯からはオリーブ黒色。
	36				底	－ － 28.0	底部から胴部にかけてあまり開かない。胴下半より底部を薄く仕上げる。鉱物が露胎しザラザラである。	赤灰色で微粒子。白色・赤褐色鉱物を多量に含む。	外面に釉垂れが認められる。暗オリーブ色。
	37				底	－ － 28.0	底部から胴部にかけてあまり開かない。胴下半より底部を薄く仕上げる。底面に砂目跡が残る。	灰赤色で微粒子。不純物はあまり見受けられない。	釉薬は認められない。
	38				底	－ － 15.0	底部から胴部にかけてあまり開かない。胴下半より底部を薄く仕上げる。18・19に比して小型のタイプである。	灰赤色で微粒子。不純物はあまり見受けられない。	内面に一部認められる。オリーブ黒色。



第24図　褐釉陶器１　中国産褐釉　壺（１～15）、鉢（16～18）



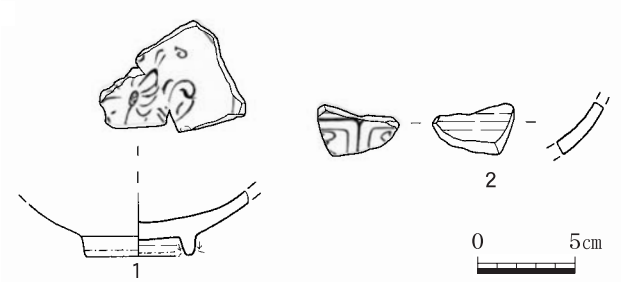
第25図　褐釉陶器２　中国産褐釉　鉢(19～21)、水注(22)、不明(23)、袋物(24･25)
タイ産褐釉　壺(26～38)

第９節　ベトナム産染付（第26図１・２）

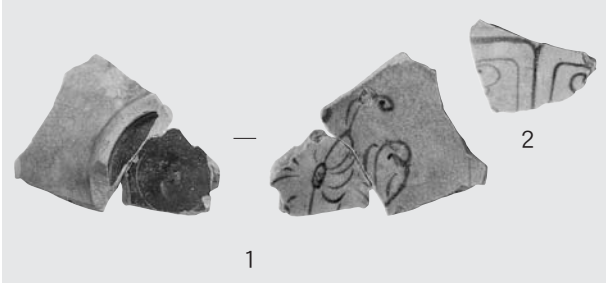
今回の調査でベトナム産染付が２点得られた。個々の遺物の特徴を以下に記述する。

１は碗の底部資料である。高台外底面に鉄錆を塗る、いわゆるチョコレートボトムを呈する。内外面に白化粧を施し、文様を染め付け、透明釉を施釉して仕上げられているが、畳付の釉薬は掻き取られている。内外面は貫入が目立つ。内底面に文様が施されており、花文と考えられるが判然としない。高台外底面にロクロ成形痕が明瞭に残る。素地は淡橙色で微粒子、不純物は見受けられない。底径5.6㎝。15世紀頃に位置づけられる。

２は瓶の腰部と思われる。外面は白化粧を施し、文様を染め付け、透明釉を施釉して仕上げられており、内面は透明釉のみである。外面は貫入が目立つ。文様はラマ式連弁文が施されている。素地は灰白色で微粒子、黒色微粒子を若干含み、気泡がある。14世紀～15世紀頃に位置づけられる。



第26図　ベトナム産染付



図版16　ベトナム産染付

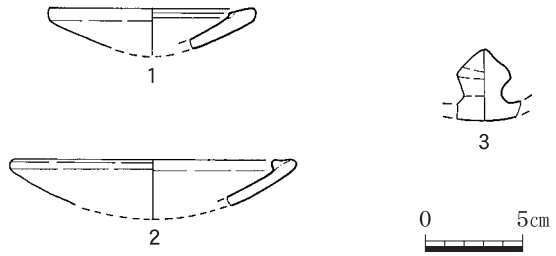
第10節　タイ産鉄絵（図版17　１・２）

器種はすべて合子。１は口縁部である。内面は透明釉、外面は鉄絵による文様を施したあと透明釉を施釉している。文様構成は判然としない。素地は白灰色で黒色鉱物が多量に含まれる。２は胴部片で合子の身の部分である。内面は透明釉を、外面は明茶褐色の鉄絵による文様を施した後一部透明釉を上から施釉している。素地は白灰色で黒色鉱物が多量に含まれる。器面には茶褐色の斑紋が多々見受けられる。16世紀頃に位置づけられる。

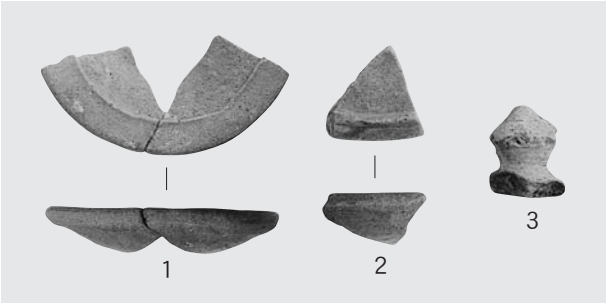
図版17　タイ産鉄絵

第11節　タイ産半練（第27図１～３）

今回の調査で出土した半練土器はすべて蓋であった。１・２は蓋の口縁部資料である。１は口唇部内側に鋭い削りを入れて、段を形成している。素地は粗く器面が橙色で内面が黒褐色を呈し、白色・赤褐色・黒色鉱物を多量に含む。２と比して小型である。径10.9㎝。２は口縁部内面に三角形の突起をつくっている。素地は粗く淡橙色で、白色・赤褐色・黒色鉱物を多量に含む。径15.2㎝。３は蓋の撮みで宝珠形を呈し、先端部を摘み上げている。素地は粗く白橙色で白色・赤褐色・黒色鉱物を多量に含む。



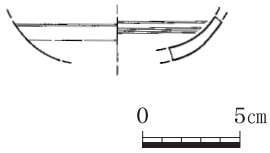
第27図　タイ産半練



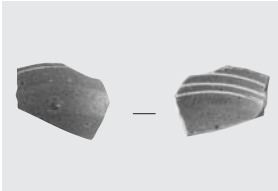
図版18　タイ産半練

第12節　高麗青磁（第28図）

高麗青磁は全部で3点しか検出されなかった。そのうち器形の窺えるもの１点を図示した。碗の胴部と思われるが、象嵌による圏線が外面に１条、内面に3条確認できる。素地は淡灰色の細粒子でややもろい感じがする。暗緑灰色の釉が両面に施され、細かい貫入が認められる。



第28図　高麗青磁



図版19　高麗青磁

第13節　本土産青磁（第29図１）

出土量は極めて少ない。瓶の底部で淡い青緑色を呈する。肥前で17世紀中ごろのタイプである。

第14節　本土産白磁（第30図27）

出土量は極めて少ない。27は小杯で、低平な器形である。近代に属するものである。

第15節　本土産染付（第29図３～15）

器種は碗、鉢、皿、瓶が確認でき、碗や皿が主体を占める。また、産地は肥前系のものがほとんどである。詳細は観察表に示した。

碗は３～７で、３・４は碗、５・６は小碗、７は猪口である。17～18世紀にかけての資料である。

鉢は８である。18世紀の資料である。

皿は９・10・12で、９・10は深い器形、12は浅い器形である。９のみが角皿である。いずれも17～18世紀にかけての資料で、10は柿右衛門様式の有田焼である。（11は中国産である）

蓋は13で、17～18世紀にかけての資料である。瓶は14・15で、17世紀中ごろの資料である。いずれも出土量は少ない。

第16節　本土産色絵（第30図16～18・20・21）

器種は碗、皿、杯、蓋が確認できる。いずれも絵付けが剥落しているが、痕が残っていることから文様の展開を確認できる。産地は肥前が主体であるが、わずかに関西系が混ざる。

16は丸碗である。17・18は皿で、18は鍔状に形成する。20はやや大型の瓶の胴部である。21は蓋である。（19は中国産である）

第17節　本土産陶器（第29図２・第30図22～29）

詳細は観察表に示した。確認できる器種は碗、小杯で、器種不明が若干ある。産地は内野山が比較的多くみられる。

２は碗の口縁部で弓なりに立ち上がるタイプで、17～18世紀にかけての京焼である。22～26の碗は、25以外は内野山系の陶器と考えられる。高台の高さや内面の深さ、形成でいくつかのタイプがみられる。25は天目茶碗を模倣したタイプと思われ、沖縄産とも考えられる。

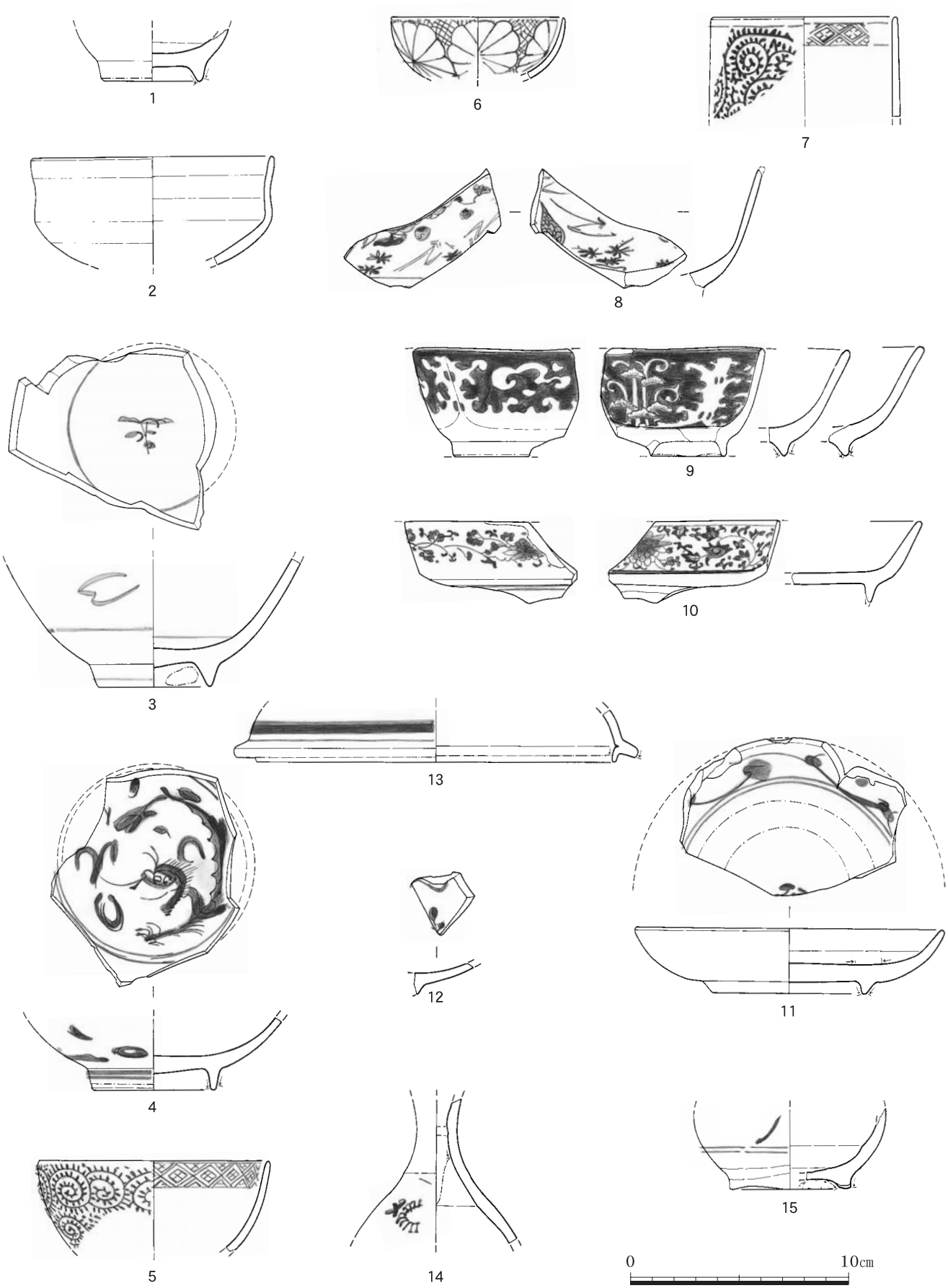
28・29は器種不明品で、28は箱形、29は羽釜形の器形である。

注）本土産陶磁器は佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二からご教示を頂いた。また、図版作成後の指導であったため、一部で中国産（第29図11・第30図19）が混在している点はお許し頂きたい。

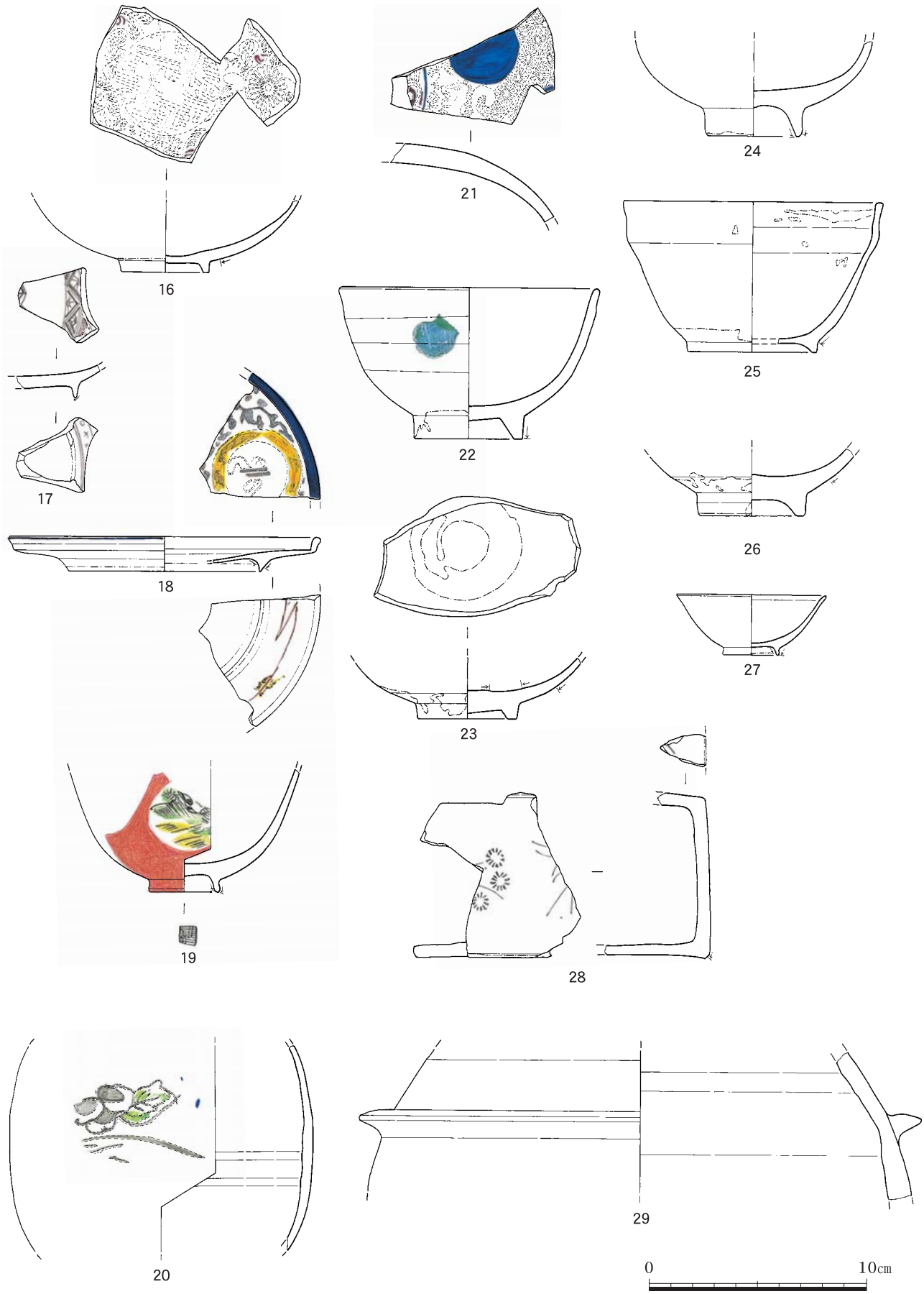
第10表　本土産陶磁器観察一覧

単位：cm

図番号		種類	器種	口径	器高	底径	観　察　事　項
第29図・図版20	1	青磁	瓶	－	－	4.6	瓶の底部。腰部に丸みをもつ器形と思われる。畳付は露胎。肥前1650～60年代。
	2	陶器	碗	11.0	－	－	腰部で折れ直に立ち上がる器形。内面に細かい貫入がみられる。京焼、17世紀後半～18世紀前半。
	3	染付	碗	－	－	5.2	底部から直線的に立ち上がる。内底面に花文、外面に不明の曲線文を施す。絵付けの発色は悪い。肥前、1650～60年代。
	4			－	－	5.6	腰部でわずかに丸みをもつ。内底面に龍文、外面に不明の斑文を施す。肥前、1655～70年代。
	5		小碗	10.6	－	－	外面に蛸唐草文、口縁内面に四方襷文を施す。肥前、1860年代ごろ。
	6			7.9	－	－	内外に大柄な菊花文を施す。地の格子文は雑。肥前、18世紀後半。
	7		猪口	8.4	－	－	外面に蛸唐草文、口縁内面に四方襷文を施す。肥前、18世紀後半。
	8		鉢	－	－	－	口縁の立ち上がりは急。文様の展開は判然としないが、草花文がみられる。肥前、18世紀後半。
	9		皿	－	5.1	－	深い器形の角皿。口縁の立ち上がりは急。内外に波濤文と松文を施す。有田、1780～1800年代。
	10			－	－	－	深い器形の皿。口縁の立ち上がりは急。内外に花唐草文を施す。貼付高台。有田柿右衛門様式、1660～70年代。
	11			14.2	3.0	7.0	内底面を蛇の目釉剥ぎし、唐草文を施す。景徳鎮、17世紀後半～18世紀前半。
	12			－	－	－	中皿か。内底面にコンニャク判で不明の文様。波佐見、18世紀後半。
	13		蓋				やや大型の蓋。圏線を２条廻らせる。肥前、17世紀後半～18世紀前半。
	14		瓶	－	－	－	瓶の頸部から胴上部。外面に花文。肥前1640～60年代。
	15			－	－	5.4	瓶の底部。腰部に２条の圏線。高台のつくりは雑。肥前、1630～50年代。
第30図・図版20	16	色絵	碗	－	－	4.0	丸碗。外底面は露胎。内面に緻密な花唐草文を施すがほとんど剥落。京焼、18世紀。
	17		皿	－	－	－	染付の絵付けは残る。外面に○×。内底面に鋸歯文を巡らせる。肥前、18世紀第４四半期～19世紀第１四半期。
	18			14.1	1.6	8.8	かなり低い器形、口縁を鍔状に形成。内面に宝文と唐草文を施すがほとんど剥落。口唇には瑠璃釉。肥前、1650～60年代。
	19		杯	－	－	3.2	外面は青をべた塗りし丸窓内に草文。外底面に落款。景徳鎮、18世紀後半～19世紀前半。
	20		瓶	－	－	－	瓶の胴部で寸胴な器形。外面に花文が残る。肥前、18世紀末～19世紀前半。
	21		蓋	－	－	－	蓋物の蓋か。金襴手で、外面を菱文で埋め丸文を施す。被熱を受ける。肥前、1690～1730年代。
	22	陶器	碗	11.8	7.0	4.9	高台は高く、深く削っており露胎内野山、17世紀後半。
	23			－	－	4.6	高台は前者に比べ低く高台内の削りも浅い。器形も低いと思われる。内底面は蛇の目釉剥ぎ。内野山、17世紀後半～18世紀前半。
	24			－	－	4.8	高台はやや低く高台内は丸く削り浅い。内野山、17世紀後半。
	25			11.8	7.0	5.9	底部からきつく立ち上がり、口縁で折れ直角に立つ。貼付高台。沖縄産の天目模倣か、17世紀末～18世紀中。
	26			－	－	4.2	呉器手碗。高台は高く高台内を丸く削り深い。17世紀末～18世紀第１四半期。
	27	白磁	小杯	6.9	2.8	2.6	口縁がわずかに外反。ややくすんだ白色。国産、幕末以降。
	28	陶器	不明	－	－	－	箱形をなす器形。器種は不明。外面に象嵌で蝶、草文を施す。薩摩か、18世紀～19世紀。
	29			－	－	－	外面に鍔状の突起を巡らせる羽釜状の器種。九州、18～19世紀。



第29図　本土産青磁　瓶(1)　　**本土産陶器**　碗(2)
本土産染付　碗(3・4)、小碗(5・6)、猪口(7)、鉢(8)、皿(9～12)、蓋(13)、瓶(14・15)



第30図　本土産色絵　碗(16)、皿(17・18)、杯(19)、瓶(20)、蓋(21)
本土産陶器　碗(22～26)、不明(28・29)　**本土産白磁**　小杯(27)

第18節　本土産印判手（図版21）

本土産印判手は、型紙摺り、銅版転写などが得られた。器種は碗、皿などの食膳器がほとんどで、わずかに香炉などが確認できる。また、今回は図は省略して写真のみとし、詳細を観察表に記した。文様の名称等の一部は『菅谷遺跡』（都立学校遺跡調査会2000）に拠った。

碗は１～６で、いずれも飯茶碗である。印判手の飯茶碗は「端反形」、「丸形」、「平形」があり、しだいに平形が主体になるとされる（冨永2001）。今回はこれらが混在する形でみられ、平形が若干多ように見受けられる。碗は大きさでみると、端反形は「四寸碗」、丸形は「三寸六部碗」に分けられ（宮城2002）、今回の端反碗は口径が11～12cmほどに収まり、丸碗は10cm前後が多いようである。また、文様でも細分で編年の可能性が指摘されている（宮城2002）が紙幅の都合により割愛する。おおむね今回出土したものはこれまでの出土例と大過はない。

小碗は９～14である。碗と同様に器形では腰部の丸味が強いタイプと弱いタイプに分けられる。クロム青磁では２つのタイプが確認されており、かつ底部の形成が異なる。時期的な違いと考えられる。筒碗は15・16で、大きさはほぼ一定に近い。

皿は17～21で、口径が13cm前後のタイプが多い。21は大皿である。口縁を平坦に形成するタイプと波状に形成するタイプに分けられる。

その他の器種は段重、香炉などがある。

＜参考文献＞

冨永樹之　2001「近代染付飯茶碗の変遷－現代飯碗の起源－」『青山考古』18
都立学校遺跡調査会　2000『菅谷遺跡－東京都荒川区千住製絨所跡都立新川工業高校地点－』
宮城弘樹　2002「いわゆるスンカンマカイについて」『壺屋焼物博物館紀要』３

第11表　本土産印判手観察一覧

単位：cm

図番号		器種	口径	器高	底径	観　察　事　項
図版21	1	碗	11.6	－	－	口縁が外反する端反形。型紙摺り。外面に花唐草文、口縁内面に花文を巡らす。
	2		10.6	5.7	4.2	丸形。腰部が丸みを帯び直に立ち上がる。型紙摺り。外面は点描の地文に人物文と菊花文、内面は口縁部に瓔珞文、内底面に三友文。
	3		10.8	5.7	4.0	丸形。ゴム判。外面に雑な網目文。内面は口縁・内底面に不明の文様。
	4		10.2	4.4	4.0	平形。型紙摺り。外面に大柄な花文、内面に風景文。
	5		11.0	4.4	4.6	平形。型紙摺り。外面に奴文、腰部に鋸歯文。内面は口縁部に瓔珞文。
	6		12.0	5.3	3.8	平形。銅判転写。外面には花文や鶴文など。内面は口縁に圏線。
	7	蓋	10.6	2.3	4.0	碗の蓋。銅判転写。外面に宝文と崩れた瓔珞文。内面は瓔珞文。
	8		9.0	2.2	3.8	碗の蓋。ゴム判。外面に草文。内面も草文か。
	9	小碗	8.8	3.7	3.2	腰部が丸みを帯び直に立ち上がる丸味の強いタイプ。型紙摺り。内外とも蔓唐草文。
	10		8.6	3.9	3.0	丸味の強いタイプ。口唇に錆釉。ゴム判。外面に＊状の文様を組み合わせる。
	11		8.4	4.2	3.2	クロム青磁。丸味の強いタイプで口縁がわずかに外反。外面に飛び鉋。
	12		8.2	4.7	3.2	全体的に丸みを帯びる丸味の弱いタイプ。銅版転写。口唇に錆釉。外面に花唐草文。
	13		8.0	4.3	4.0	腰部が折れ直に立ち上がる筒碗のような器形。銅版転写。外面に唐草文の地に扇。
	14		8.4	4.4	3.4	クロム青磁。丸味の弱いタイプ。外面に飛び鉋。
	15	筒碗	6.0	－	－	型紙摺り。外面に三友文。内面は口縁に瓔珞文。
	16		7.6	7.0	4.6	ゴム判。外面に青海波。内面に不明の文様。
	17	皿	13.0	3.3	7.6	型紙摺り。外面は花文。内面は青海波の地に窓絵に花文、底面に三友文。
	18		－	－	7.2	型紙摺り。外面は花文か。内面は微塵唐草、点描の地に鶴丸。
	19		13.0	3.3	7.2	口縁をわずかに波状に形成。型紙摺り。外面に唐草文。内面は花文の地に窓絵に藤および花文。
	20		13.6	2.6	7.0	銅版転写。内面は地を青く塗りつぶし円弧内に幾何学文や波濤文、底面に風景文。
	21		28.4	3.3	16.0	大皿。型紙摺り。外面に雑な花文。内面に花文、底面に微塵唐草の地に牡丹文。
	22	蓋物	10.9	7.9	8.8	蓋物の身。型紙摺り。幾何学模様の地に花文。腰部に鋸歯文。
	23	段重	10.8	3.6	9.0	段重の身。型紙摺り。幾何学模様の地に花文。
	24	蓋	8.4	3.1	9.6	蓋物の蓋か。銅版転写。外面に竹文。
	25	徳利	2.8	－	－	細身の器形。ゴム判。外面には雑な網目文。かなり薄手。
	26	香炉	10.6	7.6	7.2	八角の香炉。型紙摺り。口縁に雷文、胴に草文と七言律詩。
	27		11.4	8.5	10.2	クロム青磁の八角の香炉。胴に竹を浮き彫り。

第19節　沖縄産施釉陶器（第31図１～14、第32図15～26）

一般に「上焼」と称するものである。確認できる器種は碗を中心にして、皿、急須などがみられる。出土量は極めて多く、各器種で細分が可能であるが、器形をうかがうことのできる資料を優先して掲載した。また、詳細は観察表に記した。

１～４は碗で、５～７は小碗である。碗はこれまでに得られている資料と大過はない。口径は12～13㎝前後、器高・底径は５～６㎝前後と一定している。

８は小杯である。外面を面取りする。

９～11は皿である。口縁を平坦に形成するタイプと波状に形成するタイプがある。11は他の破片もあり、併せてみると口縁内面に印判手の三友文に類似する文様を展開させる。

12は小型の瓶である。やや寸胴で低い器形。

13～15は急須である。13・14は別個体の可能性があるものの、サイズが合うこと、両者とも「院」の刻字があることから組み合わせて示した。

16・17は小型の油壺である。平たい器形と丸みを帯びた器形がある。底部は、前者は高台を形成し、後者は碁笥底状をなすタイプである。

18は酒器で、カラカラである。注口は欠失する。やや低平な器形である。

19～21は火取で、19・20は筒形のタイプ、21は風炉に似るタイプである。19・20はいずれも底部は高台を形成するが、前者は形成がややルーズである。21は丸みを帯びやや扁平になる。

22は小型の燭台である。芯の部分は欠失している。

23～25は蓋で、撮みのないタイプとあるタイプ、落とし蓋のタイプを図示した。また、23は摘みを高台状にするタイプ、24は丸みを帯びた摘みのタイプである。

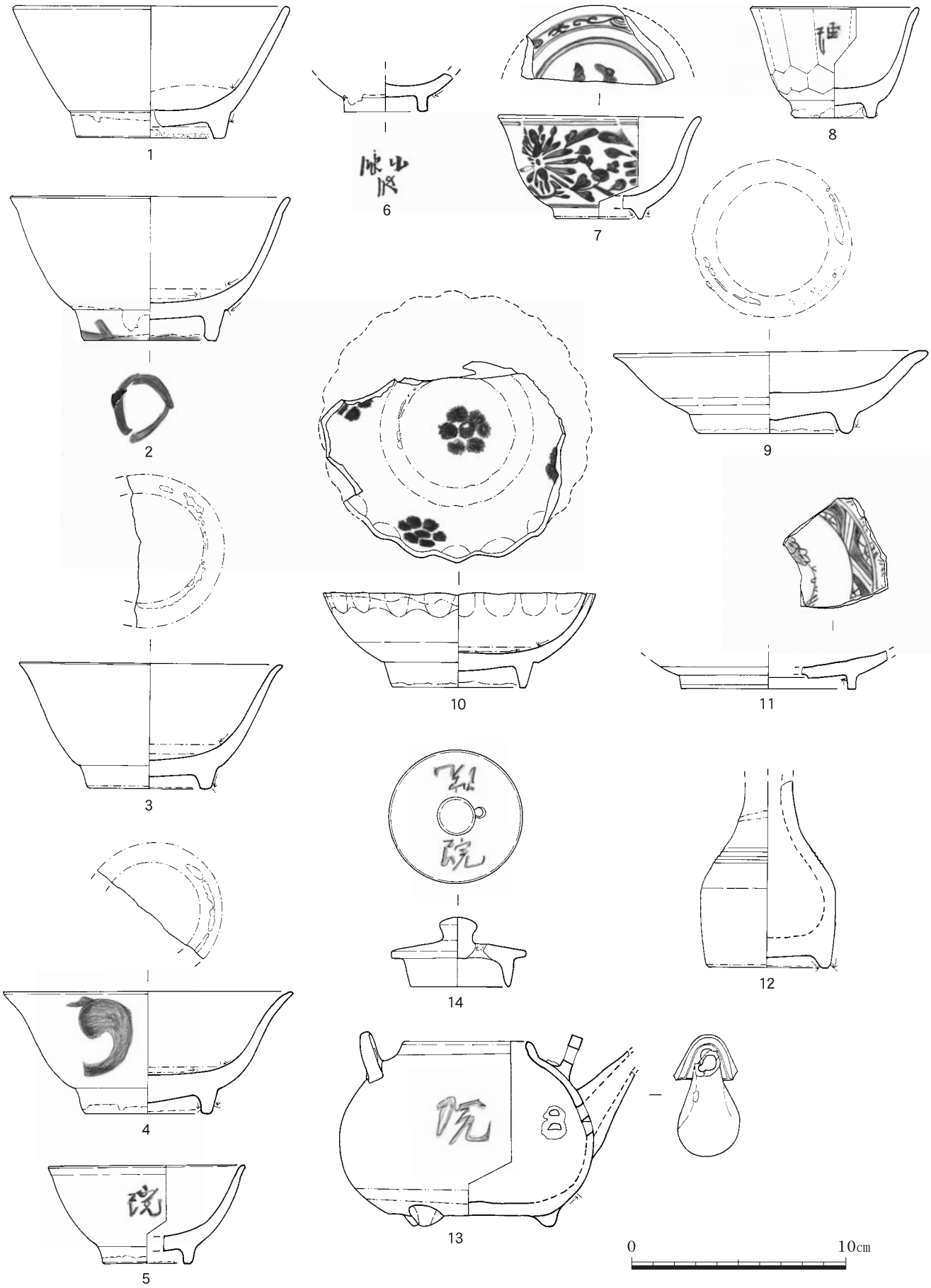
26は箱形をなす器種不明のタイプ。脚を付ける。御殿形厨子の可能性も考えられる。

これまでに底部などに墨書を施した陶磁器の出土例があるが、今回は６などを図示した。21には「評定所」の墨書があり、同名の機関が右掖門南側の北殿内に設けられており何らかの関わりがあった可能性がある。また、「院」の文字を記した例も多い。

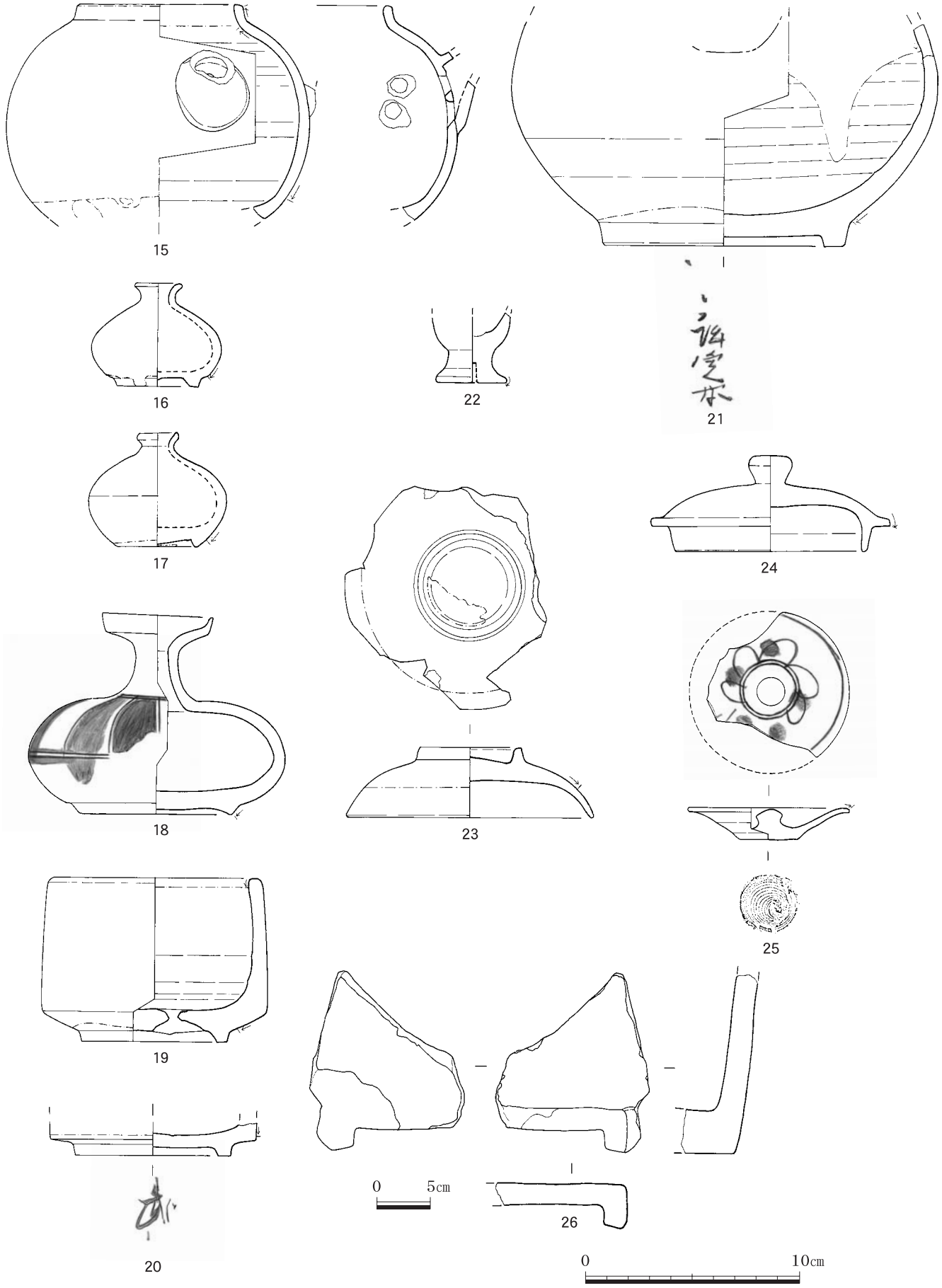
第12表　沖縄産施釉陶器観察一覧

単位：cm

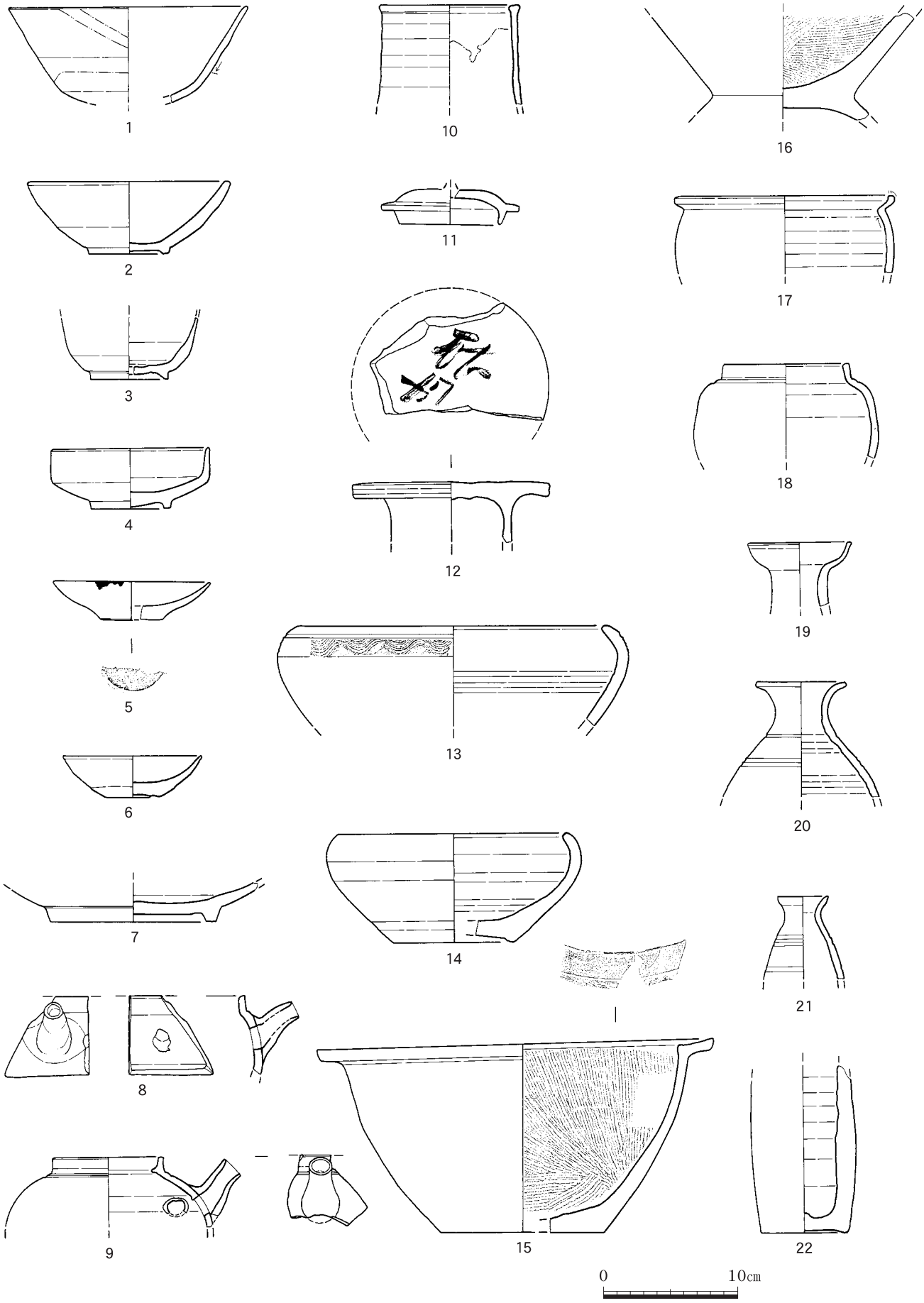
図番号		器種	口径	器高	底径	観　察　事　項
第31図・図版22	1	碗	13.0	6.1	6.8	底部から直線的に立ち上がる。釉は暗い緑色、内・外底面は露胎。
	2		13.1	6.8	6.2	腰部がわずかに丸みを帯び口唇部が弱く外反。外底面に「○」の墨書。内底面は蛇の目釉剥ぎ、外底面は露胎で高台に煤が付着する。
	3		12.3	5.9	5.5	口縁が弱く外反。内底面は蛇の目釉剥ぎで容着痕が残る。
	4		13.6	5.7	5.8	口唇の外反は前者より若干強い。内底面は蛇の目釉剥ぎで容着痕が残る。外面に丸文。
	5	小碗	9.2	4.6	4.0	口唇が弱く外反する。畳付は露胎。内外とも白化粧。外面に「院」を刻字。
	6		－	－	3.8	外底面は露胎で「□□□」の墨書。
	7		9.5	4.8	4.0	口唇部が外反。外面に大柄な花文。口縁内面に唐草文を巡らせ、内底面には不明の文様。
	8		7.9	5.2	3.6	外面を面取りする。外面に不鮮明な「院」の字。
	9	皿	14.7	3.9	6.9	やや低い器形。内底面を蛇の目釉剥ぎでわずかに容着痕が残る。畳付にわずかに白土。
	10		12.8	4.4	6.2	口唇部を波状に形成。内面口縁部と底部に花文。内底面は蛇の目釉剥ぎ。畳付に白土。
	11		－	－	8.1	高台内は露胎。内底面に鋸歯文と三友文の一部。
	12	瓶	－	－	5.6	小型の瓶。底部から直角に立ち上がる寸胴な器形。肩部に圏線。畳付は露胎。
	13	急須	5.8	8.7	6.5	急須。やや扁平な器形。外面に「院」を刻字する。
	14		6.3	3.3	4.6	急須の蓋。外面に「院」の刻字を２文字。
第32図・図版22	15	急須	7.7	－	－	前者よりも丸みを帯びた器形。口縁内面および底部は露胎。
	16	油壺	2.2	4.9	3.9	小型の油壺。やや扁平な器形。外底面は露胎。
	17		2.0	5.4	3.7	小型の油壺。前者より丸みを帯びた器形で高台が付く。畳付は露胎。
	18	酒器	5.2	9.4	7.0	扁平な器形。注口は欠失。外面を沈線で区画する。高台内は露胎。
	19	火取	9.6	7.7	6.8	底部から直角に立ち上がり、わずかに内傾する。内面、外底面は露胎。底部は意図的に穿孔か。
	20		－	－	7.2	内面、外底面は露胎。外底面に「武□」の墨書。
	21		－	－	11.2	大型の火炉で、風炉か。外底面に「評定所」の墨書。
	22	燭台	－	－	3.3	小型の燭台で芯の部分は欠失。底面は糸切りか。釘穴あり。
	23	蓋	4.8	3.3	11.6	高台状の摘み。口唇部は露胎。
	24		11.2	4.5	8.8	饅頭形の器形。扁平な撮みが付く。内面は露胎。
	25		7.6	1.5	2.8	落とし蓋。外面に花文を施す。糸切り痕が明瞭。
	26	不明	－	－	－	脚付きで大型の箱形の器形と思われる。



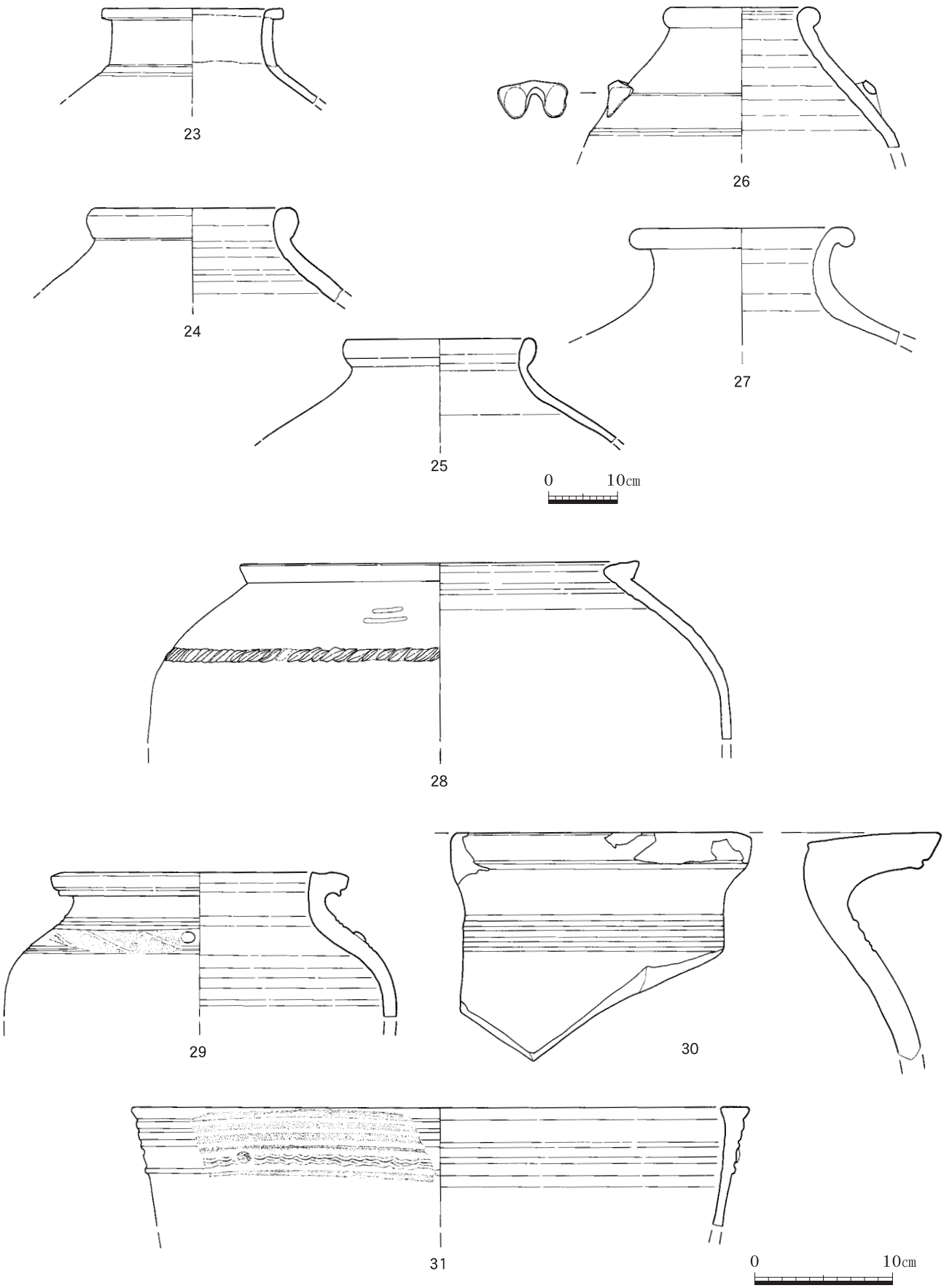
第31図　沖縄産施釉陶器１　碗（１～４）、小碗（５～８）、皿（９～11）、瓶（12）、急須（13・14）



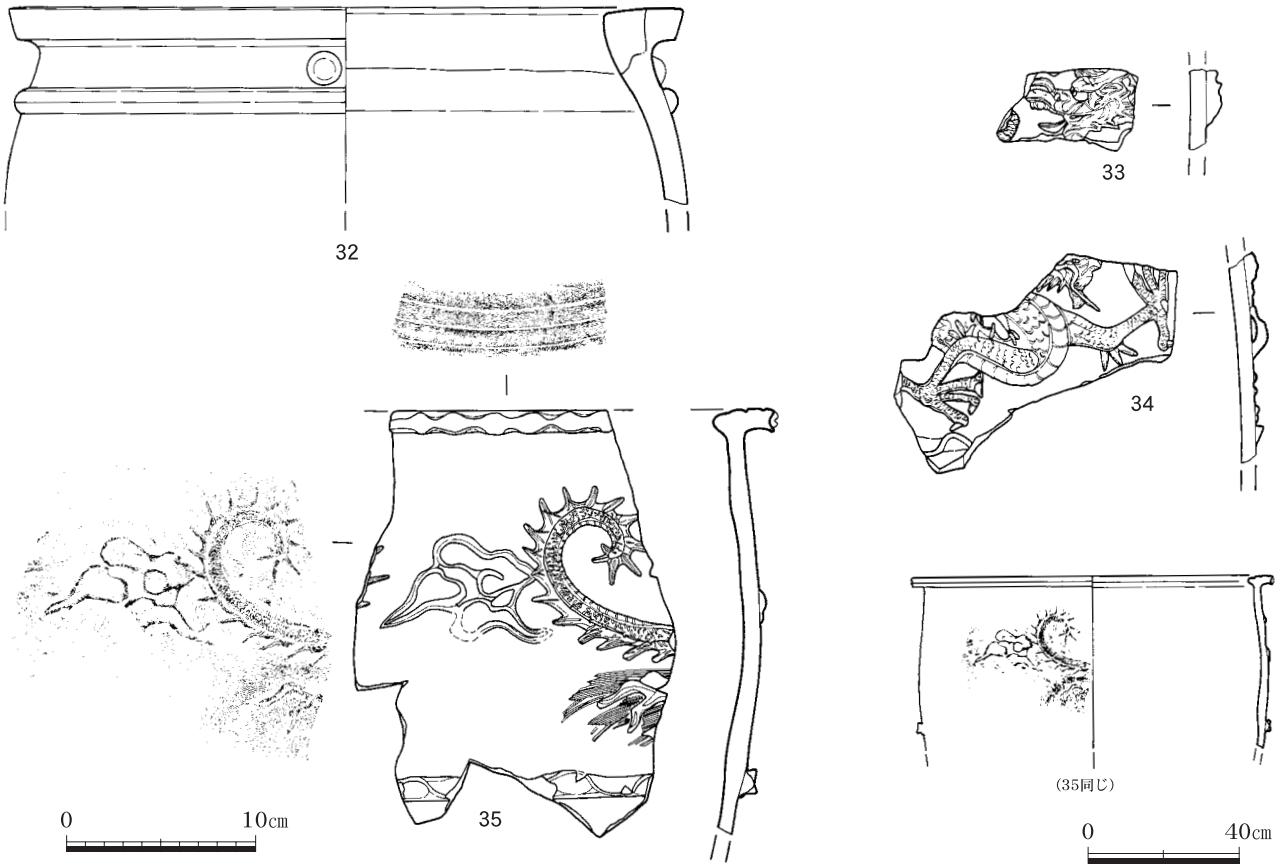
第32図　沖縄産施釉陶器２　急須(15)、油壺(16・17)、酒器(18)、火取(19～21)、燈台(22)
蓋(23～25)、器種不明(26)



第33図　沖縄産無釉陶器１　碗（１～４）、皿（５～７）、急須（８・９）、筒物（10）、蓋（11・12）、鉢（13・14）擂り鉢（15・16）、鍋（17・18）、壺（19～22）



第34図　沖縄産無釉陶器２　壺(23～27)、甕(28～35)



第35図　沖縄産無釉陶器３　甕(32～35)

第21節　類須恵器

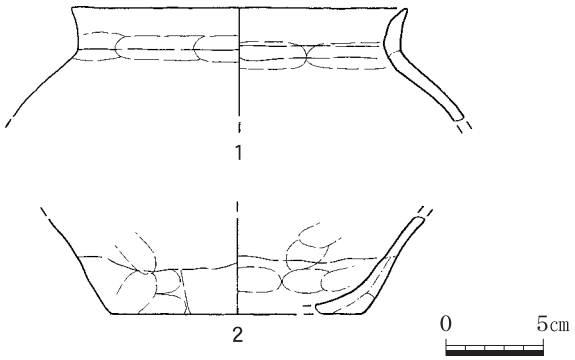
胴部片が１点のみ出土した。図等は省略する。類須恵器はこれまでも首里城跡から出土例があるものの、出土量はきわめて少ないといえる。

第22節　土器（第36図）

出土量はきわめて少ない。

１は壺の口縁部で、口縁が直立し口唇がわずかに外反する。ナデ肩の器形をなす。頸部の内外にナデが残る。胎土は砂泥質で混和材は目立たない。比較的硬質。口径は17.7㎝。グスク土器で、埋葬人骨に伴っていたものである。

２は底部で、壺もしくは鉢形。底部から急に立ち上がる器形をなす。内外にナデの痕が残る。胎土は砂質で、微細な黒色鉱物粒を含む。底径は13.2㎝。焼成は良好で硬質。沖縄編年後期前半に属する在地土器あるいは同期の移入土器と考えられる。



第36図　土器

図版25　土器

第23節　陶質土器（第37図１～20）

一般に「アカムヌー」と称されるものである。器種は鍋、急須、火炉など火と用いる器種が多く確認できる。細片がほとんどであるものの、形状から判断して鍋が最も多いと思われる。ここでは全形をうかがうことのできる資料を取り上げ、詳細は観察表に示した。

１・２は鍋である。小型と大型のタイプを図示した。いずれも外面に煤が付着している。陶質土器では鍋が主体をなすようであり、さらに口縁部（蓋受け）の形態で細分が可能と思われる。

３・４は急須である。いずれも算盤珠状の器形をなすが、３は器高が高いタイプである。

５はフライパン状製品の把手の部分である。『天界寺跡』Ⅰで報告した硬質土器（焙烙）に類似するものである。

６～９は鉢である。サイズは小型と中型があり、さらに深い器形と浅い器形のタイプに分けられる。

10・11は蓋である。10は撮みのあるタイプ、11は撮みがなく高台状に形成するタイプである。前者は急須、後者は鍋に伴うものと思われる。

12～15は火炉である。12は丸みを帯びるタイプ、13～15は筒形のタイプである。後者は受けの部分が短いタイプ、長いタイプ、長く「L」字状をなすタイプに分けられる。12などは外面に白土で圏線を巡らせる。

16・17は灯明皿である。16はベタ底、17は高台を形成する。17は皿もしくは蓋を灯明皿に転用したものと思われる。

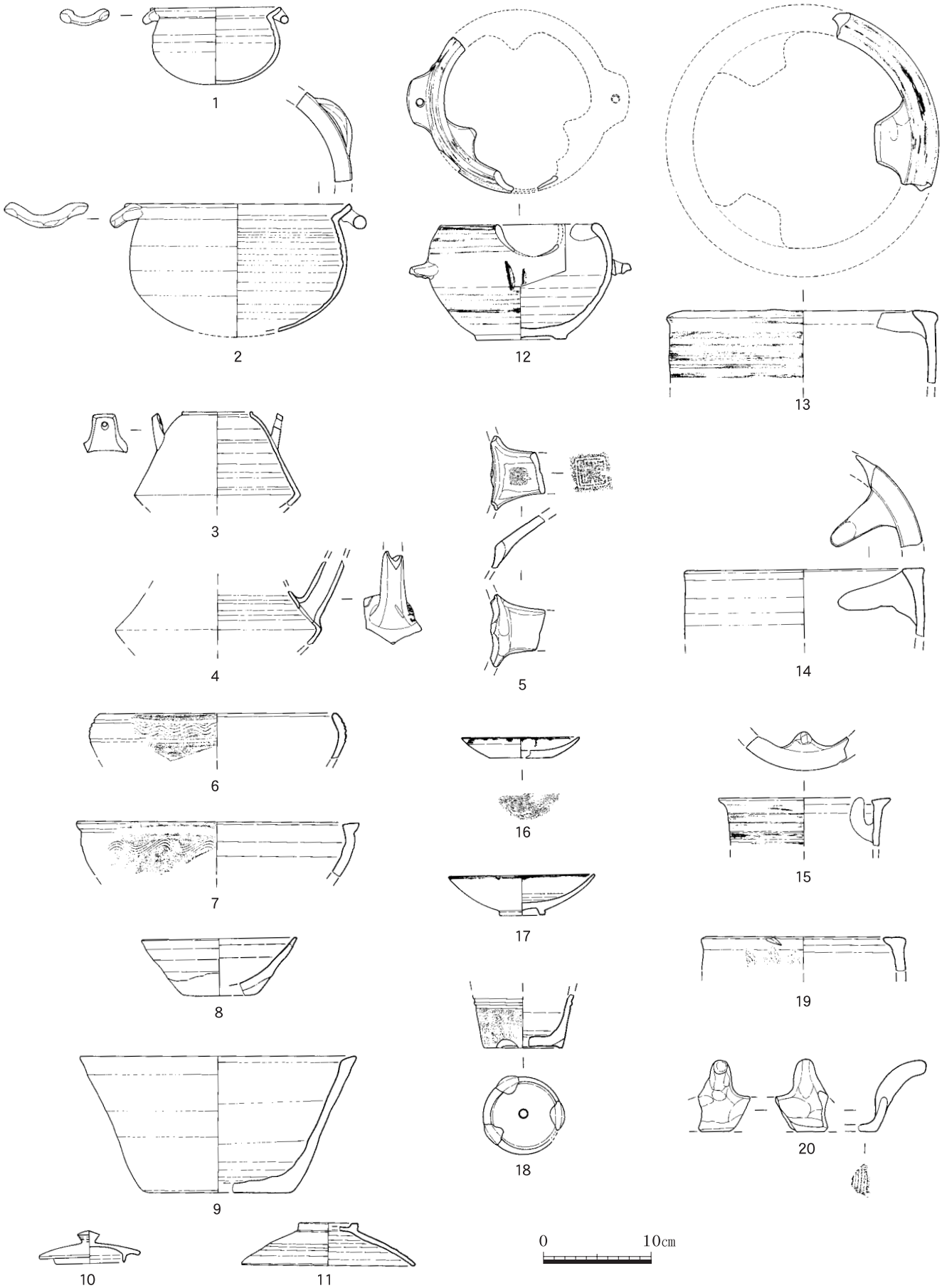
18はきわめて小型の花鉢の底部である。外面全体に飛び鉋を施す。

19・20は器種不明のものである。19は筒形をなすことから鉢などが考えられる。20は角状の突起が伸びる。脚もしくは火炉の一部の可能性がある。

第14表　陶質土器観察一覧

単位：cm

図番号		器種	口径	器高	底径	観　察　事　項
第37図・図版26	1	鍋	11.6	7.0	－	小型の鍋。口縁部を逆「L」字状に形成。外底面に煤が付着する。
	2		20.6	－	－	大型の鍋。内面は轆轤痕が明瞭。外面はわずかに煤が付着する。
	3	急須	6.4	－	－	小型の急須。背の高い器形。内面の轆轤痕が明瞭。
	4		－	－	－	大型の急須。注口の付け根部分に不明の墨書。内面の轆轤痕が明瞭。
	5	フライパン状	－	－	－	フライパン状製品の把手。表に不明のスタンプ（落款）を押す。
	6	鉢	21.6	－	－	中型の鉢。口縁が内彎する。圏線の間に波状文。
	7		26.0	－	－	中型の鉢。口縁部を逆「L」字状にするがルーズ。口縁下に波状文。
	8		14.2	－	－	小型の鉢。直線的に立ち上がる。比較的厚手の器形。
	9		25.6	12.6	－	大型の鉢。深い器形をなす。
	10	蓋	9.3	3.0	6.3	撮みが付くタイプ。
	11		16.0	3.9	5.5	撮みのないタイプ。
	12	火炉	14.6	10.5	8.2	丸みを帯びる器形。外面に白土で圏線を施す。内底面にわずかに煤が付着する。
	13		12.5	－	－	筒形のタイプ。受けの部分は台形をなす。
	14		22.0	－	－	筒形のタイプ。受けの部分は長く伸びる。
	15		15.7	－	－	筒形のタイプ。受けの部分が「L」字状をなす。
	16	灯明皿	10.8	1.9	5.8	ベタ底のタイプ。
	17		13.4	3.7	4.2	高台が付くタイプ。
	18	花鉢	－	－	7.2	小型の花鉢で、外面に飛び鉋。底部に抉りが３つ、底面の穴１つ。
	19	不明	18.6	－	－	筒形の器形で口縁下にスペード形？のスタンプ文。
	20		－	－	－	角状に突起が伸びる。表面が溝状に窪む。



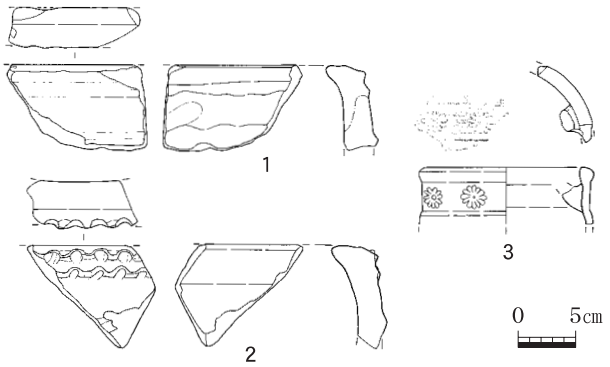
第37図　陶質土器　鍋(1・2)、急須(3・4)、フライパン状(5)、鉢(6～9)、蓋(10・11)、火炉(12～15)
灯明皿(16・17)、花鉢(18)、器種不明(19・20)

第24節　瓦質土器（第38図）

素地が暗灰色を呈するもので、出土量は極めて少ない。全形をうかがうことのできる資料はほとんどない。器種は鉢などが想定できる。

１・２は鉢で、口縁部に縄目を巡らせる。いずれも口径は不明。

３は筒形の器形で、内面に「L」字状突起があることから小型の火炉と思われる。外面には花文をスタンプする。口径は15.2㎝。



第38図　瓦質土器

図版27　瓦質土器

第25節 瓦（図版28・図版29）

瓦は全ての遺物の中で最も多く出土しており、造瓦技術から高麗系瓦・大和系瓦・明朝系瓦に大別される。今回の調査では高麗系瓦・明朝系瓦が出土した。高麗系瓦は軒平瓦・軒丸瓦・平瓦、明朝系瓦は軒平瓦・軒丸瓦が確認された。この内、明朝系瓦は今回の調査のみならず首里城で最も多く出土する。時期的にはグスク時代～近世にわたる各時代の資料が得られた。残存状態が良好なものを記述する。高麗系瓦については大川清氏の分類（大川1978）に準じさせていただき、明朝系瓦については上原静氏の分類と編年（上原1994・上原1996）に準じさせていただく。

A　軒平瓦（図版28・図版29　30）

今回の調査で出土した軒平瓦は高麗系瓦と明朝系瓦がある。数は圧倒的に明朝系瓦が多い。高麗系瓦、明朝系瓦の順に記述する。

高麗系瓦

１は崎山１類に属すると考えられる。中心に５枚の花弁をもつ花文があり、両端にむかって唐草文が展開されている。色調は灰色を帯び、素地は暗灰色を呈する。厚さは文様が施されている先端部が約4.5㎝、筒部が1.5㎝である。２は崎山３類に属すると考えられる。中心に10枚の花弁をもつ花文があり、両端に向かって唐草文が展開されている。１に比して文様の成形が良く、形が整っている。色調は暗灰色を呈する。厚さは文様が施されている先端部が約４㎝、筒部が1.6㎝である。15は浦添３類Ａに属すると考えられる。瓦当面であるが、他の資料と比較して大型である。文様は凸線で茎と葉が描かれているようにみえる。色調はやや褐色を帯びた灰色を呈する。

明朝系瓦

３・４は牡丹模様であり、その装飾から第Ⅰ文様に属すると考えられる。灰色を呈する。５・６・７は牡丹模様である。３・４に比して花芯・花弁等に簡略化が認められるが、第２文様と若干異なると考えられ、第Ⅰ文様と第Ⅱ文様の中間的な様相を呈している。やや橙色を帯びた灰色を呈するもの（５・６）と灰色を呈するものがある。８・９は第Ⅱ文様Ｃ01に属すると考えられ、牡丹模様である。やや橙色を帯びた灰色を呈する。10・11・12・13・14は第Ⅲ文様に属すると考えられる。10は第Ⅲ文様02に該当すると考えられ、灰色を呈する。Ⅱ期のものであろう。11・12は第Ⅲ文様Ｂ01に該当すると考えられ、11は橙色を帯びた褐

色を呈し、12は赤色を呈する。Ⅲ期のものであろう。13は第Ⅲ文様に属すると考えられる。第Ⅲ文様Ａ群05がさらに簡略化されており、花芯・花弁・葉は形が残るのみで表面に文様はない。やや橙色を帯びた褐色を呈するもの（13）と赤色を呈するもの（14）がある。15は第Ⅶ文様01に属すると考えられる。赤色を呈するが、表面に灰色を塗った形跡が認められる。

Ｂ　軒丸瓦（図版29　16～27）

今回の調査で出土した軒丸瓦は高麗系瓦と明朝系瓦がある。数は圧倒的に明朝系瓦が多い。高麗系瓦、明朝系瓦の順に記述する。高麗系瓦、明朝系瓦の順に記述する。

高麗系瓦

16は浦添１類に属すると考えられる。蓮華がモチーフと考えられ、周囲は２条の圏線の中に珠文が巡る。首里城出土の高麗瓦のなかでも極めてまれで、類例は西のアザナ（上原1996）で確認されている。色調は灰色を呈する。17は崎山１類と類似するが、珠文が認められない。巴文をモチーフとしており、周囲に１条の圏線が巡る。16と異なり小型である。高麗瓦・明朝瓦等他の軒丸瓦に比して、外周縁が突出する特徴がある。色調は白灰色である。首里城出土の瓦では、知見のかぎり初例と思われる。

明朝系瓦

18・19は第Ⅰ文様系に属すると考えられ、16世紀後半から登場するとされている。18は牡丹をモチーフとして花・茎・葉が明確にデザインされており、第Ⅰ文様Ａ群06に該当すると考えられる。灰色を呈する。19は同じく牡丹をモチーフとするが、花の部分のみがシンボル化されていることから、第Ⅰ文様Ｂ群02に該当すると考えられる。色調は灰色で、素地は暗褐色を呈する。

20・21・22・23・24は牡丹をモチーフとする第Ⅲ文様系に属すると考えられ、01～07が17世紀、08以降を18世紀とされている。20は第Ⅲ文様01に該当すると考えられ、花芯・花弁・茎・葉の各部が明瞭である。色調は暗褐色で、素地はやや橙色を帯びている。21は文様構成等が第Ⅲ文様05と類似するが、色調は橙色を呈する赤瓦である。22は第Ⅲ文様04に該当すると考えられ、01と比して簡略化が進み、葉が花弁の一部となっている。色調はやや橙色を帯びた灰色を呈する。20・21・23はⅡ期と考えられる。23は花芯が瓦当中央より下位に移動し、花弁が上方に広がるハイビスカス様を呈することから第Ⅲ文様09に該当すると考えられる。赤色を呈する。24は文様構成が23と酷似しており灰色を呈することから第Ⅲ文様08に該当すると考えられる。23・24はⅢ期に該当する。

25・26・27は牡丹をモチーフとしており、第Ⅸ文様系に属すると考えられる。珠文の数が前述した第Ⅰ・第Ⅲ文様系に比して極端に減少する。25は第Ⅸ文様Ａ02に該当すると考えられ、文様は花の線のみを強調したものとなっている。色調は他の赤瓦と比して赤みが強い。26は第Ⅸ文様Ａ01に該当すると考えられる。Ａ02と比して文様は立体的である。色調は橙色。27は第Ⅸ文様Ｃ01に該当すると考えられる。中央のものが花芯とすれば、花芯・花弁は縦位の線で刻んでいる。色調は赤橙色。

Ｃ　平瓦（図版29　28・29）

高麗系瓦

平瓦は高麗系のみ出土した。28は凸面に銘が刻まれた平瓦で、「大」の字のみ確認できるが、その下にまだ文字があった形跡が認められる。凸面は叩き目が、凹面は糸切りの跡が明瞭に残る。色調は灰色。29も凸面に銘が刻まれており、「高」の字のみ判別が可能である。まだ文字があった痕跡が認められるが判然としない。色調はにぶい橙色を帯びており、素地は白灰色を呈する。両資料ともに首里城西のアザナで確認された資料と酷似する。

＜参考文献＞
大川　清　1978年　「琉球古瓦調査抄報」　『沖縄文化財調査報告（1956～1962)』　那覇出版社
上原　静　1994年　「首里城跡西のアザナ地区出土の明朝系瓦とその推移」　『南島考古』No. 14　沖縄考古学会
上原　静　1996年　「首里城跡の高麗系瓦と大和瓦」　『文化課紀要』第12号　沖縄県教育庁文化課

第26節　円盤状製品（第39図１～18）

総数で110点出土し、第39図に図示した。瓦、陶磁器片を打ち欠いて円形に加工した２次製品で、中国産褐釉陶器を利用したものが多い。サイズは10cm前後から２cmとばらつきがみられ、３cm前後が最も多い。形成方法は、縁辺を荒く打ち欠いただけの不定形なタイプと、丁寧に加工して円形に近づけたタイプがある。計測値などは第15表に示した。

試みに直径（長径・短径)、厚さ、素材、形状といった要素を数値化して検討した。詳細は割愛するが、おおむね直径と厚さで９タイプほどに分けられた。素材による分類は、１～２cm程度の小型のタイプは磁器、６～７cm程度の大型のタイプは陶器や瓦が占める。これは大きなタイプには厚い素材のもの（瓦など)、小さなタイプには薄い素材のもの（染付など）を用いているからであり、分類の上で素材は大きなウエイトを占めるものではない。形状は各タイプごとに円形、不定形が混在しており、大分類として円形と不定形に分けておく必要があろう。

第15表a　円盤状製品計測一覧

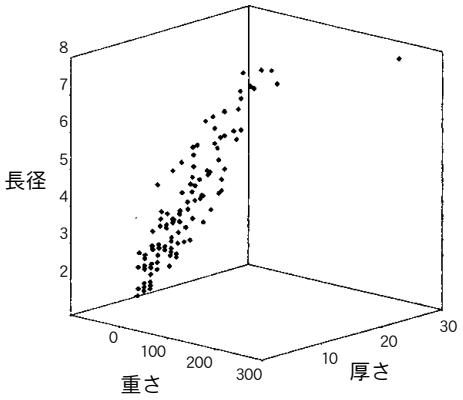
通し番号	計測値（cm／g）				形状	材質	備考
	長径	短径	厚さ	重さ			
1	7.7	7.6	28.0	235.3	円形	陶器	第39図1
2	7.7	7.1	14.0	124.0	円形	陶器	同図2
3	7.2	6.7	14.0	100.7	円形	陶器	
4	7.5	7.3	17.0	108.5	不定形	瓦	
5	6.6	6.5	11.0	83.6	円形	陶器	同図4
6	7.5	7.0	14.0	85.5	円形	瓦	
7	7.1	6.6	18.0	107.8	不定形	瓦	同図3
8	6.8	6.4	14.0	80.8	不定形	瓦	
9	6.5	6.0	14.0	75.7	円形	瓦	
10	7.0	6.6	14.0	79.7	不定形	瓦	同図5
11	6.9	6.3	17.0	71.8	不定形	瓦	
12	6.0	5.6	12.0	50.6	円形	瓦	
13	6.3	5.3	12.0	47.5	不定形	瓦	
14	5.7	5.2	13.0	50.3	不定形	瓦	
15	5.7	5.4	17.0	44.4	不定形	瓦	
16	5.8	5.1	15.0	54.2	不定形	瓦	
17	5.5	5.2	16.0	47.6	円形	瓦	同図6
18	5.5	4.7	13.0	38.3	円形	瓦	
19	5.4	4.7	13.0	44.9	不定形	瓦	
20	5.7	4.9	14.0	47.1	円形	瓦	同図7
21	5.0	4.9	14.0	34.5	不定形	瓦	
22	4.5	4.2	10.0	25.2	円形	瓦	
23	4.7	4.5	15.0	34.0	円形	瓦	
24	4.7	3.1	13.0	28.7	円形	瓦	
25	4.4	4.0	15.0	28.1	不定形	瓦	
26	4.0	3.6	12.0	20.5	不定形	瓦	
27	3.6	3.1	14.0	18.3	不定形	瓦	
28	5.2	4.7	8.0	31.1	不定形	陶器	同図９

通し番号	計測値（cm／g）				形状	材質	備考
	長径	短径	厚さ	重さ			
29	5.6	5.1	9.0	41.7	円形	陶器	
30	5.4	5.3	9.0	43.9	円形	陶器	同図8
31	4.4	4.1	11.0	21.9	円形	瓦	同図11
32	4.3	3.8	9.0	19.4	円形	陶器	
33	4.0	3.9	10.0	18.8	円形	瓦	同図13
34	3.3	3.1	13.0	15.3	不定形	瓦	
35	2.7	2.2	6.0	5.9	円形	陶器	擂り鉢
36	3.7	3.1	9.0	14.1	不定形	陶器	同図14
37	6.3	6.1	10.0	56.3	円形	陶器	
38	5.6	5.0	10.0	39.6	不定形	陶器	
39	4.7	4.0	10.0	28.9	円形	陶器	
40	5.0	4.7	7.0	24.7	円形	陶器	
41	4.3	4.1	10.0	28.3	円形	陶器	
42	4.7	4.5	12.0	37.3	円形	陶器	
43	4.1	3.8	12.0	27.4	円形	陶器	
44	4.1	3.4	15.0	28.6	不定形	石	硯
45	4.1	3.4	12.0	23.6	円形	陶器	
46	4.8	4.4	12.0	35.6	円形	陶器	
47	4.6	3.9	11.0	31.2	円形	褐釉	
48	4.7	4.5	5.0	17.2	不定形	褐釉	
49	5.0	4.6	10.0	32.3	不定形	陶器	同図10 碗(施釉)の底部
50	4.1	4.0	14.0	34.8	円形	褐釉	同図12 タイ産褐釉陶器
51	3.9	3.3	6.0	12.9	不定形	褐釉	
52	3.6	3.3	8.0	11.7	不定形	褐釉	
53	3.3	3.0	10.0	14.8	円形	褐釉	タイ産褐釉陶器
54	2.9	2.7	11.0	12.3	円形	褐釉	タイ産褐釉陶器

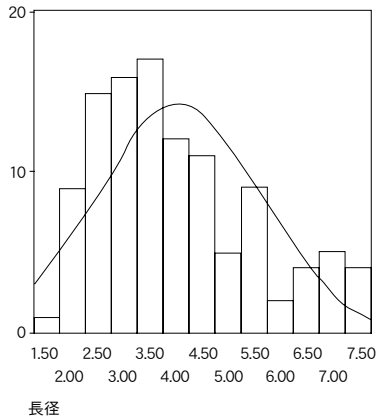
第15表b　円盤状製品計測一覧

通し番号	計測値（cm／g）				形状	材質	備考
	長径	短径	厚さ	重さ			
55	4.0	3.5	11.0	21.9	円形	褐釉	
56	3.8	3.5	10.0	19.2	不定形	褐釉	
57	3.6	3.2	8.0	15.1	不定形	褐釉	
58	3.8	3.2	7.0	12.8	不定形	褐釉	
59	3.7	3.4	6.0	11.1	円形	褐釉	
60	3.2	2.8	9.0	12.1	不定形	褐釉	
61	3.5	3.2	11.0	17.2	不定形	褐釉	
62	3.8	3.0	9.0	16.4	不定形	褐釉	
63	3.5	3.3	9.0	14.8	円形	褐釉	
64	3.5	3.4	6.0	10.5	円形	褐釉	
65	3.5	3.0	9.0	14.3	不定形	褐釉	
66	3.7	2.9	6.0	11.4	不定形	褐釉	
67	3.4	2.7	5.0	7.4	不定形	褐釉	
68	3.5	3.0	8.0	12.0	不定形	褐釉	
69	3.4	3.1	7.0	10.8	不定形	褐釉	
70	3.8	3.2	9.0	14.9	不定形	褐釉	
71	3.1	2.7	8.0	9.4	不定形	褐釉	
72	3.0	2.8	5.0	7.2	不定形	褐釉	
73	3.5	3.2	7.0	11.6	不定形	褐釉	
74	3.3	3.2	10.0	15.3	円形	褐釉	
75	2.8	2.5	8.0	9.1	不定形	褐釉	
76	2.9	2.7	10.0	12.0	不定形	褐釉	
77	3.0	2.5	8.0	8.7	不定形	褐釉	
78	2.9	2.7	9.0	10.6	円形	褐釉	
79	2.9	2.5	7.0	7.9	円形	褐釉	
80	2.9	2.8	5.0	7.5	円形	褐釉	
81	2.9	2.6	6.0	7.6	不定形	褐釉	
82	2.6	2.5	9.0	7.5	不定形	褐釉	
83	2.3	2.2	8.0	5.2	円形	褐釉	

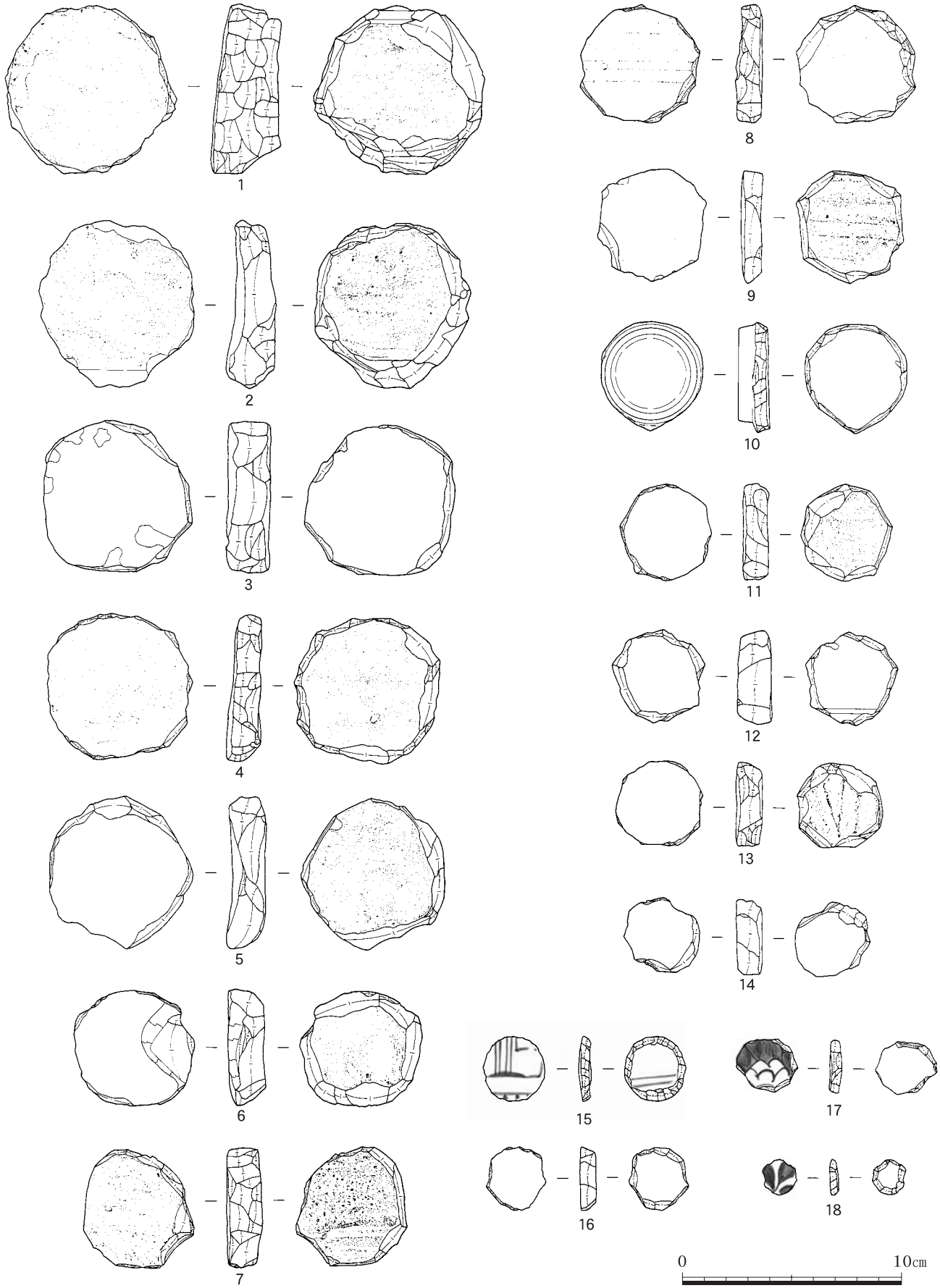
通し番号	計測値（cm／g）				形状	材質	備考
	長径	短径	厚さ	重さ			
84	2.3	2.0	6.0	4.3	不定形	褐釉	
85	2.6	2.3	8.0	6.7	不定形	褐釉	
86	2.5	2.3	9.0	7.0	不定形	褐釉	
87	2.7	2.5	8.0	8.9	不定形	褐釉	
88	2.2	2.0	5.0	3.4	不定形	褐釉	
89	2.0	1.7	5.0	2.4	不定形	褐釉	
90	2.8	2.6	7.0	7.7	不定形	陶器	同図16 沖縄産施釉陶器
91	2.5	2.3	5.0	5.0	不定形	青磁	
92	2.4	2.2	5.0	3.7	不定形	青磁	
93	2.5	2.1	4.0	3.6	不定形	青磁	
94	2.0	1.8	5.0	2.6	不定形	青磁	本土産青磁
95	2.9	2.8	3.0	4.5	不定形	青花	
96	3.0	2.6	6.0	7.2	円形	青花	
97	2.5	2.2	6.0	5.1	不定形	青花	
98	2.7	2.4	4.0	3.5	円形	青花	
99	2.4	2.2	4.0	3.3	円形	青花	
100	2.4	2.3	5.0	4.0	円形	青花	
101	2.5	2.2	3.0	2.5	不定形	青花	
102	2.0	1.8	4.0	2.6	円形	青花	
103	1.9	1.8	3.0	1.7	円形	青花	
104	1.9	1.8	5.0	2.6	円形	赤絵	
105	1.8	1.7	4.0	1.5	円形	白磁	
106	1.8	1.6	5.0	2.0	不定形	青花	
107	1.7	1.5	3.0	1.1	不定形	青花	同図18
108	3.0	2.8	5.0	5.6	円形	青花	同図15
109	2.8	2.4	4.0	4.5	不定形	青花	同図17
110	1.9	1.8	4.0	2.4	不定形	青花	



第16表　長径・重さ・厚さの散布図



第17表　長径のヒストグラム



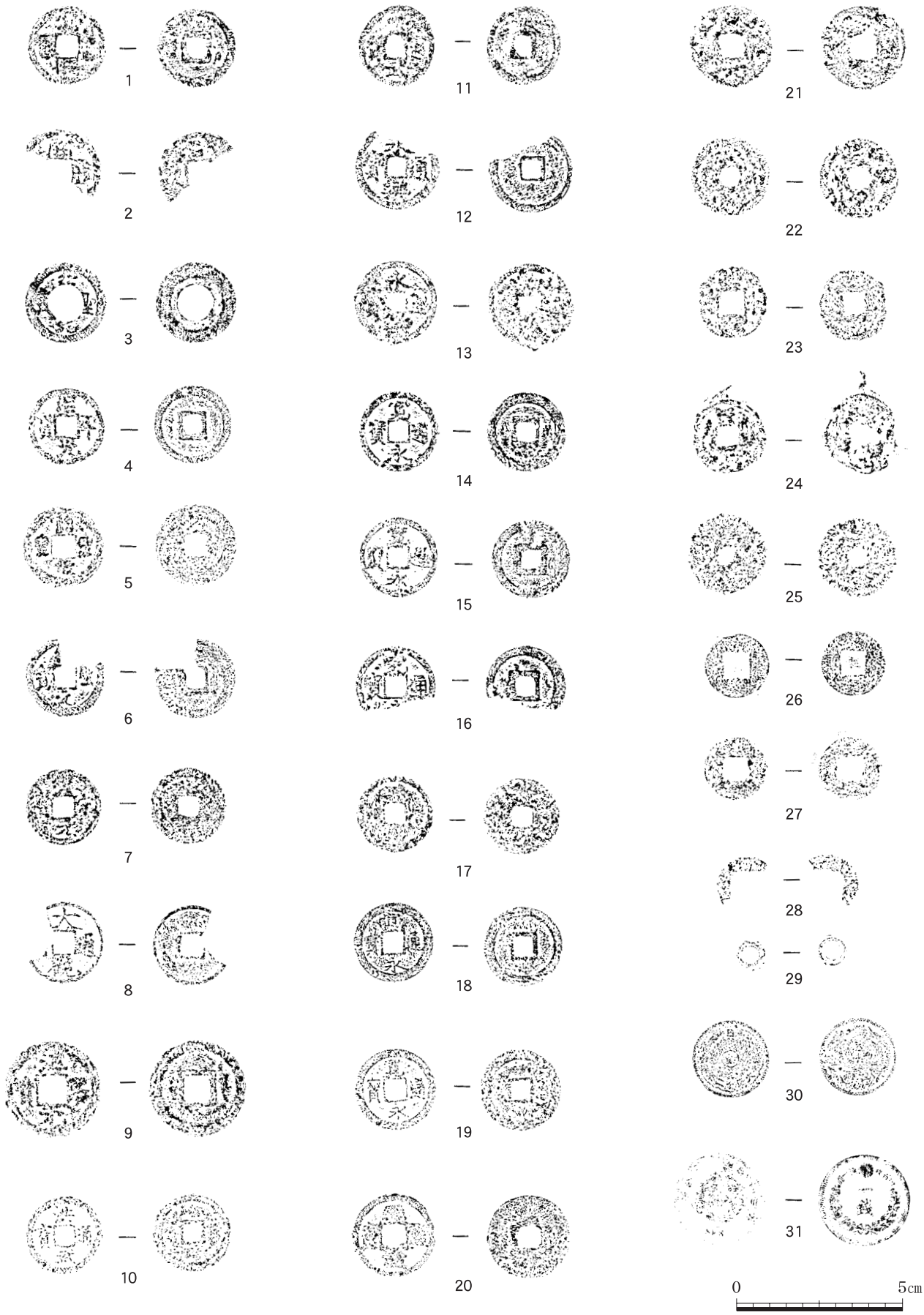
第39図　円盤状製品

第27節　銭貨（第40図）

銭貨は全部で118点出土し、そのうち31点を図化した。銭種は開元通寶を始めとして、天聖元寶、治平元寶、熙寧元寶、天豊通寶、紹聖元寶、聖宋元寶、大観通寶、淳熙元寶、洪武通寶、永樂通寶、寛永通寶、無文銭と続く。最も多いのが寛永通寶であり、古寛永通寶（14～16）と新寛永通寶（17～19）に分類することができる。特徴的な資料としては21、24の複数枚溶着したものがある。24は4枚溶着した状態であり、さらに鋳造跡が明確に残っている。なお、銭文・銭種の同定は、X線透過撮影により行った。

第18表　銭貨観察一覧

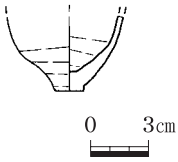
図番号		銭文	銭種	残存状態	背文字	初鋳年	輪外径(mm)縦／横		輪内径(mm)縦／横		穿幅(mm)縦／横		輪厚(mm)	重量(g)	観察事項
第40図・図版31	1	開元通寶	開元通寶	完	－	621	24.1	24.1	19.4	19.9	6.3	5.8	2.2	5.5	孔の作りが粗雑で丸味を帯びる。付着物があり銭文は不鮮明。
	2	開□通□	開元通寶	1／2	－	621	－	－	－	－	－	－	1.7	1.7	面・背ともに付着物があるが、銭文は識別可能。
	3	紹聖元寶	紹聖元寶	完	－	1094	24.5	24.5	19.2	18.5	－	－	1.4	3.1	本来は方穿であるが、円穿に加工されている。背は濶縁。
	4	治平元寶	治平元寶	完	－	1064	23.2	23.3	19.3	19.1	5.3	5.7	1.7	3.3	背の縁及び郭の太さが均一ではない。
	5	紹聖元寶	紹聖元寶	完	－	1094	24.5	24.6	19.2	18.5	6.9	6.6	1.4	3.4	面の郭は非常に細く、背は無孔郭。背は凹凸がほとんど無い。銭文も潰れている。
	6	□聖元寶	紹聖元寶	3／4	－	1094	－	24.4	－	19.1	6.2	5.7	1.7	3.1	錆及び付着物あり。背の凹凸はわずか。
	7	聖宋元寶	聖宋元寶	完	－	1101	23.1	23.3	－	－	5.9	6.0	1.3	2.5	孔は丸味を帯びる部分があり、背は平粗。薄肉。
	8	大観通□	大観通寶	3／4	－	1107	24.3	－	21.6	－	6.3	6.1	1.5	2.2	銭文、輪及び郭は鮮明。
	9	淳熙元寶	淳熙元寶	完	月	1127	29.5	29.4	23.2	23.3	8.0	8.0	1.6	6.3	面・背ともに比較的鮮明。但し、「熙」は不鮮明。
	10	洪武通寶	洪武通寶	完	－	1368	23.5	23.7	18.8	18.8	4.8	5.0	2.0	4.1	輪に緑青色の錆が付着。谷に穴あり。厚肉。
	11	洪武通寶	洪武通寶	完	－	1368	－	－	－	－	－	－	1.9	4.2	全体が歪んでいる。面全体に細かい砂が付着。
	12	□樂通寶	永樂通寶	3／4	－	1408	－	25.2	－	20.6	4.9	5.0	1.8	3.5	背の郭の太さが均一でない。
	13	永□通□	永樂通寶	完	－	1408	－	－	－		－	－	1.4	3.9	面・背ともに金属及び細かい砂の付着が見られる。
	14	寛永通寶	寛永通寶	完	－	1636	24.1	24.1	2.0	19.9	5.5	5.5	1.2	2.5	錆の付着が見られるが、銭文は鮮明。薄肉。
	15	寛永通寶	寛永通寶	完	－	1636	24.0	23.8	19.6	19.8	5.3	5.5	1.6	3.5	輪に欠けている部分、谷に穴がある部分がある。銭文も潰れている。
	16	寛永通寶	寛永通寶	完	－	1636	－	24.6	－	2.0	5.9	5.8	1.3	2.5	孔は僅かに左に歪みがある。
	17	寛□永□	寛永通寶	完	－	1697	23.2	23.0	－	18.4	5.9	6.3	1.2	2.2	錆により銭文は不鮮明。薄肉。
	18	寛永通寶	寛永通寶	完	－	1697	24.0	24.2	18.2	18.5	6.0	5.8	1.2	3.0	銭文は浅彫りで細かい。
	19	寛永通寶	寛永通寶	完	－	1697	24.5	24.6	19.5	19.3	5.9	5.9	1.5	3.2	背全面に付着物あり。銭文は鮮明。
	20	□□元寶	天聖元寶?	完	－	1023	25.2	25.3	20.8	20.8	－	－	1.3	4.1	孔は正方形のものを加工し不定形に作る。銭文は潰れている。背は平ら。
	21	□元□□	－	完	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4.4	銭貨が2枚溶着している。面・背ともに錆、金属及び砂が付着。
	22	元□通寶	元豊通寶?	完	－	1078	24.2	24.3	－	－	－	－	－	4.1	孔は不定形に作る。銭文は不鮮明。
	23	□□元寶	－	3／4	－	－	－	－	－	－	6.5	5.8	－	2.5	輪は削られ、銭文は不鮮明。
	24	－	－	完	－	－	－	－	－	－	－	－	－	7.9	銭貨が4枚溶着して、鋳造跡が残る。銭文は不明。
	25	□寧元寶	熙寧通寶	完	－	1068	－	－	－	－	－	－	－	4.7	丸孔で全面に錆が付着。肉眼では銭文は判別できない。
	26	－	無文銭	完	－	－	－	－	－	－	7.3	7.6	－	0.9	孔は鏨?により切り取られた跡がある。厚さ0.8mm。
	27	－	無文銭	完	－	－	－	－	－	－	7.0	7.6	－	0.9	孔は鏨?により切り取られた跡がある。若干歪がある。厚さ1mm。
	28	－	無文銭	1／2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.5	捻じ曲げられた跡があり、その部分で切れている。
	29	－	輪　銭	完	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.1	2枚溶着した状態で検出。非常に脆い。
	30	五十銭	五十銭銀貨	完		1922	23.6	23.6	－	－	－	－	1.5	5.0	面に鳳凰、背に菊、「大日本」及び「大正十二年」
	31	一銭	一銭銅貨	完		1873	28.0	28.0	－	－	－	－	1.5	6.6	面に龍、「大日本」、「明治十三年」及び「1 SEN」、背に菊、桐、「以百枚換一圓」


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
0
5cm

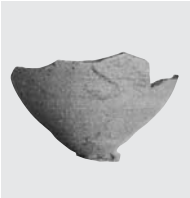
第40図　銭貨

第28節　坩堝（第41図）

図示した資料は、素地が灰白色の素粒子で、白色及び黒色粒が混入する。内外面には轆轤痕が明瞭に残る。器厚は0.25cm、底部厚は1.0cmを計る。内外面には何も溶着していないため、何を溶解したのかは不明である。



第41図　坩堝



図版32　坩堝

＜参考文献＞
沖縄県立埋蔵文化財センター　2001　『首里城跡―下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書―』

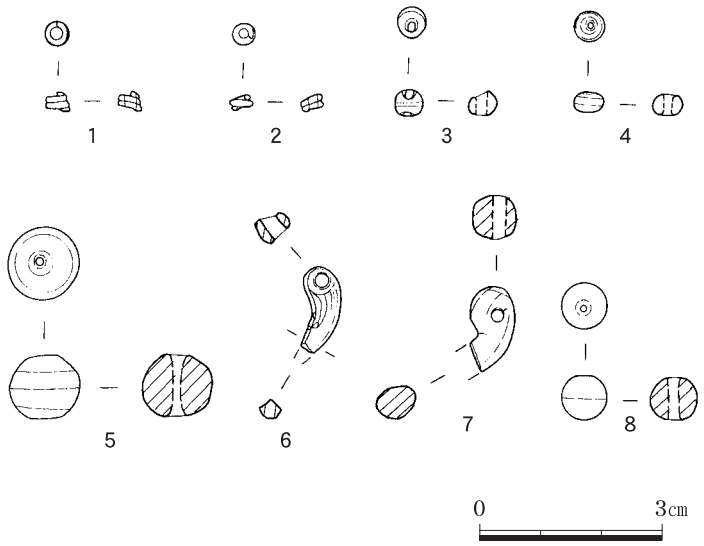
第29節　玉（第42図）

今回の調査において出土した玉のうち8点を図示した。

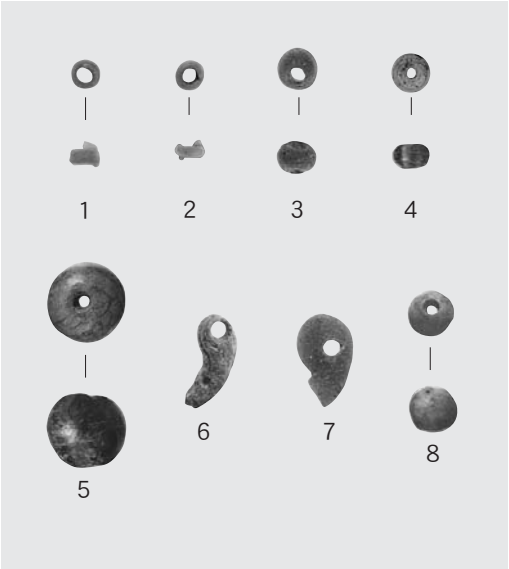
１は0.1cm幅の透明度の低い青竹色のガラス紐を、コイル状に成形する。残存高0.35cm、外径0.4cm、内径0. 2cm。２も1と同様の形状をもつ。透明度の低い白群色、残存高0.3cm、外径0.4cm、内径0. 2cm。3は透明度の高い納戸色のガラスを球状に成形する。高さ0.45cm、外径0.5cm、内径0.2cm。4は透明度の高い若竹色のガラスを球状に成形する。高さ0.4cm、外径0.5cm、内径0.1cm。5は透明度の高い古代紫色のガラスを球状に成形する。高さ1.1cm、外径1.2cm、内径0.2cm。6は透明度の低い新橋色のガラスを勾玉状に成形する。高さ0.45cm、外径0.6cm、内径0.2cm、残存長1.4cm。7は透明度の低い青磁色のガラスを勾玉状に成形する。高さ0.7cm、外径0.9cm、内径0.2cm、残存長1.4cm。8は灰白色と灰色がまだらになった石を球状に研磨する。高さ0.7cm、外径0.8cm、内径0.15cm。

ガラス製の玉のうち、球状のもの（3～5）に関しては、一旦ガラスを厚さ0.1cm～0.2cmの紐状に伸ばした後に細い棒に巻き付け、研磨して仕上げた痕が確認できた。勾玉状のもののうち、6に関しては一旦3～5のように球状のガラス玉を作った後、尾部をつけるようである。7は厚さ0.6cmのガラス紐を細い棒に巻き付け、そのまま尾部を伸ばしたようである。

＜参考・引用文献＞
沖縄県立埋蔵文化財センター　2002　『円覚寺跡―遺構確認調査報告書―』
永田泰弘　2002　『色の手帖』



第42図　玉



図版33　玉

第30節　煙管（第43図１～10）

煙管は今回の調査で得られたもののうち陶製のもの7点、金属製のもの3点を図示した。

1は無釉の雁首で、火皿に沿って８つに面取される。全面に自然釉が掛かっているため、表面は褐色を呈し、素地は暗赤褐色を呈す。２は施釉の雁首で、外面および火皿内部に褐釉を施す。表面は光沢のある褐色を呈し、素地は淡赤橙色を呈す。3も施釉の雁首で、2と同様の素地で作られており、外面および火皿内部に緑釉を施す。表面は光沢のある緑青色を呈し、素地は淡黄色を呈する。4も施釉の雁首で、白色の素地に透明釉を施すが、若干緑がかる。5は施釉の吸口である。素地および釉薬ともに4と同様であるが小口の内径が異なるため、セットになる可能性は低い。6も施釉の吸口で、淡黄色の素地に透明釉を施しているためか、表面は灰オリーブ色を呈する。7は4・5と同様、白色の素地であるが、一部分に透明釉と呉須が付着する。その部分にだけ施釉したとは考えにくく、被熱により釉が剥落したと思われる。8は真鍮製（？）の延煙管で作りは丁寧である。9は雁首部分のみ残存しており、延煙管になるかどうかは不明であるが、形状は8と似ている。赤錆が付着しているため鉄製と思われる。10は銅製（？）の吸口で、銅板を筒状にした際の繋ぎ目が残る。

＜参考文献＞

たばこと塩の博物館　1988　『きせる』
沖縄県立埋蔵文化財センター　2001　『首里城跡―下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書』

第19表　煙管法量一覧

単位：cm

番号	部位	完／破	火皿		小口		吸口		長さ	高さ
			外径	内径	外径	内径	外径	内径		
1	雁首	破	1.80	1.25	1.40	0.70	－	－	4.30	1.65
2	雁首	破	1.80	1.30	1.80	－	－	－	3.35	2.50
3	雁首	破	1.50	1.15	1.20	0.80	－	－	3.40	1.60
4	雁首	完	1.20	1.00	1.20	0.90	－	－	2.75	2.00
5	吸口	完	－	－	1.50	0.95	0.60	0.40	2.95	－
6	吸口	完	－	－	1.40	1.05	0.55	0.30	3.50	－
7	吸口	完	－	－	1.10	0.80	0.70	0.45	3.55	－
8	延煙管	完	0.90	0.70	－	－	0.50	0.35	11.65	1.70
9	雁首	破	0.90	0.75	0.80	0.60	－	－	2.95	1.40
10	吸口	完	－	－	0.80	0.80	0.70	0.35	4.70	－

第31節　簪（第43図11）

簪は完形のもの1点のみ図示した。カブは耳掻き状を呈し、首は五角柱、ムディおよび竿は六角柱で、竿の先端は六角錐状にすぼまる。形状より男性用の副簪（押差）と思われる。カブ長1.7cm、カブ幅0.5cm、首長さ2.1cm、首幅0.2cm、ムディ長1.0cm、ムディ幅0.18cm、竿長10.4cm、竿幅0.2cmで、全長は15.2cm。

＜参考文献＞

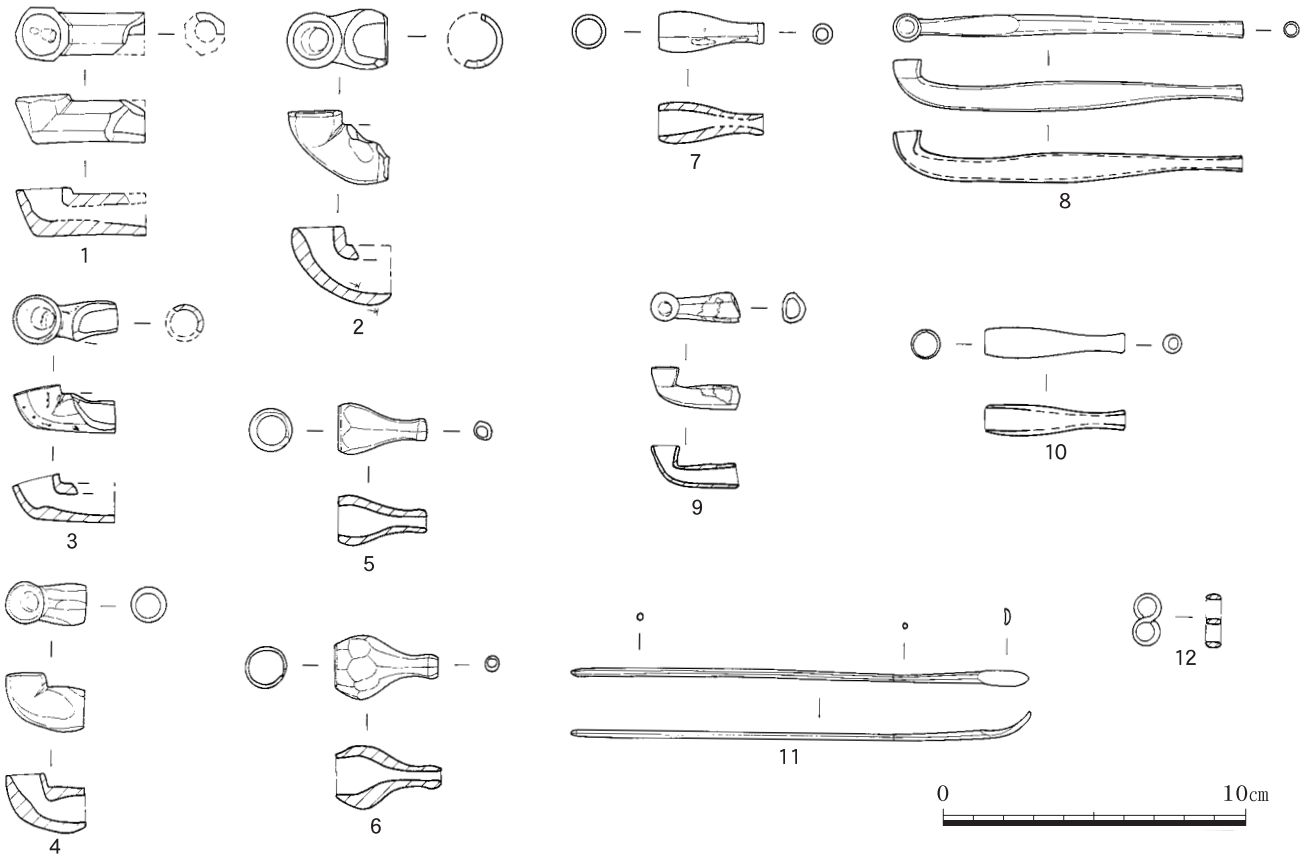
沖縄県立埋蔵文化財センター　2001　『首里城跡―下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書』

第32節　金属製品（第44図12）

金属製品は1点のみ図示した。この責鞐は、笠鞐とセットで甲冑の肩紐などを繋ぎ留めるための金具であり、0.15cm厚の銅板を８の字状に曲げて作られている。孔の径は0.6cmで、表面には金鍍金が施される。

＜参考文献＞

沖縄県立埋蔵文化財センター　2001　『首里城跡―下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書』



第43図　煙管（１～10）　簪（11）　金属製品（12）

第33節　硯（第44図）

硯は総数で88点出土した。詳細は観察表に示した。名称などは『首里城跡－下之御庭跡ほか』に従った。また、石質は頁岩もしくは赤色頁岩がほとんどである。

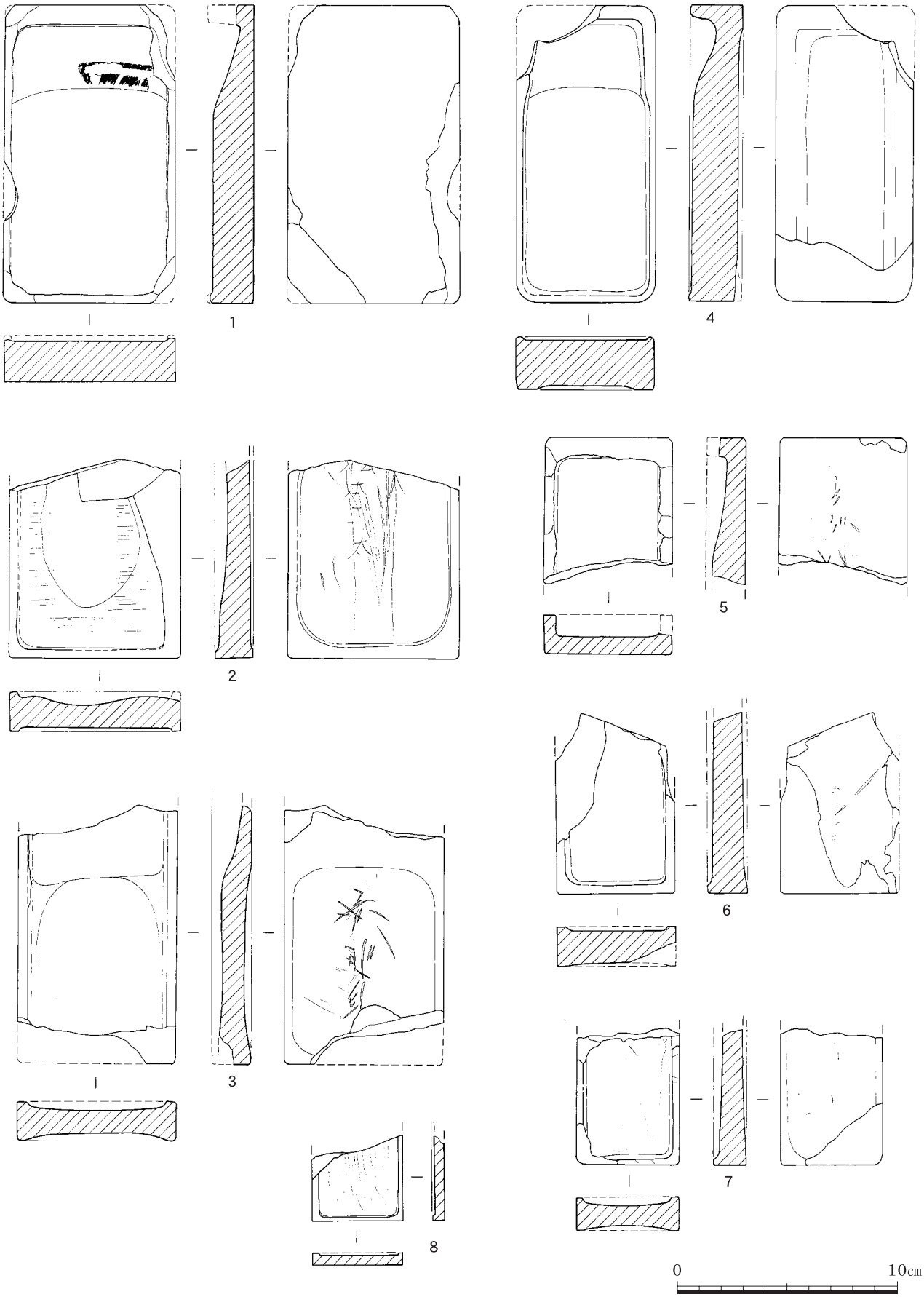
今回出土した硯は破損品がほとんどであり、全形をうかがうことのできる資料が少ないため縦横比は不明である。下之御庭跡ほか出土例から判断すると、１・２は２：１、３・４は３：１になるものと思われる。厚さは２㎝前後でそろっているが、８は0.5㎝と薄型である。さらに、１・５のように墨背が平坦なタイプ、２・３などのように隅丸方形にくぼませるタイプがみられる。また、硯背に文字を刻んだものがあり、２は「松本正（政?）太」、６は「関」の一文字が判読できる。

第20表　硯観察一覧

単位：cm

図番号		長軸	短軸	厚さ	観察事項
第44図・図版34	1	13.5	7.5	2.0	縦横がおよそ2:1。硯唇は全て欠損。硯背は平坦。
	2	－	7.7	1.8	およそ2:1になるものと思われる。硯背を隅丸方形にくぼませ、「松本正(政?)太」の文字と引っ掻き傷が見られる。
	3	－	－	1.8	上下端が欠損するが、縦横の比は3:1になるものと思われる。硯面全体に引っ掻き傷が見られる。硯背を隅丸方形にくぼませ、文字らしい刻みがみられる。
	4	13.5	6.3	2.4	およそ3:1。硯池、硯背の一部が欠損。硯背を隅丸方形にくぼませる。
	5	－	5.9	1.8	硯池のみ。硯唇もほとんど欠損。硯背は平坦で、文字らしい刻みがあるものの判読不明。
	6	－	5.4	1.4	墨堂のみ、硯背も一部欠損。硯背を浅くくぼませ、刻んだ3文字のうち「関」のみが判読できる。
	7	－	4.7	1.8	墨堂のみで、硯背の一部欠損。墨堂は浅くくぼみ、硯背は隅丸方形にくぼませる。
	8	－	4.1	0.5	小型でかなり薄型。墨堂のみで、全面に引っ掻き傷がみられる。

＊厚さは1のみ墨堂の部分を計測した。



第44図　硯

第34節　石製品（第45図１～４・第46図５～７）

１～７で、高欄羽目石などを一括して取り扱う。

３は高欄羽目石の破片である。同様な部材は複数出土しており、形状をうかがうことのできる資料を図示した。石質は砂岩。１・２は欄干の頭部で、形状は似ているが石質が異なるため併せて図示した。石質は、２は安山岩、２は砂岩である。うち、安山岩の産地は九州の可能性がある。４は亀を象った製品で、彫刻を施した高欄羽目石などの一部と考えられる。石質は砂岩である。

５・６は石製容器の破片である。５はシャーレ状の容器で、外周には浅い陰刻の唐草文を巡らせている。口径は8.6㎝。６は皿状の容器で前者と異なり文様はみられない。口径は不明。石質はいずれも蝋石である。これらと同様と思われる石質の製品として、沖縄県立博物館が所蔵する県指定有形文化財（工芸品）「朱漆山水楼閣人物箔絵丸型東道盆」に伴う石製容器がある。

７は石筆である。断面形は円形で、一端は欠損しており本来の長さは不明。残存の長さは8.4㎝、重さは8.4ｇである。石質は蝋石である。

第35節　石器（第46図８・９）

８・９である。これまで首里城跡からは土器や石器などの先史時代遺物があり、首里城跡においても先史遺跡の存在が指摘されている。これらも先史時代に由来する可能性がある。

８は円形をなす敲石である。使用痕はあまり目立たず、一部が破損している。大きさは直径8.3㎝、重さは610ｇ。石質は砂岩。グスク時代に属する石弾の可能性もある。

９は方形をなす凹石である。５面に使用痕が残り、うち２面は深くくぼんでいる。一部に研磨らしき痕跡が残っているがはっきりしない。大きさは縦8.7㎝、横8.3㎝、厚さ5.5㎝、重さは660ｇ。石質は砂岩（熱変成を受けている）。

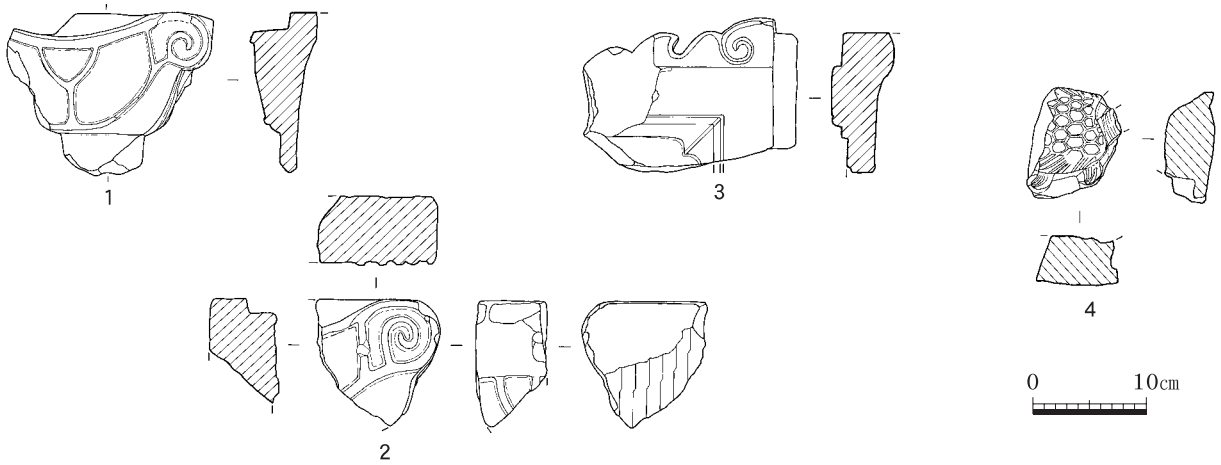
第36節　その他の製品（第46図10～14）

漆喰や塼でつくられた用途不明の製品を一括して取り扱う。

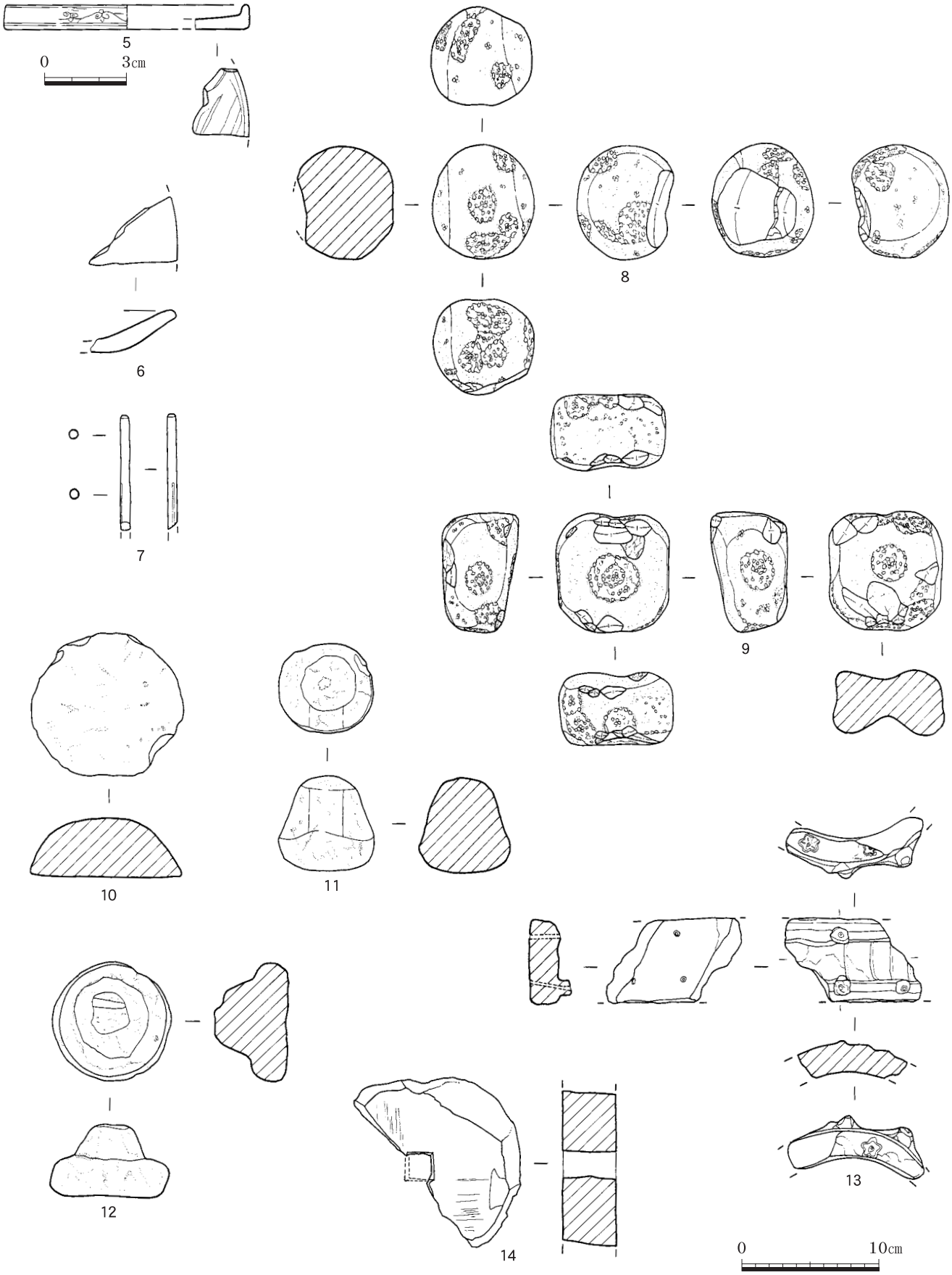
10～14は漆喰製品である。10は上面形は円形、断面形は半月形をなし、直径は11.1㎝、厚さは4.3㎝、重さは430ｇ。11はいびつな台形状で幅は7.0㎝、高さは6.9㎝、重さは288ｇ。12はスタンプ形で直径は8.8㎝、高さは5.4㎝、重さは276ｇ。いずれも何らかの製品の一部と考えられる。

13は凝灰岩を漆喰で埋めた用途不明品である。一面には階段状の彫り込みと金属を付けた痕跡があり、太鼓橋状の製品が考えられる。また、側面には花弁が陽刻されている。何らかの製品の一部と思われる。

14は塼を加工した製品である。本来は扁平な円形をなしていたと思われるが３分の１は欠失している。中央の方孔は塼作成の当初からのものと思われる。厚さは3.9㎝、方孔は一辺が２㎝である。いわゆる円盤状製品とは異なるため、ここに記した。



第45図　石製品１



第46図　石製品２（５～７）　石器（８・９）　その他の製品（10～14）

第37節　骨製品（第47図１～９）

第21表　骨製品法量一覧

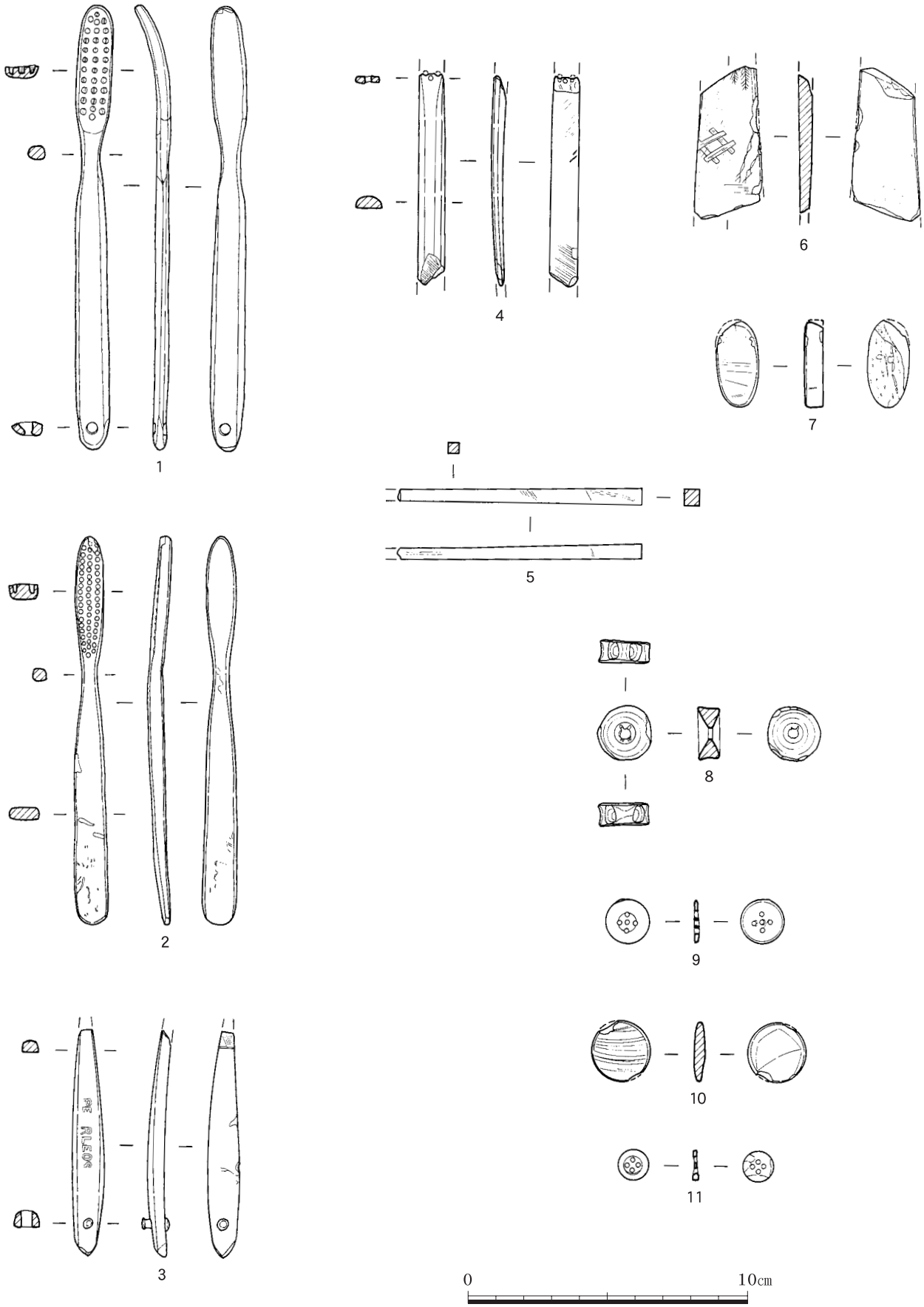
番号	残存長（cm）	最大幅（cm）	重さ（g）
1	16.0	1.2	10.0
2	14.0	1.2	9.0
3	8.2	1.2	4.0
4	7.6	1.0	2.0
5	8.8	0.6	3.4
6	5.5	2.4	6.1
7	3.1	1.6	2.4
8	2.0		0.7
9	1.6		0.5

今回の調査で骨製品はハブラシ状製品４点、ボタン１点、用途不明の製品４点が出土した。以下に個々の遺物の特徴を記述する。

１は完形である。ブラシ部が先端にいくにつれて内彎している。３列の植毛孔がみられ、孔の中上方は縦に仕切りをもつ。頸部はくびれをもつ。柄は直線的で下端に孔をもち、断面紡錘形を呈する。表裏とも平坦に仕上げる。２はブラシ部頂部がやや欠損するがほぼ完形である。ブラシ部を外反させており、１とは逆の形状を呈する。ブラシ部は側面に面をもつ断面方形状を呈する。植毛孔は３列だが１のように仕切りはない。頸部がくびれる。断面は頸部直下の柄部を最も太く成形しており、柄部下端に向かって徐々に薄く仕上げている。３はブラシ部を欠損する。頸部から柄下端部の形態は紡錘状を呈する。断面形は正面を平坦に仕上げる蒲鉾状を呈する。断面も柄中央部が最も太く、両端にいくにしたがって細くなる。下端部に孔を設け棒が抜けないように付けられている。裏面に「ＰＥ　ＲＬＥＯＳ」と彫られている。４はブラシ部と柄下端部を欠損する。植毛孔が３点残っており、頸部がくびれず直線的に成形されている。３と逆で断面は裏面を平坦に仕上げる蒲鉾状を呈する。５は方形の棒状製品である。断面正方形を呈する。端部が残存しており、徐々に細くなっていく、用途は箸か？６は端部を欠損する。平面楕円形、断面方形を呈する。表面と側面が良く磨かれている。用途不明。７は札状の製品である。顔面は薄い蒲鉾状を呈し、弧をもつ方に綾杉文等の文様が彫られているが、構成は判然としない。８は魚の脊椎を利用した製品である。側面は２個並んで左右対称に計４個の孔をもち、中央の孔につながっている。用途はボタンか？９はボタンである。表面中央は一段低くなる。中心に孔をもちそのまわりは左右対称に４ヶ所の孔がある。断面は表面平坦で裏面は弧状を呈する。

第38節　貝製品（第47図10～11）

貝製品は碁石（白）とボタンが出土した。10は碁石（白）と考えられる。薄手に成形されており、断面紡錘形である。良く磨かれている。径2.2㎝。11はボタンである。表面中央は一段低く成形されている。孔は４ヶ所設けられている。やや歪な形である。径11.1㎝。



第47図　骨製品（1～9）　貝製品（10・11）

第39節　貝類

第22表　貝類出土状況（巻貝）

番号	網名	科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
1		ニシキウズガイ科	ニシキウズ	Ⅰ－2－a	3	6	5	9
2			ギンタカハマ	Ⅰ－4－a	0	6	1	6
3			ベニシリダカ	Ⅰ－4－a	1	0	0	1
4			サラサバティ	Ⅰ－4－a	2	35	4	37
5			オキナワイシダタミ	Ⅱ－1－b	0	0	1	1
6		サザエ科	ヤコウガイ	Ⅰ－4－a	2	143	22	145
7			ヤコウガイの蓋	Ⅰ－4－a	410	160	96	570
8			チョウセンサザエ	Ⅰ－3－a	282	81	23	363
9			チョウセンサザエの蓋	Ⅰ－3－a	56	0	4	56
10			ガンギク	Ⅱ－1－b	13	0	7	13
11		アマオブネガイ科	アマオブネガイ	Ⅰ－1－b	1	0	0	1
12		オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ－2－c	5	16	4	21
13			ウミニナカニモリ		4	6	0	10
14			クワノミカニモリ	Ⅰ－1－a	3	2	0	5
15		フトヘナタリ科	マドモチウミニナ	Ⅲ－1－c	0	0	1	1
16			キバウミニナ	Ⅲ－0－c	0	1	0	1
17			センニンガイ	Ⅲ－0－c	0	5	1	5
18		ソデボラ科	オハグロガイ	Ⅱ－2－c	36	2	0	38
19			マガキガイ	Ⅰ－2－c	69	123	1	192
20			スイショウガイ	Ⅱ－2－c	1	0	0	1
21			イボソデガイ	Ⅰ－2－c	1	0	0	1
22			クモガイ	Ⅰ－2－c	2	4	2	6
23		スズメガイ科	キクスズメ		1	0	0	1
24		タカラガイ科	ホシキヌタ	Ⅰ－2－a	1	0	0	1
25			コモンダカラ	Ⅰ－2－a	2	0	0	2
26			ハナビラダカラ	Ⅰ－1－a	6	1	0	7
27			ハナマルユキ	Ⅰ－3－a	3	3	1	6
28			タカラガイ科不明		0	0	1	1
29		フジツガイ科	ホラガイ	Ⅰ－4－a	0	3	1	3
30		アッキガイ科	アカイガレイシ	Ⅰ－3－a	1	0	0	1
31			ツノテツレイシ	Ⅰ－1－a	3	0	0	3
32			シラクモガイ	Ⅰ－3－a	5	1	0	6
33		オニコブシガイ科	コオニコブシ	Ⅰ－3－a	4	1	0	5
34		エゾバイ科	ウスイロバイ	Ⅱ－2－c	1	1	0	2
35			シマベッコウバイ	Ⅱ－1－c	1	0	0	1
36		イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ－2－a	21	10	7	31
37		ツクシガイ科	ハマヅト	Ⅱ－2－c	1	0	0	1
38		イモガイ科	クロザメモドキ	Ⅰ－2－c	1	0	0	1
39			マダライモ	Ⅰ－1－a	4	0	0	4
40			サヤガタイモ	Ⅰ－1－a	0	1	0	1
41			アカシマミナシ	Ⅰ－2－c	1	0	0	1
42			ヤキイモ	Ⅰ－2－c	2	0	0	2
43			サラサミナシ	Ⅰ－2－a	0	0	1	1
44			ヤナギシボリイモ	Ⅰ－2－a	2	0	0	2
45			キヌカツギイモ	Ⅰ－2－a	2	0	0	2
46			イボカバイモ	Ⅰ－2－c	0	1	0	1
47			イボシマイモ	Ⅰ－2－a	2	0	0	2
48		ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	Ⅴ－8	11	1	2	12
49		キセルガイ科	ツヤギセルガイ	Ⅴ－8	0	0	1	1
50		カサマイマイ科	オオカサマイマイ	Ⅴ	1	0	0	1
51		ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	Ⅴ－8	1	0	35	1
合計					968	613	221	1586

第23表　貝類出土状況（二枚貝）

番号	綱名	科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体
					L	R	L	R		
1	二枚貝綱	フネガイ科	エガイ	Ⅰ－1－a	3	1	0	0	0	3
2			リュウキュウサルボウ	Ⅱ－2－c	2	2	0	0	0	2
3			ハイガイ	Ⅰ－1	1	0	0	0	0	1
4		タマキガイ科	ソメワケグリ	Ⅰ－2－c	0	1	0	0	0	1
5		イタヤガイ科	イタヤガイ	Ⅰ－1－c	0	0	0	1	0	1
6		ウミギク科	メンガイ	Ⅰ－2－a	2	0	0	0	0	2
7			カバトゲウミギク	Ⅰ－1－a	1	0	0	0	0	1
8		イタボガキ科	マガキ	Ⅰ－1	1	0	0	0	0	1
9			イタボガキ科不明		1	0	0	0	0	1
10		ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ－2－c	20	19	3	1	0	23
11		キクザルガイ科	キクザルガイ科不明		0	2	0	0	0	2
12		ザルガイ科	リュウキュウザル	Ⅱ－2－c	0	2	0	0	0	2
13			カワラガイ	Ⅱ－2－c	11	6	3	1	0	14
14		シャコガイ科	シャゴウガイ	Ⅰ－2－c	1	0	0	1	0	1
15			ヒメシャコガイ	Ⅰ－2－a	3	1	0	3	0	4
16			ヒレシャコガイ	Ⅰ－2－c	7	7	26	19	5	33
17			シラナミガイ	Ⅰ－2－a	4	5	0	4	0	9
18			シャコガイ科不明		0	0	0	1	4	1
19		チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ－1－c	0	2	0	0	0	2
20			ナミノコマスオ		0	0	0	1	0	1
21		シオサザナミ科	リュウキュウマスオ	Ⅱ－1－c	1	1	1	0	1	2
22		シジミ科	シレナシジミ	Ⅲ－0－c	5	7	5	5	0	12
23		マルスダレガイ科	アラヌノメガイ	Ⅰ－2－c	1	0	0	0	0	1
24			ヌノメガイ	Ⅱ－1－c	2	2	1	0	4	3
25			アラスジケマンガイ	Ⅲ－1－c	194	206	16	15	8	221
26			ホソスジイナミガイ	Ⅱ－1－c	10	14	0	0	0	14
27			ユウカゲハマグリ	Ⅱ－1－c	1	2	0	0	0	2
28			オイノカガミ	Ⅱ－1－c	1	1	0	0	0	1
29			ヒメアサリ	Ⅱ－1－c	1	0	0	0	0	1
30			スダレハマグリ	Ⅱ－1－c	1	0	0	0	0	1
31			チョウセンハマグリ	Ⅱ－1－c	15	24	16	17	10	41
32			オキシジミ	Ⅰ－c	9	2	3	1	1	12
33	ウニ綱	ナガウニ科	パイプウニ	Ⅰ	0	0	0	0	1	1
合計					298	307	74	70	34	417

＜貝の生息地の分類＞

外洋～内湾	水深	底質
Ⅰ：外洋・サンゴ礁域	0：潮間帯上部（Ⅰではノッチ、Ⅲではマングローブ）	a：岩盤
	1：潮間帯中・下部	
Ⅱ：内湾・転石地域	2：亜潮間帯上縁部（Ⅰではイノー）	b：転石
	3：干潮（Ⅰにのみ適用）	
Ⅲ：河口干潟・マングローブ域	4：礁斜面およびその下部	c：岩礫底、砂泥底、砂底
Ⅳ：淡水域	5：止水　6：流水	
Ⅴ：陸域	7：林内　8：林内・林縁部　9：林縁部	

第40節　脊椎動物遺体

金子浩昌

はじめに

本資料は1989年～90年にかけて調査された首里城北殿に隣接する右掖門周辺域から出土したものである。遺構として礎石、石列、石積み、暗渠などが検出されたが、直接遺構に伴うことが観察できた資料はなっかったという。しかし、これら獣魚骨には、後世の混入品もあったかとは思われるが、一方こんにちでは普通にはみない大形のウツボ類、コブダイあるいはジュゴン、そして日本在来の小形のウシ、ウマなどの骨が含まれ、この場所が機能していた頃、あるいはやや後の時代の遺物も含む可能性があると推測される。　首里城内の遺物の在り方を知る資料として貴重な一例となろう。

今回の報告には沖縄県立埋蔵文化財センターの担当であった調査員羽方　誠氏、資料整理に当たられた瑞慶覧尚美氏、玉城照美氏、玉城恵美利氏と協力された補助員の方々に御礼申しあげる。

検出された脊椎動物遺体種名表

脊椎動物門　Phylum VERTEBRATA
- 軟骨魚綱　Class Chondrichthyes
  - メジロザメ目　Order Carcharhiniformes
    - メジロザメ科　Family Carcharhinidae
      - 属・種不明　Gen.et sp.indet.
- 硬骨魚綱　Class Osteichthyes
  - ウナギ目　Order Auguilliformes
    - ウツボ科　Family Muraenidae
      - 属・種不明　Gen.et sp.indet.
  - ダツ目　Order Belonida
    - ダツ科　Family Belonidae
      - 属・種不明　Gen.et sp.indet.
  - スズキ目　Order Perciformes
    - タイ科　Family Sparidae
      - ヘダイ　*Sparus sarb*
    - フエダイ科　Family Lutjanidae
      - キマダラヒメダイ　*Pristipomoides sieboldii*
      - 属・種不明　Gen.et sp.indet.
    - フエフキダイ科　Family Lethrinidae
      - ハマフエフキ　*Lethrinus nebulosus*
      - ヨコシマクロダイ　*Monotaxis grandoculis*
    - ベラ科　Family Labrdae
      - コブダイ　*Semicossyphus reticulatus*
    - ブダイ科　Family Scaridae
      - ナガブダイ　*Scarus rubroviolaceus*
      - イロブダイ　*Bolbometopom bicolor*
      - ナンヨウブダイ　*Scarus gibbus*
      - ブダイ　*Leptoscarus japonieus*
      - 属・種不明　Gen.et sp.indet.
    - ハタ科　Family Serranidae
      - 属・種不明　Gen.et sp.indet.
      - ニザダイ科　Family Acanyhuridae
      - 属・種不明　Gen.et sp.indet.
    - カマス科　Family Sphyraenidae
      - 属・種不明　Gen.et sp.indet.
  - フグ目　Order Tetraodontiformes
    - カワハギ類　Bolistidae gen.et sp.indet.
      - 属・種不明　Gen.et sp.indet.
- 爬虫綱　Class Reptilia
  - カメ目　Order Chelonia
    - ウミガメ科　Family Chelonidac
      - 属・種不明　Gen.et sp.indet.
- 鳥綱　Class Aves
  - キジ目　Order Galliformes
    - キジ科　Family Phasianidae
      - ニワトリ　*Gallus gallus var. domesticus*
- 哺乳綱　Class Mammalia
  - 齧歯目　Order Rodentia
    - ネズミ科　Family Muridae
      - 属・種不明　Gen.et sp.indet.
  - 食肉目　Order Carnivora
    - イヌ科　Family Canidae
      - イヌ　*Canis familiaris*
    - ネコ科　Family Felidae
      - ネコ　*Felis catus*
  - 海牛目　Order Sirennia
    - ジュゴン科　Family Dugongidae
      - ジュゴン　*Dugong dugong*
  - 寄蹄目　Order Perissodactyla
    - ウマ科　Family Equidae
      - ウマ　*Equus caballus*
  - 偶蹄目　Order Artiodactyla
    - イノシシ科　Family Suidae
      - ブタ　*Sus scrofa var. domesticus*
    - シカ科　Family Cervidae
      - シカ　*Cervus nippon keramae*

ウシ科　Family Bovidae
ウシ　*Bos taurus*
ヤギ　*Capura hirucus*

脊椎動物遺体
Ⅰ　魚　類
軟骨魚網
メジロザメ目
椎骨のみが検出されている。椎体20点のうち、椎体径4.0～14.8：5点、20.0～28.0：28点であるが、その間で椎体径のばらつきがあり、同一個体かは不明である。
硬骨魚網
ウツボ科
歯骨全長80.0に達する大形標本である。グスク内からの出土は稀である。
ダツ目
破損した断片的な標本で、個体数も少なかったが、大小の個体が含まれていた。
ハタ科
多くの標本を検出しているが、ここでも大形個体は少なく、中小の個体が主であった。
フエダイ科
大型の主上顎骨片、尾椎骨などが検出されている。ただし数量的には少ない。
キマダラヒメダイ
主上顎骨右１点があったのみである。
ヘダイ
前上顎骨２点、左右各１点、主上顎骨左のみ４点、歯骨右１点。最少４個体はあったのであろう。
前上顎骨長　左22.6　右29.3
主上顎骨長　22.8、23.3、31.0±、32.3
歯骨長　右36.2
比較的大形サイズの骨格であるが、グスクのヘダイとしては普通にみるサイズである。
ヨコシマクロダイ
右歯骨１点がある。全長60.0±に達する。ヨコシマクロダイは成魚60㎝になる。この歯骨も最大級の個体であったろう。これ程大形になる歯骨の出土は稀である。
ハマフエフキ
魚類の主体種で、個体数としてはもっとも多くの標本を検出している。前上顎骨の全長47.2（推定）に達する標本があり、体長は50㎝近かったであろう。ただ、こうした大形標本は少なく、15～25.0前後が多かった。体長は22㎝前後である。この程度であれば今でもみかけるサイズである。
コブダイ（カンダイ）
大、中型の個体の前上顎骨、歯骨、下咽頭骨がある。個数は少ない。
下咽頭骨幅　43.2、48.8、78.5
最小の咽頭骨で体長30㎝前後であるから、最大の咽頭骨では60㎝近い体長になったであろう。この咽頭骨の左側面に金属刃による深い切り込みが多数みることができる。このような切痕を咽頭骨にみることは稀である。おそらく頭部を切り落とす際に、刃物が固い咽頭骨に当たったためと思われるが、それにしてもやや大げさな切り込み様である。別の咽頭骨には同じ傷をみない。なお、前上顎骨、歯骨の検出は咽頭骨の割りには少ないが、同程度のサイズの個体の標本と思われる。
ベラ科の一種
タキベラに近い形態の下咽頭骨２点がある。コブダイの中形とより小さいサイズである。
下咽頭骨幅　23.1、41.1
この種の標本は南島遺跡で出土するが、検出例は少ない。

ブダイ
歯骨、下咽頭骨１点が検出されている。下咽頭骨は小さく別個体のようである。
ナガブダイ
大型の下咽頭骨２点、小形が２点である。
下咽頭骨幅　22.18、19.68、10.98、9.12
20㎜前後に達する下咽頭骨をもつ個体はおそらく体長50㎝の最大形であろう。この咽頭骨５点に対して、前上顎骨、歯骨は多く、歯骨右だけでも13点があった。前上顎骨と歯骨の全長の個数分布をグラフに示したが、16.0前後までが多い。前上顎骨長16.79の体長は30㎝である。この遺跡のブダイの体長は30㎝前後の個体が多かったことになる。この点は先にみたハマフエフキの体長とよく似る。なお、グラフに示したような小形の個体の咽頭骨が殆ど検出されていない。内臓を取り出す際に硬いこの部分を一緒に取ったのではないかと思われる。現在でも調理の際、咽頭骨をはやくはずしている。
イロブダイ
右歯骨２点があった。
ナンヨウブダイ
上咽頭骨右６点、左４点があった。
ニザダイ科
尾柄部に付く特徴的な鱗があった。
カマス科
左歯骨１点があったのみである。
モンガラカワハギ科
第一背鰭骨４点が出土している。形態から３種はあるのではないかと思われる。標本３点は体長16㎝位であるが、１点は棘全長が90㎜になる大形標本であった。体長60㎝になり、この種の個体としては最大級になろう。

Ⅱ　爬虫類
ウミガメ科
肋骨板が７点と脛骨左１点があった。

Ⅲ　鳥　類
ニワトリ
頭骨は全く検出されていない。椎骨も非常に少ない。解体が別の場所で行われているのであろう。
肩甲骨、烏口骨、鎖骨：検出は少なく、解体の際に破壊されることが多かったと思われる。サイズは他の四肢骨とほぼ一致する。
上腕骨：標本としては最も多く残されている。ただし完存する標本は１点、骨体部分を残す標本が最も多い。これは解体の際に両端が破損しているのであろう。
上腕骨全長64.7、近位骨端幅17.7、骨体最小径6.3
上腕骨遠位骨端幅　右19.6、21.1（最大値）
橈骨、尺骨、手根中手骨：いずれも少ない。特に手根中手骨は３点のみであった。
大腿骨：両骨端が壊された状態で、骨体は比較的よく残されていた。
脛骨：近位骨端は残されていなかった。解体時この部分がよほど強く叩かれたのであろう。骨体から遠位骨端まで残されていた標本がある。
遠位骨端幅　右13.2、左8.6±、12.3、12.6、中形から中大のサイズである。
足根中足骨：骨体中央で折れたり、両端を破損したりしている。
全長　左66.39、82.7±

Ⅳ　哺乳類
ネズミ科

おそらく混入標本であろう。脛骨左１点があったのみである。

イ　ヌ

下顎骨と四肢骨片を多く出土している。

下顎骨：

①右（$M_{1\sim3}$）を残す。

	P_4 ～M_1	M_1	M_1～M_2
骨体高	19.30	20.31	20.55
骨体厚		・・・	

	P_4	M_1	M_2
歯冠長	10.3	19.0±	7.7
歯冠幅	5.3	－（割れる）	5.5
咬筋窩深	7.0		

②右骨体のみ残す。

	P_4 ～M_1	M_1	M_1～M_2
骨体高	13.8	16.0	15.1
骨体厚		8.2	
咬筋窩深	3.0		

③左下顎骨片、破損著しい破片。

この顎骨の下顎枝に解体切痕と思われる切り傷がみられる。

④左下顎骨片、僅かに枝部の一部を残すのみの小片。この下顎枝の近位部分に③例と同じ切痕がみられる。

⑤右下顎骨片、（ｄｍ２、ｄｍ４）、M_1は未萌出と思われる。乳臼歯を残す標本の出土は沖縄では珍しい。生後３～４ヶ月と推定される。

下顎骨例では小形犬の大小２形があり、①例は推定全長122.0とすれば大きい方であるが、骨体高はやや低く、きゃしゃである。さらに、②、③は小さい方で、骨体もきゃしゃである。

このことは四肢骨についてもいえる。

四肢骨：破損標本のみであったが、発掘時の破損と思われるのもあり、埋没時の保存状態を確認することはできなかった。

上腕骨　骨体最小幅　左8.1、？10.8　右11.7

橈骨　　近位骨端幅　左16.2

寛骨　　腸骨体幅　右16.16

脛骨　　骨体最小径　右12.2　左10.3、11.1　遠位骨端幅19.4

踵骨　　全長左38.8　右41.5

四肢骨も小形犬の範囲をでるものではないが、全長などの計測できた資料が少ないことや標本の破損のために不明な点が残る。小形犬に混じって、脛骨遠位骨端幅19.4例、踵骨２例のようにやや大きい個体があった。

ネコ

寛骨右１点と踵骨左１点があったのみである。

ジュゴン

頭骨を主としたやや多くの遺骸の検出があり、しかもそれぞれの部位は別個体と推定される標本もあり、個体数が予測されることになった。

脛椎：椎弓部が出土。新しい破損ヶ所もあるが、解体時に割っているのであろう。表裏面に金属刃の切痕が付く。前関節突起幅46.0±

頭骨：

①右前頭骨１点はやや小さい個体であるが、骨に若年齢的な特徴はみられない。現長85.0、この部分は成長した♂では100.0前後になる。

②右頬骨突起１点の現長75.30、これもやや小さい個体で、成長した雄では124.0前後になる。この頬骨突起と既述の前頭骨を比較すると、頬骨突起の個体の方が大きいので、別個体である。

③左切歯骨部分１点。破損した標本であるが、これは解体と切歯の取り出しのために歯槽部分を大きく壊し

ているからである。その破損口と骨表面の切痕がみられる。
④下顎骨片、近心部と遠心部の２点がある。この２点はサイズがかなり異なる別個体である。両標本とも骨体部中央で割れているのは解体時に割ったものと思われるが、下顎骨体の中央付近はくびれて幅狭いので、その部分を打ち割ったのであろう。近心部は成獣♂と比較してやや小さく、♀の可能性があり、遠心部－下顎枝部分は大きく成獣♂と思われる。
四肢骨：右肩甲骨片１点がある。遠位骨端で、骨端の化骨はない。頸部で割っている。若く、小さい個体である。頸部で割っているのは解体時の加工と思われる。この部分にも古い削り痕がみられる。

ウ　マ

歯：９点があった。骨格はウシなどより少なかったのに、歯は多かった。ウマの歯は、保存がよいために歯だけは多くなるのかも知れない。
上腕骨：左右各２点が出土している。２点とも骨体部を大破しているが、完存していたものらしい。

	上腕骨１	上腕骨２
骨体最小径	31.2	26.3
遠位骨端幅ＢＴ	69.3	67.6
遠位骨端幅Ｂｄ	75.3	70.4

日本在来のウマの小形系・トカラ馬と中小の御崎馬の中間の大きさのようである。
脛骨：近位骨端のはずれた若い個体であるが、良好な標本１点がある。

全長（推定）
骨体最小径　36.5
遠位骨端幅　65.7

若い個体であるが、小さく、トカラ馬級のサイズである。
末節骨：小さい、トカラ馬級のサイズである。

全長　52.62

ブ　タ

椎骨：椎骨の保存は少ない。環椎３点、軸椎１点、胸椎４点といった状態である。一般に多くないが、四肢骨などに比べて格段に少ない。
頭骨：頭骨も少なく、頭頂骨１点があったのみである。若い個体であるが大型であった。
顎骨：多くは残されていなかった。歯牙萌出は、上顎骨例で、M_2の未萌出段階、下顎骨でも同じ段階であった。下顎骨近心端の下顎角40度である。

下顎骨　左　ｄｍ４歯冠長14.8同幅6.7、M_1歯冠長14.5同幅8.9（M_2未萌出）
下顎犬歯　右♂　幅15.4

肩甲骨：左右各４点、四肢骨のなかでは少ない。近位骨端はほとんど壊れていたが、遠位骨端を比較てきよく残していた。肩甲骨頸部幅　右14.3、18.9、20.7±、29.9
上腕骨：左12点、右９点でやや多い。近位骨端は骨端骨がはずれ、遠位骨端も骨端骨の骨化例は左右それぞれ２点前後（不明標本がある）。

遠位骨端幅Ｂｄ　左29.7、39.7（滑車上孔閉鎖）、右28.4±、34.4、42.8（滑車上孔閉鎖）
遠位骨端が40前後の上腕骨では滑車上孔は閉鎖例がみられる（開口例もある）。こうした大形標本には近現代の混入品のあることが予測される。
骨体最小幅　左10.6、12.2、12.5、13.7、14.4、17.7、18.2、20.3

17.0以上が大形になることが看取される。
橈骨：左４点、右６点、左橈骨で近位骨端を残す例２点があり、他は近、遠位骨端を欠損する。おそらく遠位骨端の化骨はなかったのではないかと思われる。
尺骨：左３点、右９点。尺骨も近遠位骨端を大きく欠損する。
肘突起深ＤＰＡ34.1を１例計測したのみである。
中手骨：保存率は低いが、完存標本もしくはそれに近い標本は３～４点残されていた。
寛骨：左２点、右４点、保存率は低い。大腿骨を外す際に寛骨の割られることが多いのではないかと考えられる。寛骨臼で破損するのは、この位置で割られているのであろう。

腸骨体幅　15.9、17.1
大腿骨：左８点、右８点が残され、上腕骨にやや近づいた数になっている。しかし、骨の保存は悪く、骨体を残すのが大部分であった。遠位骨端では骨端骨のみ左２点あった。
骨体最小径　左15.3　右12.5、12.7、19.2
遠位骨端幅　左38.7
脛骨：左８点、右11点が残されていたが、やはり保存状況は悪く、骨体部分を残すのみであった。また、骨端の化骨化の状況は遠位骨端が末骨化であることを確認した例３点があったのみである。ただ骨体の破損が、骨髄の摘出などと関係があることを確認できる標本は少ない。
骨体最小径　左　10.9、12.3、13.1、　17.3、　20.4、20.8
右 8.9、　13.5、14.6、15.4、15.5、16.3、16.3、　18.6
腓骨：遠位骨端がはずれるが、骨体が保存される標本１点があった。全長140±。
距骨：左２点、右２点。少なかった。一部が残されているのみであった。
全長　左　37.6、39.3
右33.1、　40.1
踵骨：左４点、右１点。外形はほぼ完存される状態ではあったが、計測できる標本はない。
ケラマジカ
３点があった。
環椎：１点。解体の切痕がみられた。幅65.19
鹿角：１点。切断された小片であった。
上腕骨：１点。右骨体～遠位骨端、滑車幅39.0、遠位骨端幅39.2、骨体を大きく打ち割っている標本であった。骨髄の摘出が目的であったと思われる。
ウ　シ
頭骨：骨格で検出できたのは殆どなかった。
上顎骨：Ｍ３は咬耗の弱い臼歯。
下顎骨：臼歯６点、Ｍ３で３～４歳前後左２点、Ｍ１，２はそれに対応する歯と思われる。
肩甲骨：右１点、破片５点
上腕骨：右２点、遠位部で骨端欠１点、破損した端にかじり痕がつくので、廃棄後しばらく露呈していたと思われる。骨体最小径29.0。他に同部分の破損標本。
橈骨：左２点、右２点があるが、計測に耐える標本はない。
橈骨遠位骨端幅78.1（遊離骨端骨）、小形
尺骨：左２点、右１点。左２点の標本は近、遠位骨端を欠くが保存は良好だった。めずらしい。
肘頭最小径48.8、54.0　中形
脛骨：左１点。骨体中央を打ち割っていた。
中足骨：右　骨体を中央で打ち割っていた。遠位骨端幅53.0　中形
基節骨：全長59.8、60.47　中形
中節骨：全長40.6　中形
ヤ　ギ
①四肢骨が一部であるけれども一括出土していた。しかし破損が著しく、本来の骨格の保存状況を確認することが難しかった。
上腕骨：骨体部片
橈骨：左近位骨端幅21.0、22.5
尺骨：肘突起～骨体後縁17.8
中手骨：左近位骨端幅18.8
大腿骨：左骨体最小径15.3
中足骨：右近位骨端幅17.0
それぞれの骨格のサイズからみて、同個体と推定される骨で、解体した骨が集められて一括廃棄されたものかと思われる。

②遊離臼歯、四肢骨があり、サイズはまちまちで、別個体が３個体はあったと推定される。
上顎臼歯M^2、左下顎骨（M_3）、右M_3
上腕骨：骨体右１
橈骨：近位骨端～骨体左２点（骨体最小径12.3、14.3）、右１点（骨体最小径18.0）があり、別個体。
中手骨：近位骨端左１
寛骨：左１
大腿骨：骨体左１
中足骨：近位骨端～骨体左

Ⅳ　要約

今回検出された獣魚類の遺骸は、種類、全体量において必ずしも多いものではなかったが、当時の食料事情の一端あるいは動物との関わりをみることができたと思われる。特に首里城内のこうした資料は、他の諸遺物に比べて少なく、その性格を知る機会は多くはないと思われる。他のグスク関係資料との比較の上でも、基準になる資料といえよう。

魚類：多くの魚骨を検出し、種類も多い。それらのなかには現段階では確認できなかった種類２乃至３種が含まれる。ただそれらは歯骨などで見る限り個体数も各１個体程度であったと思う。それと土壌の水洗いによって椎骨を多数検出している。これらのなかには顎骨などでは確認されない中、小型の魚類が含まれると思われるが、こちらについての分類は、時間的余裕がなくてできなかった。こうした不明種を除くと、今回の調査で知られたのは、他の遺跡でも知られることの多い種類群であった。ハマフエフキが最も多く、ハタ類、ブダイ類、コブダイ、フエダイ類の順に減少する。この序列は沖縄近海サンゴ礁内海域での主要種の生息状況を反映するものであろう。

特徴としては主体となったハマフエフキが、小さな個体を主としていたことが注目された。一般のグスク関係の調査で出土する標本は、体長40～50㎝サイズが多かったからである。しかし、今回のように土壌の水洗い作業をすると、こうした小形のものも検出されるいうことが判明した。扱い方にも、調理法にも違いがでてくるであろう。ただし、広い城郭内であるから地点による違いがあるかも知れないので、丁寧な調査が必要であろう。なお、ブダイ類、ハタ類についても小型標本が多かった。細かい同定ができなかったが、多数検出された中小～小形の椎骨はこうした魚のものであったと思われる。そうした小形の魚と共に、大形のブダイ類、フエダイ類モンガラカワハギ類などが少数検出されている。これらは特別な行事のための饗応の魚であったことは推測に難くない。

なお、検出魚骨中には多数の椎骨があった。総数1801点の椎骨中1746点が一括で出土している。廃棄場所があったのであろう。この椎骨中には体調20㎝前後のアジ類、その他の未同定種の標本も含まれ、こうした魚も食用になっていることが判明している。

鳥類：鳥類はニワトリに限られた。食用だったと思われる。本土の近世遺跡ではガン、カモ類の出土がまだ多い。こうした渡り鳥の少ない南島では渡り鳥の捕獲機会も少なく、まして海鳥などを獲ることは技術的にも、味覚上からも行うことがなかったのである。

獣類：獣類ではブタが多かった。ブタ肉食の習慣が根付いていたといえる。頭部骨格は少なく、頭が持ち込まれることが殆どなかった。指骨の検出は少なく、料理に使うのは中手、中足骨位までであった。生後半年から1.5歳以内の個体であり、他に数ヶ月程度の個体も少数あったようである。飼育種であれば当然この程度までの生育を待ったはずである。小型のブタであった。大陸からの輸入されたブタが基になっているのであろう。　ウシはブタと比べるとずっと少なくなるが、上下の臼歯があるところをみると、頭も運び込まれ、四肢骨は割られて、料理の味出しに使われた。骨をかじった痕があるのは、イヌの歯痕であろう。

ウマはウシより少なかったが、ほぼ完存するかたちで左右別個体の上腕骨があった。２歳前後である。別に検出されている臼歯からでは10～15歳位の個体があったことが推定されている。出土したウマの遺骸が、食用に供されたものとすれば、年齢もいろいろな個体が使われたのであろう。

ウシもウマも日本の在来家畜のなかで、中小から小形系といわれるサイズの個体である。ウシもウマも石器時代の沖縄には生息しないので、その後に大陸からもたらされた動物であり、古代あるいは中、近世にわたって飼育された。それは明治以降に欧米の外来系の家畜が入るまでの日本の在来家畜の基幹となったので

ある。

ヤギの遺骸も検出されている。ヤギをいつ頃から食べるようになったのか、なお不明な点があるが、こうした資料の解釈が問題である。

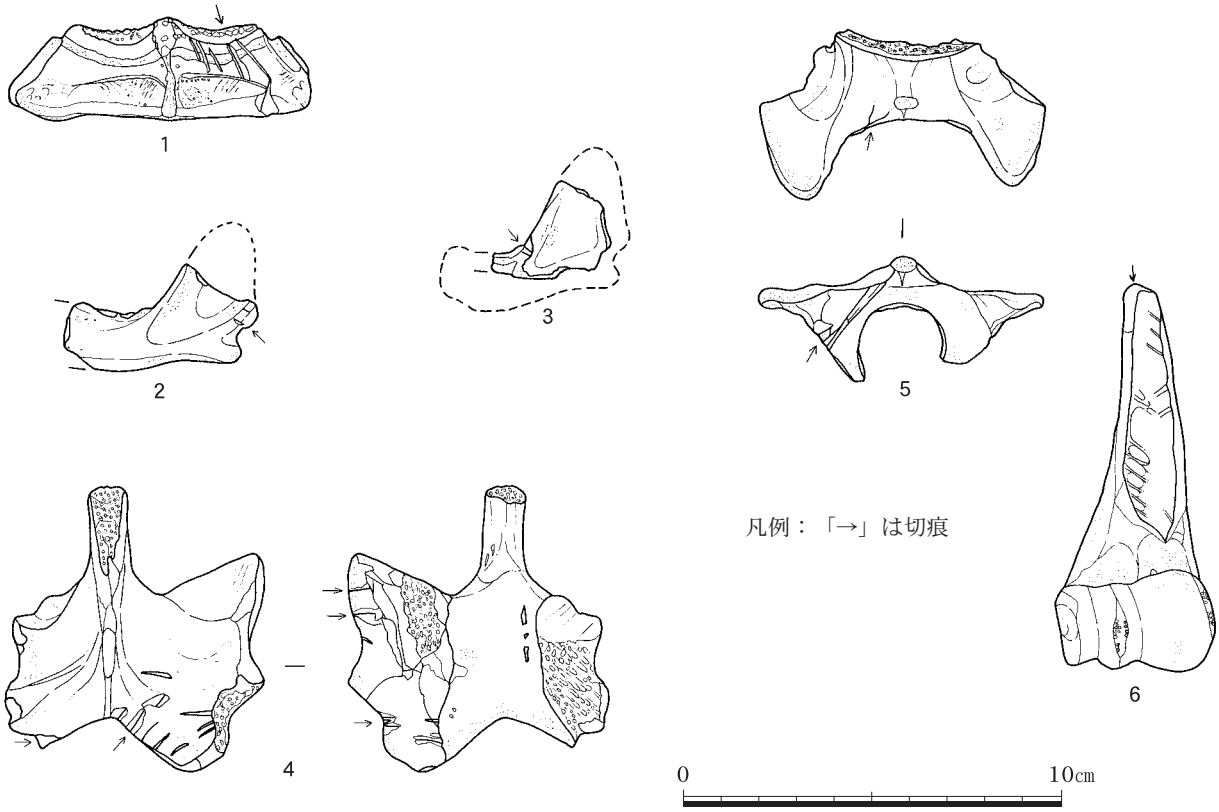
ケラマジカの遺骸が少数であるが出土している。沖縄本島には生息しないので、搬入されたことになる。出土例はこれまでに本島各地で報告されているが、角片であることが多い。シカ肉が饗応のために使われたというのであるが、それにしては遺骸は少ない。しかし今回のように切痕のある環椎の出土などは、遺骸に解体に行われていることを示すのであろう。これも使節の饗応に使われたというのである。

グスク期になって、イヌはどんな目的で飼育されていたのであろうか。出土するイヌの遺骸の保存は一般によくない。歯の遊離した下顎骨、破損した四肢骨が、他の食料残滓と一緒に出土することは、イヌを食べた可能性も考えられる。下顎骨に解体切痕の付く標本もあった。この程度の検出例は他にもあるが、これによって南島地域でイヌを食べる風習が一般的だったとはとてもいえないだろう。

ジュゴンは沖縄海域で捕獲できたほとんど唯一の海棲獣である。クジラ、イルカ類の骨もみないわけでもないが稀である。ジュゴンがサンゴ礁縁に生息し、時に礁内に進入することがあり、捕獲する機会ができたのである。しかし、この動物を特に狙って追うという猟は無かったのではないか。遺跡でのまとまった出土例は、沖縄石器時代後期、平敷屋トウバル遺跡のような特殊な立地条件下の例以外にすぎない。長い年月の間には、この動物に対する神聖視する信仰も生まれたようである。それでもグスク遺跡での検出例は少数づつ知られる。肉は珍重され、骨は骨器の素材になった。今回出土した切歯骨に破損跡がみられたが、この破損は切歯を抜き取るためである。♂の大きな切歯は牙製品の素材になったはずである。右掖門遺跡でのジュゴン遺骸の出土はグスク出土例のなかでも数多い例である。首里城という特殊性があったと考えられる。

＜参考文献＞

茂原信生、小野寺　覚、田柄貝塚出土犬骨の形態的特徴について、宮城県文化財調査報告書　第111集「田柄貝塚」。
茂原信生、松井　章、原の辻遺跡出土の動物遺体、長崎県文化財調査報告書　第124集「原の辻遺跡」1955



第48図　切痕をもつ骨　サカナ　**ベラ科コブダイ**　1.下咽頭骨　イヌ　2・3.左下顎骨
ジュゴン　4.棘突起　シカ　5.環椎　6.右上腕骨

第24表　魚類出土一覧

種目			部位	右	左	個体数
メジロザメ目	メジロザメ科	メジロザメ科の一種	脊椎骨	28		2
ウナギ目	ウツボ科	ウツボ科の一種	歯骨	1		1
ダツ目	ダツ科	ダツ科の一種	前上顎骨		1	3
			歯骨		3	
スズキ目	ハタ科	ハタ科の一種	前上顎骨A	3	4	22
			前上顎骨B	1	6	
			歯骨A	16	8	
			鋤骨	1		
			副楔骨	4		
			主上顎骨	6	8①	
			方骨	8	7	
			舌顎	8	6	
			擬鎖骨	3	7	
			主鰓蓋骨	1	2	
			角骨	6	7	
	フエダイ科	キメダラヒメダイ	主上顎骨	1		1
		フエダイ科の一種	前上顎骨		1	10
			歯骨	2		
			前鰓蓋骨	10	5	
	タイ科	ヘダイ	前上顎骨	1	1	4
			歯骨	1		
			主上顎骨		4	
	フエフキダイ科	ヨコシマクロダイ	歯骨	1		1
		ハマフエフキ	前上顎骨	12	12	15
			歯骨	15	7	
			主上顎骨	5	10	
			口蓋	4	9	
			方骨A	8	3	
			方骨B	3		
			舌顎A		2	
			舌顎B	5	11	
			前鰓蓋骨	7	2	
			主鰓蓋骨	4	8	
			角骨	7	6	
	ベラ科	コブダイ	前上顎骨	3	5	5
			歯骨		2	
			下咽頭骨	1②		
		A	前上顎骨	1	1	3
			歯骨	2	3	
		B	上咽頭骨	1		1
		C	下咽頭骨	②		2
	ブダイ科	ブダイ	歯骨		1	1
			下咽頭骨	1		
		ナガブダイ	下咽頭骨	4		4
		イロブダイ	歯骨	2		2
		ナンヨウブダイ	上咽頭骨	6	4	6
		ブダイ科の一種	前上顎骨	18	18	24
			歯骨	21	24	
			主上顎骨	2	2	
			口蓋	2		
			方骨	6	8	
			角骨	5	1	
	ニザダイ科	ニザダイ科の一種	鱗	2		1
	カマス科	カマス科の一種	歯骨		1	1
フグ目	カワハギ類	カワハギ類の一種	背鰭棘	4		1
科・種不明			歯骨	1	2	2
			鋤骨	1		
			主上顎骨	1		
			背鰭棘	86		
			臀鰭血管棘	22		
			第２臀鰭棘	8		
			脊椎骨	1841		
合計				2526		112

注　○：切痕

第26表　ニワトリ出土一覧

部位		右／左	個数
烏口骨		右	5
		左	6
下顎骨		不明	1
胸骨			1
椎体	胸椎(棘突起が融合したもの)		1
肩甲骨	近位部～遠位端	左	1
	遠位部	右	1
	遠位端	左	3
上腕骨	完存	左	1
	近位端	左	2
	近位部～遠位部	右	1
	骨体	右	2
		左	4
	骨体～遠位端	左	1
	遠位端	右	3
		左	1
	遠位骨端はずれ	右	1
橈骨	近位骨端はずれ	左	1
	近位端	右	1
	骨体	不明	2
	遠位端	右	2
		左	1
尺骨	近位端	左	1
	近位部	左	1
	近位部～遠位端	右	1
	骨体	右	4
		左	2
	遠位端	右	2
		左	1
	遠位骨端はずれ	右	1
中手骨		右	2
		左	1
大腿骨	近位骨端はずれ	左	1
	近位端	右	1
		左	1
	近位部～遠位部	左	4
	骨体	右	2
		左	5
		不明	1
	遠位部	左	1
	遠位端	右	4
		左	4
	遠位骨端はずれ	右	1①
		左	①
脛骨	近位端	右	1
		左	1
	近位部	左	2
	近位部～遠位部	右	1
		左	1
	骨体	右	3
		左	7
		不明	1
	骨体～遠位部	右	1
	骨体～遠位端	左	1
	遠位部	右	3
		左	6
	遠位端	右	2
中足骨	完存♀	左	1
	近位端	右	1
		左	1
	近位部	右	1
	近位部～遠位部♀	右	1
	近位部～遠位骨端はずれ♀	左	1
	骨体～遠位部♀	左	1
	遠位端♂	左	1
	遠位端	右	1
破片			21

注　○：切痕

第25表　ウミガメ出土一覧

部位	右／左	個数
肋骨板	不明	7
脛骨	左	1
破片		3

第27表　ネズミ出土一覧

部位		右／左	個数
脛骨	完存	左	1

第29表　ネコ出土一覧

部位		右／左	個数
寛骨	完存	右	1
踵骨		左	1

第28表　イヌ出土一覧

部位		右／左	個数
下顎骨	dm2,4	左	1
	P4 M1,2	右	1
	切痕	左	2
		右	1
肋骨		右	1
		不明	4
上腕骨	骨体	右	1
		左	1
	遠位部	右	1
橈骨	近位骨端はずれ	左	1
	近位端	左	1
	骨体	右	1
寛骨	腸骨部	右	1
大腿骨	骨体	不明	1
	遠位端（破片）	左	1
脛骨	骨体	右	1
		左	1
	骨体～遠位部	左	1
	遠位端	右	1
踵骨		右	1
		左	1
中手・中足骨		不明	1
中足骨	Ⅳ	左	1
基節骨		不明	1

第30表　ジュゴン出土一覧

部位		右／左	個数
頭骨	前頭骨	右	1
	側頭骨頬骨突起	右	1
上顎骨	切歯骨（切痕）	右	1
下顎骨		左	2
椎体	棘突起（切痕）		2
肩甲骨	（切痕）	右	1
破片			7

第31表　ウマ出土一覧

部位		右／左	個数
上顎骨	M1	左	1
下顎骨	P2	左	1
	P3		1
	P3,4		1
	M1,2		1
上下顎不明	切歯Ⅰ	不明	1
上腕骨	近位骨端はずれ～遠位端（切痕）	右	1
	近位端～遠位端（切痕）	左	1
寛骨	破片		1
脛骨	近位骨端はずれ～遠位端	右	1
末節骨		不明	1

第32表　ブタ出土一覧

部位		右／左	個数
頭骨	頭頂骨	右	1
	側頭骨頬骨突起	右	①
	後頭骨頸静脈突起	右	1
		左	1
	項稜	左	1
	鼻骨	左	2
上顎骨	I1	左	2
	dm2,3,4M1,＜2＞	左	1
	P2	左	1
	P3	左	1
	P3,4	左	1
	後頭骨底部	不明	1
	切歯骨	左	1
下顎骨	I1	右	5
		左	2
	I2	右	1
		左	1
	犬歯♂	右	1
		左	1
	犬歯♀	左	1
	P3	右	1
	dm2,3,4M1,＜2＞	左	1
	連合部	左右	1
	下顎角	左	1
	舌骨		1
		左	3
		不明	(9)
椎体	頸椎		1
	環椎		4
	胸椎		4
	腰椎		1
	椎窩		1
	棘突起		5
	破片		3
肋骨	第1	右	1
		右	26②
		左	13②
		不明	4Ⅰ(50)(②)
肩甲骨	骨体～遠位骨端はずれ	右	2
	遠位部	右	①
		左	1
	遠位端	左	①
	遠位骨端はずれ	左	①
	破片	右	①
		左	1
上腕骨	近位骨端はずれ～遠位端	右	1
		左	1
	近位端	左	1
	近位部	左	1
	骨体	右	2
	骨体～遠位部	右	1
	遠位部	右	1
		左	6②
	遠位端	右	1
		左	1
	破片		1
橈骨	近位骨端はずれ	左	①
	近位端	左	1
	近位端～遠位部	左	①
	近位部	右	(1)
	近位部～遠位部	右	3
	両端はずれ	右	1
	骨体	右	1
	遠位骨端はずれ	左	1

部位		右／左	個数
尺骨	近位骨端はずれ	右	1
	近位部	右	4
	近位部～遠位部	左	2
	骨体	右	4
		左	1
	骨体～遠位部	左	1
	遠位部	左	2
	破片	右	1
中手骨	Ⅲ	右	3
		左	1
	Ⅳ	右	1
		左	3
	Ⅴ	右	①
寛骨	腸骨部	右	1
		左	1
	臼部	右	1
	坐骨	右	1
		左	1
大腿骨	骨頭のみ	右	1
		左	1
	近位骨端はずれ	左	1
	近位部	左	1
	近位部～遠位部	右	1
		左	「1」
	骨体	左	2(1)
		左	(1)
	遠位部	右	1
	遠位骨端はずれ	左	1
		左	1
	遠位骨端のみ	右	1「1」
		左	「1」
	破片		1
膝蓋骨		右	1
脛骨	近位骨端はずれ	右	1
	近位部	左	[1]
	骨体	右	4{1}
			5①
	骨体～遠位部	左	3
	骨体～遠位骨端はずれ	右	②
	遠位骨端はずれ	右	1
		左	(1)
	破片	右	3
腓骨	近位部	不明	1
	両端はずれ	左	1
	骨体	不明	4
	遠位骨端はずれ	左	1
距骨		右	2
		左	1①
踵骨		右	①
		左	4(1)
中手・中足骨		不明	3①
中足骨	Ⅱ	右	①
	Ⅲ	左	2
	Ⅳ	右	1
		左	4
	Ⅴ	右	1
		左	①
基節骨		右	2
		左	1
中節骨		右	1
合計			115

注 ＜ ＞：未萌出、{ }：幼、［ ］：若、「 」：半欠、○：切痕、（ ）：破片

第33表　シカ出土一覧

部　　位		右／左	個数
角		不明	1
環椎（切痕）			1
上腕骨	遠位端（切痕）	右	1

第34表　ウシ出土一覧

部　　位		右／左	個数
頭骨	角	不明	(1)
	頬骨側頭突起	右	1
	破片		8
上顎骨	dm4	右	1
		左	1
	P2	右	2
		左	2
	P3	右	3
		左	2
	P4	右	1
	M1	右	1
	M2	右	1
		左	1
	M3	右	1
		左	1
	切歯骨	右	1
		左	1
	破片	右	1
下顎骨	切歯Ⅰ	右	3
		左	2
	P2	左	1
	P4	右	1
	M1	左	1
	M2	右	1
	M3	左	3
	下顎骨	左	1
	舌骨		1
		右	1
		左	1
		不明	(8)
上下顎不明	歯破片		3
椎体			1
肩甲骨	遠位部	右	1
	破片	右	1
		不明	4
上腕骨	遠位部	右	1(①)
橈骨	近位部	左	2
	遠位骨端のみ	右	1
	破片	右	1
		不明	1
尺骨	近位部～遠位部	左	2
手根骨	尺側	左	1
大腿骨	骨頭のみ	不明	1
脛骨	近位部	左	1
距骨		左	(①)
踵骨		右	(1)
		左	(1)
足根骨	第4中心	左	1
中手・中足骨	遠位骨端のみ	不明	(1)
中足骨	遠位端	右	1
基節骨		右	1
		左	4
中節骨		右	2

注　○:切痕、(　):破片

第35表　ウシ・ウマ出土一覧

部　　位		右／左	個数
下顎骨（破片）			3
肋骨		右	11
		左	12①
		不明	57③

注　○:切痕

第36表　ヤギ出土一覧

部　　位		右／左	個数
上顎骨	M2	右	1
下顎骨	M3	右	1
		左	1
		左	1
上腕骨	骨体	右	1
		左	2
	遠位部	右	1
橈骨	近位端（切痕）	右	1
	近位端～骨体	左	2
	近位端～遠位部	右	1
	遠位部	左	1
	遠位端	右	1
尺骨	近位部	左	1
	骨体（切痕）	右	1
中手骨	近位端	左	1
	骨体	不明	1
寛骨	腸骨部	右	1
		左	1
大腿骨	骨体	左	1
脛骨	破片	左	1
中足骨	近位骨端はずれ	不明	1
	近位端	右	1

第37表　種不明出土一覧

部　　位		右／左	個数
棘突起			1
肋骨		不明	2
橈骨		不明	1
脛骨	骨体	右	1
		不明	1
	骨体～遠位部（切痕）	左	1

第38表　サカナ計測一覧

単位:mm

科・種		右／左	計測部位		計測値
フエフキダイ科	ハマフエフキ	右	前上顎骨	長さ	(11.1)
					(13.4)
					(15.6)
					16.4
					17.6
					18.0
					21.0
					21.6
					22.5
					24.9
					40.0
					(47.2)
		左			19.3
					21.7
					24.4
					25.4
					(32.8)
					(36.7)
					38.8
					43.5
					(43.5)
ブダイ科	ナガブダイ	下咽頭骨		幅	7.8
					9.6
					13.3
					14.7
	種不明	右	前上顎骨	長さ	6.1
					6.9
					7.4
					(8.3)
					9.7
					10.0
					10.9
					12.1
					(12.7)
					15.7
					16.1
					(16.4)
					18.5
					21.3
					27.1
					28.2
					30.3
		左			6.3
					8.2
					8.6
					8.7
					9.3
					10.0
					10.2
					10.9
					11.7
					(12.6)
					13.6
					14.8
					19.8
					25.4

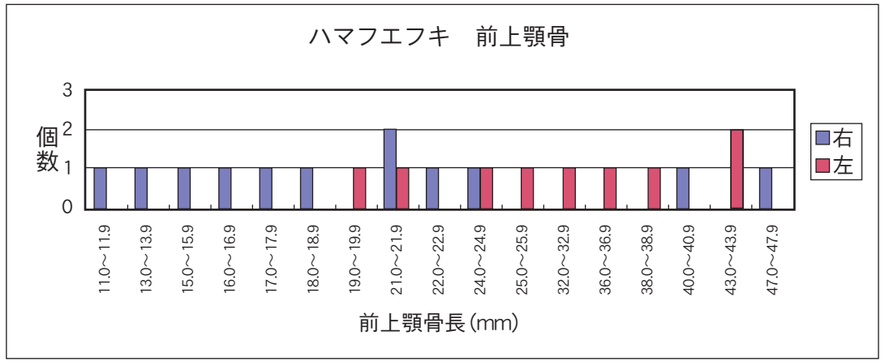
科・種		右／左	計測部位		計測値
ブダイ科	種不明	右	歯骨	長さ	(7.5)
					8.6
					(8.9)
					9.4
					9.9
					10.4
					11.3
					11.5
					12.8
					13.0
					13.7
					18.7
		左			(21.1)
					27.1
					28.4
					7.7
					7.7
					9.1
					9.2
					10.6
					11.2
					12.0
					13.1
					13.3
					13.5
					24.8
					28.9
					29.8
ハタ科	種不明	右	歯骨A	幅	3.30
					4.09
					4.56
					(4.79)
					5.02
					5.48
					5.50
					5.85
					6.27
					6.54
					8.52
					9.35
		左			5.54
					6.42
					7.41
					8.10
					8.23
					8.76
					9.68

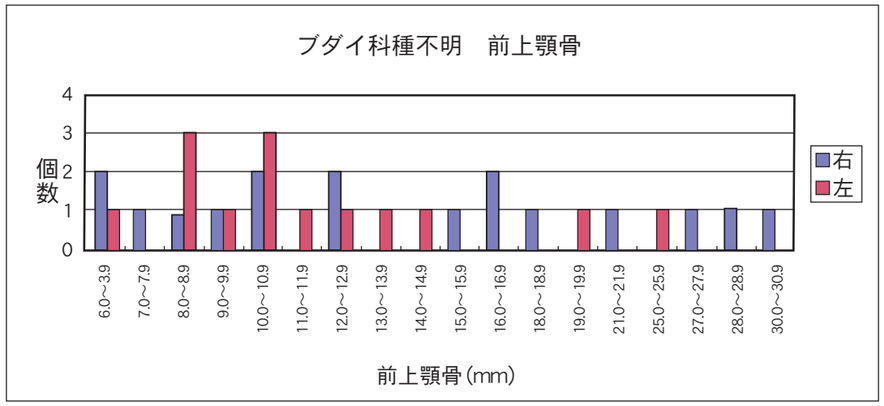
注（ ）:推定値

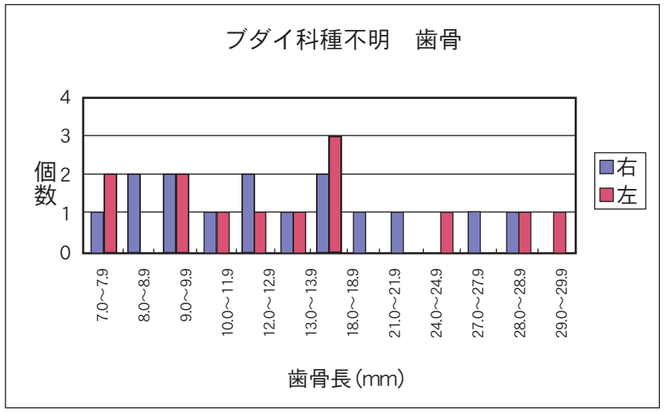
第39表　ウマ計測一覧

単位:mm

部位		右／左	計測部位	計測値
下顎骨	P2	左	高さ	17.5
	P3			27.5
	P3,4			37.0
	M1,2			4.55







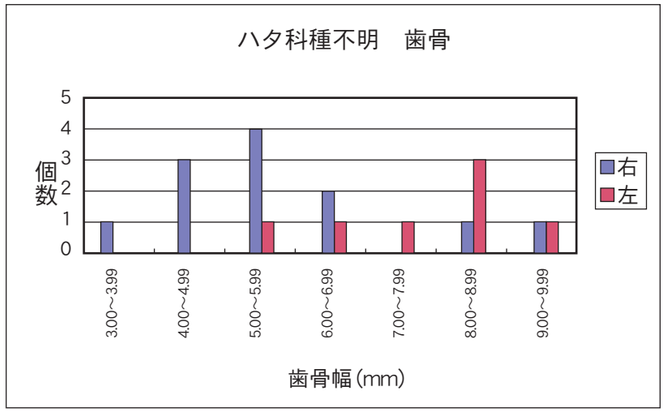
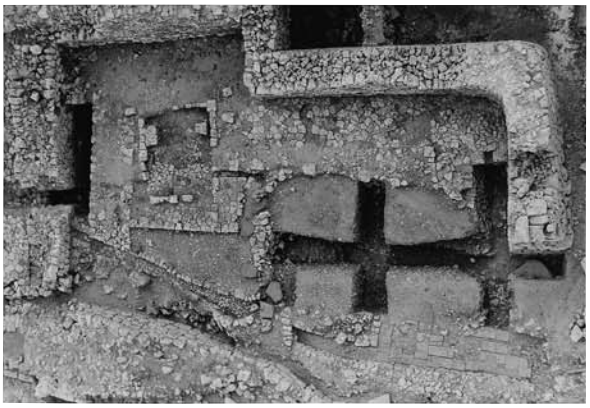


図　　版

調査区全景

右掖門南側状況


L字状石積

北殿に至る石畳道

石畳道脇の塼敷き

暗渠検出

暗渠正面

暗渠上方から

図版１　遺構１

右掖門へ至る石畳道と側壁（西から）

右掖門へ至る石畳道と側壁（北から）

石畳側面

人骨検出前（北から）

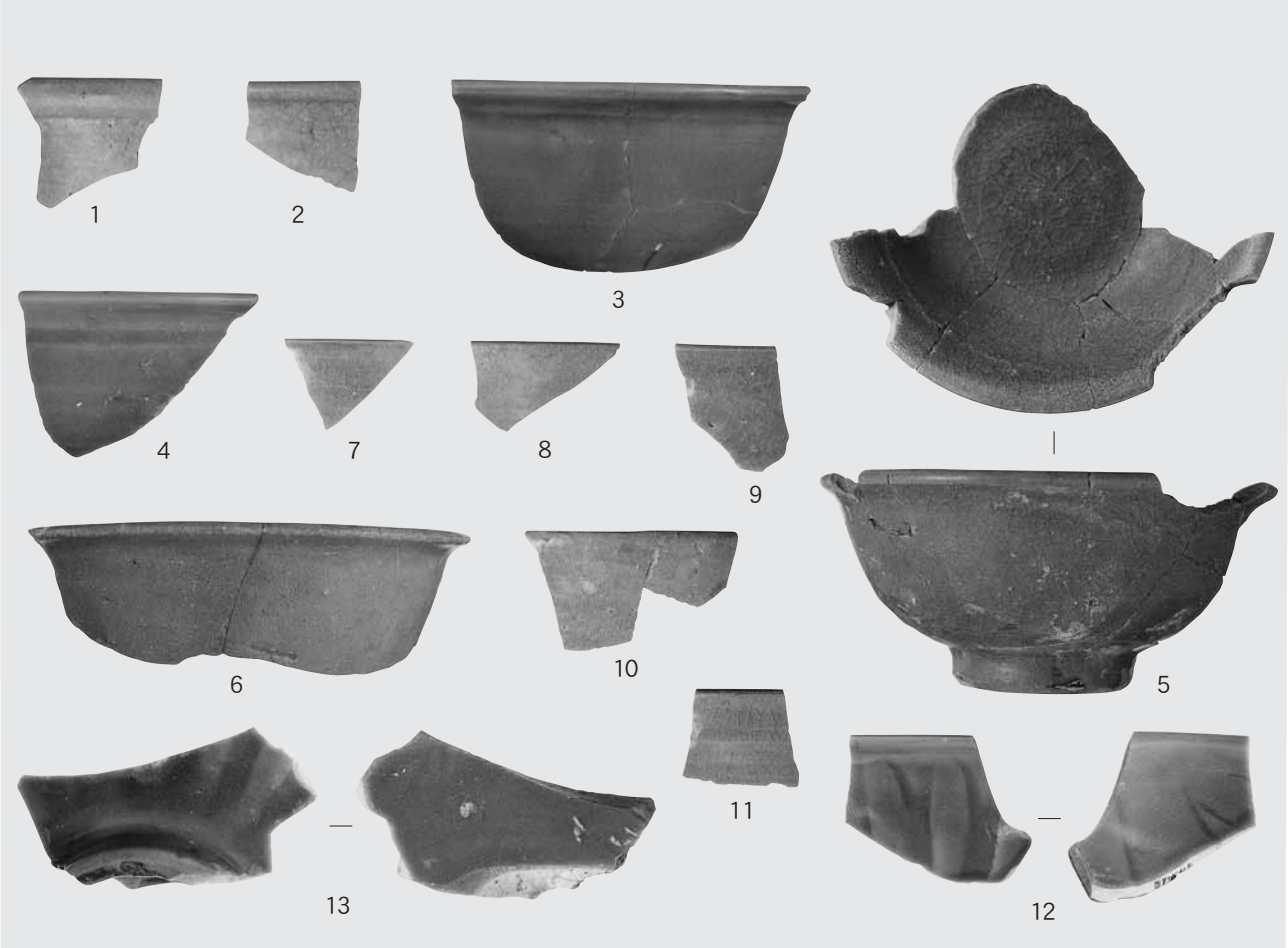
人骨検出状況（遠景北東から）

人骨検出状況（近景北から）

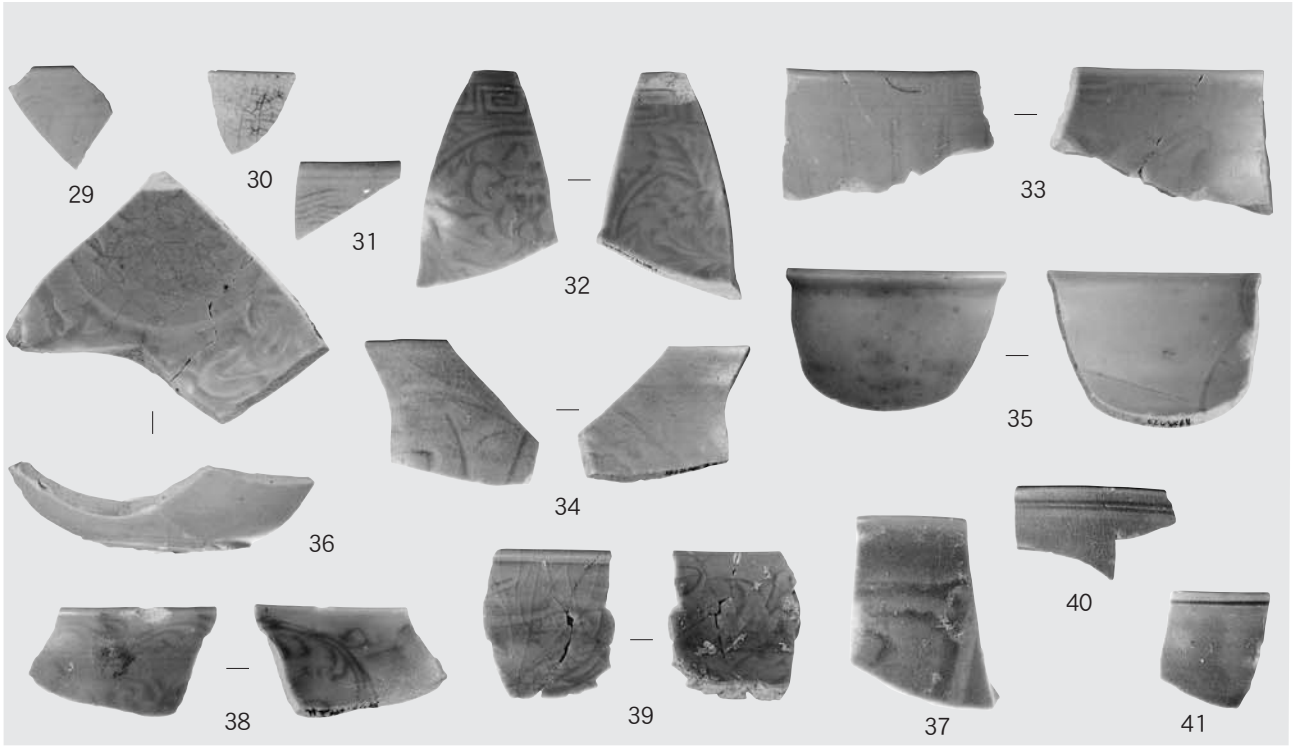
人骨検出状況（西から）

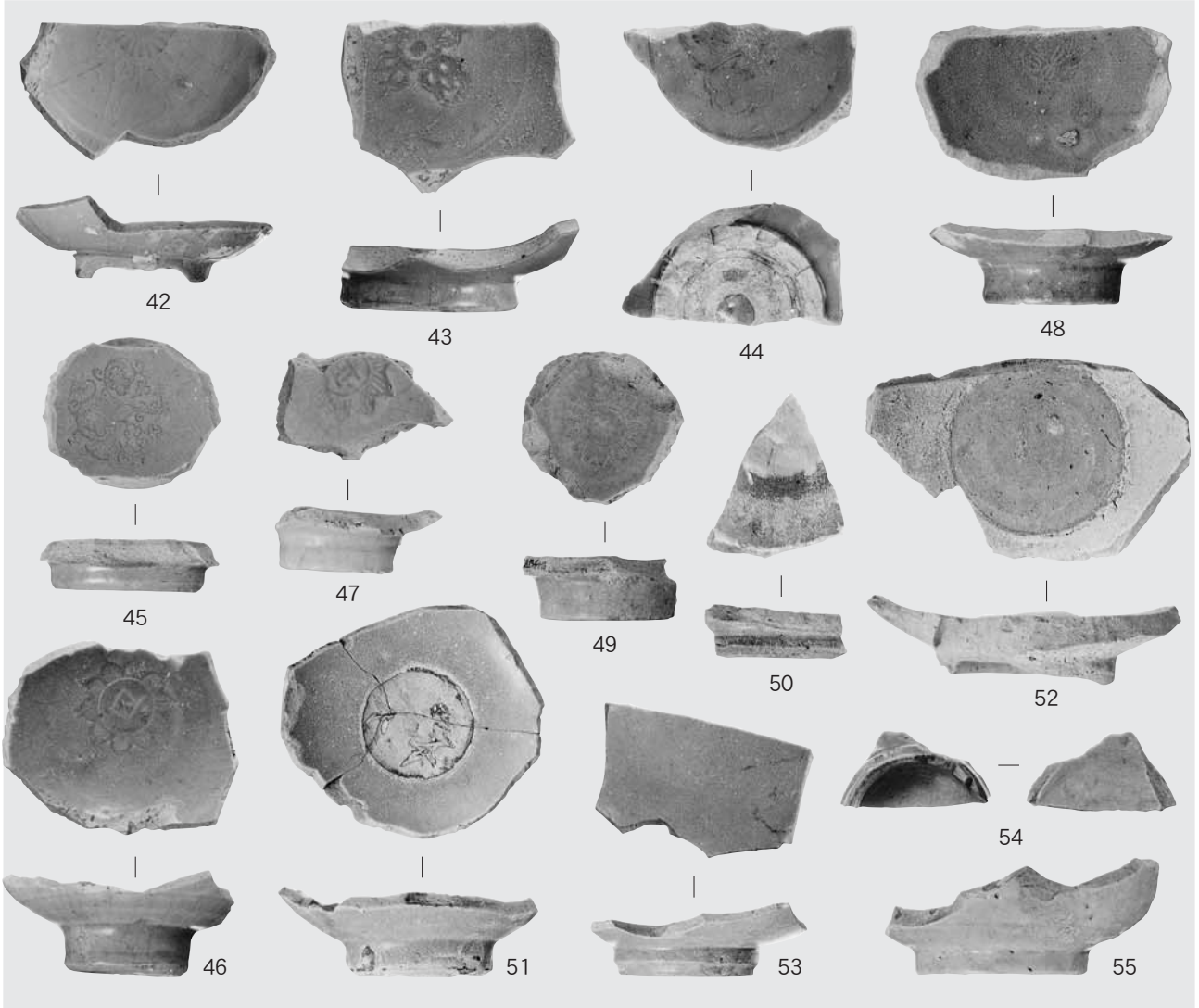
人骨検出地完掘状況

図版２　遺構２

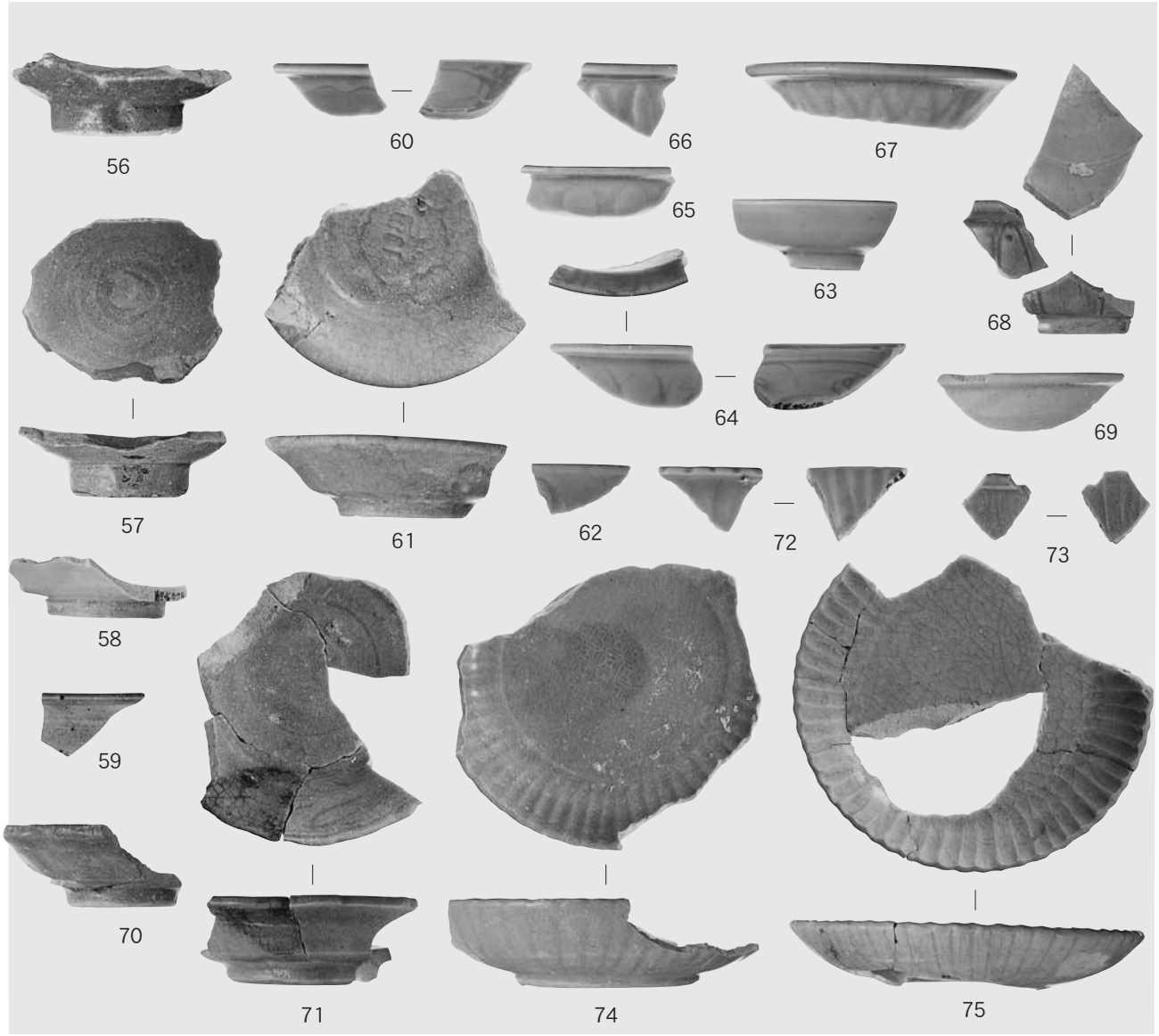


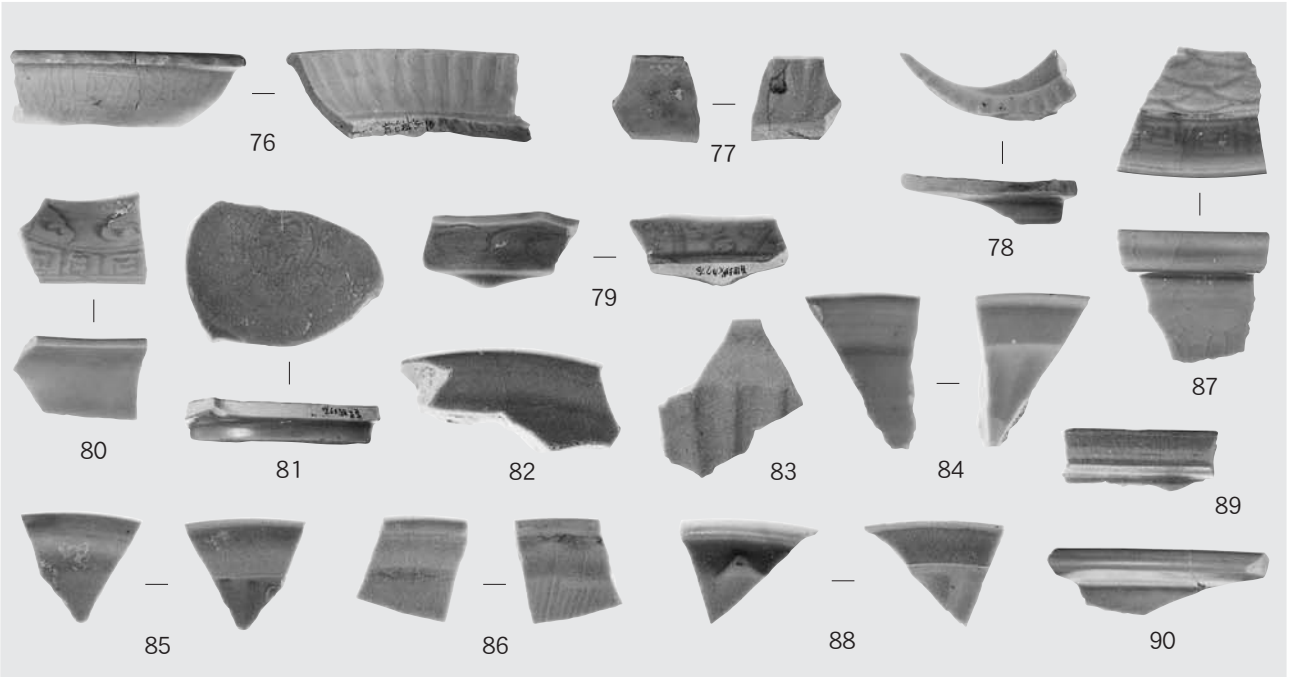
図版３　上：青磁１　下：青磁２



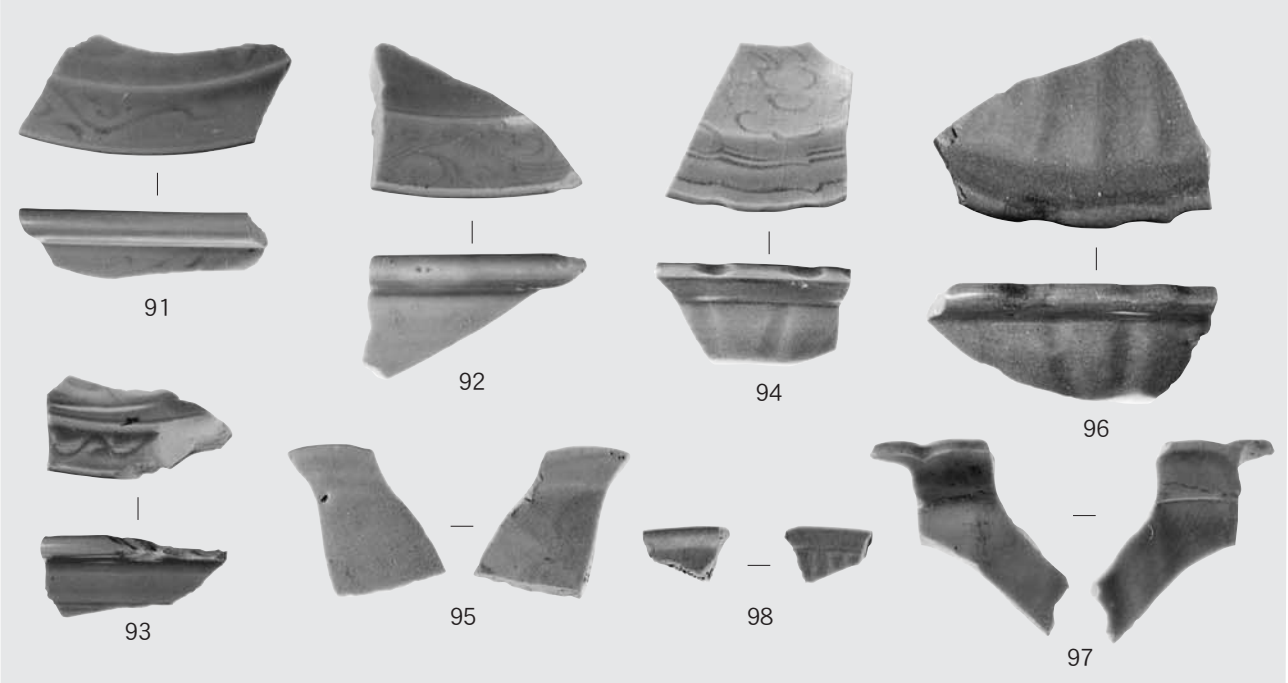


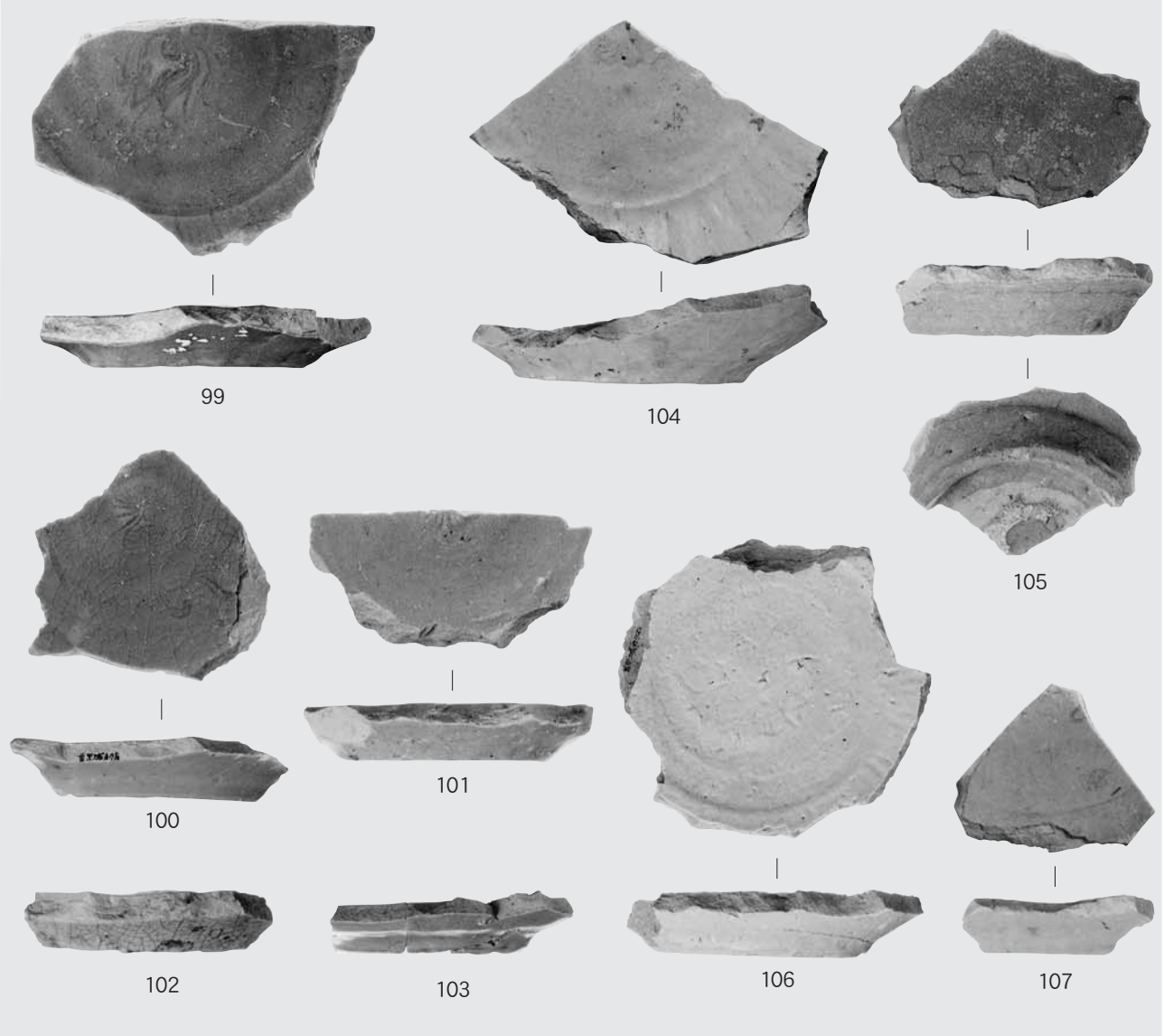
図版４　上：青磁３　下：青磁４



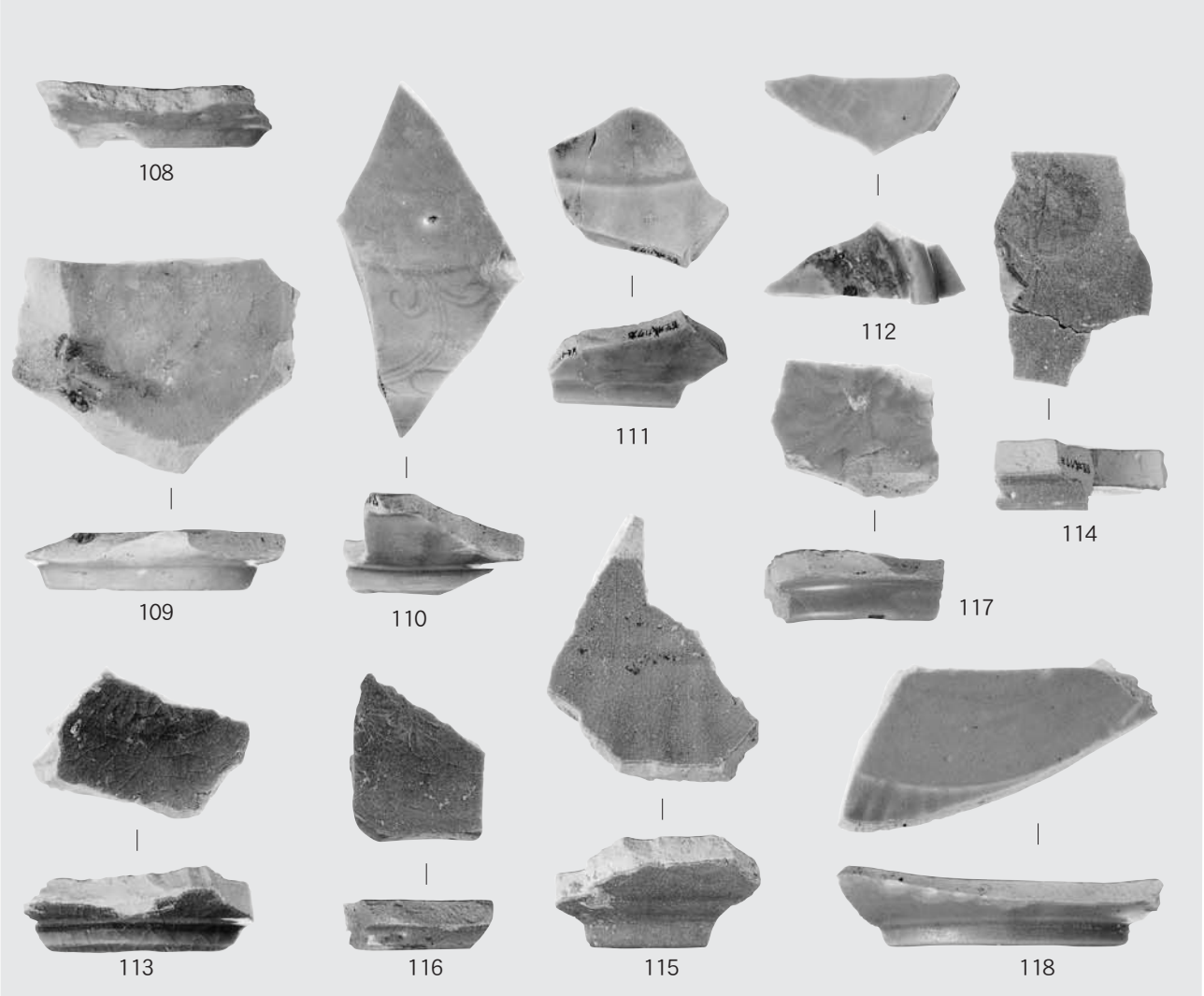


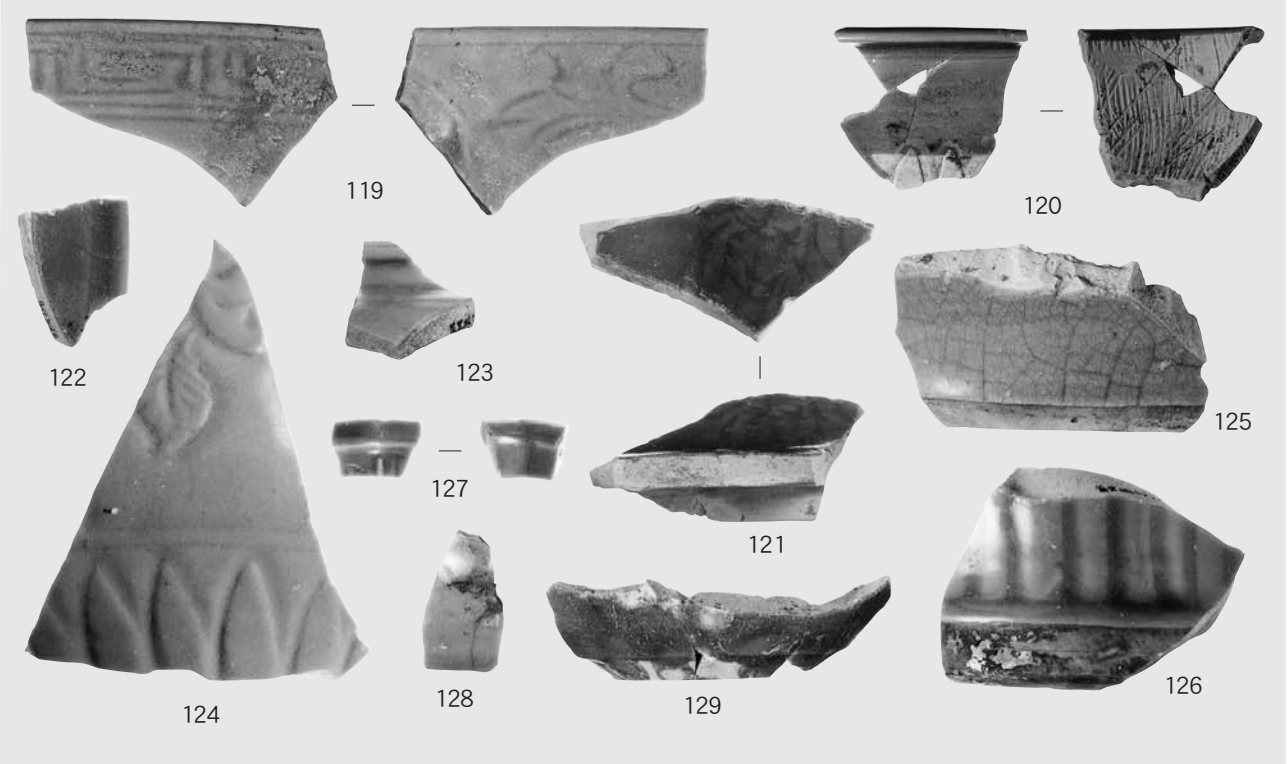
図版５　上：青磁５　下：青磁６



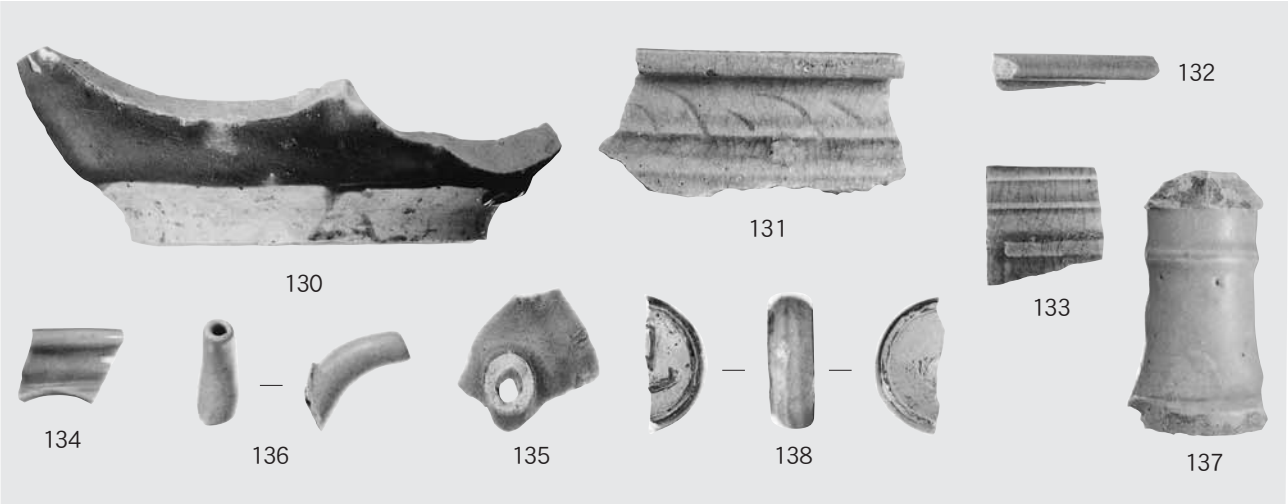


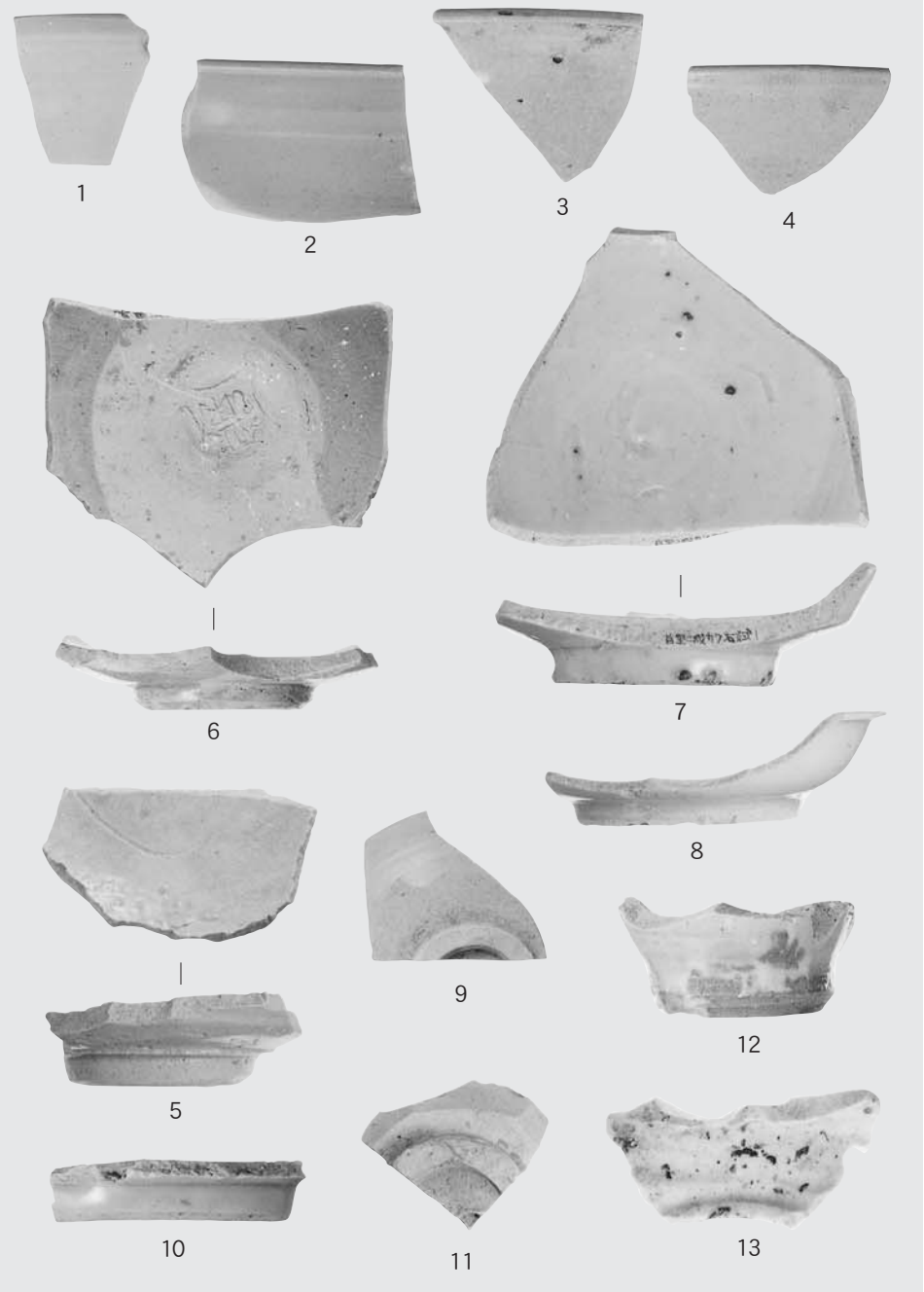
図版６　上：青磁７　下：青磁８

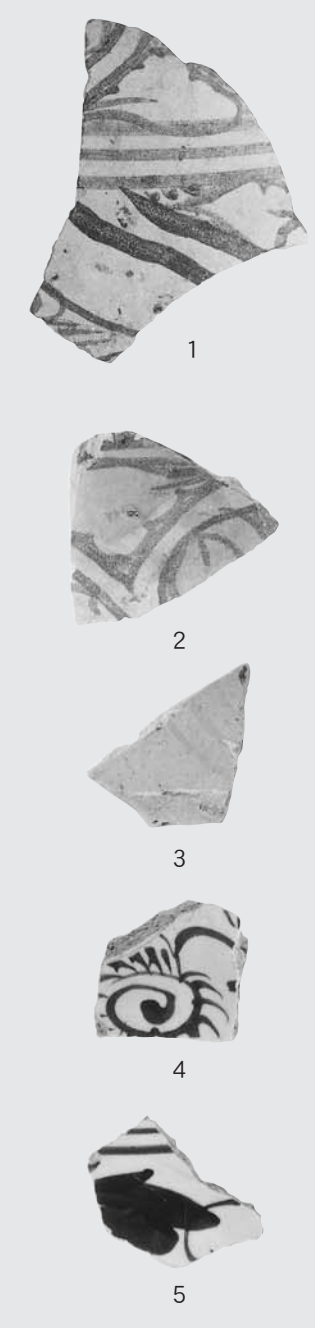




図版７　上：青磁９　下：青磁10





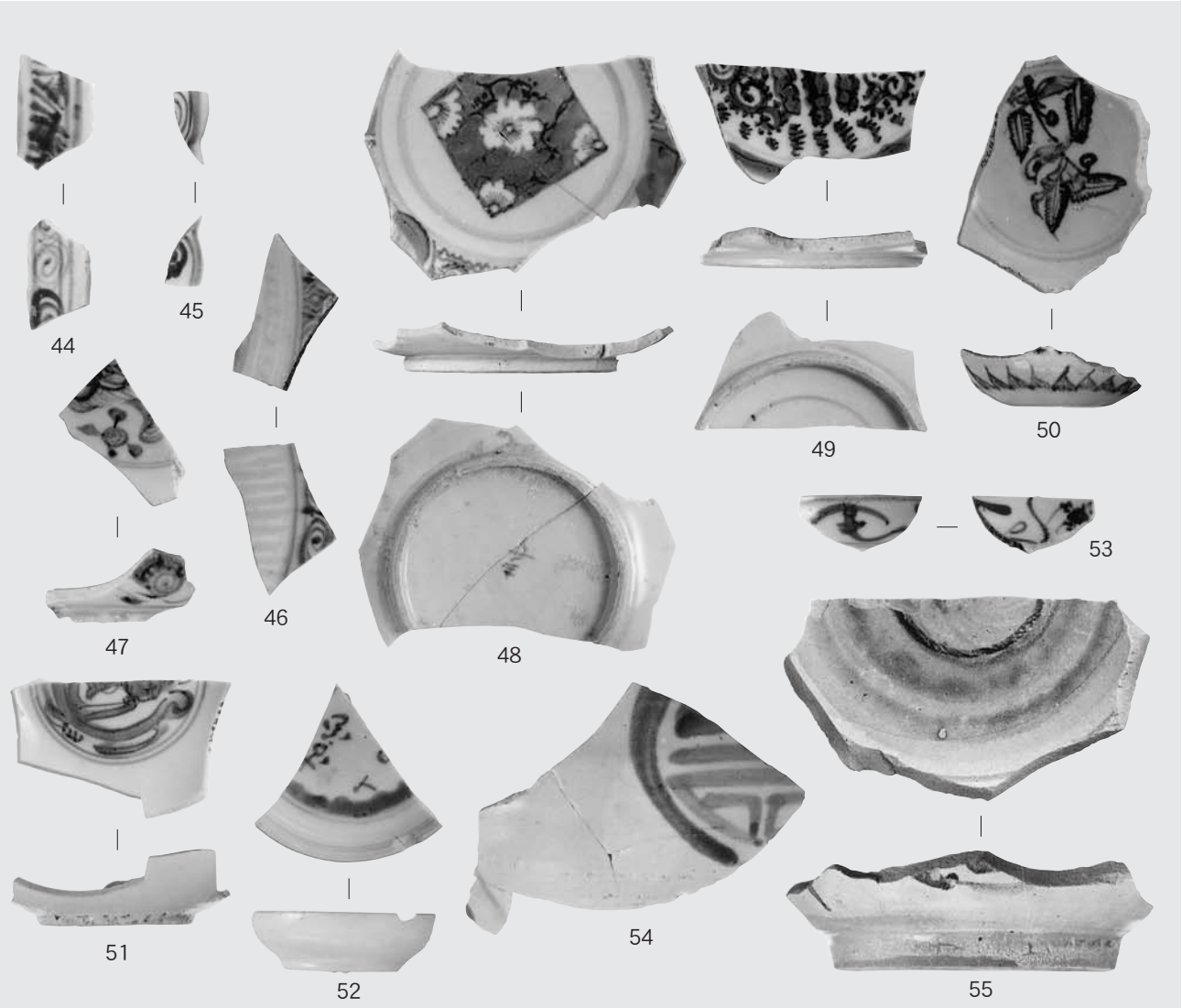


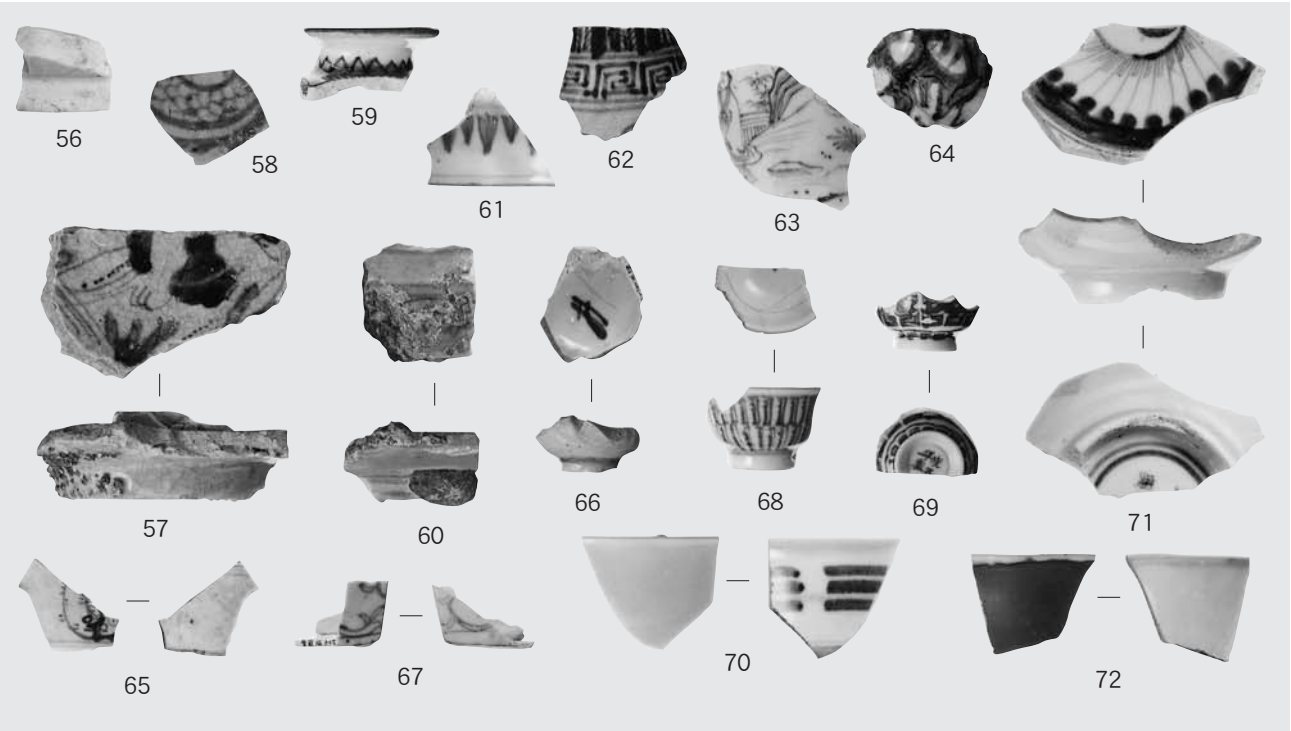
図版８　上：青磁11　下右：白磁　下左：中国産鉄絵

図版９　染付1

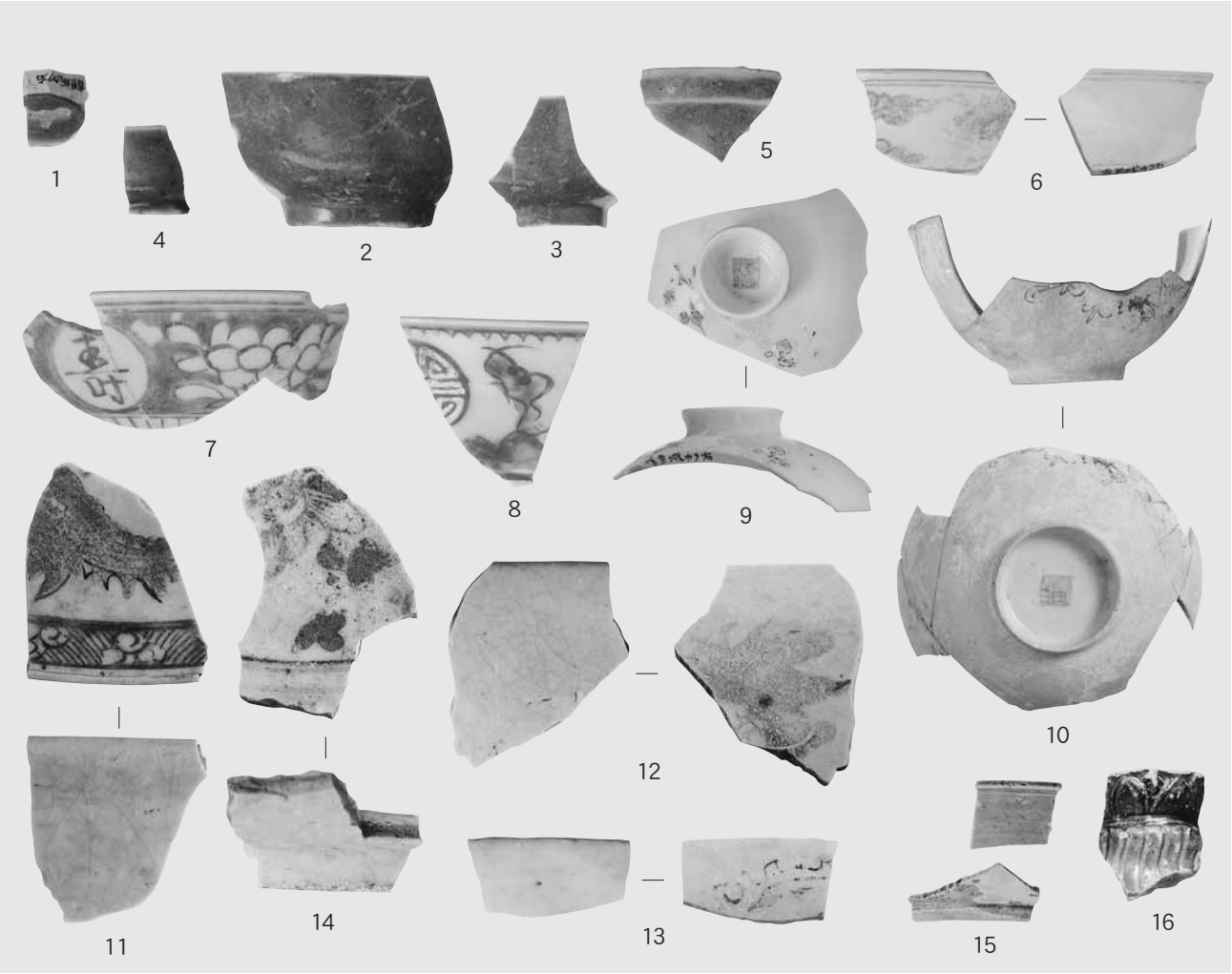
図版10　染付２

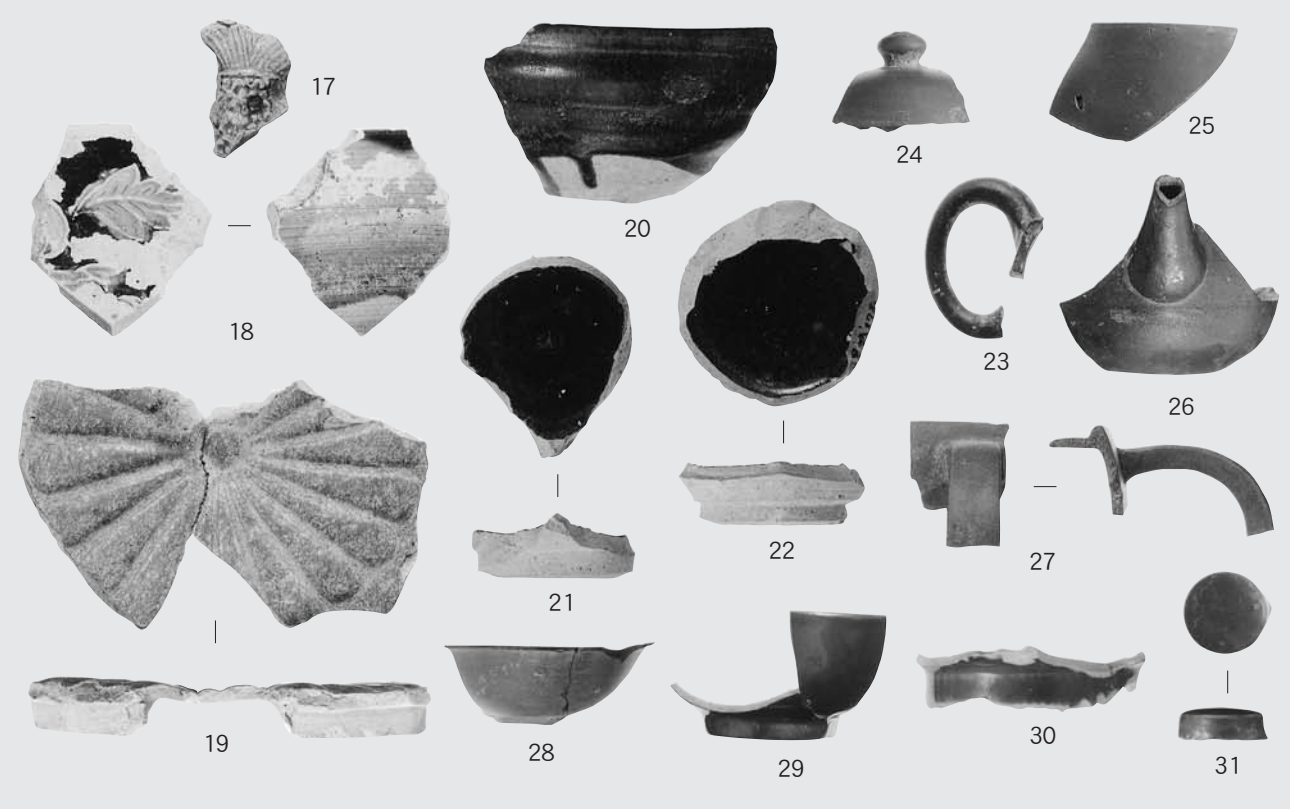
図版11　染付３



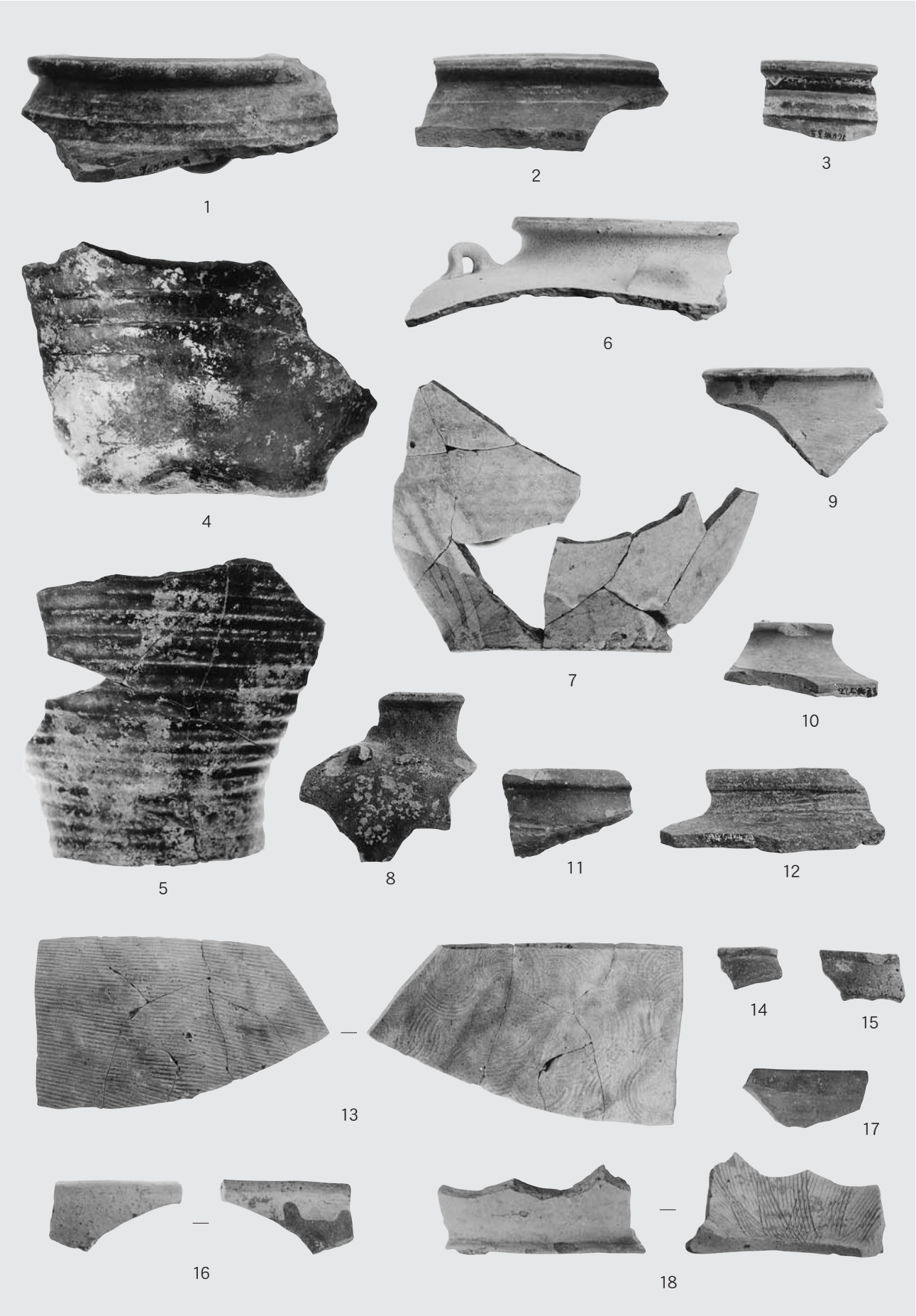


図版12　上：染付４　下：染付５・青磁染付・褐釉染付

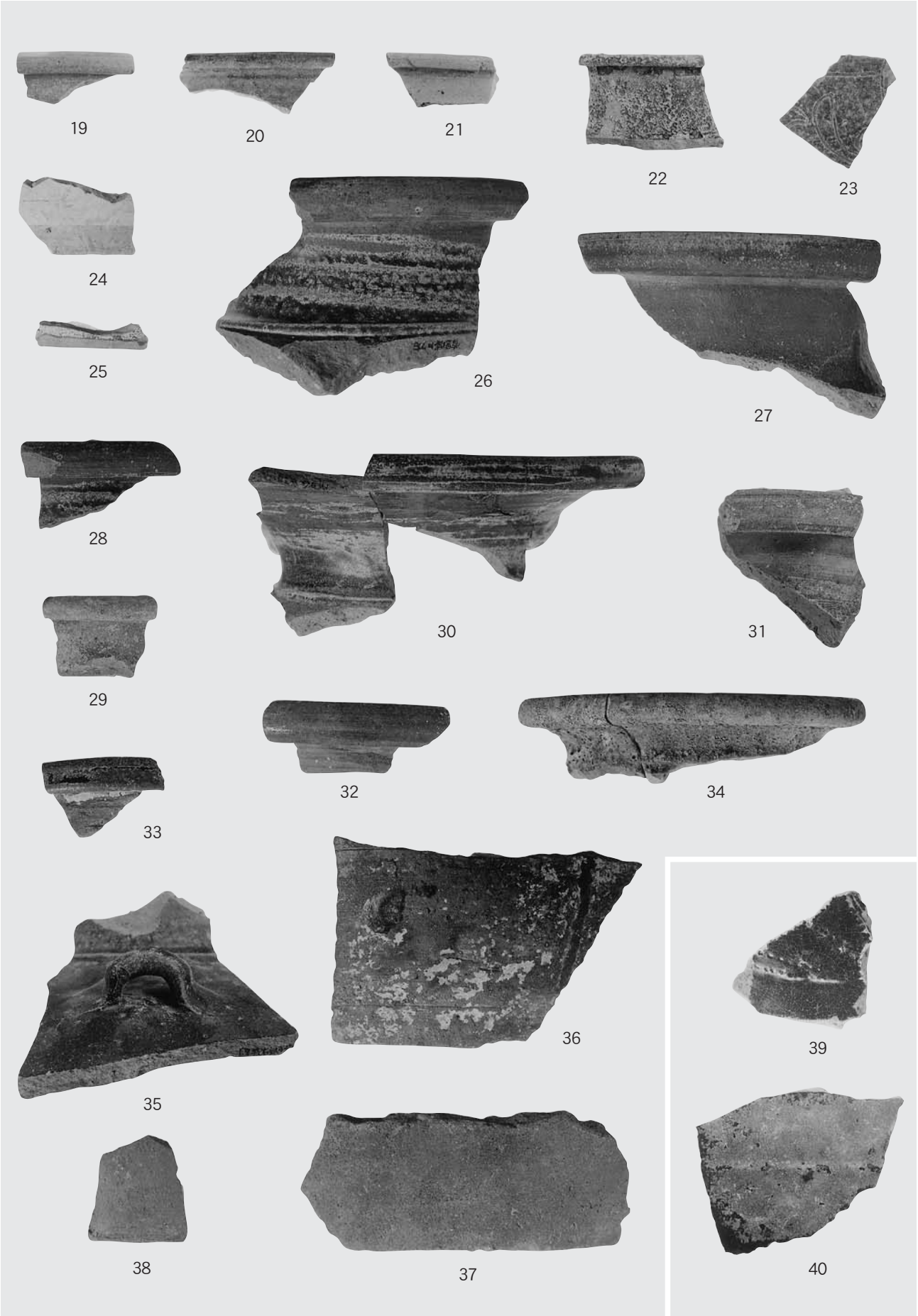




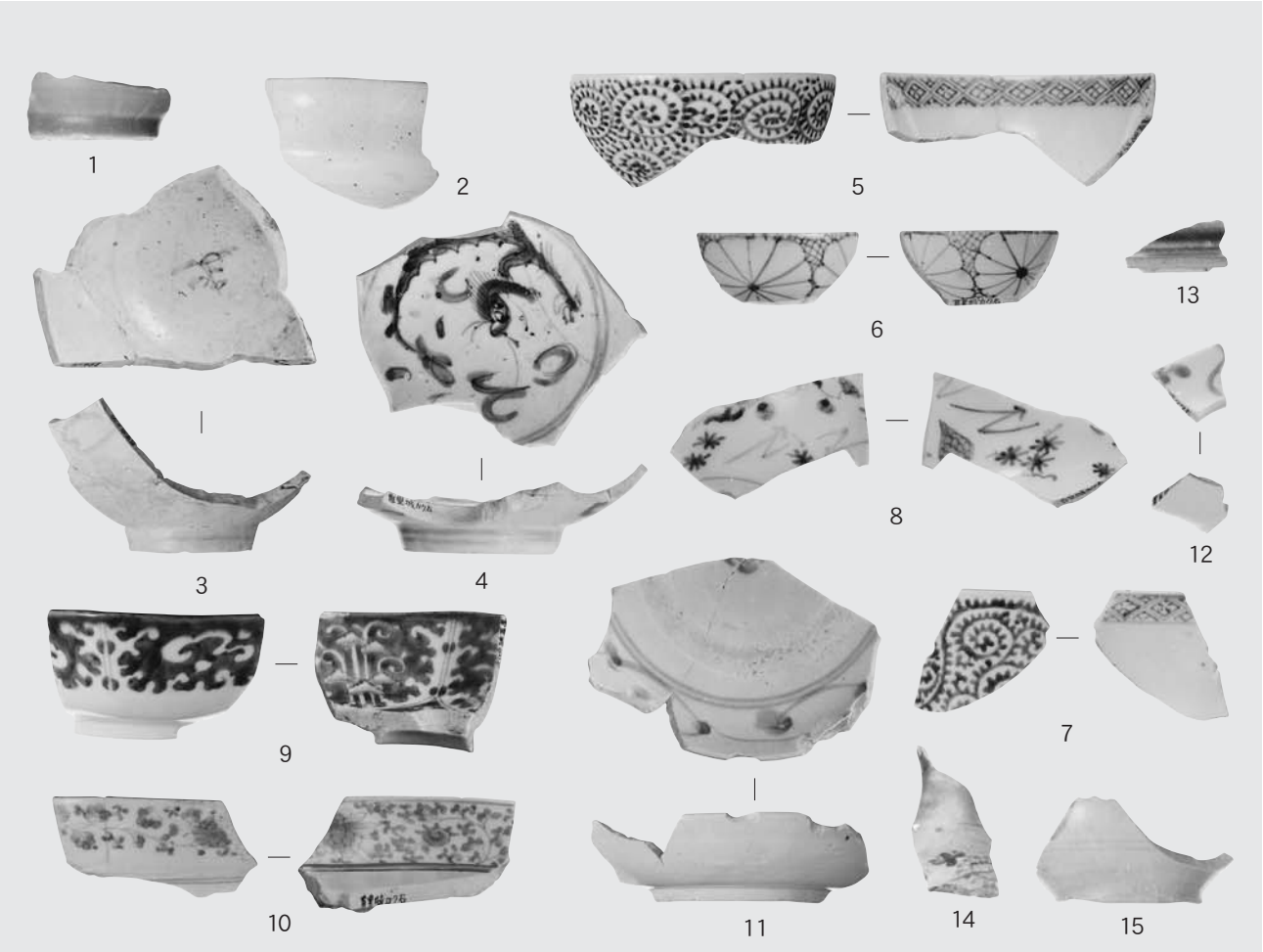
図版13　上：その他の中国産陶磁器１　　下：その他の中国産陶磁器２

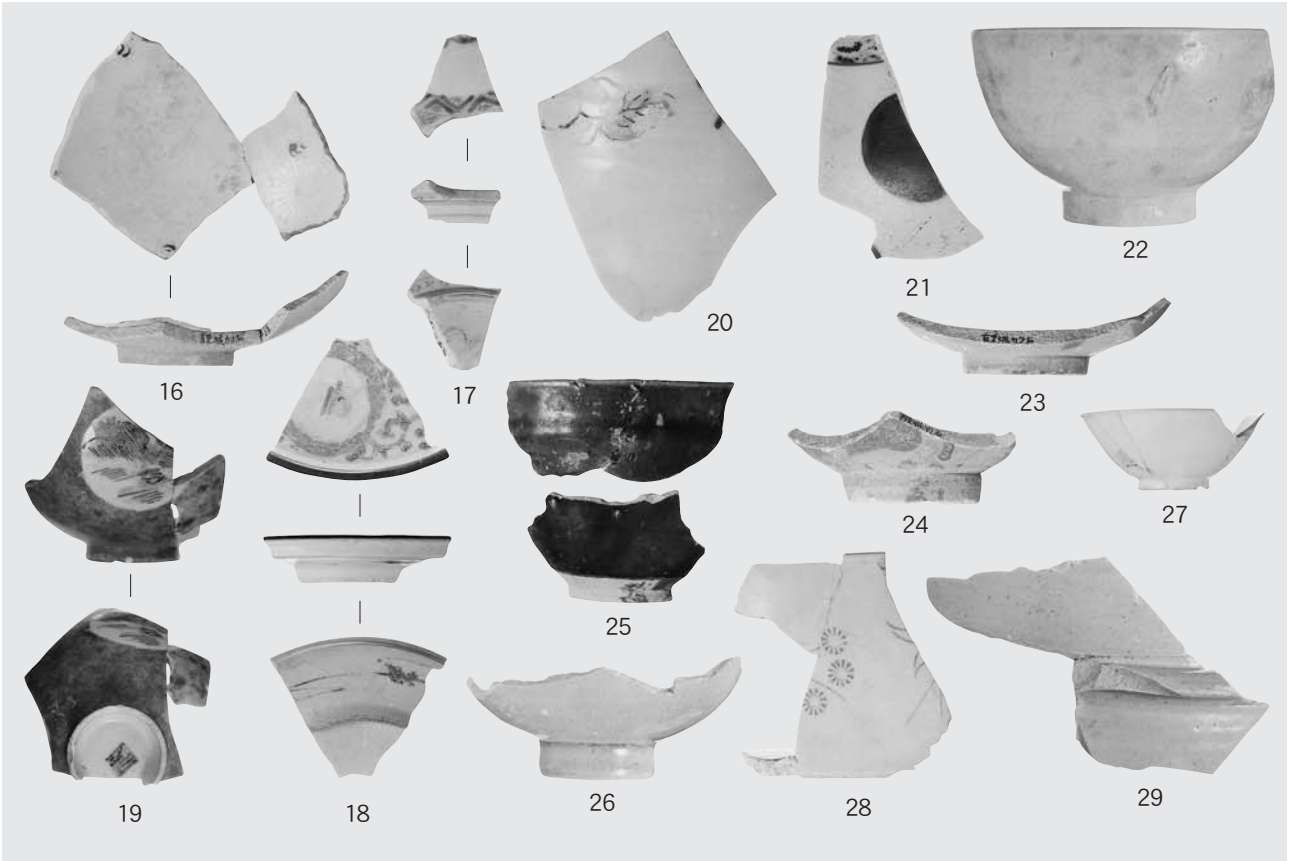


図版14　褐釉陶器 1



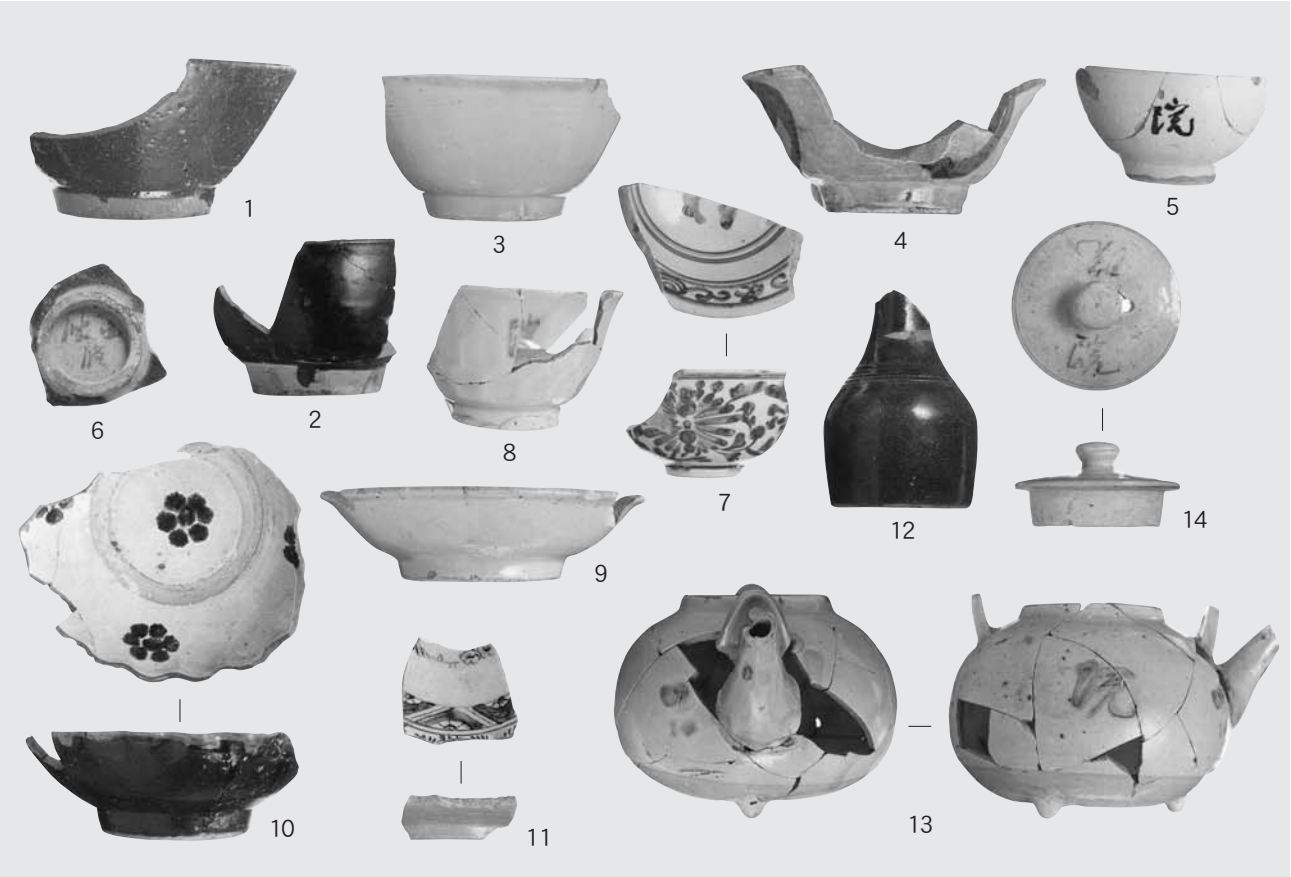
図版15　褐釉陶器２

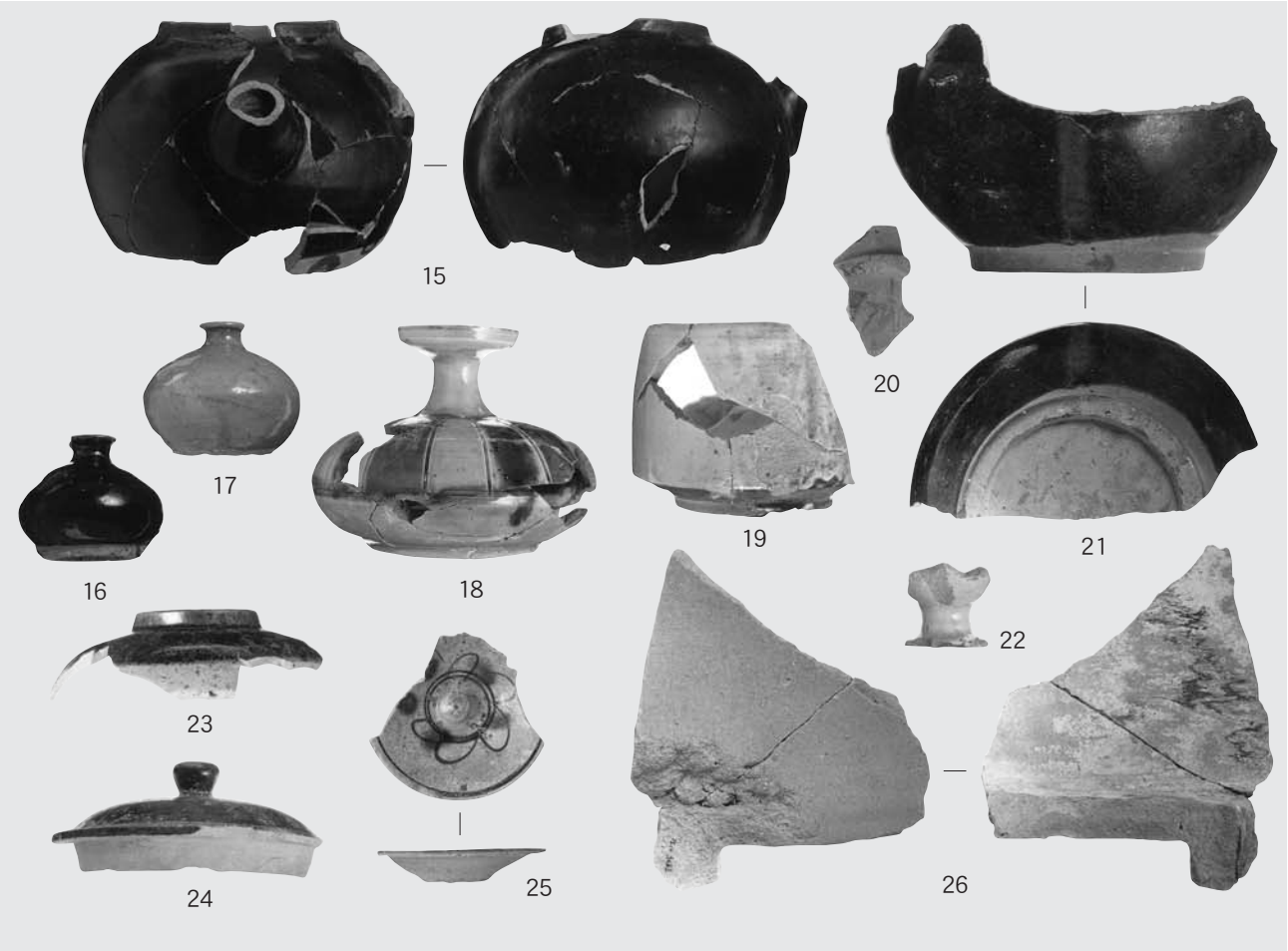




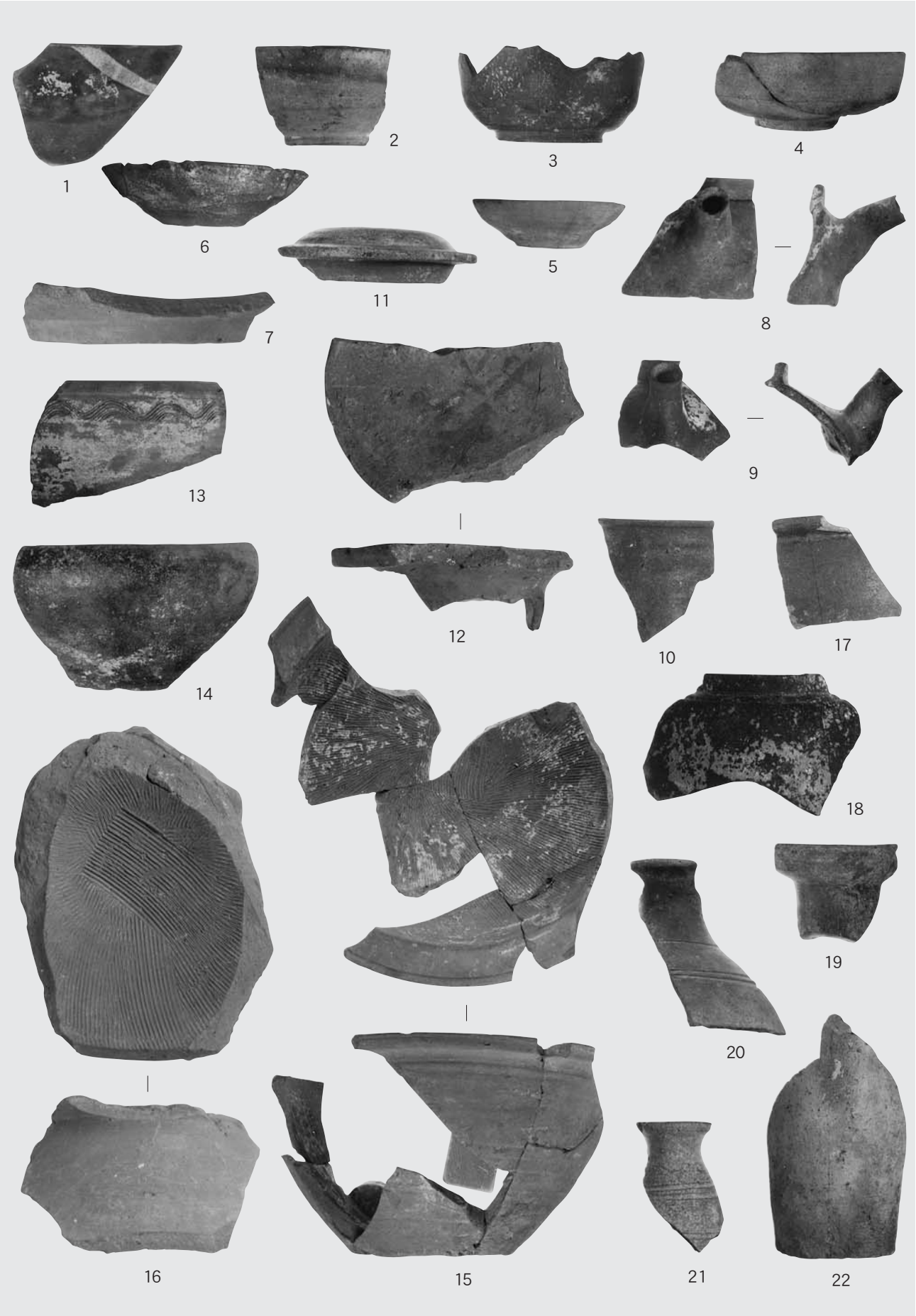
図版20　上：本土産青磁・本土産陶器・本土産染付　下：本土産色絵・本土産陶器・本土産白磁

図版21　本土産印判手

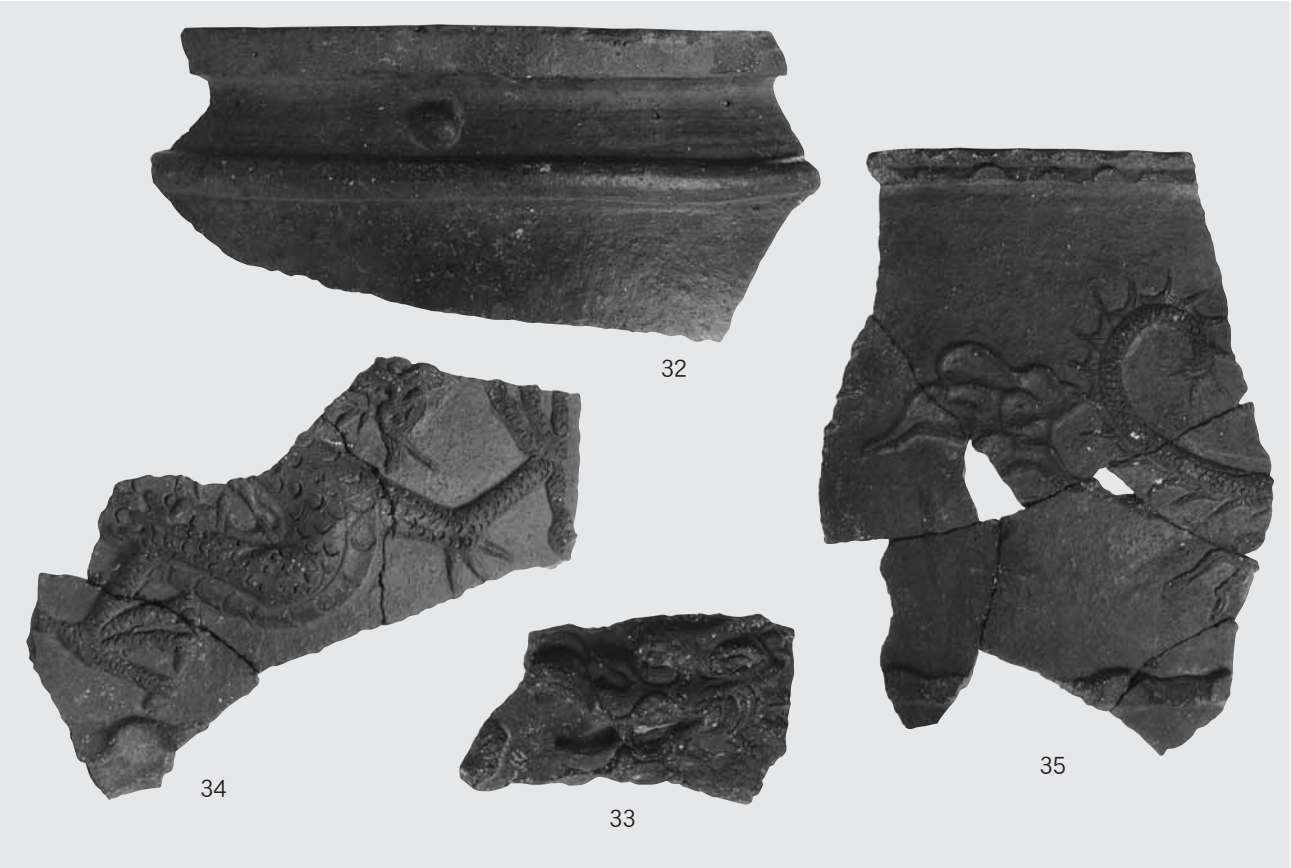




図版22　上：沖縄産施釉陶器１　　下：沖縄産施釉陶器２

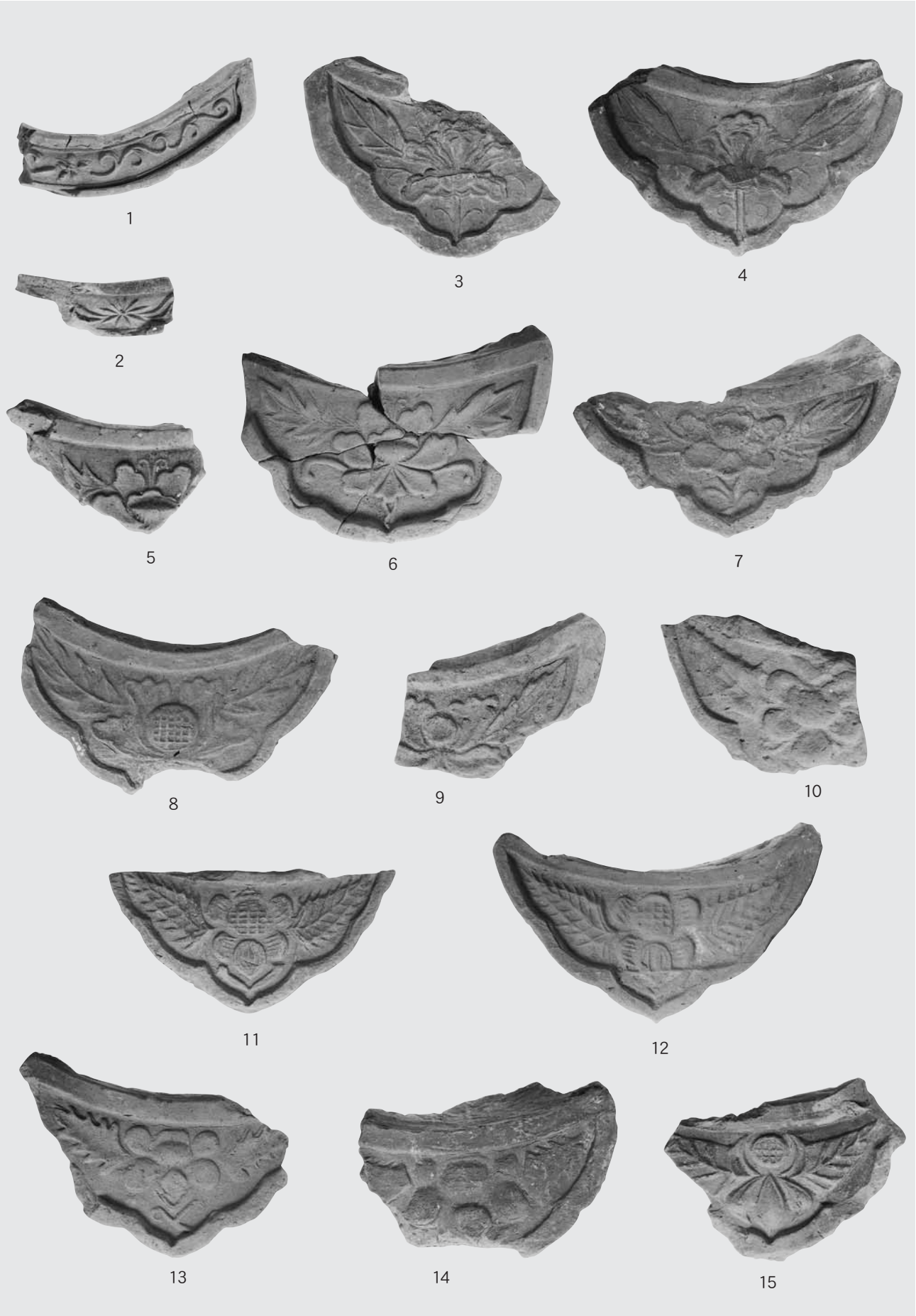


図版23　沖縄産無釉陶器 1



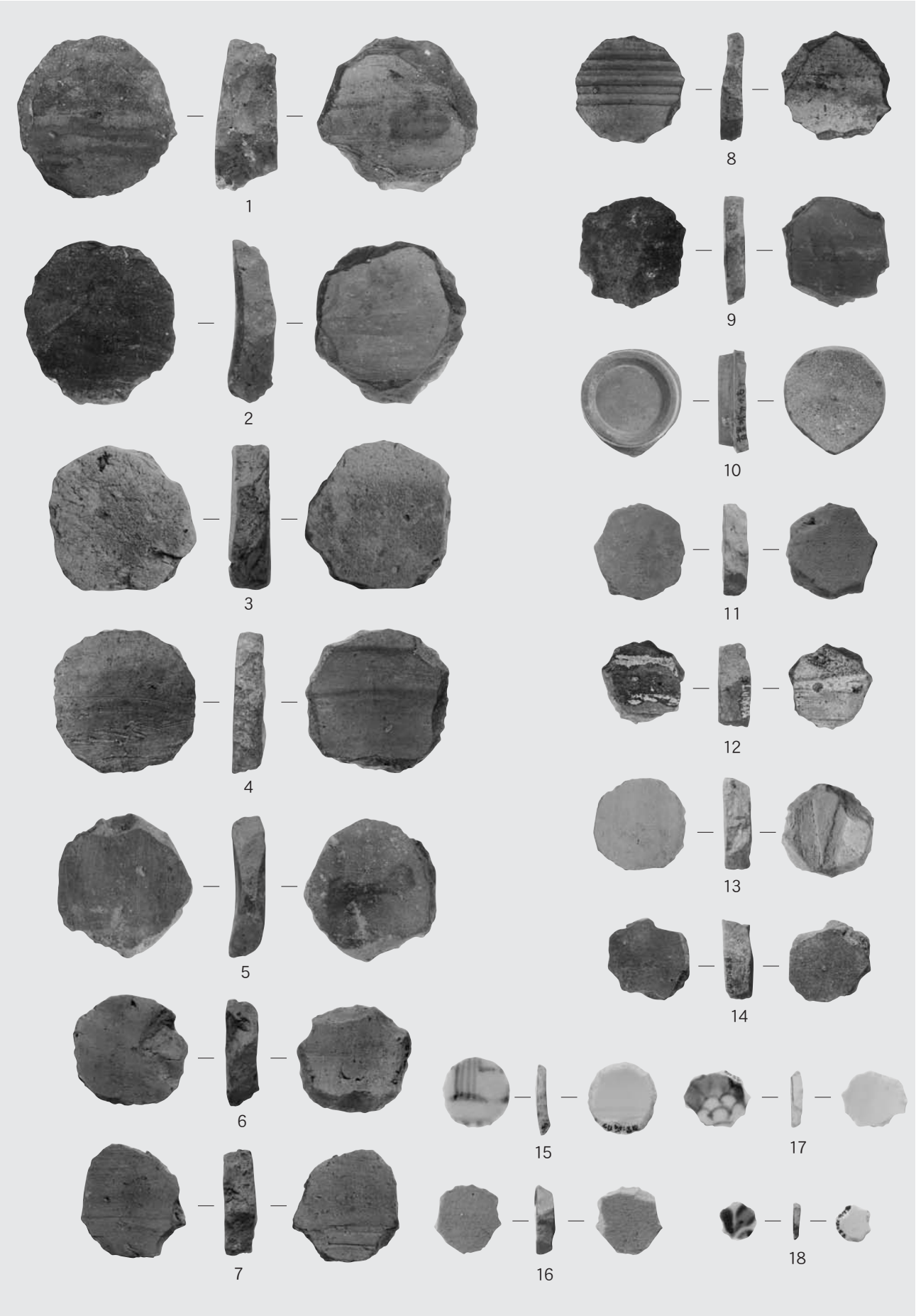
図版24　上：沖縄産無釉陶器２　下：沖縄産無釉陶器３

図版26　陶質土器

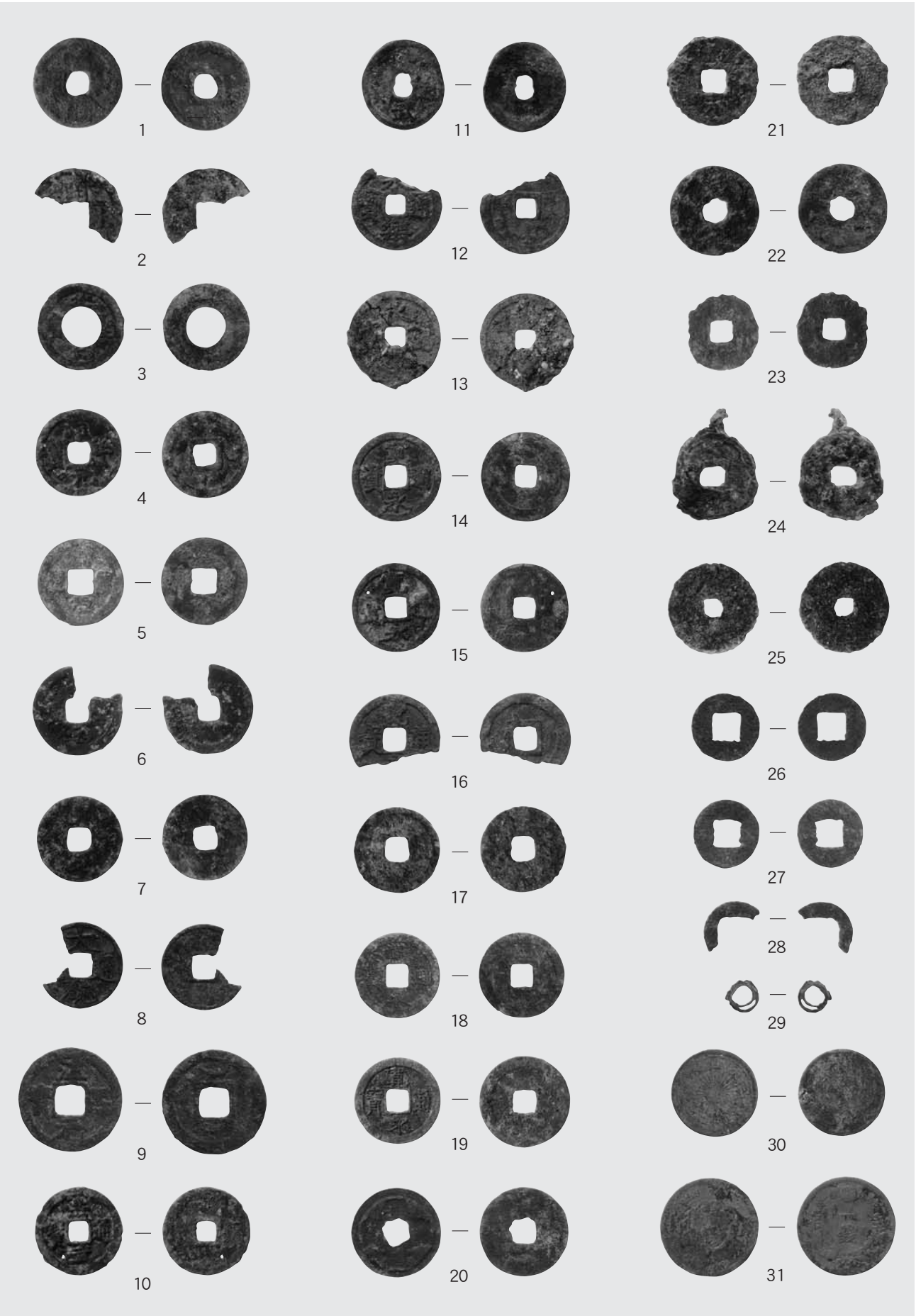


図版28　瓦 1

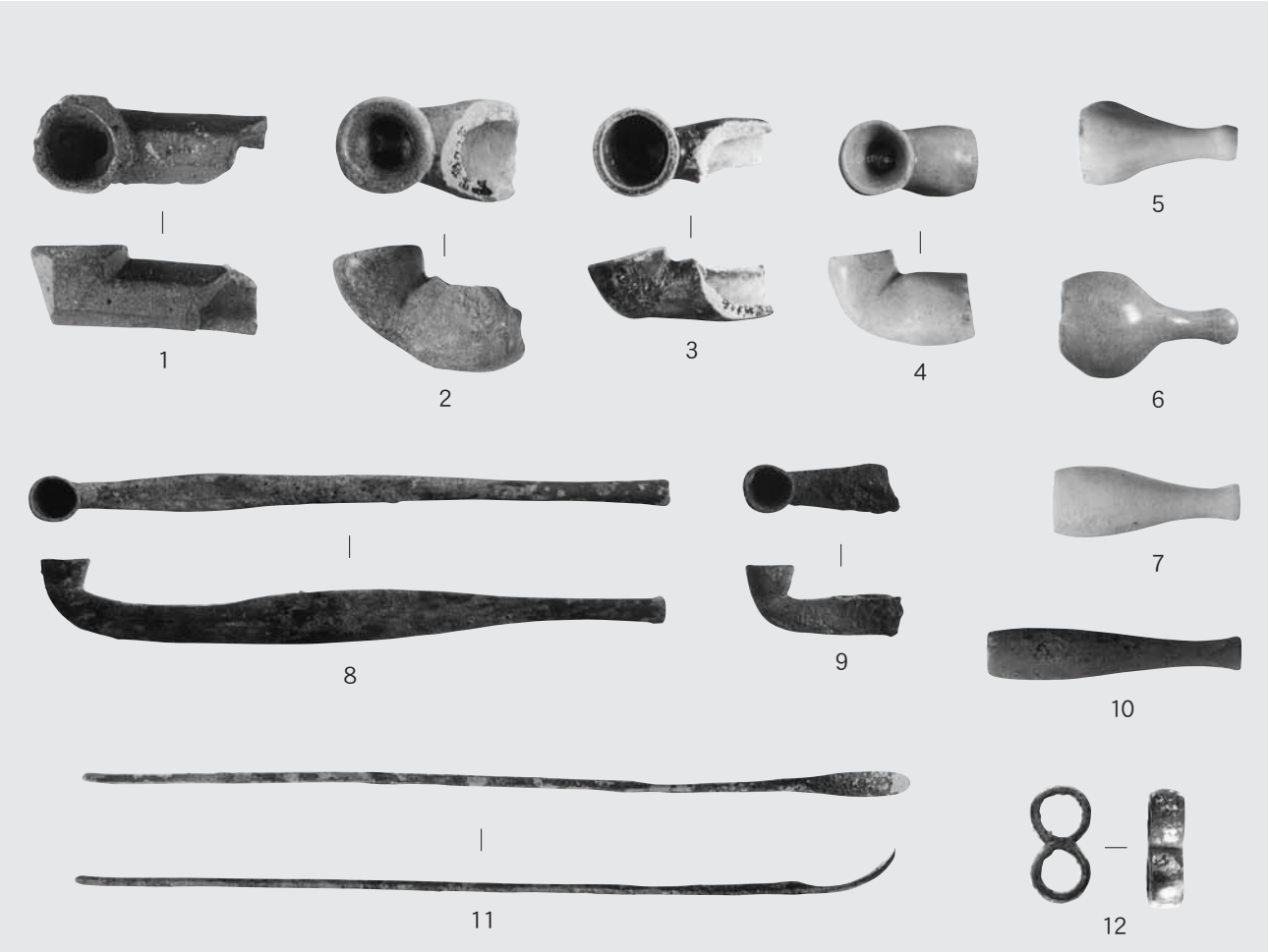
図版29　瓦２

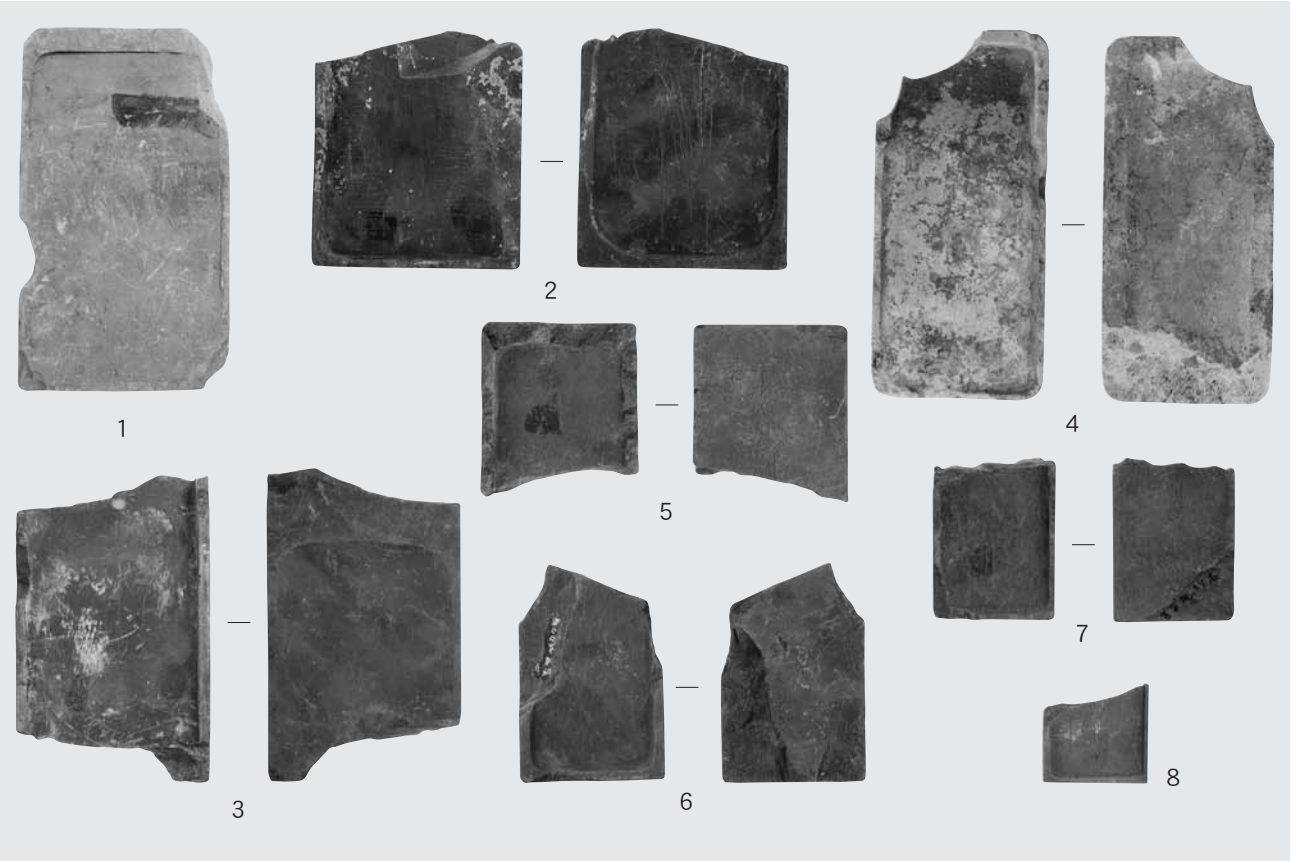


図版30　円盤状製品


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

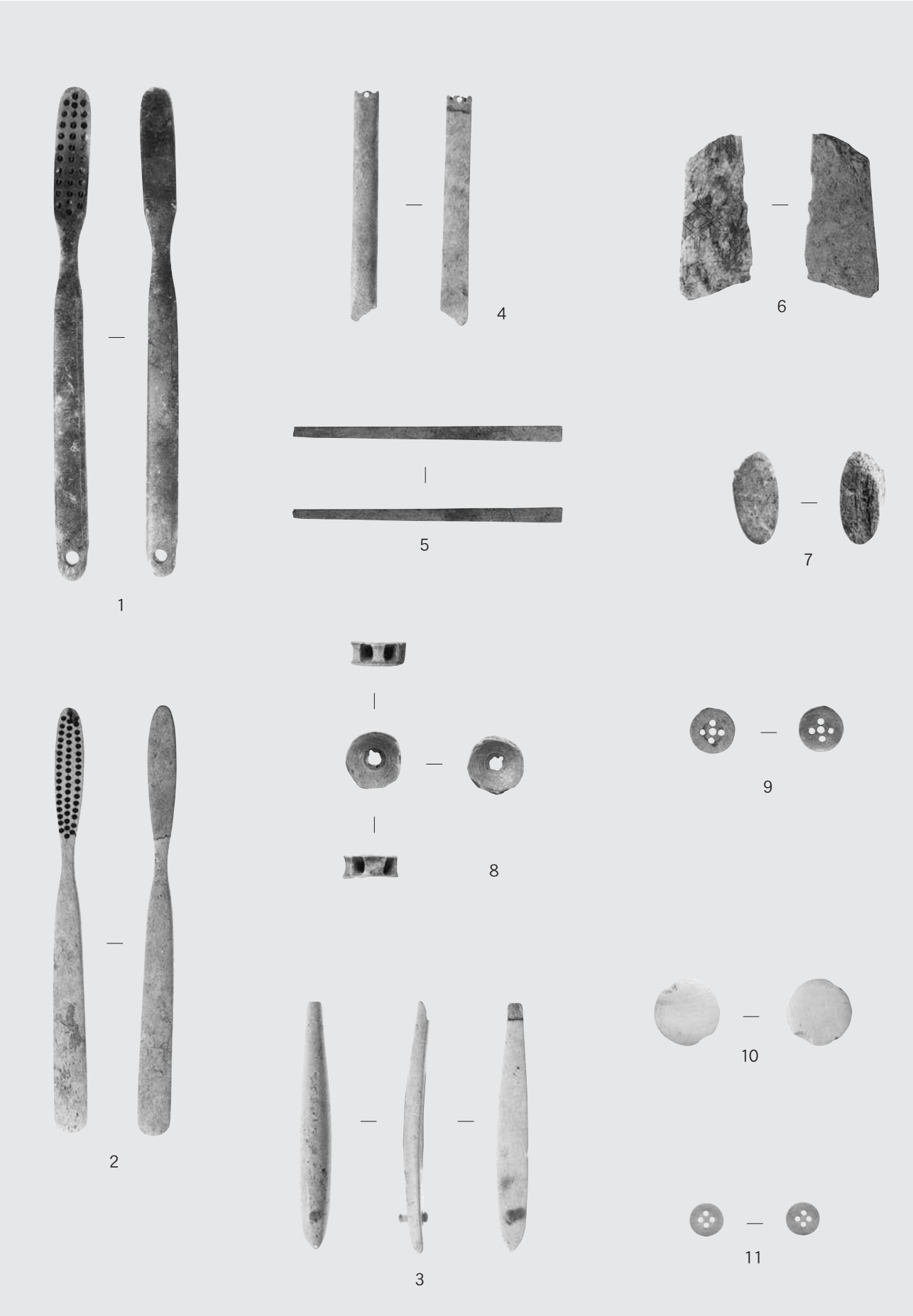
図版31　銭貨



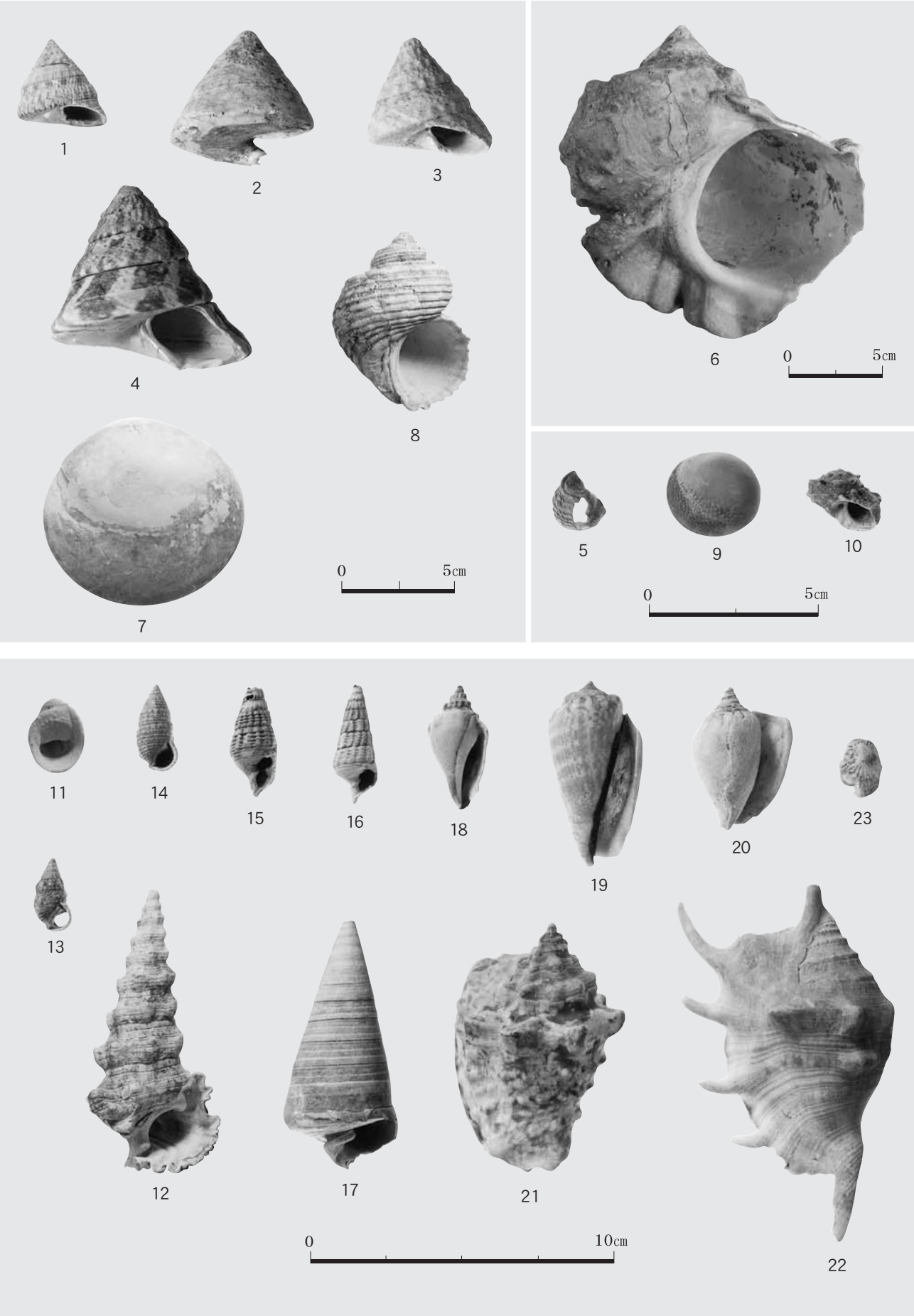


図版34　上：煙管・簪・金属製品　下：硯

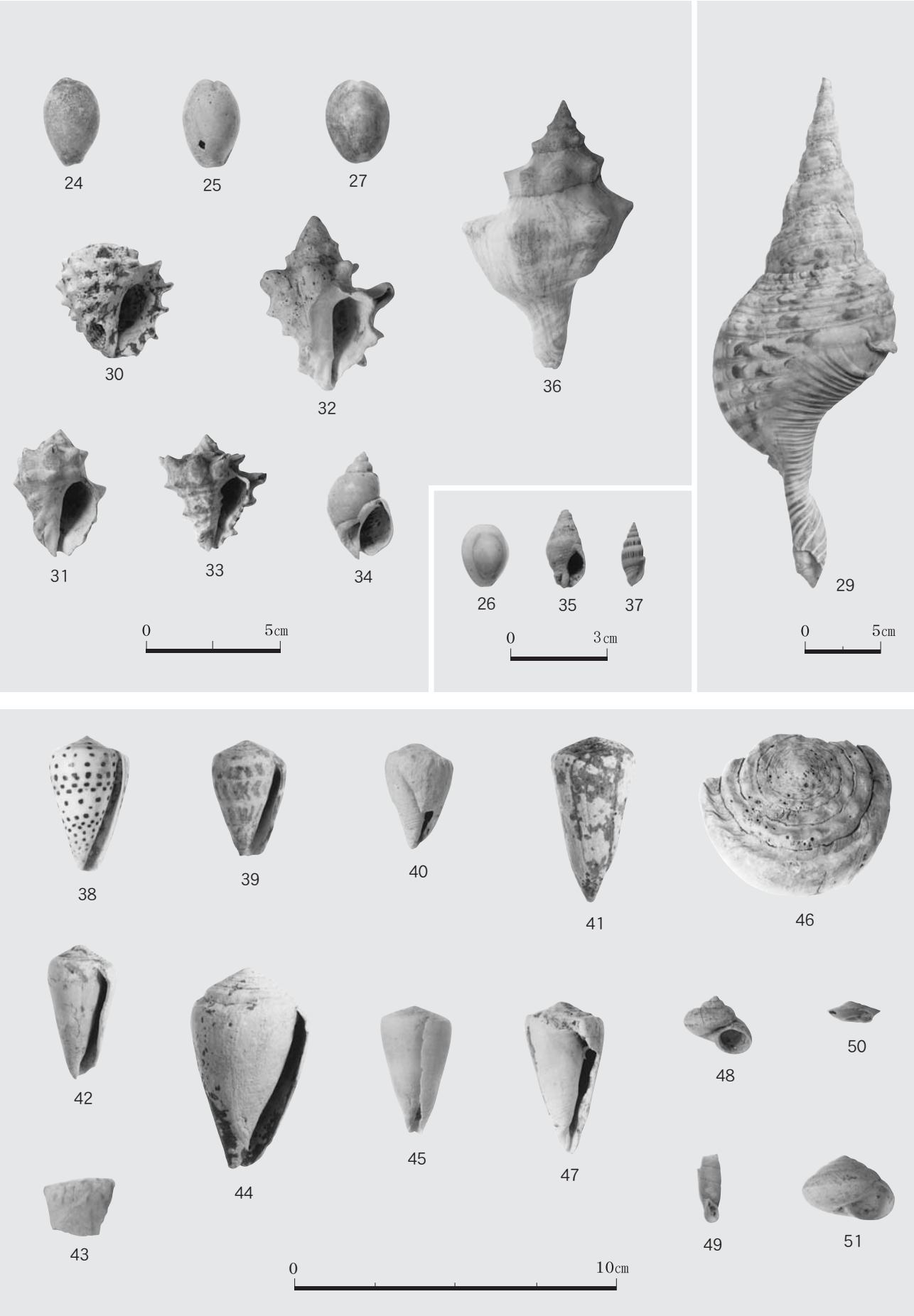
図版35　上：石製品１　　下：石製品２・石器・その他の製品



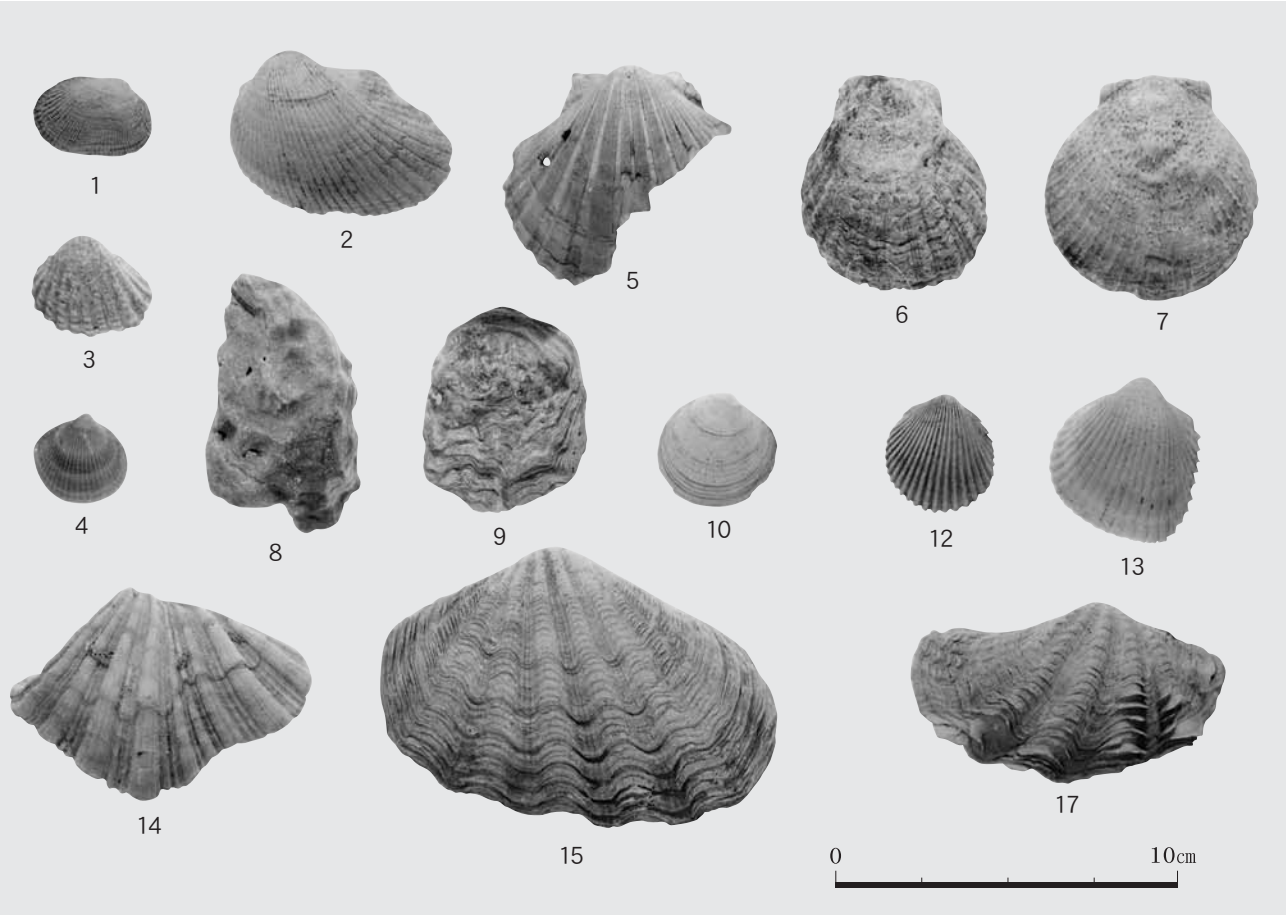
図版36　骨製品・貝製品

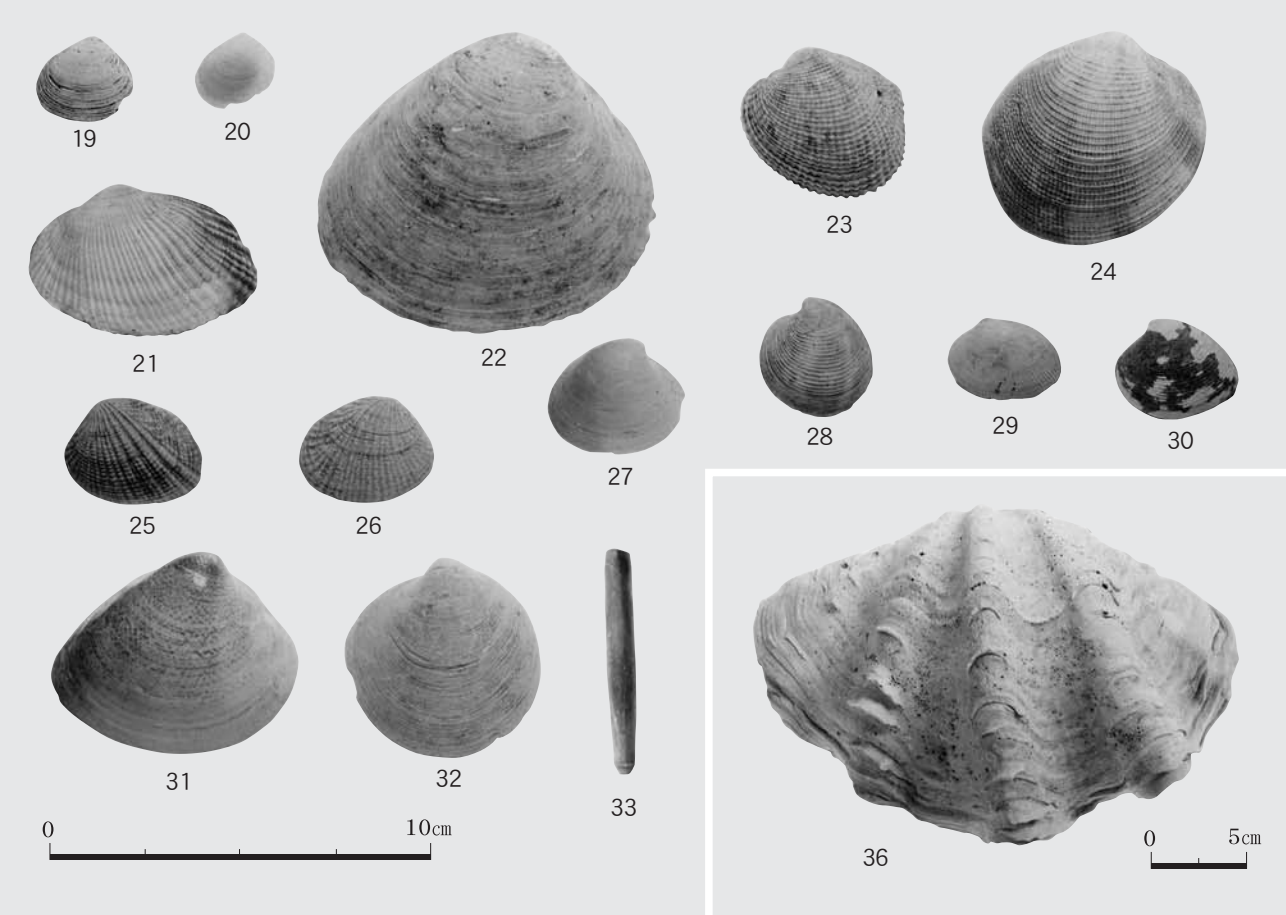


図版37　貝１　巻貝（番号は表と一致）



図版38　貝２　巻貝（番号は表と一致）





図版39　貝３　二枚貝（番号は表と一致）

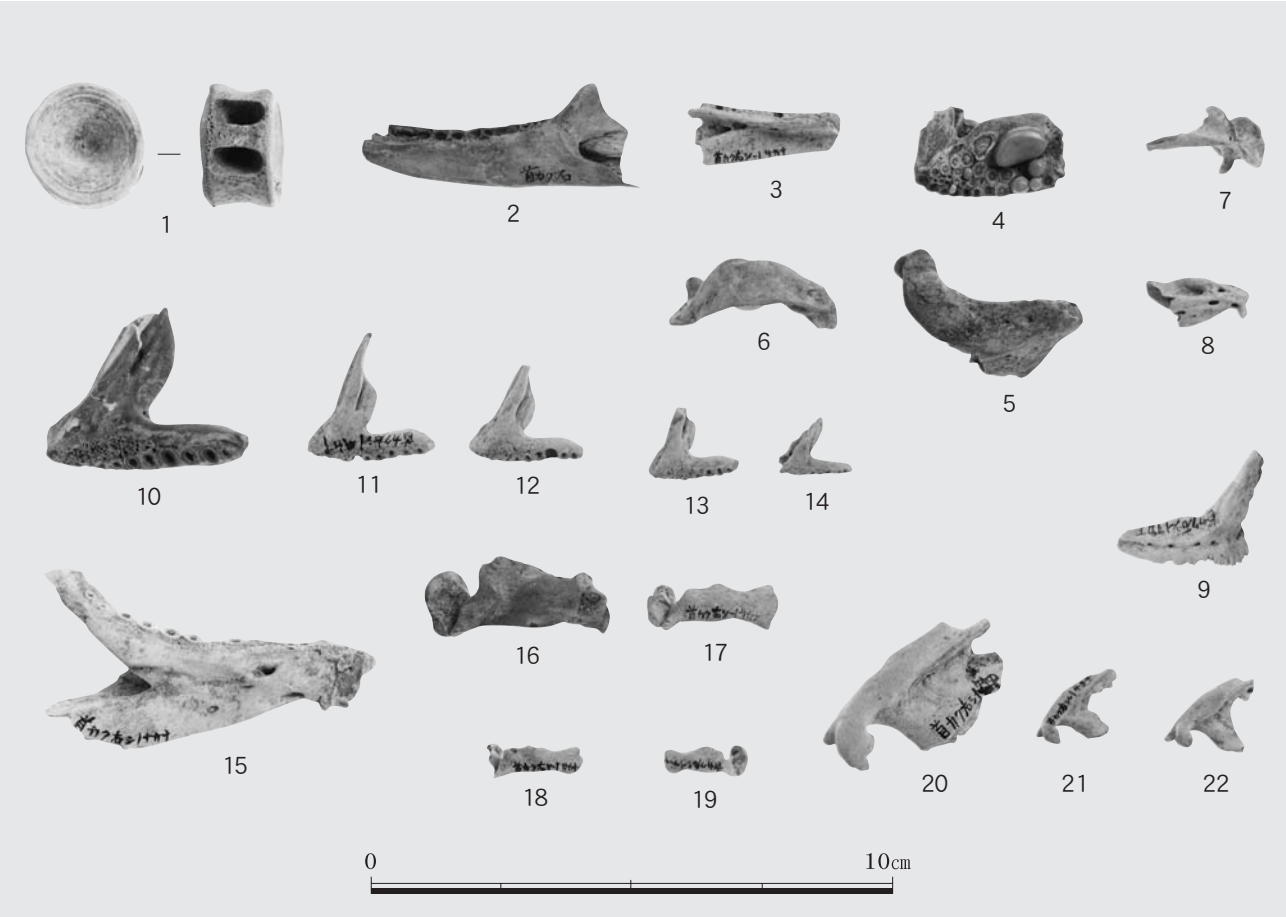
図版40

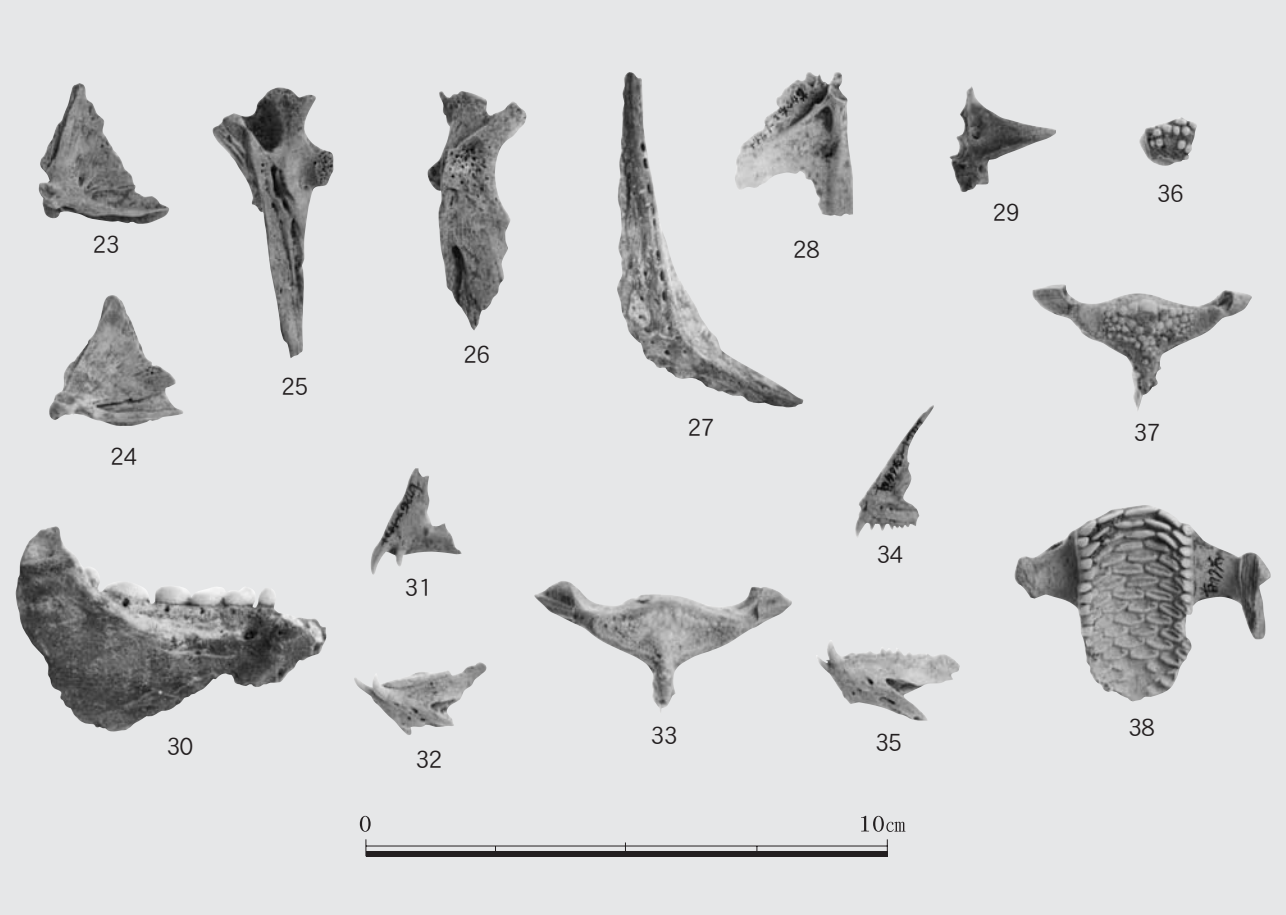
上

1．メジロザメ科の一種　脊椎骨
2．ウツボ科の一種　右　歯骨
3．ダツ科の一種　左　歯骨
4．タイ科　ヘダイ　右　前上顎骨
5．タイ科　ヘダイ　右　歯骨
6．タイ科　ヘダイ　左　主上顎骨
7．フエダイ科　キマダラヒメダイ　右　主上顎骨
8．フエダイ科の一種　右　歯骨
9．フエダイ科の一種　右　前鰓蓋骨
10．フエフキダイ科　ハマフエフキ　右　前上顎骨
11．フエフキダイ科　ハマフエフキ　右　前上顎骨
12．フエフキダイ科　ハマフエフキ　右　前上顎骨
13．フエフキダイ科　ハマフエフキ　右　前上顎骨
14．フエフキダイ科　ハマフエフキ　右　前上顎骨
15．フエフキダイ科　ハマフエフキ　左　歯骨
16．フエフキダイ科　ハマフエフキ　左　主上顎骨
17．フエフキダイ科　ハマフエフキ　左　主上顎骨
18．フエフキダイ科　ハマフエフキ　左　主上顎骨
19．フエフキダイ科　ハマフエフキ　右　主上顎骨
20．フエフキダイ科　ハマフエフキ　左　口蓋
21．フエフキダイ科　ハマフエフキ　左　口蓋
22．フエフキダイ科　ハマフエフキ　左　口蓋

下

23．フエフキダイ科　ハマフエフキ　右　方骨Ａ
24．フエフキダイ科　ハマフエフキ　右　方骨Ｂ
25．フエフキダイ科　ハマフエフキ　左　舌顎Ａ
26．フエフキダイ科　ハマフエフキ　右　舌顎Ｂ
27．フエフキダイ科　ハマフエフキ　右　前鰓蓋骨
28．フエフキダイ科　ハマフエフキ　左　主鰓蓋骨
29．フエフキダイ科　ハマフエフキ　右　角骨
30．フエフキダイ科　ヨコシマクロダイ　右　歯骨
31．ベラ科　コブダイ　左　前上顎骨
32．ベラ科　コブダイ　左　歯骨
33．ベラ科　コブダイ　下咽頭骨　切痕
34．ベラ科Ａ　左　前上顎骨
35．ベラ科Ａ　左　歯骨
36．ベラ科Ｂ　右　上咽頭骨
37．ベラ科Ｃ　下咽頭骨　切痕
38．ブダイ科　ナガブダイ　下咽頭骨


1
2
3
4
7
6
5
8
10
11
12
13
14
9
15
16
17
20
21
22
18
19
0
10cm

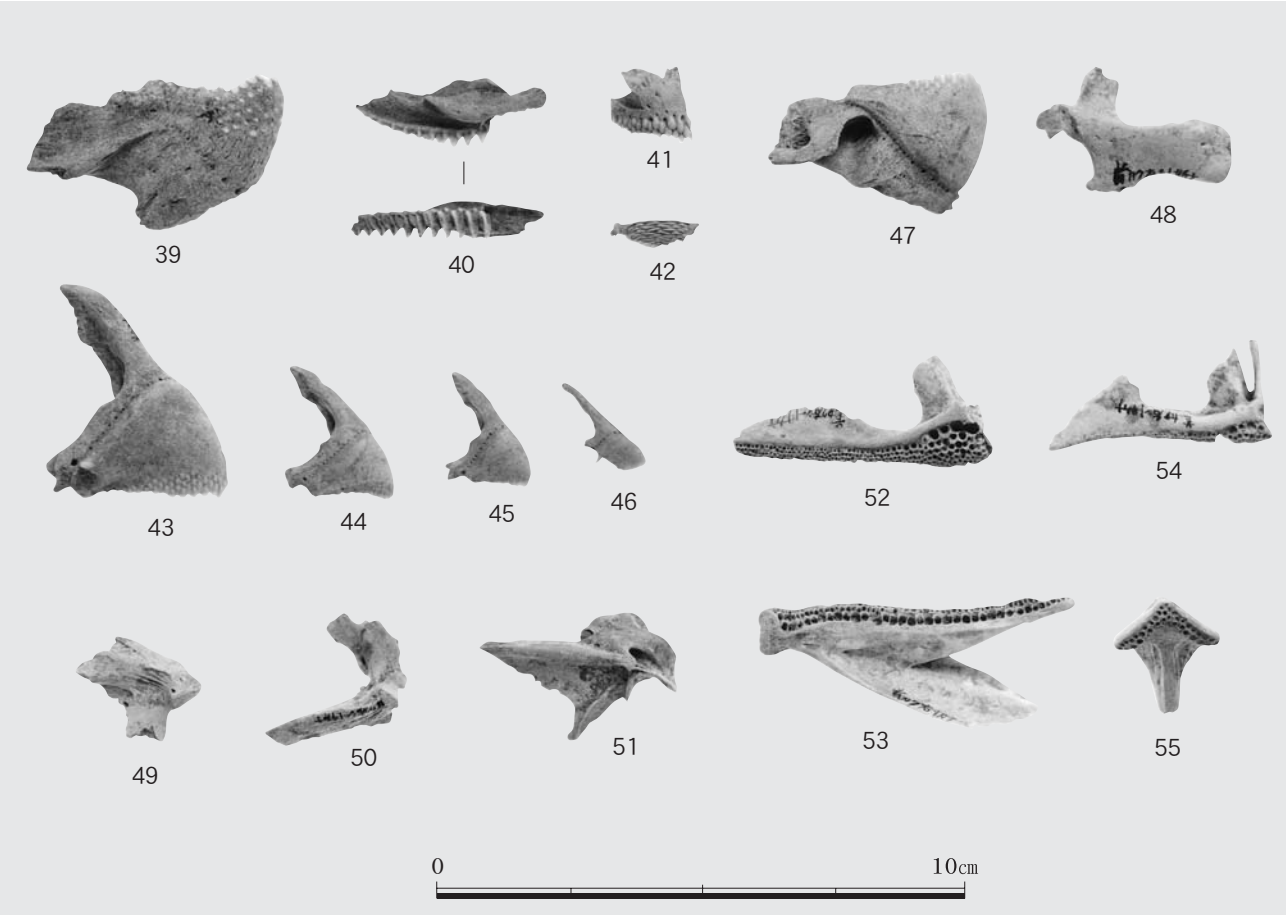

23
25
26
27
28
29
36
24
37
31
34
30
32
33
35
38
0
10cm

図版40　魚類１

図版41

上
39. ブダイ科　イロブダイ　右　歯骨
40. ブダイ科　ナンヨウブダイ　左　上咽頭骨
41. ブダイ科　ブダイ　左　歯骨
42. ブダイ科　ブダイ　下咽頭骨
43. ブダイ科の一種　右　前上顎骨
44. ブダイ科の一種　右　前上顎骨
45. ブダイ科の一種　右　前上顎骨
46. ブダイ科の一種　右　前上顎骨
47. ブダイ科の一種　右　歯骨
48. ブダイ科の一種　右　主上顎骨
49. ブダイ科の一種　右　口蓋
50. ブダイ科の一種　右　方骨
51. ブダイ科の一種　右　角骨
52. ハタ科の一種　左　前上顎骨Ａ
53. ハタ科の一種　右　歯骨Ａ
54. ハタ科の一種　左　前上顎骨Ｂ
55. ハタ科の一種　鋤骨

下
56. ハタ科の一種　左　主上顎骨
57. ハタ科の一種　副楔骨
58. ハタ科の一種　左　方骨
59. ハタ科の一種　左　舌顎
60. ハタ科の一種　右　擬鎖骨
61. ハタ科の一種　右　主鰓蓋骨
62. ハタ科の一種　左　角骨
63. ニザダイ科の一種　鱗
64. カマス科の一種　左　歯骨
65. カワハギ類の一種　背鰭棘
66. 科・種不明　左　歯骨
67. 科・種不明　左　歯骨
68. 科・種不明　右　歯骨
69. 科・種不明　鋤骨
70. 科・種不明　右　主上顎骨
71. 科・種不明　背鰭棘
72. 科・種不明　臀鰭血管棘
73. 科・種不明　第２臀鰭棘
74. 科・種不明　脊椎骨


39
40
41
42
47
48
43
44
45
46
52
54
49
50
51
53
55
0
10cm

56
58
59
60
63
57
61
62
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
0
10cm

図版41　魚類２

図版42

1．左　烏口骨
2．左　烏口骨
3．左　肩甲骨　遠位端
4．左　肩甲骨　遠位端
5．左　肩甲骨　遠位端
6．左　上腕骨　完存
7．左　上腕骨　近位端
8．右　上腕骨　骨体
9．左　上腕骨　骨体
10．右　上腕骨　遠位端
11．左　尺骨　近位端
12．右　尺骨　近位部～遠位端
13．左　中手骨
14．左　大腿骨　近位端
15．左　大腿骨　近位部～遠位部
16．左　大腿骨　近位部～遠位部
17．左　大腿骨　近位部～遠位部
18．右　大腿骨　遠位端
19．右　大腿骨　遠位端
20．左　大腿骨　遠位端
21．左　大腿骨　遠位端
22．左　脛骨　近位部～遠位部
23．右　脛骨　遠位端
24．左　中足骨　完存　♀
25．右　中足骨　近位部～遠位部　♀
26．左　中足骨　遠位端　♂

図版42　ニワトリ

図版43

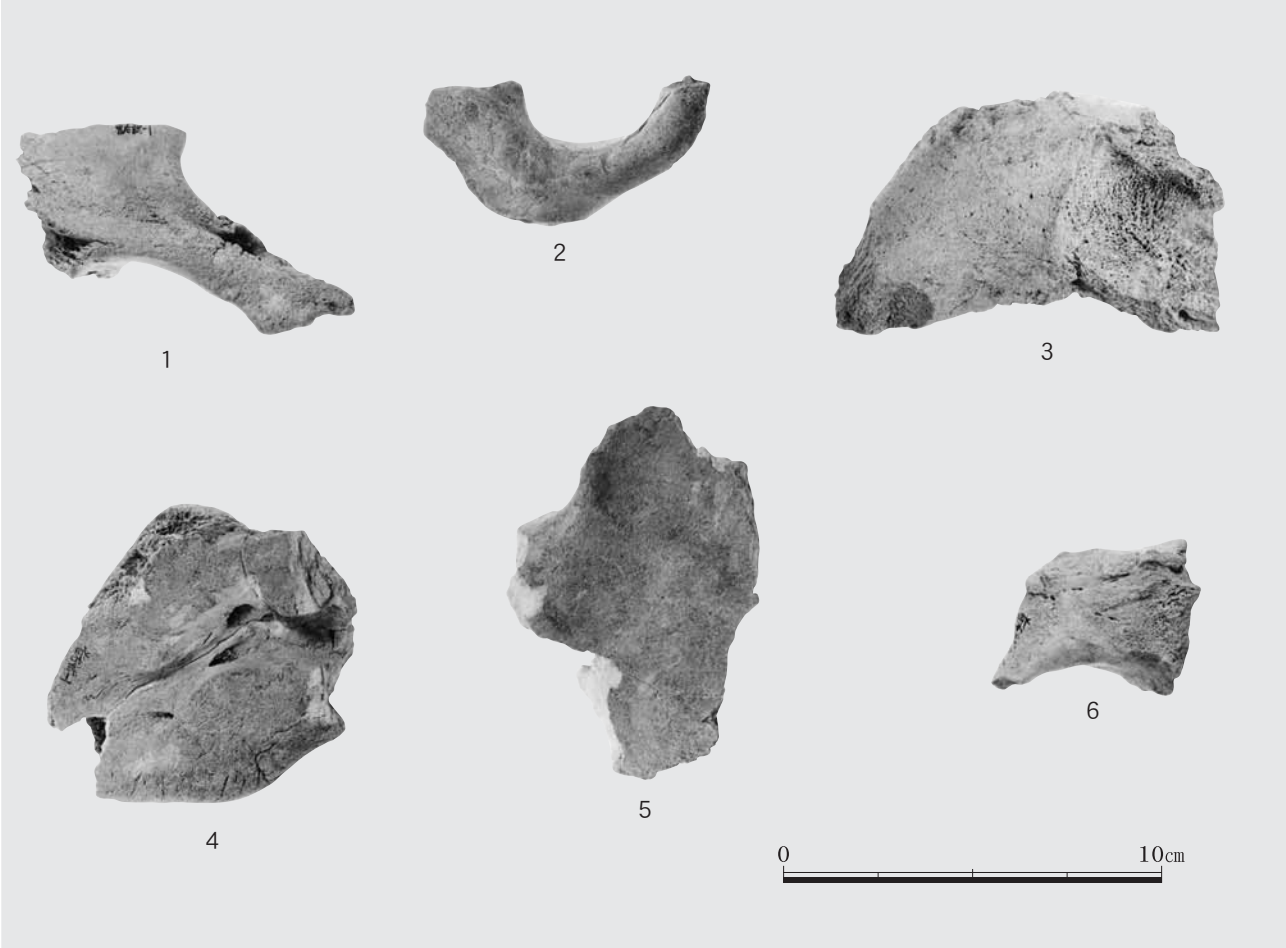
ウミガメ
１．肋骨板
２．肋骨板
イヌ
３．左　下顎骨　$dm_{2,4}$
４．右　下顎骨　$P_4M_{1,2}$
５．右　上腕骨　骨体
６．右　上腕骨　遠位部
７．左　橈骨　近位端
８．右　寛骨　腸骨部
９．右　脛骨　遠位端
10．左　踵骨
ネコ
11．右　寛骨　完存
12．左　踵骨

図版43　ウミガメ・イヌ・ネコ

図版44

上
ジュゴン
１．右　頭骨　前頭骨
２．右　頭骨　側頭骨頬骨突起
３．右　上顎骨　切歯骨　切痕
４．左　下顎骨
５．右　肩甲骨　切痕

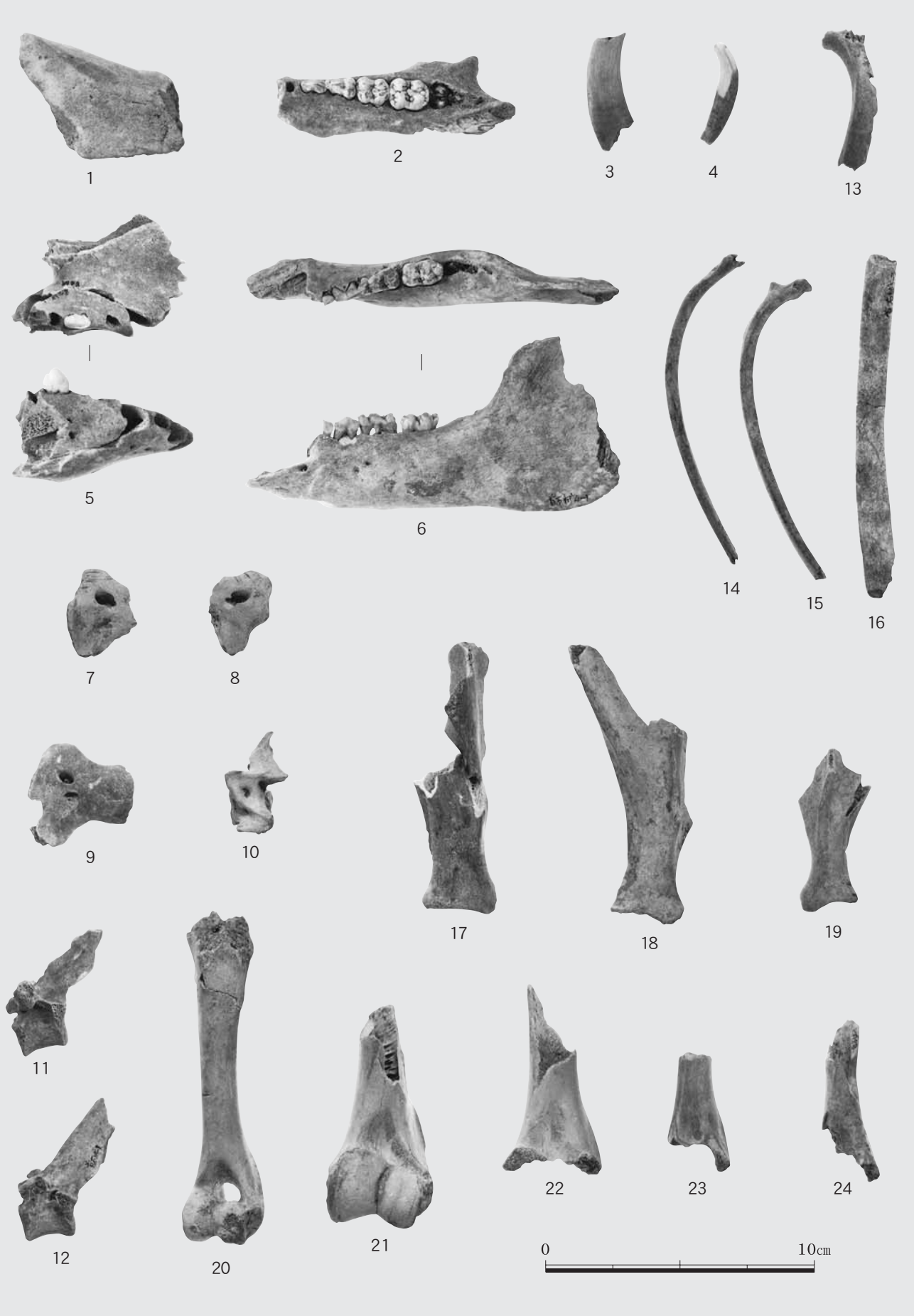
下
ウマ
１．上下顎不明　切歯Ｉ
２．左　下顎骨　P_2
３．左　下顎骨　P_3
４．左　下顎骨　$P_{3,4}$
５．左　下顎骨　$M_{1,2}$
６．右　上腕骨　近位骨端はずれ～遠位端　切痕
７．左　上腕骨　近位端～遠位端　切痕
８．右　脛骨　近位骨端はずれ～遠位端
９．末節骨



図版44　上:ジュゴン　下:ウマ

図版45

1．右　頭骨　頭頂骨
2．左　上顎骨　$dm^{2,3,4}M^{1,\langle 2\rangle}$
3．右　下顎骨　犬歯　♂
4．左　下顎骨　犬歯　♀
5．右　下顎骨　P_3
6．左　下顎骨　$dm_{2,3,4}M_{1,\langle 2\rangle}$
7．椎体　環椎
8．椎体　環椎
9．椎体　環椎
10．椎体　頸椎
11．椎体　胸椎
12．椎体　胸椎
13．左　肋骨　切痕
14．左　肋骨
15．右　肋骨
16．肋骨　切痕
17．右　肩甲骨　骨体～遠位骨端はずれ
18．右　肩甲骨　骨体～遠位骨端はずれ
19．左　肩甲骨　遠位端　切痕
20．左　上腕骨　近位骨端はずれ～遠位端
21．左　上腕骨　遠位端
22．左　上腕骨　遠位部　切痕
23．左　上腕骨　遠位部
24．左　上腕骨　遠位部



図版45　ブタ 1

図版46

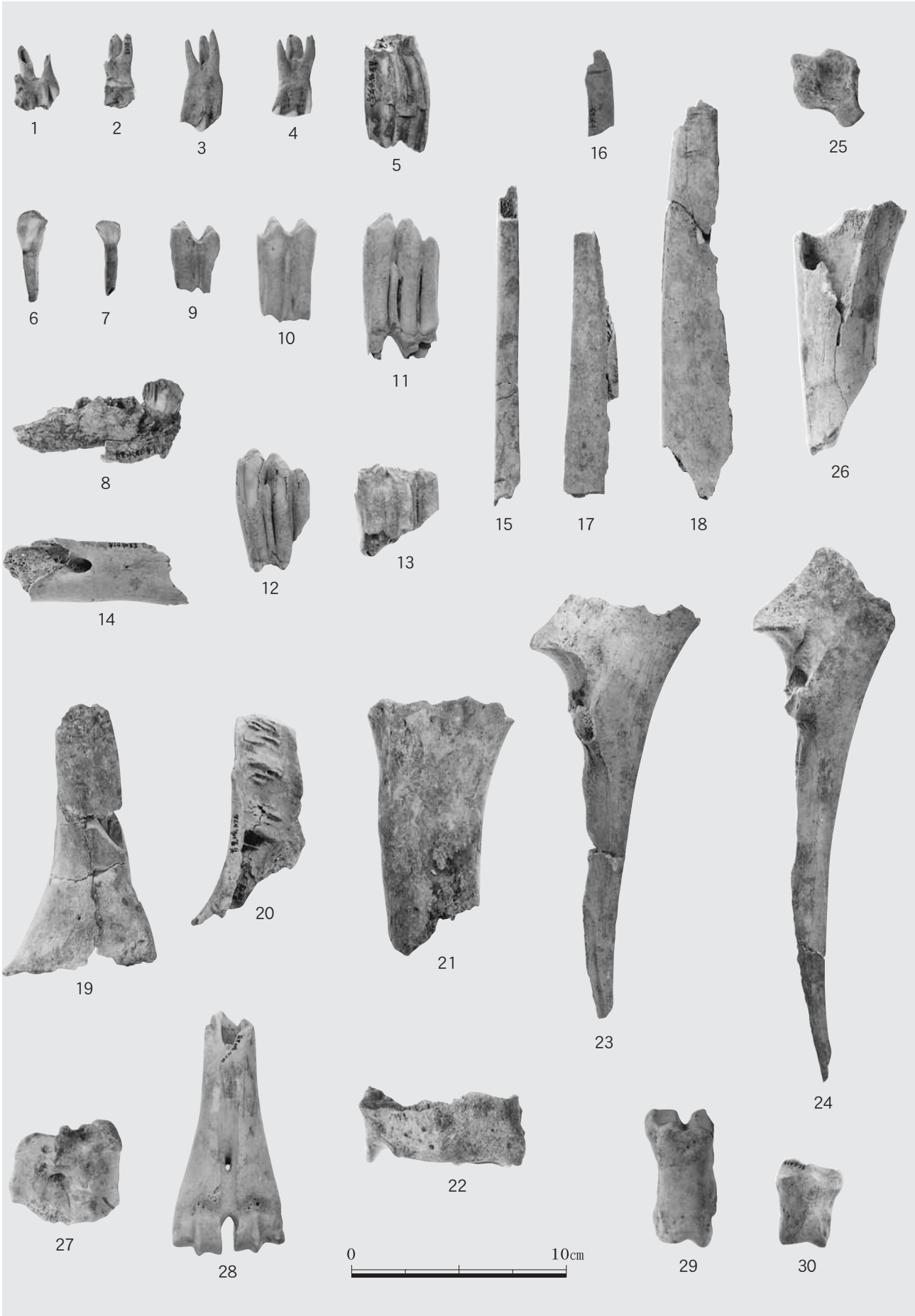
25. 右　橈骨　両端はずれ
26. 左　橈骨　近位端
27. 右　尺骨　骨体
28. 右　尺骨　近位部
29. 右　尺骨　近位部
30. 左　中手骨　Ⅲ
31. 右　中手骨　Ⅲ
32. 右　寛骨　腸骨部
33. 右　寛骨　腸骨部
34. 右　寛骨　臼部
35. 左　大腿骨　近位部～遠位部　半欠
36. 右　大腿骨　近位部～遠位部
37. 左　大腿骨　遠位骨端はずれ
38. 右　大腿骨　骨体
39. 右　大腿骨　遠位骨端のみ
40. 右　膝蓋骨
41. 右　脛骨　骨体～遠位骨端はずれ　切痕
42. 右　脛骨　近位骨端はずれ
43. 右　脛骨　遠位骨端はずれ
44. 左　腓骨　両端はずれ
45. 左　踵骨
46. 右　踵骨　切痕
47. 左　距骨　切痕
48. 右　距骨
49. 右　距骨
50. 左　中足骨　Ⅳ
51. 右　中足骨　Ⅳ
52. 右　基節骨

25
26
27
28
29
32
33
30
31
34
35
36
37
38
42
39
40
41
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
0
10cm

図版46　ブタ 2

図版47

1．右　上顎骨　dm^4
2．右　上顎骨　P^5
3．右　上顎骨　P^3
4．右　上顎骨　P^4
5．右　上顎骨　M^3
6．左　下顎骨　切歯Ⅰ
7．右　下顎骨　切歯Ⅰ
8．左　下顎骨　P_2
9．左　下顎骨　M_1
10．右　下顎骨　M_2
11．左　下顎骨　M_3
12．左　下顎骨　M_3
13．左　下顎骨　M_3
14．左　下顎骨
15．左　肋骨　切痕　（ウシ・ウマ）
16．肋骨　切痕　（ウシ・ウマ）
17．肋骨　切痕　（ウシ・ウマ）
18．肋骨　切痕　（ウシ・ウマ）
19．右　上腕骨　遠位部
20．右　上腕骨　遠位部　切痕　破片
21．左　橈骨　近位部
22．右　橈骨　遠位骨端のみ
23．左　尺骨　近位部～遠位部
24．左　尺骨　近位部～遠位部
25．左　手根骨　尺側
26．左　脛骨　近位部
27．左　足根骨　第４中心
28．右　中足骨　遠位端
29．左　基節骨
30．左　中節骨

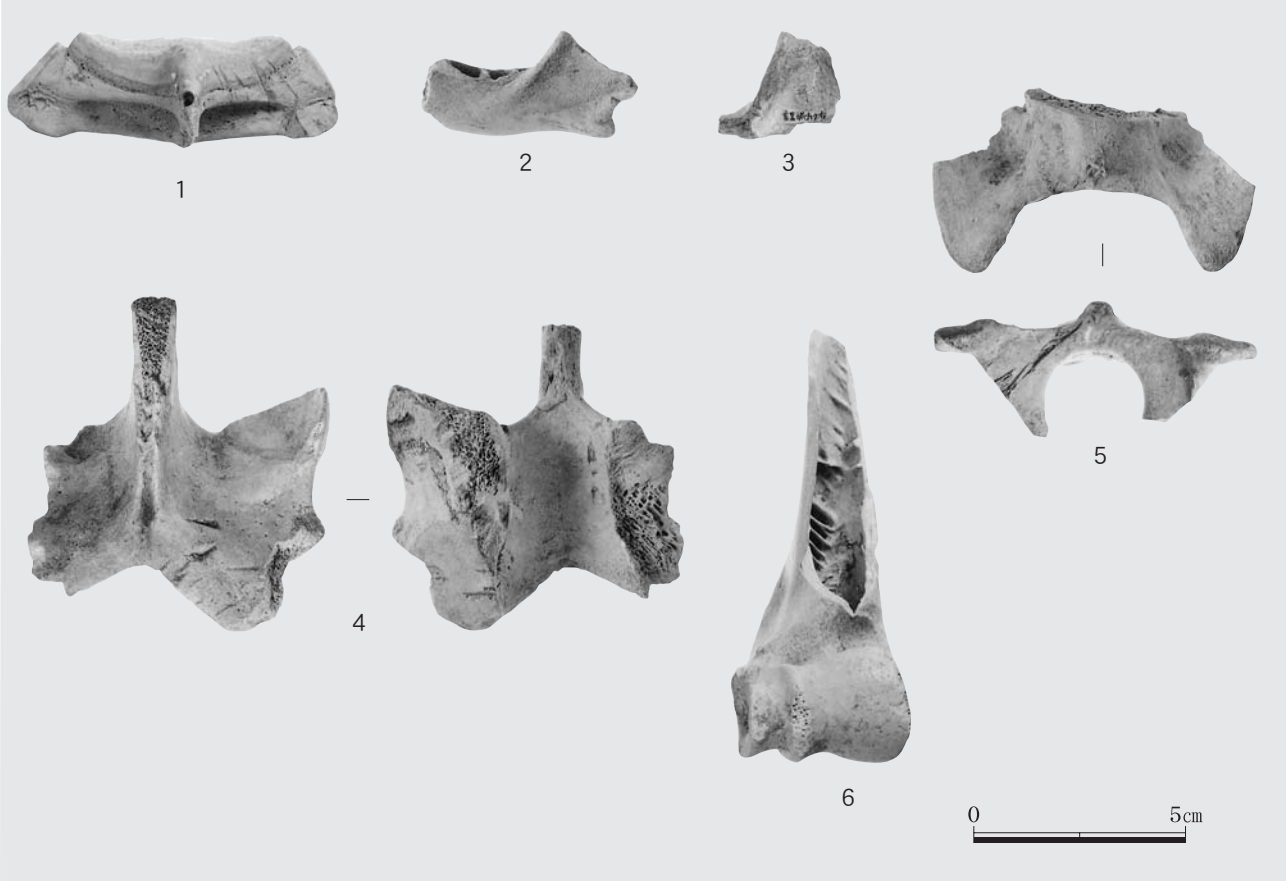

1
2
3
4
5
16
25
6
7
9
10
11
15
17
18
26
8
12
13
14
19
20
21
23
24
27
28
22
29
30
0
10cm

図版47　ウシ

図版48

上
ヤギ
１．右　上顎骨　M^2
２．右　下顎骨　M_3
３．左　下顎骨　M_3
４．右　上腕骨　骨体
５．右　橈骨　近位端～遠位端
６．左　橈骨　近位端～骨体
７．左　橈骨　近位端～骨体
８．左　尺骨　近位部
９．左　中手骨　近位端
10．左　寛骨　腸骨部
11．左　大腿骨　骨体
12．右　中足骨　近位端
シカ
13．角

下
魚類
１．ベラ科　コブダイ　下咽頭骨
イヌ
２．左　下顎骨
３．左　下顎骨
ジュゴン
４．椎体　棘突起
シカ
５．椎体　環椎
６．右　上腕骨　遠位端



図版48　上：ヤギ・シカ　下：切痕をもつ骨

第Ⅴ章　人骨

【はじめに】

『首里城跡―右掖門及び周辺地区』の発掘調査において発見された成人男性の人骨について報告する。『首里城跡―右掖門及び周辺地区』の発掘調査は、1990年に国営公園整備事業に伴って実施された調査で、沖縄開発総合事務局からの委託を受けた沖縄県教育委員会が主体となって行われたものである。人骨の年代は考古学的所見から、グスク時代と推定されている。グスク時代は文化的にも、また、それらの文化を担った人びとの形質的特徴においても大きな画期であったと考えられており、琉球の歴史解明にとって重要な時代である。しかしながら、これまでに発見されているグスク時代人骨は少なく、形質変化の詳細は十分に解明されていない。今回発見された人骨はグスク時代に関する貴重な情報を提供し得る好資料と思われるので、以下にその概略を報告する。

【人骨発見の経緯】

右掖門は首里城の内郭に位置する城門のひとつで、歓会門から長い石畳道を登りつめた所に建っており、淑順門へと通じている。「よそへちの御門」とも称され、かつては御内原への通用門として使用された。遺構の保存状態は良好であり、遺物も豊富で貿易陶磁器をはじめ様々な製品が出土している。

人骨は右掖門から約７ｍ程西の内郭石積の中から検出された。城壁の復元整備事業に伴い、内郭石積みの摘出を実施したところ、内郭石積内から琉球石灰岩が確認され、さらに石灰岩の岩陰直下を掘り下げたところ、グスク土器と人骨が検出された。

人骨の出土状態

【出土状態および保存部位】

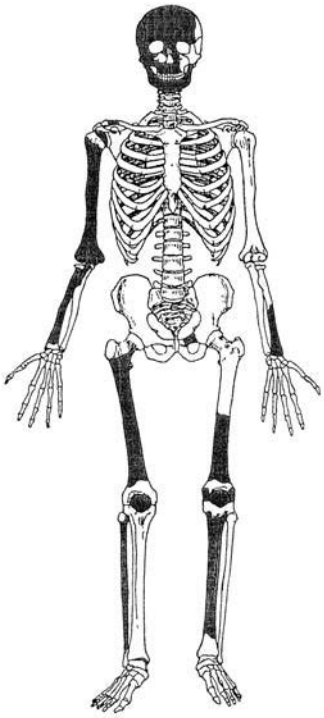
人骨の保存部位のうち主要な部分を第49図に示す。左上肢骨の破損が著しいが、椎骨片、肋骨片なども検出されており、ほぼ１体分の全身骨が確認できた。保存状態は良好である。残存する歯の歯式を以下に示す。

M^3 M^2 ○ P^2 P^1 C I^2 I^1	I^1 I^2 C P^1 P^2 M^1 M^2×
M_3 M_2 △ ○ P_1 ○ ○ ○	○ ○ C P_1 P_2 M_1 ○ M_3

○　歯槽開放　　×　歯槽閉鎖　　△　歯根のみ

本人骨の出土状態は解剖学的に正しい位置関係を保っていない。頭蓋骨は狭い岩陰で底部を上に、下顎骨は後頭部に接した状態で出土している。また、上肢骨も下肢骨も関節した位置関係を保っているものはない。しかし、全体的には、本来の位置に近いところから検出されており、骨になった後に何らかの理由で、奥壁側に軽く寄せて片づけられているように見える。骨の保存状態が良好であること、骨が動かされていることなどから考えると、骨の周囲には継続的に空間が存在していたことになり、この人骨が岩陰に風葬されていた可能性を示唆している。グスク時代の葬制については、土壙墓や木棺による埋葬の例[1)]が知られているほか、那覇市天久古墓群では風葬の例が報告されている[2)]。琉球列島における風葬の始まりについては不明な点が多く、まだまだ議論の多いところであるが、本例は今後の研究に多くの示唆を与えるものと思われる。

以上の人骨のほかに、成人の下顎骨小片が１片と右下顎乳臼歯１本が



第49図　人骨の出土部位

検出されているが、詳細は不明である。したがって、ここではまとまって出土した成人男性について報告する。形質の特徴を知るための比較資料としては、沖縄先史時代人[3]、銘苅古墓グスク時代人[4]、ヤッチのガマ近現代人[5]、津雲縄文人[6) 7) 8)]、渡来系とされる金隈弥生人[9]、西南日本現代人[10] を用いた。通常の計測はKnussman(1988)[11] に、顔面平坦度はYamaguchi（1973）[12] に従った。

【人骨の所見】

性別・年齢の推定：

頭蓋骨の眉弓および外後頭隆起の発達が良好で、四肢骨も頑丈であることから、本人骨は明らかに男性である。年齢は、歯牙の咬耗度および頭蓋主要縫合の閉鎖程度など[13] から、成年後半から熟年にかけて（３５～４５歳位）と推定される。

頭蓋骨：

頭蓋骨の主要計測値を第40表に、非計測的形質の観察結果を第41表に示す。

第40表　頭蓋主要計値

Martin's NO.	計測項目	計測値
1	頭蓋最大長	179
5	頭蓋基底長	96
9	最小前頭幅	91
17	バジオン・ブレグマ高	(128)
40	顔長	91
48	上顔高（alv）	(68)
51	眼窩幅（r）	43
52	眼窩高（r）	32
54	鼻幅	(25)
55	鼻高	48
65	下顎関節突起幅	134
66	下顎角幅	100
68	下顎骨長	71
69	オトガイ高	37
69(3)l	下顎体厚（l）	16
70l	下顎枝高（l）	64
71l	下顎枝幅（l）	34
52／51	眼窩示数（r）	74.4
54／55	鼻示数	52.1
71／70	下顎枝示数（l）	53.1
	顔面平坦度	
	前頭骨弦	100.9
	前頭骨垂線高	14.3
	前頭骨平坦度示数	14.2

（　）推定値　　(mm)

第41表　頭蓋非計測的形質の観察

	項　　目	右	左
1	前頭縫合	－	
2	眼窩上神経溝	－	－
3	眼窩上孔	／	＋
4	二分頬骨	－	／
5	内側口蓋管骨橋	－	－
6	ラムダ小骨	－	
7	インカ骨	－	
8	横後頭縫合(10mm＜)	－	／
9	矢状洞溝左優位	－	
10	顆管	／	＋
11	舌下神経管骨橋	－	－
12	アステリオン小骨	－	／
13	外耳道骨腫	－	／
14	頭頂切痕骨(5mm＜)	－	／
15	副オトガイ孔	－	－
16	顎舌骨筋神経管骨橋	－	－

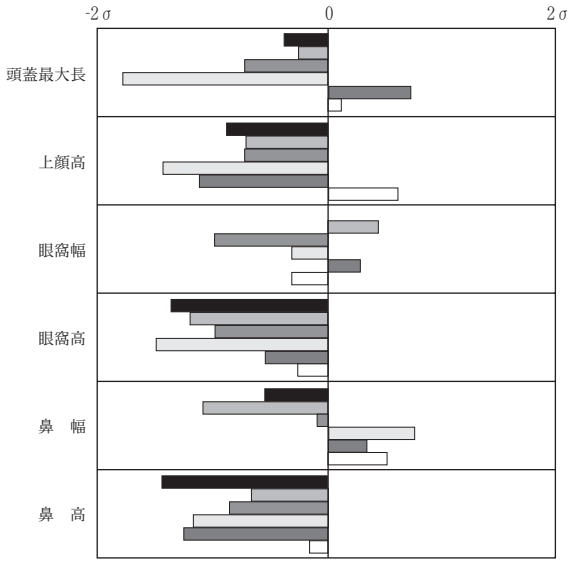
＋ 有　　－ 無　　／ 観察不能

頭蓋骨の骨質は頑丈で筋付着部の発達が良好である。頭蓋の左側が破損しているため正確な頭形は不明であるが、全体的な印象ではおそらく中頭型に属すると思われる。いずれにしても、先史時代人に特徴的な極端な短頭傾向はみられない。顔面も左頬骨、鼻骨、左右上顎骨の一部を破損しているが、低顔、低眼窩の傾向が認められる。

第50図は、本人骨の特徴をより分かり易くするために、他の集団と比較したものである。比較に使った集団は沖縄先史時代人、銘苅古墓グスク時代人、ヤッチのガマ近現代人、津雲縄文人、渡来系とされる金隈弥生人である。西南日本現代人の計測値を基準にして、基準値からどのくらい違っているかを標準偏差単位（σ）で示している。沖縄各時代の集団は全体にマイナス側（左）に偏れており、サイズが小さいことを示している。

まず、脳頭蓋の結果をみると、頭蓋最大長が小さいのは沖縄各時代に共通する特徴であるが、短頭傾向の強い沖縄先史時代人の最大長は極端に小さいことが分かる。右掖門人骨の最大長は沖縄先史時代人およびヤッチのガマ近現代人より大きく、同時代の銘苅グスク時代人に近い。中世は日本列島全体に長頭化傾向がみられた時代であるが、本例は沖縄のグスク時代にもその影響が及んでいた可能性を支持するように思われる。

顔面頭蓋については、日本人の系統の違いを表すと考えられている、上顔高、眼窩部および鼻部の計測値を比較した。面長な顔が特徴の渡来系金隈弥生人は現代人よりも上顔高が高く、グラフはプラス（右）側に偏れているが、他はすべてマイナスで顔の高さが低かったことを示している。しかし、右掖門人骨は低顔ではあるが、沖縄先史時代人に比べるとグスク時代以降の沖縄の集団に近い。また、眼窩や鼻部は高径が小さいという沖縄に共通する特徴を保持しているようであるが、全体としては、同時代の銘苅古墓人骨と共通する特徴を持っており、すでに新しい時代の特徴を示しているように思われる。顔面平坦度は前頭骨平坦度のみ計測可能だったが、沖縄の他の集団と同様に扁平である。非計測的形質は１６項目について観察できたが、特記すべき変異は見られなかった。



50図　頭蓋計測値の比較（西南日本現代人基準）

■ 右掖門　□ 銘苅古墓　■ ヤッチのガマ
□ 沖縄先史時代　■ 津雲縄文　□ 金隅弥生

体部骨：

1）上肢骨

上腕骨と橈骨の計測値が得られているが、どちらも全体に頑丈で、筋付着部の発達が良好である。計測値を第42表に示す。上腕骨中央最大幅（25）、最小幅（19）ともに、銘苅古墓（22.1、16.2）やヤッチのガマ（21.6、16.0）よりも大きく、頑丈な上肢を持っていた沖縄先史時代人（26.1、17.8）に匹敵する大きさである。橈骨は幅径が大きく、前腕の筋が発達していたことを示している。

第42表　上肢骨主要計測値

Martin's NO.	計測項目	右	左
	上腕骨		
4	下端幅	61	
5	中央最大径	25	
6	中央最小径	19	
7	最小周	63	
7a	中央周	73	
6／5	体断面示数	76.0	
	橈骨		
3	最小周	39	38
4	体横径	18	18
5	体矢状径	10	10
5(6)	下端幅		34
5／4	体断面示数	55.6	55.6

（mm）

第43表　下肢骨計測値

Martin's NO.	計測項目	右	左
	大腿骨		
6	体中央矢状径	26	26
7	体中央横径	27	27
8	体中央周径	85	85
9	体上横径	32	
10	体上矢状径	22	
6／7	体中央断面示数	96.3	96.3
10／9	体上断面示数	68.8	
	脛骨		
8a	栄養孔位最大径		32
9a	栄養孔位横径		23
10a	栄養孔位周		89
10b	最小周		71
9a／8a	栄養孔位断面示数		71.9
	腓骨		
2	中央最大径	(15)	
3	中央最小径	(13)	
4	中央周径	(45)	
4a	上端下最小周径	34	
3／2	中央断面示数	(86.7)	

（　）推定値　（mm）

2）下肢骨

下肢骨の計測値を第43表に示す。大腿骨は後面の殿筋粗面や粗線が明瞭で、殿部や大腿の筋が発達してい

たことを示している。しかしながら、中央部の計測値は前後径よりも横径が大きく、柱状傾向は認められない。脛骨もヒラメ筋線が明瞭で全体に頑丈であるが、扁平傾向は認められない。

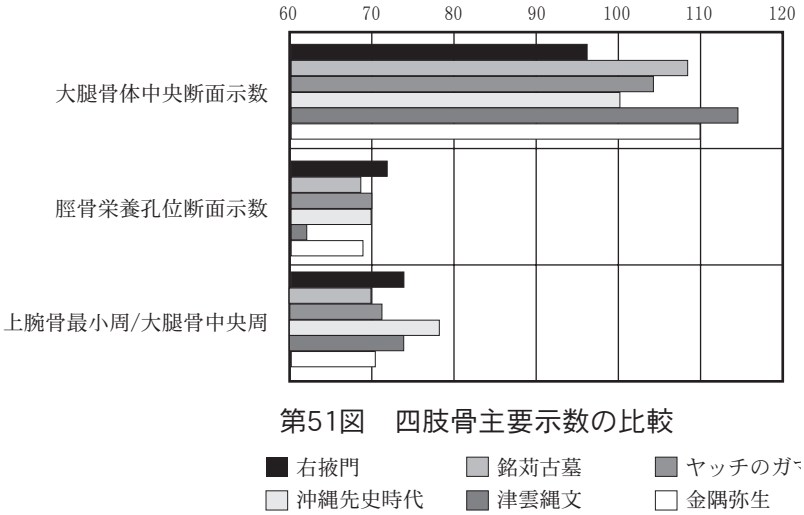
3）身長の推定

ほとんどの四肢骨が破損を受けており、身長の推定に必要な最大長の計測が可能なものはなかった。しかし、およその体格でも推定出来れば、当時の人びとをより具体的に知るための情報としては有益と思われる。そこで、最も保存の良かった大腿骨について、足りない部分を完全な大腿骨標本によって補いながら、最大長の推定（40～41cm程度）を行い、ピアソンの式を用いて身長の推定を試みた。その結果は156?158cmとなり、全体にやや小柄でがっしりした体格だったことが推測された。

4）四肢骨の特徴

頭蓋骨が系統関係に関する情報を多く持っているのに対して、四肢骨は生活に関する情報を多く持っている。筆者等は沖縄先史時代人の生活を知るために、四肢骨形態の分析を行い、大略以下のような結果を得ている[3)]。

沖縄先史時代人は全体的に小柄ではあるが、上肢が良く発達したがっしりした体格である。また、大腿骨の柱状性や脛骨の扁平性は縄文人より弱い。縄文人における大腿骨の柱状性や脛骨の扁平性は、彼等が野山を駆けめぐって狩猟や採集をしていたことを物語る特徴だと考えられている[14)]。沖縄先史時代人の四肢骨断面形態はどちらかというと稲作農耕をしていた渡来系の弥生人のそれに近く、少なくとも津雲縄文人とは違う生活形態を持っていた可能性がある。しかし、下肢に対して上肢が相対的に良く発達している点では、沖縄先史時代人は弥生人とも違っている。上肢が発達するのは漁民に見られる特徴といわれており、沖縄先史時代人は珊瑚礁の海を主たる生業の場とした生活を送っていたことを物語っているのではないかと推定される。



第51図　四肢骨主要示数の比較

第51図は同様に本例の特徴を他の集団と比較したものである。大腿骨の柱状傾向を示す中央断面示数はすべての沖縄集団が小さな値を示している。脛骨の扁平性を示す栄養孔位断面示数はすべての沖縄集団が縄文人よりも渡来系弥生人の値に近くなっている。また、相対的な上肢の発達程度を示す示数（上腕骨最小周/大腿骨中央周）は、先史時代人ほどではないが、銘苅やヤッチのガマよりも大きく、本人骨が発達した上肢を持っていたことを示している。

【特記事項】

本人骨の右前頭部には外傷によると思われる病変が認められる（図版49）。頭蓋骨は外板、板間層、内板の３層構造からなっているが、本例の傷は外板から板間層にまで達する深いものである。傷は４センチの長さに及んでいるが、傷口には周囲の骨組織が増殖した明らかな治癒過程が認められ、この男性が受傷後も長く生存していたことを物語っている。また、傷は表面に直角にではなく、斜めに深く入り込んでいる。このような傷の状態から考えると、最も可能性があるのは鋭くてある程度の重量のある利器による傷ということになる。時代背景を考え合わせると、刀創と考えるのが最も妥当であろう。少し想像を逞しくして、刃部を顔の中心方向へ少し寝かせたような状態で、右の額の生え際から眼窩の内側縁に向かって振り下ろされた刀による傷と考えると理解しやすいかも知れない。骨増殖の程度も正中側が顕著で、切り込まれた側がダメージを多く受けたことを示している。正面からの攻撃に対しては反射的に上肢で防御するものであるが、右上腕骨にも橈骨にも刀創は認められない。あるいは振り向きざまに受けた傷という推測も成り立つかも知れない。

刀創は内板にまでは達していないので、もちろん外傷は脳には及んでいない。しかし、眼窩の上内側縁には眼窩上神経、眼窩上動静脈が走っており、これらが損傷を受けたことは確実である。相当な出血を伴ったものと思われる。一方、受傷部のすぐ裏側には副鼻腔の一つである前頭洞が位置しているが、前頭洞内面には明瞭な骨増殖の痕跡は認められず、残存する眼窩内面にも炎症の痕跡が見られないなど、炎症の痕跡は前頭骨の外板に集中している。傷は今一歩のところで深部への損傷を免れているようにみえる。この男性が受傷後も生存できたことに関しては、受傷時の年齢が比較的若く、治癒力が旺盛であったことは勿論であるが、このような幸運も重なったのではないだろうか。

【まとめ】

国営公園整備事業に伴って1990年に実施された、沖縄県教育委員会による『首里城跡―右掖門及び周辺地区―』の発掘調査で、グスク時代の男性人骨が出土した。

人骨は成年後半から熟年前半くらいの年齢と推定され、基本的にはグスク時代から近現代の沖縄人に近い形質的特徴を持っていた。しかし、顔面の高径が低い点など沖縄先史時代人の特徴も保有しているようであり、現代人への過渡期の人骨と位置づけられるかも知れない。体格は小柄ではあるが、特に上半身が良く発達した頑丈な体つきだったようである。四肢骨断面形などの特徴も沖縄の集団に共通するものだった。

特記すべき事項として、本例の前頭部には明瞭な刀創が認められた。このような刀創例は鎌倉出土の中世人骨にしばしば見かけられ、材木座遺跡をはじめ由比ヶ浜南遺跡などから出土した中世人骨の刀創例が知られている[15)]。本例も鎌倉の中世人とほぼ同時代に属しており、背景にこのような緊張した社会があったことは十分に考えられることである。

沖縄のグスクから発見された人骨の例としては、勝連城の幼児骨[16)]や浦添城の女性人骨[17)]が知られているが、いずれも城壁の近くから発見されたことから“人柱”の可能性が指摘されている。本例が内郭石積内に葬られていた意味を推測することは難しいが、刀創をもつ屈強な男性である点で、弱者を葬った他の２例とは違っていた可能性がある。グスク時代の社会を知る上で非常に興味深い課題であるが、さらなる評価については今後の資料の追加を待つことにしたい。

謝辞

人骨調査の機会を与えていただいた、沖縄県立埋蔵文化財センターの皆さまに心からの謝意を表します。

参考文献

1）沖縄県立埋蔵文化財センター（2001）「伊佐前原第一遺跡」沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第４集.

2）那覇市教育委員会（1999）「銘苅古墓群（Ⅱ）」那覇市文化財調査報告書第４０集.

3）土肥直美，泉水 奏，瑞慶覧朝盛，譜久嶺忠彦 （2000）骨からみた沖縄先史時代人の生活．高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会編，琉球・東アジアの人と文化（下巻），高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会，pp.431-448.

4）分部哲秋，佐伯和信，弦本敏行，長島聖司（1999）那覇市銘刈古墓群Ｂ地区３号及び４号墓出土の人骨.「銘苅古墓群（Ⅱ）」那覇市文化財調査報告書第４０集，那覇市教育委員会，pp.191-232.

5）譜久嶺忠彦，土肥直美，石田　肇，瑞慶覧朝盛，泉水　奏，佐宗亜衣子，比嘉貴子（2001）　ヤッチのガマ・カンジン原古墓群出土の人骨.「ヤッチのガマ・カンジン原古墓群」沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第６集，沖縄県立埋蔵文化財センター，pp.345-385.

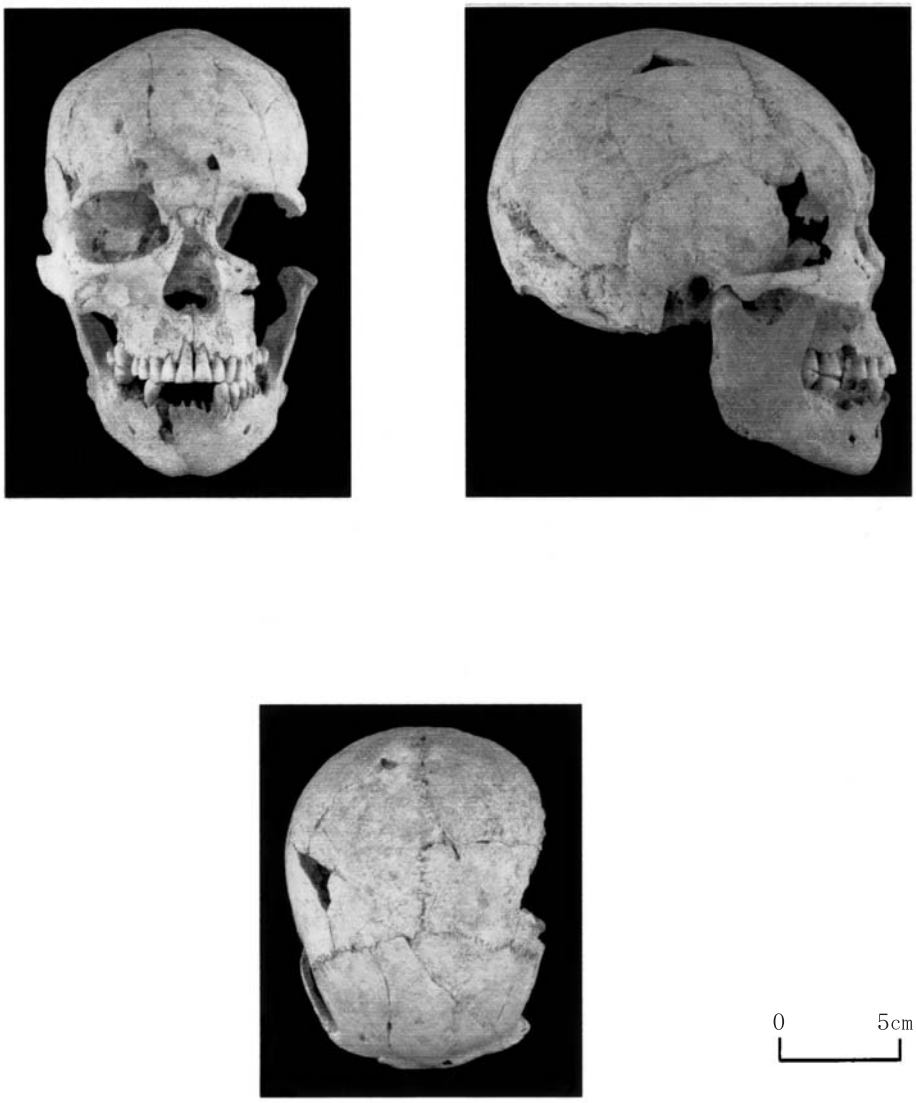
6）清野謙次，宮本博人（1925）津雲貝塚人人骨の人類学的研究　第二部頭蓋骨の研究．人類学雑誌41（3, 4）

7）清野謙次，平井隆（1928a）　津雲貝塚人人骨の人類学的研究　第三部上肢骨の研究．人類学雑誌43（3附），pp. 179-301.

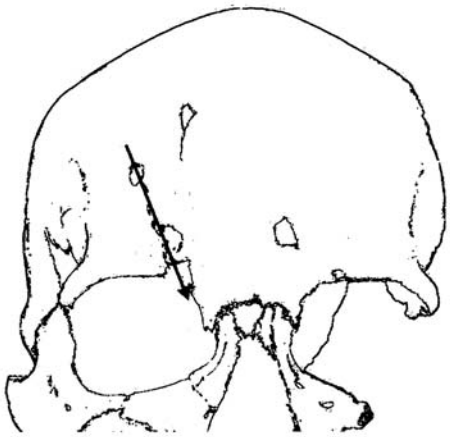
8）清野謙次，平井隆（1928b）津雲貝塚人人骨の人類学的研究　第四部下肢骨の研究．人類学雑誌43（4附, 5附），pp. 303-390.

9）中橋孝博，土肥直美，永井昌文（1985）　金隈遺跡出土の弥生時代人骨.「史跡　金隈遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第123集，福岡市教育委員会，pp. 43-145.

10）原田忠昭（1954）西南日本現代人頭骨の人類学的研究．人類学研究1-1.2，pp.1-51.
11）Knussman R.（1988）Martin / Knussman　Anthropologie. Band 1, Stuttgart, Gustav Fischer Verlag.
12）Yamaguchi B.（1973）　Facial flatness measurements of the Ainu and Japanese crania. Bulletin of the National Science Museum, vol.16, pp.161-171.
13）Miles A.E.W.（1963）The dentition in the assessment of individual age in skeletal material. In: Dental Anthropology (ed. Brothwell DR). pp. 191-209.
14）山口　敏（1982）縄文人骨の特徴．加藤晋平他編　縄文文化の研究1 縄文人とその環境，雄山閣，pp. 27-54.
15）平田和明（2002）鎌倉出土人骨の骨病変-由比ヶ浜南遺跡出土人骨を中心に?．五味・斎木偏「中世都市鎌倉と死の世界」，高志書院，pp.29-45.
16）勝連町教育委員会（1983）「勝連城跡」勝連町の文化財第５集.
17）浦添市教育委員会（1985）浦添城跡調査報告書.



図版49　右掖門西方岩陰下出土の頭蓋骨（上左：正面観　上右：右側面観　下：上面観）



図版50　右掖門西方岩陰下出土の頭蓋骨にみられた刀創

第Ⅵ章　結　語

以上、前章までにて調査の内容及び成果について述べてきた。ここでは、調査によって明らかになったことなどについて述べ、結語としたい。

すでに述べたように、調査は1992年(平成４)11月に一部開園が決定していた国営首里城公園の整備に伴った事前調査として、1990年(平成２)に実施したものである。調査地区は、正殿北側に所在する右掖門及びその周辺地区で、一帯は旧琉球大学の敷地造成等によって敷き均され、着手前は比較的平坦面を呈していた。

検出された主な遺構には右掖門の蹴離し、北殿の基壇、L字状の石積遺構、右掖門より久慶門へ通ずる石畳道、同側壁の暗渠、磚敷などがある。

右掖門の蹴離しは、右掖門に架設されていた観音開きの扉の下位に築造され、南北に延びていた蹴離しの根石遺構である。上端部は破壊を受け、その高さ等については、判然としなかったものの、幅等については窺い知ることができた。

北殿の基壇は、その北側から東側にかけての一部を確認したのみであるゆえ、全体的な構造等については明らかではないが、ある程度の高さ等については推することが可能であった。

L字状の石積み遺構は、北殿北側に所在し、比較的小幅の石積み遺構であった。使用石材も小振りなものが主体をなし、あい方積みを基本的とした丁寧な石積み遺構である。当該遺構の性格、あるいは帰属時期等については、判然としない部分が多く、Ⅰ～Ⅴ期の変遷が確認されている正殿のどの期に属するかは不明である。

右掖門より久慶門へ通ずる石畳道は、右掖門東側では比較的良好な保存状態にあったが、寒川及び久慶門寄りに行くに従って、旧琉球大学の整備等によって破壊を受け、右掖門よりの５m程までのみしか残存していなかった。なお、この石畳道の南側、すなわち擁壁的機能をも兼備した内郭石積に沿って、側溝が附設されていることが明らかとなった。そして、この側溝には内郭よりの暗渠が取り継がれ、北殿一帯の地下に浸透した雨水等は、当該渠を介して側溝へ流していたようである。

磚敷は、北殿北側より右掖門へ向けて下って行く、踏み幅が狭くかつ蹴上げの緩い階段の右側の袖石垣を介した東側にて検出されたもので、場所によっては二ないし三重に敷かれている箇所も見られた。当該箇所の北接部分には淑順門が位置しており、あるいはそれに関連した機能を有していた遺構かも知れない。

この他に、正殿北側部に擁壁の機能をも有した石積みも検出されたが、一帯は旧琉球大学時の志喜屋図書館が設置されていた地点の近傍にあたり、その建設によって大きく破壊を受けたらしく、根石等を中心にわずかに残るのみであった。

そして、右掖門寄りの内郭石積内の岩陰から埋葬人骨がグスク土器を伴って検出された。出土人骨を調査研究された琉球大学医学部土肥直美助教授によると、第Ⅴ章で詳述しているように、当該人骨は男性で、年齢は成年後半から熟年前半(35～45歳)くらいと見られるようである。その他にも諸点において特徴を有しているようであり、詳細については、第Ⅴ章を熟読していただくとするが、特筆すべきこととしては、前頭部には明瞭な刀創が認めらたことであろう。土肥助教授によれば、かかる刀創例は鎌倉・材木座出土人骨には知られているものの、琉球列島に多く分布しているグスクからの出土は初例のようである。往時の時代背景等を考慮すると興味深い資料と言えよう。

そして、グスクの石積み内及びその周辺からの出土例としては、勝連城跡出土の幼児骨、浦添城跡追手門近く石積み内出土の「人柱」の可能性が指摘されている女性人骨等があるが、当該例は内郭石積内からの出土で、かつまた屈強な男性であることから、勝連城跡や浦添城跡例とは異なった性格を有していたものと考えられるようである。

出土遺物は種類も豊富で多量であるが、そのほとんどが旧琉球大学整備に伴った造成土からの出土であり、元位置を保っているものは多くない。このようなことから、検出遺構等との関連について把握可能な資料は多くない。このような状況下で唯一、把握可能な資料は内郭石積み内にて埋葬人骨に伴出したグスク土器であった。

出土遺物の種類及び内容等は、大勢として従前に調査、報告されている内郭地区の出土遺物と類似しているものが少なくないが、とりわけ、2001年(平成13)度報告の「首里城跡－下之御庭・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報書－」とは極めて類似性が強く、接合可能なものも少なくない。

また、特筆すべきものとして、1996年(平成８)度に京の内地区より出土し、重要文化財に指定されている紅釉水注と類似するの口縁部資料が出土している(第22図５)。同様な資料は、下之御庭地区調査においても報告されており、これらと接合する可能性も少なくない。

このように、首里城跡内外は去った太平洋戦争末期の沖縄戦において、地下に日本陸軍の陣地としての司令部壕が配置されたこともあり、上屋を有した建物群をはじめ、城壁の石積み等が破壊されたうえ、戦後は城内に旧琉球大学が設置されたことから、その整備に伴いかなりの攪乱を受けていることを改めて記しておきたい。

出土遺物は、中国産を主体とし、ベトナム、タイ、ミャンマー、朝鮮などの周辺諸国や本土、さらには地元・沖縄産の陶磁器をはじめ、瓦類、円盤状製品、石器、石製品及び石造製品、古銭、玉、煙管、硯、骨製品、貝製品、貝類及び獣類遺存体等の種々の遺物が検出されている。

紙幅などの関係もあり、個々の遺物についての詳細についてはふれられないが、その特徴的なものを抽出し、若干コメントしたい。

中国産陶磁器は青磁、白磁、青花(染付)、色絵等の磁器類と、褐釉陶器がある。これらの生産年代には、かなりの時間幅が認められ、量的に最も多い青磁は龍泉窯系を主体にし、15～16Ｃ代の碗・皿の器種を主体とする。代表的な遺物としては、第５図12や第11図96の碗があげられよう。白磁は碗を主体とし、13Ｃ代に位置づけられている資料（第16図７）から近世に至るまでの時期差を有しているが、主体をなすのは15・16Ｃ代に位置づけられているものである。

青花(染付)は器種が豊富で、碗・皿類の他、盤、杯、瓶、壺、器種不明の袋物等も含まれる。年代的には17・18Cを主体とし、生産窯としては徳化窯系がほとんどである。鉄絵はすべて酒会壺と見られる器種で、磁州窯系が目立つ。色絵は碗と皿があるが、15～18C代と年代幅を有している。褐釉陶器は、壺が主体を占めている。

これらの中国産以外の陶磁器類としては、青磁では高麗青磁が3点ある。うち、1点は器形が窺えるもので、碗の胴部破片とみられるものである(第28図・図版19)。他に、青花(染付)ではベトナム産が2点得られており(第26図・図版16)、うち1点はラマ式連弁が施文されている(同図２)。また、鉄絵ではタイ産があるが、16C代に位置付けられる合子である(図版17)。上記したように、中国産が酒会壺が主体をなしていたことを考慮すると、その輸入対象国の使い分けがなされていたかと考えるが、限られた資料のゆえ、これ以上の言及は避けておきたい。色絵は肥前系を主体とし、量的にはすくないが関西系も得られている。褐釉陶器はタイ産と、2点のみであるがミャンマー産がある。タイ産は中国産と同様、壺が圧倒的主体を占めている。ミャンマー産は、胴部片資料で具体的な器種については判然としないが、県下では同じ首里城跡の「首里城跡－下之御庭・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報書－」に報告例があるのみで、本報告例が２例目となる貴重な資料である。

この褐釉陶器の蓋として運ばれているのがタイ産の半練土器である(第27図・図版18)。口縁部資料と中に付くつまみ部の資料が得られている。他の陶磁器資料としては、本土産の型紙摺、銅版転写等あり、これらの器種は碗・皿などの食膳器が主体となす。

陶磁器以外のものとして特筆されるものとして、蝋石製の容器がある(第46図５・６)。両者とも同一の石材を使用し、５がシャーレ様を、６は浅い皿状器形をなすものである。そして、５の側面には浅い陰刻により唐草文を囲繞させている。当該石材を同定していただいた神谷厚昭氏によると、標品は沖縄県立博物館所蔵の「朱漆山水楼閣人物箔絵丸型東道盆」県指定有形文化財（工芸品）の中央部に添えられた小皿と同様なものであろう、とのご教示を得た。興味深い資料である。ちなみに、素材となっている蝋石は中国南部や台湾でしか産出しないようである。

他には建造物の部材である高欄羽目板石や欄干や、石筆なども見られた。硯は頁岩や赤色頁岩等を素材としたもので、墨背の形態が平坦のものと隅丸方形に凹ませる２タイプが見られ、硯背には「松本正(政？)太」「関・・」と刻印されたものがある。あるいは、廃藩置県以降、熊本鎮台沖縄分遣隊の駐屯時及び首里第一小学校、沖縄師範学校の際のものかもしれない。動物遺体では、他のグスクに比して海棲獣のジュゴンが多い、ということが指摘できる。首里城という特殊性であろうか。今後に残された課題である。

附篇　下之御庭ほか出土の遺物

本来は前年度に刊行した『首里城跡－下之御庭跡ほか』（以下、下之御庭）で報告すべきであったが、遺物が極めて多量であり資料整理が十分でなかったことから、今回の報告となった。追加として報告するものは飾瓦、石製品である。また、編集の都合上、写真図版のみを掲載する。

図版の１～７は飾瓦である。１は大柄な牡丹でわずかに彩色が残っている。２・３は瑞雲状のもので、素地は２が灰色、３が赤褐色である。４～７は龍や獅子などの一部と思われる。４は鼻、５は目の部分で、６・７は鰭であろうか。いずれもわずかながら彩色が残っている。

石製品は礎石である。上面に棒状の突出がみられるタイプと平たいタイプがある。石質は砂岩である。

図版50　下之御庭ほか出土の遺物

沖縄県立埋蔵文化センター調査報告書　第14集

首　里　城　跡

－右掖門及び周辺地区発掘調査報告書－

発　行　年　　2003年（平成15）３月20日
発行・編集　　沖縄県立埋蔵文化センター
〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の７
TEL　098-835-8751
印　　刷　　（株）尚生堂
〒901-2114 沖縄県浦添市安波茶１丁目６番３号
TEL（098）876-2232

首里城跡

沖縄県立埋蔵文化財センター
二〇〇三年（平成十五）三月